



鳩間島・新城島・黒島

SURVEY REPORTS ON NATURAL HISTORY, HISTORY AND CULTURE

総合調査

OF HATOMAJIMA, ARAGUSUKUJIMA, KUROSHIMA ISLANDS

報告書 2016

沖縄県立博物館・美術館

Okinawa Prefectural Museum and Art Museum

鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書

SURVEY REPORTS ON NATURAL HISTORY, HISTORY
AND CULTURE OF HATOMAJIMA, ARAGUSUKUJIMA, KUROSHIMA ISLANDS

2016年

沖縄県立博物館・美術館

OKINAWA PREFECTURAL MUSEUM
AND ART MUSEUM

鳩間島・新城島・黒島の総合調査で確認されたさまざまな自然遺産や文化遺産



口絵1 各島のビーチロック 黒島港付近(左) 新城(上地)島港付近(中) 鳩間島屋良浜(右) 【地学:P.1】



口絵2 沖縄県では希少なゴバンノアシの自生株(新城島上地)
【生物:P.14】



口絵3 新城島(上地)で採集された
ハテルマヨナグニゴマフ

新城島は石垣島、西表島に近いが、同島にみられる亜種 *Mesosa yonaguni subkonoi* イシガキヨナグニゴマフではなく、竹富島、小浜島、黒島に産するものと同様に波照間島に産する亜種 *M.y.kashiwai* ハテルマヨナグニゴマフと同一であることが確認された。

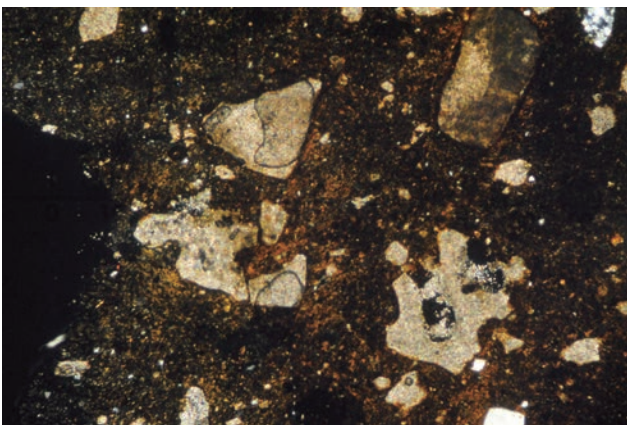
【生物:P.70】



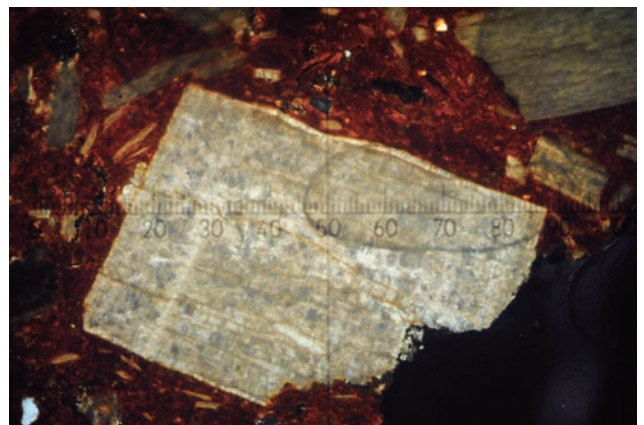
口絵4 鳩間島の堀込墓（崖葬墓）
【考古：P.83】



口絵5 新城島（上地島）の
ガジュマルに覆われる石積墓
【考古：P.87】



口絵6 パナリ焼胎土薄片の偏光顕微鏡写真
ポーラスなサンゴ片が多く見られる 【考古：P.99】



口絵7 中森式土器胎土薄片の偏光顕微鏡写真
板状の貝殻片が見られる 【考古：P.99】



口絵8 黒島 伊古棧橋登録有形文化財の碑
【歴史：P.120】



口絵9 上地島タカニク（火番盛）より黒島を望む
【歴史：P.130】



口絵10 各地に残る歴史的建造物 上地島・タカニク（左） 黒島・プズマリ（中） 鳩間島・中森（右）【歴史：P.149-151】

口絵11 三線 真壁型墓
黒島 北當山の真壁型（左）
鳩間島 ウィカナケの真壁型（右）
【美術工芸：P.159-160】





口絵 12 黒島・仲本集落にある養蚕のなごりの桑の木 【美術工芸：P.167】



口絵 13 黒島の石積墓遠景
【民俗：P.178】



口絵 14 石積墓の内側にある墓室
テーブルサンゴの平板で囲まれている
【民俗：P.179】

まえがき

沖縄県は大小さまざまな島々から成り立つ島嶼県です。それぞれの島には地質・地形を基盤とする独自の生態系と、その自然環境を背景にして長い歴史を刻んで育まれた人々のくらしや文化があります。これまでに、県内外の研究者の努力によって、島々の自然・歴史・文化に関するさまざまな研究成果が得られておりますが、まだまだ調査が追いつかず、多くの課題も山積しています。沖縄県立博物館・美術館では、それらの課題に向き合い、各島嶼の自然遺産、文化遺産を記録・保存し、後世に伝えてゆくという使命のもと、さらなる調査研究や資料の収集・掘り起こしを継続しておこなっています。また、その成果を展示会や講演会の開催、出版物の刊行などを通して随時発信し、県民をはじめ多くの方々に本県の自然・歴史・文化について理解を深めていただくよう努めております。

当博物館による島嶼の総合調査は1980年の粟国島を皮切りに、現在までのべ14の島々でおこなわれ、調査報告書の刊行は、1980粟国島、1981渡名喜島、1983座間味島、1987伊計島、1988瀬底島、1989与那国島、1990浜比嘉島、1991古宇利島、1992久米島、1995波照間島、1997西表島、2002小浜島、2005与那国島、2009竹富島とつづいております。そして、2012年度から2014年度までの3カ年にわたっては、鳩間島・新城（上地・下地）島・黒島の4島嶼を対象とし、当館学芸員および調査員がそれぞれのテーマを設定して独自の調査研究をおこないました。本報告書はその研究成果を自然・考古・歴史・美術工芸・民俗の各分野ごとにまとめたものです。本報告書が、各島嶼の自然・歴史・文化を理解する一助になれば幸いです。

最後に、本調査を実施するにあたり、多大なご協力をいただきました竹富町・竹富町教育委員会、NPO法人日本ウミガメ協議会附属黒島研究所、竹富町立鳩間小中学校、その他関係各位に深くお礼申し上げます。

平成28年3月

沖縄県立博物館・美術館
館長 安里 進

沖縄県立博物館・美術館 鳩間島・新城島・黒島総合調査 調査員

自然史

| | |
|-------|-----------------------------|
| 仲里 健 | (博物館班 主任学芸員) |
| 山崎 仁也 | (博物館班 主任学芸員) |
| 横田 昌嗣 | (琉球大学教授 委嘱調査員) |
| 知念 美香 | (名護商工高校教諭 委嘱調査員) |
| 仲宗根忠樹 | (株式会社 Tsudoi Company 委嘱調査員) |
| 松村 雅史 | (博物館昆虫ボランティア 委嘱調査員) |
| 吉田 和久 | (委嘱調査員) |
| 力身 恭二 | (委嘱調査員) |
| 目黒 賢児 | (委嘱調査員) |

考古

| | |
|-------|--------------|
| 片桐千亜紀 | (博物館班 主任学芸員) |
| 山崎 真治 | (博物館班 主任) |

歴史

| | |
|-------|--------------|
| 岸本 弘人 | (前原高校 教諭※) |
| 石垣 忍 | (博物館班 主任学芸員) |
| 崎原 恭子 | (博物館班 主任) |

美術工芸

| | |
|-------|--------------|
| 園原 謙 | (博物館班 班長) |
| 與那嶺一子 | (博物館班 主任学芸員) |

民俗

| | |
|-------|---------------|
| 岸本 敬 | (大平特別支援学校教諭※) |
| 大湾ゆかり | (博物館班 主任学芸員) |

※沖縄県立博物館・美術館在籍中に調査実施

目 次

【自然史】

仲里 健 (Takeshi NAKAZATO)

- 鳩間島・黒島・新城島（上地・下地）の地質…………… 1
Geology of Hatoma Island, Kuroshima Island, and Aragusuku (Kamiji・Shimoji) Island.

山崎仁也 (Jinya YAMAZAKI), 横田昌嗣 (Masatsugu YOKOTA), 知念美香 (Mika CHINEN),

仲宗根忠樹 (Tadaki NAKASONE), 比嘉清文 (Seibun HIGA), 加島幹男 (Mikio KASHIMA)

- 鳩間島・新城（上地・下地）島・黒島の植物相 (FLORA) …………… 13
Flora of Hatoma Island, Aragusuku (Kamiji・Shimoji) Island, and Kuroshima Island, The Yaeyama Islands.

山崎仁也 (Jinya YAMAZAKI), 松村雅史 (Masafumi MATSUMURA), 吉田和久 (Kazuhisa YOSHIDA),

力身恭二 (Kyouji RIKIMI), 目黒賢児 (Kenji MEGURO)

- 鳩間島・新城（上地）島・黒島の動物相 (FAUNA) —昆虫相を中心に …………… 69
Fauna of Hatoma Island, Aragusuku (Kamiji) Island, and Kuroshima Island, The Yaeyama Islands
- Mainly, report about the insect fauna-

【考 古】

片桐千亜紀 (Chiaki KATAGIRI), 岸本敬 (Takashi KISHIMOTO)

- 鳩間島・新城島（上地）の古墓調査…………… 81
Investigation of old tombs in Hatomajima Island and Aragusukujima (Kamiji) Island

山崎真治 (Shinji YAMASAKI)

- 伝説の土器・パナリ焼を探る…………… 93
An archaeological study of the Panari-yaki pottery in the recent Aragusukujima Island

【歴 史】

岸本弘人 (Hiroto KISHIMOTO), 石垣 忍 (Shinobu ISHIGAKI)

- 鳩間島・黒島・新城島における石碑・記念碑等の調査報告…………… 109
The investigation report of the monument in Hatomajima Island/Kuroshima Island/Aragusukushima Island

崎原恭子 (Kyoko SAKIHARA)

- 近世琉球における烽火（火立）のネットワークについて—新城島・黒島・鳩間島を中心に—…………… 147
Brief notes on network of Pre-modern beacon fires in Aragusuku Island, Kuro Island, Hatoma Island

【美術工芸】

園原 謙 (Ken SONOHARA)

- 鳩間島・黒島所在・由来の三線…………… 153
The Trace of *Sanshins* in Hatomajima and Kuroshima Islands

與那嶺一子 (Ichiko YONAMINE)

- 黒島の染織概観…………… 165
The outline of textile in Kuroshima Island

【民 俗】

大湾ゆかり (Yukari OWAN)

- 黒島の古墓及び葬法調査…………… 175
Investigation of old tombs and funeral ceremony in Kuroshima Island

鳩間島・黒島・新城島（上地・下地）の地質

仲里 健*

Geology of Hatoma Island, Kuroshima Island, and Aragusuku (Kamiji・Shimoji) Island.

Takeshi NAKAZATO*

はじめに

博物館総合調査は、2012年から2014年までに、鳩間島・黒島・新城島の3島の調査を行い、2015年にまとめを行う調査である。2102年に黒島、2013年に鳩間島・新城島、2015年に新城島の再調査を行った。本稿では、北から鳩間島、黒島、新城島の順でまとめている。短い調査であるが、今回の調査の範囲内で各島の地質について報告する。

1. 鳩間島

鳩間島は、西表島の上原港から北方約6kmに位置している。島は、北西から南東方向で約1.3km、北東から南西へ約1kmの卵を傾けたような楕円形をしており、外周約3.9km、面積約1km²の島である。最高標高は、島の中央部から南側にある丘陵の「鳩間中森」で、30.1mである。鳩間中森は八重山層群西表層の上部に位置するG層に対比され、その周りは琉球石灰岩で覆われている。北側の標高がやや高く、南側に向けて緩やかに傾斜する地形を呈している。北側の海岸線は、琉球石灰岩の崖が優勢であるが、南側には砂丘砂や砂浜海岸も見られ、ビーチロックも発達している。主に島の北西から南東沿岸にかけて、約5kmに及ぶサンゴ礁が発達しており、島はその中央に位置している。

各層解説

今回の調査結果を踏まえ、鳩間島の地質図を作成した(図1)。

古生界トムル層

鳩間島は、鳩間中森を形成する八重山層群西表層と琉球石灰岩が主な岩層とされているが、今回の調査において、中森の西側の2つ露頭で採取したサンプルが、ランセン石、白雲母、緑簾石、石英を含み、片理と微褶曲の構造を持つ緑色片岩の変成岩であることが確認された(写真1-1、1-2)。これは八重山層の下部に当たる古生層の八重山変成岩類トムル層

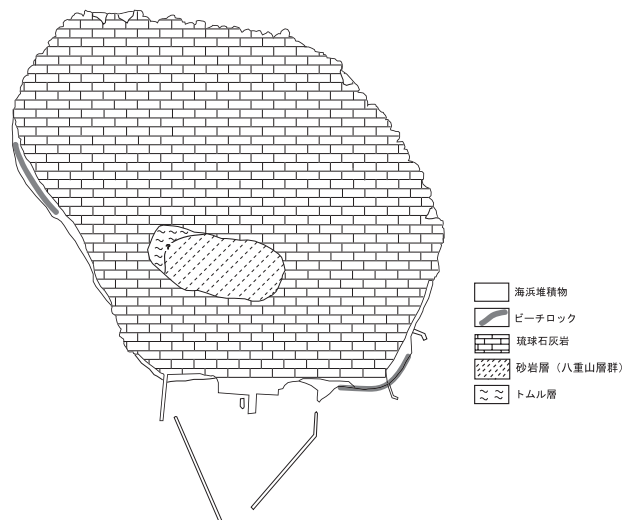


図1 鳩間島の地質

* 〒900-0006 沖縄県おもろまち 3-1-1 沖縄県立博物館・美術館

* Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006, Japan.

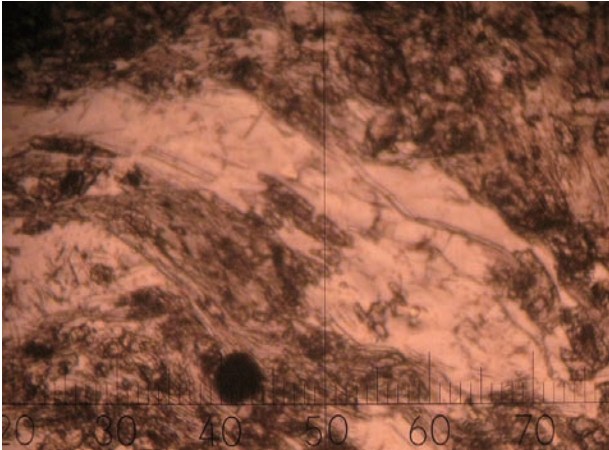


写真 1-1 緑色片岩 (平行ポーラー)

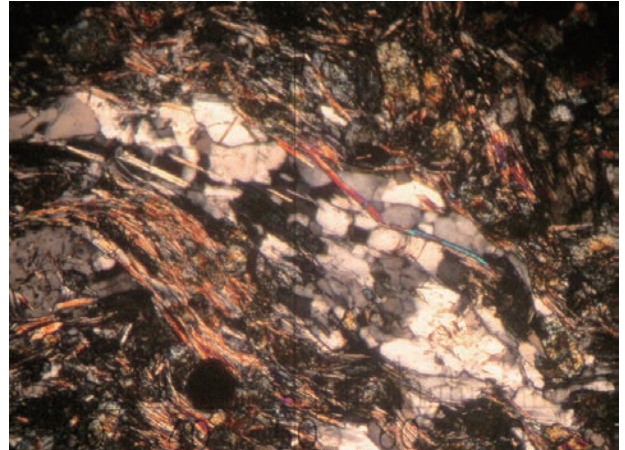


写真 1-2 緑色片岩 (直行ポーラー)

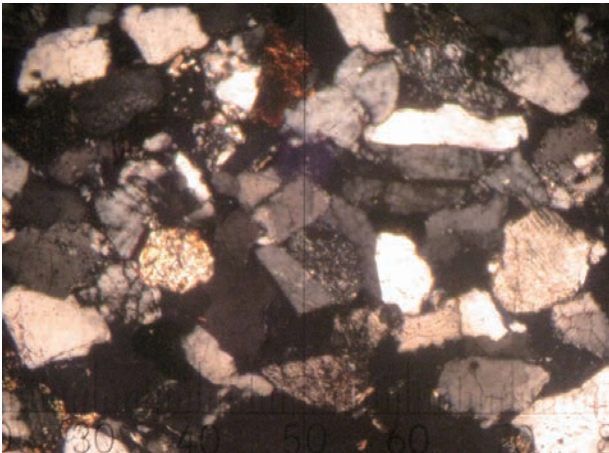


写真 2 西表層の薄片写真 (直行ポーラー)



写真 3 砂岩層のクロスラミナ



写真 4-1 石灰岩中のサンゴ化石



写真 4-2 北側の石灰岩地形

であると判断し、地質図中に記載した。中森に当たる部分は八重山層の砂岩できているが、それ以外の平坦な場所では、基盤であるトムル層が分布していると思われる。しかし、その分布に関して正確には確認していないため、その境界を中森の西端に限定し、「？」で記してある。

西表島では、トムル層の上に野底層があり、野底層と不整合関係で八重山層があるとされている。しかし、鳩間島では野底層は確認されていない。再度細かい調査を行ってその関係を明らかにする必要がある。

中新統八重山層群西表層

島の高台である「鳩間中森」を形成しているのが、中生代第三紀中新世の八重山層群西表層である。西表層のG層に対比され、基盤のトムル層と不整合で重なっていると考えられる。おもにマッシュな砂岩（写真2）であるが、クロスラミナ（斜交葉理）も確認できる（写真3）。風化が進んでおり、中森周辺部では、巨大な転石も多数見られる。

更新統琉球石灰岩

島の大部分を占めているのが第四紀の琉球石灰岩である。トムル層や西表層を不整合に覆い、サンゴ化石を多く含んでいる（写真4-1）。全体として標高10～15mの平坦面を形成している。北部の標高がわずかに高く（写真4-2）、南部に向かって緩やかに傾斜している。石灰岩を利用した遺跡も上部に見られる。



写真5 鍾乳洞（アンヌカー）
タカセガイが散乱している。



写真6-1 屋良浜のビーチロック

代表的な鍾乳洞ではアンヌカーがある。以前は水が湧いていたようであるが、現在は見当たらない。戦時中に防空壕として利用していたことだろうか、鍾乳洞の堆積物には、シャコガイやタカセガイ、サザエや2枚貝などの殻が散乱している（写真5）。

別の鍾乳洞はヤシガニの生息地にもなっている。

完新統積物

島の北側では、わずかに海浜堆積物の砂浜が点在しているが、西側や南側では新期砂丘砂、ビーチロック、海浜堆積物などが顕著に見られる。

ビーチロックは、鳩間小中学校の北東にある海岸と、西側の屋良浜海岸に分布している。屋良浜のビーチロックは全長は約250mにおよぶ。ここでは大きく分けて2層あり、陸側と海側で、特徴的に分けられる。陸側では、ほぼ水平でシャコガイやタカセガイ、イモガイ、サンゴ片、岩石片（ほとんど砂岩）で構成されている（写真6-1、6-2）。小元（2005）によると、屋良浜海岸のシャコガイの同位体年代は約2600±65年を示しており、その当時に形成されたと考えられる。海側のビーチロックでは、海に向かって約18°の傾斜をしており（写真7-1）、ほとんど砂質で、有孔虫サンゴ片、小さな貝殻などが主である（写真7-2）。何枚かの層構造が見られるが、正確には分からなかった。

新期砂丘砂は厚さ1～2mほどで、小規模ではあるが海岸線の石灰岩の上部、またはビーチの後方に分布している。軽石を多く含んでおり、茶色に変色している。シャコガイやタカセガイ、などの貝を



写真6-2 ビーチロック中の構成物
岩石片、タカセガイ、シャコガイ等



写真 7-1 海側のビーチロック

含んでいる部分もある。海浜堆積物は、有孔虫を多く含んでいる砂浜で、星砂（バキュロジプシナ *Baculogypsina*）やゼニイシ（*Marginopora*）アンフィスティギナ（*Amphistegina*）などの死骸やサンゴ、貝の破片など多く観察できる。

2. 黒島

黒島は、八重山諸島の石垣島と西表島の上に発達する「石西礁湖」の西側に位置している小さな島であるが、石西礁湖内の島の中では最大の面積を持っている。南北約3.5km、東西約4kmのハート型をしており、周囲約12.5km、最高標高15.3mの平らな島である。

全体が琉球石灰岩で形成されているが、スタビライザー（岩石掘削機）を導入しての大規模な開墾事業が行われ、牧草地が広がるようになった。そのため、地形が大きく変わっており、内陸側よりは、海岸の調査を重点的に行った。

地形・地質

黒島の基盤となる岩石は、第四系の琉球石灰岩のみである。石西礁湖内で琉球石灰岩のみの島は黒島と新城島だけである。両島とも隆起珊瑚礁で、高い場所がほとんど無い平らな地形、つまり低島の様子を呈している。竹富島や鳩間島では、部分的に琉球石灰岩の下部にある富崎層や八重山層が露出して高台を形成し、御嶽などになっているが、黒島にはこのような高い場所が無い。今回の調査を踏まえ、黒



写真 7-2 砂質のビーチロック

島の地質図を作成した(図2)。地質図作成にあたり、琉球弧の地質誌(1985)を基に、一部改訂を加えた。

各層解説

更新統琉球石灰岩

黒島全体が琉球石灰岩で形成されており、内陸部ではサンゴ礁特有の平坦な地形、海岸部ではノッチが発達した溶食地形が多く見られる(写真8)。沖に見られる転石などは、ほとんどがキノコ岩の形状を持っている(写真9)。観察できる石灰岩は、石サンゴ等を多く含む石灰岩、枝状のサンゴを多く含む石灰岩、ラミナ構造を持つ層状砂質石灰岩がある(写真10-1,2)。

鍾乳洞は3つある中で、パイムティアブとゲンノアブは確認できたが、もう一つはアダンの茂みによって確認することができなかった。両鍾乳洞とも

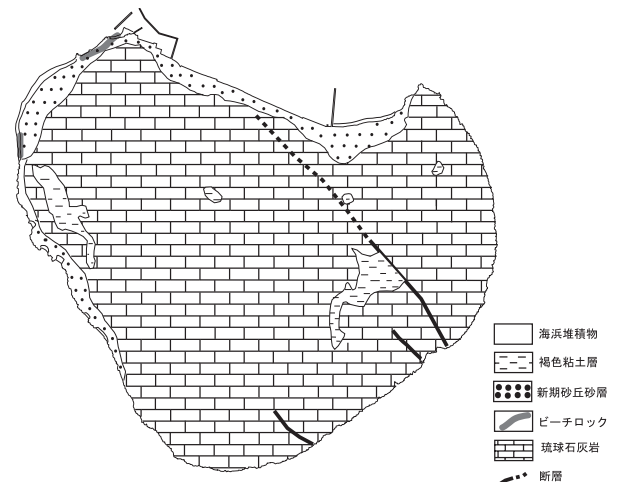


図2 黒島の地質図



写真8 ノッチの発達した海岸地形



写真9 海岸に見られるキノコ岩



写真 10-1 石灰岩中のサンゴ化石



写真 10-2 砂質層状の石灰岩



写真 11-1 洞内に見られるサンゴなど



写真 11-2 洞内あるパイプウニのトゲ

牧草地内にあるため、許可無く入ることはできない。ゲンノアブは、入口付近を確認するにとどまったが、パムティアブは内部を確認することができた。天井は低く、中腰でなければ歩けないが、内部は広くいくつかの部屋に分かれている。細部までの調査はしていない。防空壕として使用したことがあり、整備されている様子がうかがえる。洞内堆積物

に貝やサンゴの骨格、パイプウニのトゲ（写真11-1,2）などが多く散乱しているが、その由来は不明である。。

褐色粘土層

褐色粘土層は、東筋の東側に分布しているが、現在はそのエリアのほとんどが牧場になっているた

め、具体的な露頭は見当たらず、盛り土してある土壌でその存在を確認する程度であった。具体的な層厚測定や分布調査は行っていない。

完新統堆積物

基盤である琉球石灰岩を不整合に覆って、新期砂丘砂層、海浜堆積物、ビーチロックなどがある。規

模の大きい海浜堆積物、すなわち砂浜の分布は限られており、伊古棧橋のある北側海岸、港の西側の海岸、および仲本海岸である。これらの海浜堆積物の後部および石灰岩の上部に、新期砂丘砂が島を取り巻くように分布している（写真12）。新期砂丘砂には、多くの軽石も確認できる（写真13）。

ビーチロックは、港の西側にある砂浜で顕著に見



写真12 海岸広報に見られる新期砂丘砂



写真13 砂丘砂に含まれる軽石



写真14 ビーチロック中のイモガイ



写真15 ビーチロック中のシャコガイ



写真16 傾斜するビーチロック



写真17 ビーチロックにできたポットホール

られる。分布として断続的にはあるが、広範囲にあり、その一部は離水している。確認できる範囲で、層厚は約60cm以上あり、サンゴ片や貝類を含むタイプと（タイプⅠ）、ほとんどが砂質のタイプ（タイプⅡ）に分けられる。タイプⅠには、シャコガイ、タカセガイ、イモガイ、二枚貝、様々なサンゴ片（写真14、15）、などが含まれており、ほぼ水平で、陸側に分布している。タイプⅡは、主に有孔虫や小さなサンゴ片などの砂質で、タイプⅠから伸びるように、海に向かって緩やかに傾斜（傾斜角6～8°）している（写真16）。ポットホールができているのが印象的である（写真17）。

3. 新城島

新城島は、石西礁湖の南西端に位置し、黒島の西に約5km、西表島からは南東に約6km、上地島と下地島の2島で形成されている。両島とも第四系更新統の琉球石灰岩でできている。

上地島は北東から南西に細長く、北東-南西の長さが約2.5km、幅が最大約0.7km、周囲約6kmの島である。最高標高13.0mの平坦な島で、集落地域を除けば、ほとんど手付かずの自然が残っている。

下地島は、縦約1.3km、横約1.5km、周囲約5kmの、半円形の島である。最高標高が島のほぼ中心の20.4mで、周辺に向かって低くなっていく弱い段丘地形を呈している。全体的に上地島より標高が高い。遺跡も多く残っているが、島のほとんどが牧場となっている。そのため、以前には段丘地形も見られたようであるが、現在ではあまり明瞭ではない。

両島の東側では、現生のサンゴ礁が発達していて、大潮の干潮時にはサンゴ礁を歩いて島を行き来することができる。

調査期間が短く、下地島は一部しか調査できなかった。

地形・地質

上地島・下地島両島とも、黒島同様琉球石灰岩のみで形成されている。上地島では海浜堆積物が島の北東側ほぼ全域と南端の岬に分布しており、東側の河岸は、琉球石灰岩のノッチが発達した浸食地形を

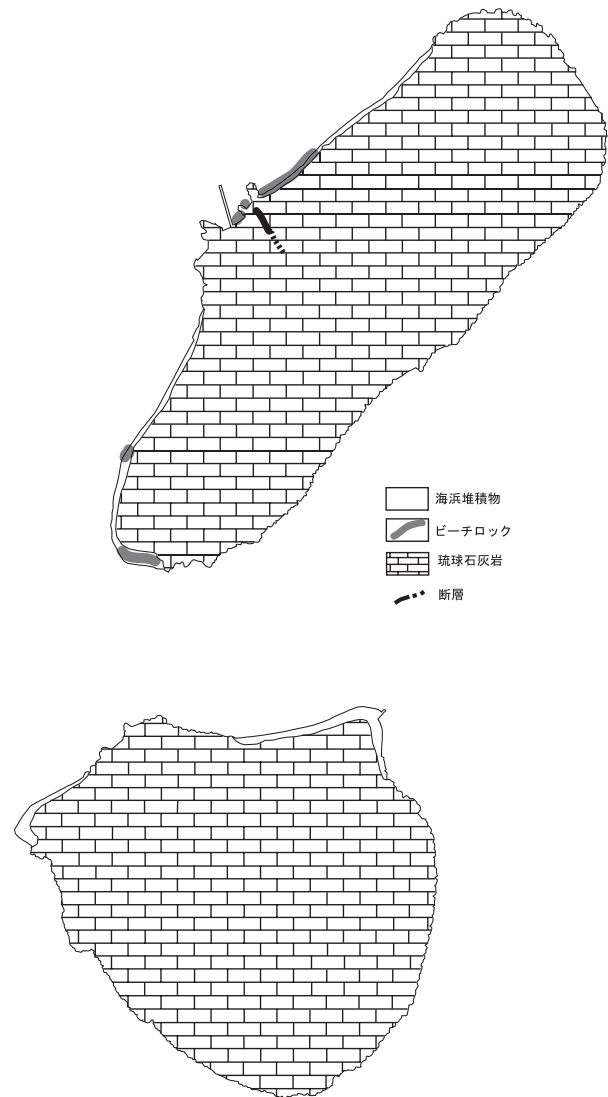


図3 新城島（上地島・下地島）の地質図

呈している。下地島での海浜堆積物は、島の北側海岸と北西海岸のみで、その他の海岸はノッチが発達した岸壁になっている。今回の調査を踏まえ、新城島の地質図を作成した（図3）。

各層解説

更新統琉球石灰岩

上地島では、露頭で観察できた琉球石灰岩には、サンゴ主体（写真18）、石灰藻球および石灰藻（写真19）、碎屑性砂質の石灰岩が観察された。よく見られるのはサンゴ石灰岩である。島の東側はノッチの発達した直線状に近い岸壁（写真20）になっており、わずかに砂浜が点在する。西側海岸では砂浜



写真18 石灰岩中のサンゴ



写真19 石灰岩中の石灰藻球



写真20 東側には石灰岩の岸壁が続く



写真21 離水したダブルノッチとビーチロック

が優勢で、離水したノッチ、もしくはダブルノッチ（写真21）が見られる。

下地島では、北西側海岸のわずかな範囲と陸上の一部の調査を行った。島すべてが琉球石灰岩であるが、海岸の石灰岩からサンゴ化石を確認した（写真22）。陸上については、そのほとんどが牧場となっており、遺跡周辺部は手付かずであったが、それ以外はほとんど整地されていた。そのため島の南側にある高まりから、島の北側に緩く傾斜し、南側では急斜面を持つ、わずかな段丘地形が確認できたのみである。上地島・下地島にそれぞれ、ゲーツノアブ・クッカーメアブとウブフツアブという鍾乳洞があるが、今回の調査では、すべて確認することができなかった。

完新統堆積物

上地島では、琉球石灰岩を不整合で覆うように、島の西側海岸と南の浜崎に、海浜堆積物（砂浜）と



写真22 石灰岩中のサンゴ化石

ビーチロックが分布している。上地港北側のビーチロックは、断続的に500mほどの長さがあり、離水したビーチロック（写真21）と、波打ち際のビーチロック（写真23）がある。どちらも層状構造を呈しているが、何層あるかは不明である。離水したビーチロックは枝状サンゴの破片が多く、ほぼ

水平か、6～10°程度の傾斜面を持っている（写真24）。水平面は浸食の影響を受けている可能性もある。海側のビーチロックは、ほとんど砂優勢で、4°程度の傾斜を持っている。2つのビーチロックの関係性は不明であるが、島民（西泊氏）の話では、台風の後など、一面ビーチロックになっていたこともあるという。

また、港に近いビーチロックでは、層状構造を持ち、シャコガイ・タカセガイ・サンゴ片・岩石片を含む層と（写真25、26）、枝サンゴ多くを含む層（写真27）が見られる。ビーチロックを取り込んだビーチロックも観察できる。岩石片は、安山岩質の溶岩や、トムル層と思われる緑色片岩などが。現在の海岸にも石灰岩を除く岩石片が多く転石としてみら



写真23 波打ち際のビーチロック



写真24 ビーチロックの断面



写真25 ビーチロック中のサンゴ



写真26 ビーチロック中の岩片



写真27 枝サンゴが密集するビーチロック



写真28 切り出されたと思われるビーチロック



写真29 浜崎浜のビーチロック



写真30 下地島の海岸と吹き上げ砂丘



写真31 巨大なサンゴ片



写真32 標高約10mにある石灰岩

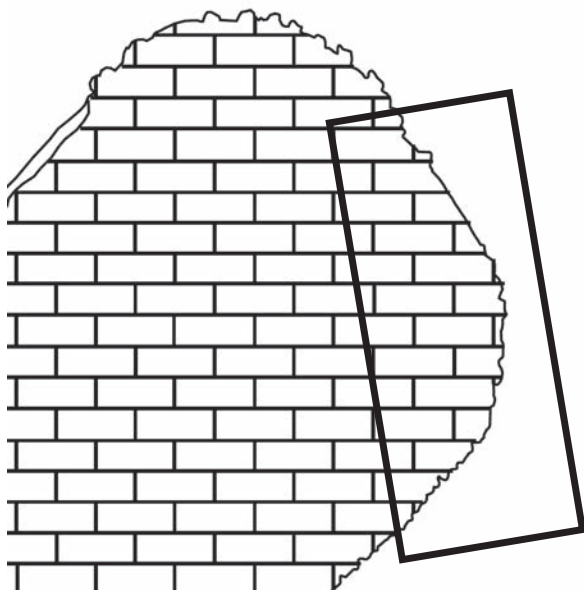


図4 巨大サンゴ片の分布エリア

れるが、岩石片すべてが海から供給された物であると考えられる。

港の南側の海岸にあるビーチロックは、切り出されたような形跡も残っている（写真28）。また、南の先にある浜崎浜でも、サンゴ、貝類を多く含むビーチロックと主に砂質のビーチロックの二種類が分布してる（写真29）。下地島でのビーチロックの分布は確認できなかった。

下地島で海浜堆積物が分布するのは、長崎（北棧橋付近）の西側と、最西端に当たるパイナースキ周辺のみである。砂浜海岸の後部には、吹き上げ砂丘の地形が確認できる。砂丘の傾斜面は35～40°ほどあり、かなりの急傾斜である。植生のため、その規模や範囲は不明である。吹き上げ砂丘の形態は、上地島でも確認できる。

上地島の北東海岸（図4：□で囲ったエリア）では、波の影響で打ち上げられたと考えられる巨大なサンゴが多数見られる。最大のサンゴ片はノッチの発達



写真33 標高10m以上にある細かいサンゴ片

した窪地に入り込んでおり、約2 m四方の大きさで、約16 tと推定した。さらに標高10mを超える石灰岩上にも、石灰岩が打ち上げられたり、サンゴ片が散乱している。

これらの岩片は、台風や津波など、強い波の影響を受けたと考えられる。詳細な調査をしていないので何ともいえないが、今後再検討する必要があるだろう。

断層

上地島の港の北側では、北西から南東に走る断層が見られる。それによって、離水ノッチや離水ビーチロックとなっている。離水ノッチの高さから、断層のずれは北側が推定1～2 mほど持ち上がっている。南東側への伸びは不明瞭である。石灰岩上部は御嶽になっており詳細な調査は行っていない。

まとめ

鳩間島、黒島、新城島は、ほとんどが琉球石灰岩の島であることから、調査前は気軽な気持ちであった。しかし実際に調査をすると、鳩間島ではトムル層の変成岩が露出していることや、黒島や下地島では牧場によって大きく地形が変わっていること、上地島では断層があるなど、それぞれで思わぬ発見があった。ビーチロックなどは、その周辺離島においても特徴が類似しているなど、細かい調査を行う必要性を感じた。各島の鍾乳洞の調査や、上地島の巨大なサンゴ塊の由来など、今回の調査では行き渡らなかった部分や課題も多く出てきている。今後の継

続した総合調査に期待したい。

おわりに

本調査に当たり、短い期間ではありましたが、多くの方達にお世話になりました。特に調査に同行して下さった、若月氏をはじめとする黒島研究所の皆様、新城島の調査に甚大な協力をいただきました西泊ご夫妻、また、竹富町教育委員会の皆様など、この場を借りて感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

参考文献

- 沖縄県, 1986, 土地分類基本調査「西表島北部・西表島西部・西表島南部(波照間島含む)・与那国島」, p18-24.
- 小元久仁夫, 2005, 「南西諸島から採取したビーチロックの14C年代および安定同位体比($\delta^{13}C$)—測定資料とその分布—」, 日本大学文理学部自然科学研究所研究紀要 (No:40), p1-27.
- 木崎甲子郎編著, 1985, 「琉球弧の地質誌」, 沖縄タイムス社, p159-167、p173-182.

鳩間島・新城（上地・下地）島・黒島の植物相（FLORA）

山崎 仁也^{※1)}，横田 昌嗣^{※2)}，知念 美香^{※3)}，仲宗根 忠樹^{※4)}，比嘉 清文^{※5)}，加島 幹男^{※6)}

Flora of Hatoma Island, Aragusuku (Kamiji・Shimoji) Island, and Kuroshima Island, The Yaeyama Islands.

Jinya YAMAZAKI, Masatsugu YOKOTA, Mika CHINEN, Tadaki NAKASONE, Seibun HIGA, Mikio KASHIMA

はじめに

南琉球に位置する八重山群島の小島嶼の植物相はこれまであまり調べられていないが、いくつかまとまった報告がある。年代順には田代による黒島（離弁花植物のみ105種、1893-94）、新城による鳩間島（263種、1977）、新里による竹富島（174種、1985）、知念による石西礁湖の小島嶼（小浜島、竹富島、黒島、新城島上地・下地、嘉弥真島、平西島、ウ離島、パサイ島、1989および1993）、NPO法人日本ウミガメ協議会附属黒島研究所による黒島（151種、2006）などである。これら小島嶼の自然環境はもろく、外来種の侵入や自然災害等による改変が常に心配される。また、隔離による種分化、変異の可能性もあり、定期的な調査が望まれるところである。

今回県立博物館・美術館では、総合調査の枠組みの中で鳩間島、新城島（上地・下地）、黒島の植物相調査を行い、いくつかの新知見が得られたので、植物目録とともに報告する。

方法

調査は以下の日程で行った。

| | |
|-------|----------------|
| 鳩間島 | 2013年2月10日～11日 |
| 新城島上地 | 2013年6月26日～28日 |
| 新城島下地 | 2013年6月27日 |
| 黒島 | 2014年6月27日～30日 |

各島内を広く踏査し、出現した植物種を記録した。目録はAPG III分類体系に基づき、「植物和名ー学名インデックス YList」を参照して作成した。産地の



図1 八重山諸島 各島嶼の位置

表1 調査した4島嶼の位置と地形的概況

| 島名 | 北緯 | 東経 | 面積 (km ²) | 海岸線長 (km) | 最大標高 (m) |
|-----|--------------|---------------|-----------------------|-----------|----------|
| 鳩間島 | N24° 28' 22" | E123° 49' 12" | 0.96 | 3.9 | 33.8 |
| 上地島 | N24° 14' 02" | E123° 56' 40" | 1.76 | 6.2 | 13.1 |
| 下地島 | N24° 12' 56" | E123° 55' 46" | 1.58 | 4.8 | 20.4 |
| 黒島 | N24° 14' 22" | E124° 00' 53" | 10.02 | 12.6 | 15.3 |

※1) 沖縄県立博物館・美術館（那覇市おもろまち3-1-1）
※2) 琉球大学理学部（中頭郡西原町千原1）
※3) 沖縄県立名護商工高等学校（名護市大北4-1-23）
※4) 株式会社 Tsudoi Company（中頭郡北谷町北前259-15）
※5) 元中学校教諭
※6) 元沖縄森林管理署大原森林事務所（八重山郡竹富町字南風見201）

新城島上地・新城島下地はそれぞれ上地島・下地島と略記した。

各島の地形的概況を表1に示す。

結果と考察

1. 鳩間島

鳩間島のフロラは1977年に新城により詳細な報告があるが、その時の確認種数は亜種、変種、品種を含め297種であった。今回の確認種は250種となりかなり減じているが、調査の時期や踏査した範囲、調査員の同定能力の差などの違いがあり、単純な比較はできない。1977年には見られなかったが今回見られた種は75種あり、そのうち37種が帰化種または栽培逸出種で、割合にすると49%になる。この35年で移入種が増えていることはまちがいない。

環境省または沖縄県のRDB掲載種で見ると（VU以上）、1977年には見られたが今回確認できなかったものに、トサカメオトラン、ヤエガヤ、イソフジ、リュウキュウチシャノキがあげられる。1977年にも2013年にも見られたのはアイアシ、イソマツ、ヤエヤマアオキである。鳩間島には大きな森林がなく、島の中央部にはウシの牧草地が広がっている。加えて野生化ヤギの増殖が目立ち、今後も環境が変化していくことが予想される。

2. 新城島

新城島のフロラは1989年に知念により詳細な報告がある。上地島、下地島ともに今回の調査では確認種数が大きく増えているが、調査の時期や踏査した範囲、調査員の同定能力の差などの違いがあり、単純な比較はできない。

上地島では確認種数は亜種、変種、品種を含め258種であった。1989年には見られなかったが今回見られた種は110種あり、そのうち40種が帰化種または栽培逸出種で、割合にすると36%になる。環境省または沖縄県のRDB掲載種で見ると（VU以上）、ヤエヤマヒトツボクロ、イソフジ、ササキカズラ、ハテルマカズラ、イソマツ、ヤエヤマアオキ、ミゾコウジュ、ヤエヤマズコウジュ、モクビャッコウが見られた。島の北西部の海岸沿いには、本邦初記録となるハマヤブガラシの群生地が確認され

た。付近には外来種や栽培種がほとんど見られないことや、人があまり入り込まない場所であることから、もともと自生していたか、鳥散布のような自然分布であると考えられる。上地島は人口が減少し、常時住む島民は10人に満たない。また、集落近くに残る御嶽林は現在も島民の努力により島外の人間が中に入らないよう厳重に管理されている。上地島においては、野生化したヤギが多少目立つものの、おそらく今後の環境改変は進まず、このまましばらくは自然が残るものと予想される。

下地島では確認種数は209種であった。1989年には見られなかったが今回確認された種は82種あり、そのうち28種が帰化種または栽培逸出種で、割合にすると34%になる。環境省または沖縄県のRDB掲載種で見ると（VU以上）、ヤエヤマヒトツボクロ、イソフジ、イソマツ、ゴバンノアシ、ヤエヤマアオキ、ヤエヤマズコウジュ、モクビャッコウが見られた。下地島は島の中央部のほとんどをウシの牧場・牧草地が占め、アフリカヒゲシバ（ローズソウ、ローズグラス）やギネアキビ（ギニアキビ、ギニアグラス）を中心とした外来の牧草が目立つ。ただし、海岸沿いには自然林や御嶽林が鬱蒼と残る。そのような場所に沖縄では自生株の少ないゴバンノアシの大木が見られた。

3. 黒島

黒島のフロラは、古くは1893年の田代より記録があるが、1989年知念、2006年黒島研究所の報告がある。それぞれ確認種数に差があり、それは調査の時期や踏査した範囲、調査員の同定能力の差などの違いに起因すると思われる。今回の調査では変種、品種を含め305種を確認した。黒島は島の中央部を牧場が占め、人口よりウシの数が多き島として有名だが、島の局所に御嶽林が残り、さまざまな環境が見られる。環境省または沖縄県のRDB掲載種で見ると（VU以上）、ヤエヤマヒトツボクロ、オニクグ、ミヤコジマツルマメ、イソフジ、ヤエヤマハマナツメ、ゴバンノアシ、オキナワソケイ、ヤエヤマズコウジュ、モクビャッコウが確認できた。1893年の確認種の約半数は今回の調査で確認できず、120年間の環境改変の激しさを示している。また、全確認種数に対する移入種（帰化種及

表2 4島嶼の植物種数

| 島名 | 鳩間島 | | 上地島 | | 下地島 | | 黒島 | | | | |
|------|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | 調査年 | 2013 | 1977 | 2013 | 1989 | 2013 | 1989 | 2014 | 2006 | 1989 | 1893 |
| 確認種 | | 250 | 297 | 258 | 153 | 209 | 143 | 305 | 151 | 190 | 106 |
| 亜種 | | 7 | 5 | 5 | 3 | 4 | 3 | 6 | 4 | 2 | 3 |
| 変種 | | 28 | 34 | 23 | 18 | 14 | 15 | 31 | 19 | 17 | 12 |
| 品種 | | 3 | 2 | 3 | 2 | 2 | 1 | 3 | 3 | 2 | 2 |
| 移入種* | | 68 | 86 | 58 | 21 | 55 | 31 | 91 | 67 | 42 | 12 |
| 移入種率 | | 27% | 29% | 22% | 14% | 26% | 22% | 30% | 44% | 22% | 11% |

※移入種は帰化種と栽培逸出種を合わせた数とした

び栽培逸出種)数の割合が高く、2006年で40%、2014年で30%を越えている(表2)。調査中、いたるところにインドクジャクの群れが見られ、環境改変に一役買っていることは想像に難くない。

新城島」, p.62-70.
 邑田仁 米倉浩司, 2013, 「維管束植物分類表」, 北隆館.

4.4 島嶼総合

今回調査した4島嶼の植物種数及び移入種(帰化種及び栽培逸出種)数、割合を表2に示す。

いずれの島も今回の調査で移入種率が20%を越えた。石西礁湖周辺の無人島(嘉弥真島、平西島、離島、パサイ島)では帰化種の率が4%未満であるという報告があり(知念1993)、有人島では、人為的な影響による自然改変が進んでいることを示している。

謝辞

本調査にあたって、新城島パナリ観光の西泊宏信氏、NPO法人日本ウミガメ協会附属黒島研究の若月元樹氏、宮良哲行氏には格別のご助力をいただいた。ここに厚く感謝の意を表す。

参考文献

- 田代安定, 1893-94, 「八重山列島各属島ノ植物」, 植物学雑誌第81-85号.
- Kazuharu SHINJO, 1977, 「FLORA OF HATOMA ISLAND, THE YAEUAMA ISLANDS」, Ecol.Stud.Nat. Ryukyu Isl., III, p.29-40.
- 知念美香, 1993, 「石西礁湖小島嶼の植物相」, 沖縄島嶼研究, Vol.11, p.75-105.
- NPO法人日本ウミガメ協議会附属黒島研究所, 2006, 「黒島の自然と民俗」, p.3-12.
- 竹富町史編集委員会, 2013, 「竹富町史 第五巻

鳩間島 植物目録

2013 1977
確認 確認

| 大葉類 | | EUPHYLLOPHYTA | |
|--|------|--|---|
| 大葉シダ植物 | | MONILOPHYTA | |
| フサシダ目 | | Schizaeales | |
| カニクサ科 | | Lygodiaceae | |
| <i>Lygodium japonicum</i> (Thunb.) Sw. var. <i>microstachyum</i> (Desv.) C.Chr. et Tardieu | [変種] | ○ | ● |
| ナガバカニクサ (タイワンカニクサ, テリバカニクサ) | | | |
| ウラボシ目 | | Polypodiales | |
| イノモトソウ科 | | Pteridaceae | |
| <i>Pteris fauriei</i> Hieron. | | ○ | ● |
| ハチジョウシダ (シマハチジョウシダ) | | | |
| <i>Pteris ryukyuensis</i> Tagawa | | ○ | ● |
| リュウキュウイノモトソウ | | | |
| チャセンシダ科 | | Aspleniaceae | |
| <i>Asplenium nidus</i> L. | | | ● |
| シマオオタニワタリ | | | |
| <i>Asplenium setoi</i> N.Murak. et Seriz. | | ○ | |
| ヤエヤマオオタニワタリ (リュウキュウトリノスシダ) | | | |
| ヒメシダ科 | | Thelypteridaceae | |
| <i>Thelypteris acuminata</i> (Houtt.) C.V.Morton | | ○ | ● |
| ホシダ (シシホシダ) | | | |
| タマシダ科 | | Nephrolepidaceae | |
| <i>Nephrolepis biserrata</i> (Sw.) Schott | | ○ | ● |
| ホウビカンジュ | | | |
| <i>Nephrolepis brownii</i> (Desv.) Hovenk. et Miyam. | | ○ | ● |
| ヤンバルタマシダ (オオタマシダ, ムニンタマシダ) | | | |
| <i>Nephrolepis cordifolia</i> (L.) C.Presl | | ○ | ● |
| タマシダ | | | |
| ウラボシ科 | | Polypodiaceae | |
| <i>Phymatosorus scolopendria</i> (Burm.f.) Pic.Serm. | | ○ | |
| オキナワウラボシ | | | |
| 種子植物 | | SPERMETOPHYTA | |
| 裸子植物 (末端裸子植物) | | GYMNOSPERMAE (Acrogymnospermae) | |
| ソテツ目 | | Cycadales | |
| ソテツ科 | | Cycadaceae | |
| <i>Cycas revoluta</i> Thunb. | | ○ | ● |
| ソテツ | | | |
| マツ目 | | Pinales | |
| マツ科 | | Pinaceae | |
| <i>Pinus luchuensis</i> Mayr | | ○ | |
| リュウキュウマツ (リュウキュウアカマツ) | | | |
| ナンヨウスギ目 | | Araucariales | |
| マキ科 | | Podocarpaceae | |
| <i>Podocarpus macrophyllus</i> (Thunb.) Sweet | | ○ | ● |
| イヌマキ (クサマキ) | | | |
| 被子植物 | | ANGIOSPERMAE | |
| コショウ目 | | Piperales | |
| コショウ科 | | Piperaceae | |
| <i>Piper kadsura</i> (Choisy) Ohwi | | ○ | ● |
| フウトウカズラ (オオバフウトウカズラ) | | | |
| <i>Piper retrofractum</i> Vahl | [帰化] | ○ | ● |
| ヒハツモドキ (ジャワナガコショウ, ヒハツ) | | | |

| | 2013 確認 | 1977 確認 |
|--|------------|------------|
| ウマノスズクサ科 Aristolochiaceae | | |
| <i>Aristolochia liukuensis</i> Hatus. リュウキュウウマノスズクサ | | ● |
| <i>Aristolochia shimadae</i> Hayata アリマウマノスズクサ (ミツデウマノスズクサ, ホソバウマノスズクサ) | ○ | |
| クスノキ目 Laurales | | |
| ハスノハギリ科 Hernandiaceae | | |
| <i>Hernandia nymphaeifolia</i> (C.Presl) Kubitzki ハスノハギリ | ○ | ● |
| クスノキ科 Lauraceae | | |
| <i>Cassytha filiformis</i> L. スナヅル (シマネナシカズラ) | ○ | ● |
| <i>Machilus thunbergii</i> Siebold et Zucc. タブノキ (イヌグス) | ○ | ● |
| 単子葉植物 MONOCOTYLEDONEAE | | |
| オモダカ目 Alismatales | | |
| サトイモ科 Araceae | | |
| <i>Alocasia odora</i> (Lodd.) Spach クワズイモ | ○ | ● |
| <i>Epipremnum pinnatum</i> (L.) Engl. ハブカズラ | ○ | ● |
| <i>Typhonium blumei</i> Nicolson et Sivadasan リュウキュウハンゲ | | ● |
| ヤマノイモ目 Dioscoreales | | |
| ヤマノイモ科 Dioscoreaceae | | |
| <i>Dioscorea alata</i> L. ダイジョ (ダイショ) | | ● |
| <i>Dioscorea pseudojaponica</i> Hayata キールンヤマノイモ (キールンヤマノイモ) | | ● |
| タコノキ目 Pandanales | | |
| タコノキ科 Pandanaceae | | |
| <i>Pandanus boninensis</i> Warb. タコノキ | ○ | |
| <i>Pandanus odoratissimus</i> L.f. アダン (リュウキュウアダン, カネアダン) | ○ | ● |
| ユリ目 Liliales | | |
| サルトリイバラ科 Smilacaceae | | |
| <i>Smilax bracteata</i> C.Presl サツマサンキライ | ○ | |
| <i>Smilax sebeana</i> Miq. ハマサルトリイバラ (トゲナシカカラ) | | ● |
| ユリ科 Liliaceae | | |
| <i>Lilium longiflorum</i> Thunb. テッポウユリ | ○ | ● |
| キジカクシ目 (クサスギカズラ目) Asparagales | | |
| ラン科 Orchidaceae | | |
| <i>Geodorum densiflorum</i> (Lam.) Schltr. トサカメオトラン | | ● |
| アヤメ科 Iridaceae | | |
| <i>Gladiolus × colvillii</i> Sweet グラジオラス | [栽培逸出] ○ | |
| <i>Iris domestica</i> (L.) Goldblatt et Mabb. ヒオウギ | | ● |

2013 1977
確認 確認

ススキノキ科 (ワスレグサ科) Xanthorrhoeaceae

| | | |
|---|--------|---|
| <i>Aloe arborescens</i> Mill. キダチアロエ (アロエ, キダチロカイ) | [栽培逸出] | ● |
| <i>Dianella ensifolia</i> (L.) DC. キキョウラン | | ● |

ヒガンバナ科 Amaryllidaceae

| | | |
|--|--------|---|
| <i>Crinum asiaticum</i> L. var. <i>japonicum</i> Baker ハマオモト (ハマユウ) | [変種] ○ | ● |
|--|--------|---|

キジカクシ科 (クサギカズラ科) Asparagaceae

| | | |
|---|----------|---|
| <i>Agave americana</i> L. アオノリュウゼツラン | [帰化] ○ | ● |
| <i>Barnardia japonica</i> (Thunb.) Schult. et Schult.f. ツルボ (サンダイガサ, オニツルボ, キタツルボ) | ○ | ● |
| <i>Liriope muscari</i> (Decne.) L.H.Bailey ヤブラン | ○ | ● |
| <i>Ophiopogon jaburan</i> (Siebold) Lodd. ノシラン | | ● |
| <i>Sansevieria nilotica</i> Baker チトセラン | [栽培逸出] ○ | ● |

ヤシ目 Arecales

ヤシ科 Arecaceae

| | | |
|--|----------|---|
| <i>Arenga ryukyuensis</i> A.Henderson クロツグ (コミノクロツグ) | ○ | ● |
| <i>Cocos nucifera</i> L. ココヤシ | [栽培逸出] ○ | ● |
| <i>Livistona chinensis</i> (Jacq.) R.Br. ex Mart. var. <i>subglobosa</i> (Hassk.) Becc. ビロウ | [変種] ○ | ● |
| <i>Rhapis humilis</i> Blume シュロチク | [栽培逸出] | ● |
| <i>Washingtonia filifera</i> (Linden ex André) H.Wendl. ex De Bary ワシントンヤシ (オキナヤシ, シラガヤシ) | [栽培逸出] | ● |

ツユクサ目 Commelinales

ツユクサ科 Commelinaceae

| | | |
|--|--------|---|
| <i>Commelina auriculata</i> Blume ホウライツユクサ (ナミツユクサ) | ○ | ● |
| <i>Commelina benghalensis</i> L. マルバツユクサ | | ● |
| <i>Commelina diffusa</i> Burm.f. シマツユクサ (ハダカツユクサ) | | ● |
| <i>Murdannia loriformis</i> (Hassk.) R.Rao et Kammathy シマイボクサ (ハナイボクサ, ナガバイボクサ) | ○ | |
| <i>Tradescantia spathacea</i> Sw. ムラサキオモト (シキンラン) | [帰化] ○ | |

ショウガ目 Zingiberales

バショウ科 Musaceae

| | | |
|--|---------------|---|
| <i>Musa balbisiana</i> Colla var. <i>liukiuensis</i> (Matsum.) Häkkinen リュウキュウバショウ (リュウキュウイトバショウ, イトバショウ) | [変種] [栽培逸出] ○ | ● |
| <i>Musa basjoo</i> Siebold ex Inuma バショウ | [栽培逸出] ○ | |
| <i>Musa</i> × <i>paradisiaca</i> L. バナナ | [栽培逸出] | ● |

カンナ科 Cannaceae

| | | |
|---|--------|---|
| <i>Canna indica</i> L. ダンドク (アカバナダンドク) | [帰化] ○ | ● |
|---|--------|---|

| | | 2013 確認 | 1977 確認 |
|--|----------------------------------|------------|------------|
| <i>Canna indica</i> L. var. <i>flava</i> (Roscoe) Baker キバナダンドク | [変種] [帰化] | ○ | ● |
| | ショウガ科 Zingiberaceae | | |
| <i>Alpinia zerumbet</i> (Pers.) B.L.Burtt et R.M.Sm. ゲットウ | | ○ | ● |
| | イネ目 Poales カヤツリグサ科 Cyperaceae | | |
| <i>Carex brunnea</i> Thunb. コゴメスゲ (コゴメナキリスゲ, シオカゼナキリ) | | | ● |
| <i>Carex kobomugi</i> Ohwi コウボウムギ (フデクサ, ホウキコウボウムギ) | | ○ | |
| <i>Carex wahuensis</i> C.A.Mey. var. <i>bongardii</i> (Boott) Franch. et Sav. ヒゲスゲ (イソスゲ, オオヒゲスゲ) | [変種] | | ● |
| <i>Cladium jamaicense</i> Crantz subsp. <i>chinense</i> (Nees) T.Koyama ヒトモトススキ (シシキリガヤ) | [亜種] | ○ | ● |
| <i>Cyperus alternifolius</i> L. subsp. <i>flabelliformis</i> Kük. シュロガヤツリ | [亜種] [帰化] | | ● |
| <i>Cyperus cyperinus</i> (Vahl) Suringar シマクゲ (タイワンクゲ) | | | ● |
| <i>Cyperus kyllingia</i> Endl. オオヒメクゲ (シロヒメクゲ) | | ○ | ● |
| <i>Cyperus polystachyos</i> Rottb. イガガヤツリ | | ○ | ● |
| <i>Cyperus rotundus</i> L. ハマスゲ | | ○ | ● |
| <i>Fimbristylis dichotoma</i> (L.) Vahl var. <i>diphylla</i> (Retz.) T.Koyama クグテンツキ | [変種] | | ● |
| <i>Fimbristylis ovata</i> (Burm.f.) Kern ヤリテンツキ | | | ● |
| | トウツルモドキ科 Flagellariaceae | | |
| <i>Flagellaria indica</i> L. トウツルモドキ | | ○ | ● |
| | イネ科 Poaceae | | |
| <i>Arthraxon hispidus</i> (Thunb.) Makino コブナグサ | | ○ | ● |
| <i>Cenchrus brownii</i> Roem. et Schult. クリノイガ | [帰化] | | ● |
| <i>Chloris gayana</i> Kunth アフリカヒゲシバ (ローズソウ, ローズグラス) | [帰化] | ○ | |
| <i>Coix lacryma-jobi</i> L. ジュズダマ | [帰化] | | ● |
| <i>Cynodon dactylon</i> (L.) Pers. ギョウギシバ (バミューダグラス) | | ○ | ● |
| <i>Dactyloctenium aegyptium</i> (L.) P.Beauv. タツノツメガヤ (ミヤコジマオヒシバ, ヤンバルオヒシバ) | [帰化] | | ● |
| <i>Digitaria ciliaris</i> (Retz.) Koeler メヒシバ | | ○ | ● |
| <i>Digitaria henryi</i> Rendle ヘンリーメヒシバ (ナンゴクメヒシバ) | | | ● |
| <i>Eleusine indica</i> (L.) Gaertn. オヒシバ (チカラグサ, オイジワ) | | ○ | ● |
| <i>Eragrostis multicaulis</i> Steud. ニワホコリ | | ○ | ● |

| | 2013 確認 | 1977 確認 |
|---|------------|------------|
| <i>Eriochloa villosa</i> (Thunb.) Kunth ナルコビエ (ホソバナナルコビエ, ホソミナルコビエ, ホソミノナルコビエ) | | ● |
| <i>Hackelochloa granularis</i> (L.) Kuntze ヤエガヤ | [帰化] | ● |
| <i>Imperata cylindrica</i> (L.) Raeusch. var. <i>koenigii</i> (Retz.) Pilg. チガヤ (ケチガヤ) | [変種] ○ | ● |
| <i>Ischaemum aureum</i> (Hook. et Arn.) Hack. ハナカモノハシ | ○ | ● |
| <i>Leptochloa panicea</i> (Retz.) Ohwi イトアゼガヤ | | ● |
| <i>Lepturus repens</i> (G.Forst.) R.Br. ハイシバ | | ● |
| <i>Miscanthus condensatus</i> Hack. ハチジョウススキ | ○ | |
| <i>Miscanthus sinensis</i> Andersson ススキ | ○ | ● |
| <i>Oplismenus compositus</i> (L.) P.Beauv. エダウチチヂミザサ | ○ | ● |
| <i>Oplismenus undulatifolius</i> (Ard.) Roem. et Schult. チヂミザサ (ケチヂミザサ) | ○ | |
| <i>Panicum repens</i> L. ハイキビ | | ● |
| <i>Paspalum conjugatum</i> Bergius オガサワラスズメノヒエ (スズメノナガビエ) | [帰化] | ● |
| <i>Paspalum scrobiculatum</i> L. var. <i>orbiculare</i> (G.Forst.) Hack. スズメノコビエ | [変種] | ● |
| <i>Paspalum vaginatum</i> Sw. サワスズメノヒエ | | ● |
| <i>Pennisetum purpureum</i> Schumach. ナピアグラス (ネピアグラス, エレファントグラス) | [帰化] ○ | |
| <i>Phacelurus latifolius</i> (Steud.) Ohwi アイアシ | ○ | ● |
| <i>Phragmites japonicus</i> Steud. ツルヨシ (ジシバリ) | ○ | ● |
| <i>Phyllostachys aurea</i> Carrière ex A. et C.Rivière ホテイチク (ゴサンチク) | [栽培逸出] | ● |
| <i>Pleiblastus linearis</i> (Hack.) Nakai リュウキュウチク (ゴザダケザサ, ギョウヨウチク) | ○ | ● |
| <i>Rottboellia cochinchinensis</i> (Lour.) Clayton ツノアイアシ (ケアイアシ) | [帰化] ○ | |
| <i>Saccharum arundinaceum</i> Retz. ヨシススキ | [帰化] | ● |
| <i>Setaria pallidifusca</i> (Schumach.) Stapf et C.E.Hubb. コツブキンエノコロ | | ● |
| <i>Setaria verticillata</i> (L.) P.Beauv. ザラツキエノコログサ | [帰化] | ● |
| <i>Setaria viridis</i> (L.) P.Beauv. エノコログサ | | ● |
| <i>Setaria viridis</i> (L.) P.Beauv. var. <i>pachystachys</i> (Franch. et Sav.) Makino et Nemoto ハマエノコロ (ムラサキハマエノコロ) | [変種] | ● |
| <i>Spinifex littoreus</i> (Burm.f.) Merr. ツキイゲ | | ● |
| <i>Sporobolus fertilis</i> (Steud.) Clayton var. <i>purpureosuffusus</i> (Ohwi) Ohwi ムラサキネズミノオ (リュウキュウネズミノオ) | [変種] ○ | ● |

| | 2013 確認 | 1977 確認 |
|---|------------|------------|
| <i>Sporobolus virginicus</i> (L.) Kunth ソナレシバ | ○ | ● |
| <i>Thuarea involuta</i> (G.Forst.) R.Br. ex Sm. クロイワザサ (スナザサ) | ○ | ● |
| <i>Zoysia matrella</i> (L.) Merr. コウシュンシバ (ハリシバ) | | ● |
| <i>Zoysia pacifica</i> (Goudswaard) M.Hotta et Kuroki コウライシバ (イトシバ) | ○ | ● |
| 真正双子葉植物 EUDICOTS | | |
| キンポウゲ目 Ranunculales | | |
| ケシ科 Papaveraceae | | |
| <i>Corydalis heterocarpa</i> Siebold et Zucc. var. <i>brachystyla</i> (Koidz.) Ohwi ムニンキケマン (シマキケマン, ナンゴクキケマン) | ○ | ● |
| ツツラフジ科 Menispermaceae | | |
| <i>Cocculus trilobus</i> (Thunb.) DC. アオツツラフジ (カミエビ) | | ● |
| <i>Cyclea insularis</i> (Makino) Hatus. ミヤコジマツツラフジ | | ● |
| <i>Sinomenium acutum</i> (Thunb.) Rehder et E.H.Wilson ツツラフジ (オオツツラフジ) | ○ | |
| <i>Stephania japonica</i> (Thunb.) Miers ハスノハカズラ (ケハスノハカズラ, コバノハスノハカズラ, オオバハスノハカズラ) | | ● |
| キンポウゲ科 Ranunculaceae | | |
| <i>Clematis javana</i> DC. リュウキュウボタンヅル (ケボタンヅル, タイワンボタンヅル) | ○ | ● |
| <i>Ranunculus sieboldii</i> Miq. シマキツネノボタン (ヤエヤマキツネノボタン) | ○ | ● |
| ユキノシタ目 Saxifragales | | |
| ベンケイソウ科 Crassulaceae | | |
| <i>Bryophyllum pinnatum</i> (L.f.) Oken トウロウソウ (セイロンベンケイ) | ○ | ● |
| <i>Bryophyllum tubiflorum</i> Harvey キンチョウ | ○ | |
| ブドウ目 Vitales | | |
| ブドウ科 Vitaceae | | |
| <i>Vitis ficifolia</i> Bunge エビヅル (ミツバブドウ, リュウキュウガネブ) | ○ | ● |
| マメ目 Fabales | | |
| マメ科 Fabaceae | | |
| <i>Acacia confusa</i> Merr. ソウシジュ (タイワンアカシア) | | ● |
| <i>Alysicarpus vaginalis</i> (L.) DC. ササハギ (マルバダケハギ) | | ● |
| <i>Caesalpinia crista</i> L. ナンテンカズラ | | ● |
| <i>Caesalpinia major</i> (Medik.) Dandy et Exell ハスノミカズラ | ○ | |
| <i>Caesalpinia pulcherrima</i> (L.) Sw. オウゴチョウ (オオゴチョウ) | ○ | ● |
| <i>Canavalia lineata</i> (Thunb.) DC. ハマナタマメ | ○ | ● |
| <i>Christia obcordata</i> (Poir.) Bakh.f. ex Meeuwen ホオズキハギ | | ● |

2013 1977
確認 確認

| | | | |
|--|--------|--------------|---|
| <i>Delonix regia</i> (Bojer ex Hook.) Raf. ホウオウボク | [栽培逸出] | ○ | |
| <i>Derris trifoliata</i> Lour. シイノキカズラ (ギョトウ) | | ○ | ● |
| <i>Erythrina variegata</i> L. デイゴ (デイコ, ムニンデイゴ) | [帰化] | | ● |
| <i>Galactia tashiroi</i> Maxim. ハギカズラ | | | ● |
| <i>Indigofera suffruticosa</i> Mill. ナンバンコマツナギ | [帰化] | | ● |
| <i>Indigofera trifoliata</i> L. ミツバノコマツナギ (ナハエボシグサ) | | ○ | ● |
| <i>Lablab purpurea</i> (L.) Sweet フジマメ | [栽培逸出] | | ● |
| <i>Leucaena leucocephala</i> (Lam.) de Wit ギンゴウカン (ギンネム) | [帰化] | ○ | ● |
| <i>Medicago lupulina</i> L. コメツブウマゴヤシ (ネバリコメツブウマゴヤシ) | [帰化] | ○ | ● |
| <i>Melilotus officinalis</i> (L.) Pall. subsp. <i>suaveolens</i> (Ledeb.) H.Ohashi シナガワハギ (エビラハギ) | [亜種] | ○ | |
| <i>Millettia pinnata</i> (L.) Panigrahi クロヨナ | | ○ | ● |
| <i>Ormocarpum cochinchinense</i> (Lour.) Merr. ハマセンナ (ハマエンジュ) | | ○ | |
| <i>Phaseolus vulgaris</i> L. インゲンマメ (インゲン, サイトウ, ゴガツササゲ) | [栽培逸出] | | ● |
| <i>Rhynchosia minima</i> (L.) DC. ヒメノアズキ | | | ● |
| <i>Senna occidentalis</i> (L.) Link ハブソウ (オオハブソウ, クサセンナ) | [栽培逸出] | | ● |
| <i>Sophora tomentosa</i> L. イソフジ | | | ● |
| <i>Vicia tetrasperma</i> (L.) Schreb. カスマグサ | | ○ | |
| <i>Vigna marina</i> (Burm.) Merr. ハマアズキ (ハマササゲ) | | | ● |
| <i>Vigna minima</i> (Roxb.) Ohwi et H.Ohashi var. <i>minor</i> (Matsum.) Tateishi ヒナアズキ (コバノツルアズキ, ヒメハマアズキ) | [変種] | | ● |
| <i>Vigna reflexopilosa</i> Hayata オオヤブツルアズキ (サカサハマササゲ) | | ○ | |
| | ヒメハギ科 | Polygalaceae | |
| <i>Polygala japonica</i> Houtt. ヒメハギ (ハイヒメハギ) | | ○ | |
| | バラ目 | Rosales | |
| | バラ科 | Rosaceae | |
| <i>Amygdalus persica</i> L. モモ | [栽培逸出] | | ● |
| <i>Rosa chinensis</i> Jacq. コウシンバラ | [栽培逸出] | | ● |
| <i>Rubus parvifolius</i> L. ナワシロイチゴ | | ○ | ● |
| | アサ科 | Cannabaceae | |
| <i>Trema orientalis</i> (L.) Blume ウラジロエノキ | | ○ | |

2013 1977
確認 確認

クワ科 Moraceae

| | | | |
|--|------|---|---|
| <i>Broussonetia papyrifera</i> (L.) L'Hér. ex Vent. カジノキ | | ○ | ● |
| <i>Ficus caulocarpa</i> (Miq.) Miq. オオバアコウ | | ○ | ● |
| <i>Ficus elastica</i> Roxb. ex Hornem. インドゴムノキ (アッサムゴム) | [帰化] | | ● |
| <i>Ficus erecta</i> Thunb. var. <i>erecta</i> イヌビワ (イタビ) | [変種] | ○ | ● |
| <i>Ficus microcarpa</i> L.f. ガジュマル | | ○ | ● |
| <i>Ficus septica</i> Burm.f. オオバイヌビワ | | ○ | ● |
| <i>Ficus superba</i> (Miq.) Miq. var. <i>japonica</i> Miq. アコウ | [変種] | ○ | |
| <i>Ficus virgata</i> Reinw. ex Blume ハマイヌビワ | | ○ | ● |
| <i>Maclura cochinchinensis</i> (Lour.) Corner var. <i>gerontogea</i> (Siebold et Zucc.) H. Ohashi カカツガユ | [変種] | ○ | |
| <i>Morus australis</i> Poir. ヤマゲワ (シマゲワ, アマミゲワ) | | ○ | ● |

イラクサ科 Urticaceae

| | | | |
|--|------|---|---|
| <i>Boehmeria nivea</i> (L.) Gaudich. var. <i>concolor</i> Makino アオカラムシ (ノカラムシ) | [変種] | ○ | ● |
| <i>Boehmeria nivea</i> (L.) Gaudich. var. <i>concolor</i> Makino f. <i>nipponnivea</i> (Koidz.) Kitam. ex H. Ohba カラムシ (クサマオ) | [品種] | ○ | ● |
| <i>Gonostegia hirta</i> (Blume ex Hassk.) Miq. ツルマオ | | | ● |
| <i>Pilea microphylla</i> (L.) Liebm. コゴメミズ | [帰化] | ○ | |
| <i>Pipturus arborescens</i> (Link) C.B. Rob. ヌノマオ (オオイワガネ) | | ○ | ● |
| <i>Pouzolzia zeylanica</i> (L.) Benn. ヤンバルツルマオ (オオバヒメマオ, ツルマオモドキ, コケツルマオ) | | | ● |

ブナ目 Fagales

モクマオウ科 Casuarinaceae

| | | | |
|--|--------|---|---|
| <i>Casuarina cunninghamiana</i> Miq. カニンガムモクマオウ | [栽培逸出] | | ● |
| <i>Casuarina equisetifolia</i> L. トクサバモクマオウ (モクマオウ, トキワギョリュウ) | [帰化] | ○ | ● |

ウリ目 Cucurbitales

ウリ科 Cucurbitaceae

| | | | |
|--|--------|---|---|
| <i>Citrullus lanatus</i> (Thunb.) Matsum. et Nakai スイカ | [栽培逸出] | | ● |
| <i>Diplocyclos palmatus</i> (L.) C. Jeffrey オキナワスズメウリ | | | ● |
| <i>Luffa cylindrica</i> (L.) M. Roem. ヘチマ | [栽培逸出] | | ● |
| <i>Momordica charantia</i> L. ニガウリ (ツルレイシ, ゴーヤ) | [栽培逸出] | ○ | |
| <i>Zehneria guamensis</i> (Merr.) Fosberg クロミノオキナワスズメウリ | | ○ | ● |

2013 1977
確認 確認

ニシキギ目 Celastrales
ニシキギ科 Celastraceae

- Euonymus japonicus* Thunb. ○ ●
マサキ (オオバマサキ, ナガバマサキ, コバマサキ, ボウシュウマサキ, ヤクシママサキ)
Gymnosporia diversifolia Maxim. ○
ハリツルマサキ (トゲマサキ)

カタバミ目 Oxalidales
カタバミ科 Oxalidaceae

- Oxalis corniculata* L. ○ ●
カタバミ
Oxalis debilis Kunth subsp. *corymbosa* (DC.) Lourteig [亜種] [帰化] ○
ムラサキカタバミ

キントラノオ目 Malpighiales
トウダイグサ科 Euphorbiaceae

- Acalypha wilkesiana* Müll.Arg. [栽培逸出] ○ ●
アカリファ (ヘリトリアカリファ, フクリンアカリファ, キフクリンアカリファ)
Chamaesyce atoto (G.Forst.) Croizat ○ ●
スナジタイゲキ (ハマタイゲキ, スナタイゲキ)
Chamaesyce bifida (Hook. et Arn.) T.Kuros. ●
ミヤコジマニシキソウ (アワユキニシキソウ)
Chamaesyce hirta (L.) Millsp. ○ ●
シマニシキソウ (タイワンニシキソウ)
Chamaesyce prostrata (Aiton) Small [帰化] ○ ●
ハイニシキソウ
Codiaeum variegatum (L.) A.Juss. var. *pictum* (Lodd.) Müll.Arg. [変種] [栽培逸出] ○ ●
ヘンヨウボク (クロトン, クロトンノキ)
Croton cascarilloides Raeusch. ○ ●
グミモドキ (チャンカニー)
Euphorbia cyathophora Murray [帰化] ●
ショウジョウソウ
Euphorbia pulcherrima Willd. ex Klotzsch [栽培逸出] ●
ショウジョウボク (ポインセチア)
Excoecaria agallocha L. ●
シマシラキ (オキナワジンコウ)
Macaranga tanarius (L.) Müll.Arg. ○ ●
オオバギ (オオバキ)
Mallotus japonicus (L.f.) Müll.Arg. ○
アカメガシワ (ゴサイバ)
Melanolepis multiglandulosa (Reinw. ex Blume) Rchb.f. et Zoll. ○ ●
ヤンバルアカメガシワ
Ricinus communis L. [帰化] ○ ●
トウゴマ (ヒマ)
Triadica sebifera (L.) Small [帰化] ●
ナンキンハゼ
Acalypha australis L. ●
エノキグサ (アミガサソウ, ホソバエノキグサ)
ミカンソウ科 (コミカンソウ科) Phyllanthaceae
Antidesma pentandrum (Blanco) Merr. ○ ●
コウトウヤマヒハツ (シマヤマヒハツ, カイガンセイシボク)
Bischofia javanica Blume ○ ●
アカギ
Breynia vitis-idaea (Burm.f.) C.E.C.Fisch. ○ ●
オオシマコバンノキ (オオシマカンコノキ, ヒメコバンノキ, タイワンコバンノキ, タイワンヒメコバンノキ, タカサゴコバンノキ)

| | 2013 確認 | 1977 確認 |
|--|-------------|------------|
| <i>Flueggea suffruticosa</i> (Pall.) Baill. ヒトツバハギ | | ● |
| <i>Phyllanthus amarus</i> Schumach. キダチコミカンソウ (キダチミカンソウ) | [帰化] ○ | |
| <i>Phyllanthus lepidocarpus</i> Siebold et Zucc. コミカンソウ | ○ | ● |
| <i>Phyllanthus reticulatus</i> Poir. シマコバンノキ (タイワンコバンノキ) | | ● |
| スミレ科 Violaceae | | |
| <i>Viola confusa</i> Champ. ex Benth. タイワンコスミレ (タイワンスミレ) | | ● |
| <i>Viola yedoensis</i> Makino var. <i>pseudojaponica</i> (Nakai) T.Hashim. リュウキュウコスミレ | [変種] ○ | |
| テリハボク科 Clusiaceae | | |
| <i>Calophyllum inophyllum</i> L. テリハボク (ヤラボ, タマナ, ヒータマナ) | [栽培逸出] ○ | ● |
| <i>Garcinia subelliptica</i> Merr. フクギ | [帰化] ○ | ● |
| フウロソウ目 Geraniales フウロソウ科 Geraniaceae | | |
| <i>Geranium carolinianum</i> L. アメリカフウロ | [帰化] ○ | |
| フトモモ目 Myrtales シクンシ科 Combretaceae | | |
| <i>Terminalia catappa</i> L. モモタマナ (コバテイシ, シマボウ) | ○ | ● |
| ミソハギ科 Lythraceae | | |
| <i>Cuphea hyssopifolia</i> Kunth メキシコハナヤナギ | [栽培逸出] ○ | |
| <i>Pemphis acidula</i> J.R. et G.Forst. ミズガンピ (ミズハギ) | ○ | ● |
| <i>Punica granatum</i> L. 'Nana' ヒメザクロ | [栽培逸出] ○ | |
| アカバナ科 Onagraceae | | |
| <i>Oenothera laciniata</i> Hill コマツヨイグサ | [帰化] ○ | ● |
| <i>Oenothera speciosa</i> Nutt. ヒルザキツキミソウ | [帰化] | ● |
| フトモモ科 Myrtaceae | | |
| <i>Psidium guajava</i> L. バンジロウ (グァバ) | [帰化] ○ | ● |
| ムクロジ目 Sapindales ムクロジ科 Sapindaceae | | |
| <i>Allophylus timoriensis</i> (DC.) Blume アカギモドキ | ○ | ● |
| <i>Cardiospermum halicacabum</i> L. var. <i>microcarpum</i> (Kunth) Blume コフウセンカズラ | [帰化] [変種] ○ | ● |
| <i>Dodonaea viscosa</i> Jacq. ハウチワノキ (ヒロハハウチワノキ) | ○ | |
| ミカン科 Rutaceae | | |
| <i>Citrus depressa</i> Hayata シイクワシャー (ヒラミレモン, シーカーシャー) | ○ | ● |
| <i>Melicope triphylla</i> (Lam.) Merr. アワダン (ミツバゴシュユ) | ○ | ● |

2013 1977
確認 確認

Murraya paniculata (L.) Jack
ゲッキツ

センダン科 Meliaceae

○ ●

Melia azedarach L.
センダン (アウチ)

○ ●

アオイ目 Malvales
アオイ科 Malvaceae

Abutilon indicum (L.) Sweet subsp. *indicum*
タカサゴイチビ (シマイチビ)

[亜種] [帰化] ●

Althaea rosea (L.) Cav.
タチアオイ

[栽培逸出] ○ ●

Hibiscus rosa-sinensis L.
ブッソウゲ

[栽培逸出] ○ ●

Hibiscus syriacus L.
ムクゲ (ハチス)

[帰化] ○

Hibiscus tiliaceus L.
オオハマボウ (ヤマアサ, シマハマボウ, ハマイチビ, オオバノハマボウ)

○ ●

Malvastrum coromandelianum (L.) Garcke
エノキアオイ (アオイモドキ)

[帰化] ○

Malvaviscus arboreus Cav. var. *drummondii* (Torr. et A.Gray) Schery
ヒメフヨウ (ヒメブッソウゲ)

[変種] [栽培逸出] ●

Sida rhombifolia L. subsp. *insularis* (Hatus.) Hatus.
ハイキンゴジカ

[亜種] ○ ●

Thespesia populnea (L.) Sol. ex Correa
サキシマハマボウ (シマアオイ, トウユウナ)

○ ●

Triumfetta rhomboidea Jacq.
カジノハラセンソウ

[帰化] ●

Urena lobata L.
オオバボンテンカ (アマミボンテンカ)

[帰化] ○

ジンチョウゲ科 Thymelaeaceae

Wikstroemia retusa A.Gray
アオガンピ (オキナワガンピ)

○ ●

アブラナ目 Brassicales
パパイヤ科 Caricaceae

Carica papaya L.
パパイヤ (パパイア)

[帰化] ○ ●

フウチョウボク科 Capparaceae

Crateva formosensis (Jacobs) B.S.Sun
ギョボク (アマギ)

●

アブラナ科 Brassicaceae

Brassica rapa L. var. *oleifera* DC.
アブラナ (ニホンアブラナ, ナタネ, ウンダイアブラナ)

[変種] [栽培逸出] ○

Cardamine scutata Thunb.
タネツケバナ

○

Lepidium didymum L.
カラクサナズナ (カラクサガラシ, インチンナズナ)

[帰化] ○

Lepidium englerianum (Muschler) Al-Shehbaz
ハマガラシ (ヤンバルガラシ)

○ ●

Lepidium virginicum L.
マメゲンバイナズナ (セイヨウゲンバイナズナ, コウベナズナ)

[帰化] ○

Raphanus sativus L. var. *hortensis* Backer
ダイコン

[変種] [栽培逸出] ●

Raphanus sativus L. var. *hortensis* Backer f. *raphanistroides* Makino
ハマダイコン

[品種] [帰化] ○ ●

| | 2013 確認 | 1977 確認 |
|---|---------------|------------|
| ナデシコ目 Caryophyllales | | |
| イソマツ科 Plumbaginaceae | | |
| <i>Limonium wrightii</i> (Hance) Kuntze var. <i>arbusculum</i> (Maxim.) H.Hara イソマツ (ムラサキマツ) | [変種] ○ | ● |
| タデ科 Polygonaceae | | |
| <i>Persicaria chinensis</i> (L.) H.Gross ツルソバ | ○ | ● |
| <i>Rumex japonicus</i> Houtt. ギシギシ (オオギシギシ, ニッコウギシギシ) | | ● |
| ナデシコ科 Caryophyllaceae | | |
| <i>Sagina japonica</i> (Sw.) Ohwi ツメクサ | ○ | |
| ヒユ科 Amaranthaceae | | |
| <i>Achyranthes aspera</i> L. var. <i>rubrofusca</i> (Wight) Hook.f. ムラサキイノコヅチ (ダイトウイノコヅチ) | [変種] ○ | ● |
| <i>Alternanthera bettzickiana</i> (Regel) G.Nicholson モヨウビユ | [栽培逸出] | ● |
| <i>Amaranthus blitum</i> L. イヌビユ (ムラサキビユ) | [帰化] ○ | ● |
| <i>Amaranthus viridis</i> L. ホナガイヌビユ (アオビユ) | [帰化] ○ | |
| <i>Amaranthus spinosus</i> L. ハリビユ (ハリイヌビユ) | [帰化] | ● |
| <i>Atriplex maximowicziana</i> Makino ミヤコジマハマアカザ | ○ | ● |
| <i>Blutaparon wrightii</i> (Hook.f. ex Maxim.) Mears イソフサギ | ○ | |
| <i>Chenopodium acuminatum</i> Willd. var. <i>vachelii</i> (Hook. et Arn.) Moq. カワラアカザ | [変種] | ● |
| <i>Chenopodium album</i> L. シロザ (シロアカザ) | [帰化] ○ | |
| ハマミズナ科 Aizoaceae | | |
| <i>Sesuvium portulacastrum</i> (L.) L. ミルスベリヒユ (ハマミズナ, ハマスベリヒユ) | ○ | ● |
| <i>Tetragonia tetragonoides</i> (Pall.) Kuntze ツルナ (ハマヂシャ) | ○ | ● |
| オシロイバナ科 Nyctaginaceae | | |
| <i>Boerhavia glabrata</i> Blume ナハカノコソウ | ○ | ● |
| <i>Mirabilis jalapa</i> L. オシロイバナ | [帰化] | ● |
| <i>Pisonia aculeata</i> L. トゲカズラ | | ● |
| <i>Pisonia umbellifera</i> (J.R. et G.Forst.) Seem. ウドノキ (オオクサボク, ウドキ, ナガミノウドノキ) | | ● |
| ツルムラサキ科 Basellaceae | | |
| <i>Basella alba</i> L. ツルムラサキ | [帰化] | ● |
| スベリヒユ科 Portulacaceae | | |
| <i>Portulaca oleracea</i> L. スベリヒユ (オオスベリヒユ, タチスベリヒユ) | | ● |
| <i>Portulaca pilosa</i> L. subsp. <i>grandiflora</i> (Hook.) R.Geesink マツバボタン | [亜種] [栽培逸出] ○ | ● |

| | | 2013 確認 | 1977 確認 |
|---|--|-------------|------------|
| <i>Talinum paniculatum</i> (Jacq.) Gaertn. ハゼラン (シュッコンハゼラン) | サボテン科 Cactaceae | [帰化] ○ | |
| <i>Hylocereus</i> sp. ドラゴンフルーツ (サンカクサボテン類) | | [栽培逸出] ○ | |
| | ツツジ目 Ericales アカテツ科 Sapotaceae | | |
| <i>Planchonella obovata</i> (R.Br.) Pierre アカテツ (クロテツ) | | ○ | ● |
| | カキノキ科 Ebenaceae | | |
| <i>Diospyros egbert-walkeri</i> Kosterm. ヤエヤマコクタン (リュウキュウコクタン) | | ○ | ● |
| <i>Diospyros maritima</i> Blume リュウキュウガキ (クサノガキ, クロボウ) | | ○ | ● |
| | サクラソウ科 Primulaceae | | |
| <i>Anagallis arvensis</i> L. f. <i>coerulea</i> (Schreb.) Baumg. ルリハコベ | | 品種 ○ | |
| <i>Androsace umbellata</i> (Lour.) Merr. リュウキュウコザクラ (コケサクラソウ) | | ○ | |
| <i>Ardisia sieboldii</i> Miq. モクタチバナ | | ○ | ● |
| <i>Lysimachia mauritiana</i> Lam. ハマボッサ | | ○ | ● |
| | エゴノキ科 Styracaceae | | |
| <i>Styrax japonica</i> Siebold et Zucc. エゴノキ (ロクロギ, チシャノキ, ロクロギ) | | ○ | ● |
| | リンドウ目 Gentianales アカネ科 Rubiaceae | | |
| <i>Galium spurium</i> L. var. <i>echinospermon</i> (Wallr.) Hayek ヤエムグラ | | [変種] ○ | |
| <i>Guettarda speciosa</i> L. ハテルマギリ | | ○ | ● |
| <i>Hedyotis strigulosa</i> (Bartl. ex DC.) Fosberg var. <i>parvifolia</i> (Hook. et Arn.) T.Yamaz. ソナレムグラ (イソイナモリソウ) | | [変種] ○ | ● |
| <i>Morinda citrifolia</i> L. ヤエヤマアオキ (ハテルマアオキ, ムガクヤエヤマアオキ) | | ○ | ● |
| <i>Paederia scandens</i> (Lour.) Merr. ヘクソカズラ (ヤイトバナ) | | ○ | ● |
| <i>Psychotria manillensis</i> Bartl. ex DC. ナガミボチョウジ | | ○ | ● |
| <i>Psychotria rubra</i> (Lour.) Poir. ボチョウジ (リュウキュウアオキ) | | ○ | ● |
| | キョウチクトウ科 Apocynaceae | | |
| <i>Catharanthus roseus</i> (L.) G.Don ニチニチソウ | | [栽培逸出] ○ | |
| <i>Cerbera manghas</i> L. ミフクラギ (オキナワキョウチクトウ, アマミキョウチクトウ) | | ○ | ● |
| <i>Cynanchum liukiuense</i> Warb. リュウキュウガシワ | | ○ | ● |
| <i>Nerium oleander</i> L. var. <i>indicum</i> (Mill.) O.Deg. et Greenwell キョウチクトウ | | [変種] [栽培逸出] | ● |
| <i>Parsonia alboflavescens</i> (Dennst.) Mabb. ホウライカガミ | | ○ | ● |

| | 2013 確認 | 1977 確認 |
|--|------------|------------|
| <i>Tylophora tanakae</i> Maxim. ツルモウリンカ | ○ | ● |
| ムラサキ目 Boraginales ムラサキ科 Boraginaceae | | |
| <i>Bothriospermum zeylanicum</i> (J.Jacq.) Druce ハナイバナ | ○ | |
| <i>Ehretia dicksonii</i> Hance マルバチシャノキ | ○ | ● |
| <i>Ehretia microphylla</i> Lam. フクマンギ | ○ | ● |
| <i>Ehretia philippinensis</i> A.DC. リュウキュウチシャノキ (ヤエヤマチシャノキ) | | ● |
| <i>Heliotropium foertherianum</i> Diane et Hilger モンパノキ (ハマムラサキノキ) | ○ | ● |
| <i>Trigonotis peduncularis</i> (Trevir.) Benth. ex Hemsl. キュウリグサ (タビラコ) | ○ | |
| ナス目 Solanales ヒルガオ科 Convolvulaceae | | |
| <i>Calystegia soldanella</i> (L.) R.Br. ハマヒルガオ | | ● |
| <i>Dichondra micrantha</i> Urb. アオイゴケ | ○ | ● |
| <i>Ipomoea batatas</i> (L.) Poir. サツマイモ (カンショ, アメリカイモ) | ○ | ● |
| <i>Ipomoea biflora</i> (L.) Pers. ネコアサガオ (ケアサガオ) | ○ | ● |
| <i>Ipomoea indica</i> (Burm.) Merr. ノアサガオ | ○ | ● |
| <i>Ipomoea littoralis</i> Blume ソコベニヒルガオ | ○ | ● |
| <i>Ipomoea pes-caprae</i> (L.) Sweet ゲンバイヒルガオ | ○ | ● |
| <i>Merremia umbellata</i> (L.) Hallier f. subsp. orientalis (Hallier f.) Ooststr. ミミバフサアサガオ | ○ | ● |
| ナス科 Solanaceae | | |
| <i>Capsicum frutescens</i> L. キダチトウガラシ (シマトウガラシ) | ○ | ● |
| <i>Datura stramonium</i> L. ヨウシュチョウセンアサガオ (シロバナチョウセンアサガオ, シロバナヨウシュチョウセンアサガオ) | ○ | ● |
| <i>Lycopersicon esculentum</i> Mill. トマト (アカナス) | ○ | ● |
| <i>Physalis angulata</i> L. var. <i>angulata</i> ヒロハフウリンホオズキ (センナリホオズキ) | ○ | ● |
| <i>Solanum americanum</i> Mill. テリミノイヌホオズキ (ニセイヌホオズキ, ナンゴクイヌホオズキ, カンザシイヌホオズキ) | ○ | ● |
| <i>Solanum nigrum</i> L. イヌホオズキ | ○ | ● |
| シソ目 Lamiales モクセイ科 Oleaceae | | |
| <i>Fraxinus griffithii</i> C.B.Clarke シマトネリコ (タイワンシオジ, タイワントネリコ, タイトウシオジ, ケタイトウシオジ) | ○ | ● |
| オオバコ科 Plantaginaceae | | |
| <i>Plantago asiatica</i> L. オオバコ (ハハキオオバコ, ホウキオオバコ) | ○ | ● |

2013 1977
確認 確認

Plantago virginica L.
ツボミオオバコ (タチオオバコ)

[帰化] ○

ゴマ科 Pedaliaceae

Sesamum orientale L.
ゴマ

[栽培逸出] ●

シソ科 Lamiaceae

Ajuga pygmaea A.Gray
ヒメキランソウ

○ ●

Callicarpa japonica Thunb. var. *luxurians* Rehder
オオムラサキシキブ

[変種] ○ ●

Clerodendrum inerme (L.) Gaertn.
イボタクサギ (ガシヤング)

○ ●

Clerodendrum trichotomum Thunb. var. *esculentum* Makino
シヨウロウクサギ (シヨウロクサギ)

[変種] ○ ●

Clinopodium gracile (Benth.) Kuntze
トウバナ

○

Leucas chinensis (Retz.) R.Br.
ヤンバルツルハツカ

○ ●

Premna serratifolia L.
タイワンウオクサギ (シマウオクサギ, ケウオクサギ)

○ ●

Scutellaria rubropunctata Hayata
アカボシタツナミソウ

●

Stachys officinalis (L.) Trevis.
カッコウソウ

[栽培逸出] ○

Teucrium viscidum Blume var. *viscidum*
コニガクサ (コツルニガクサ, ツルイヌチョロギ)

[変種] ●

Vitex rotundifolia L.f.
ハマゴウ (ハマハビ)

○ ●

Vitex trifolia L.
ミツバハマゴウ

○

キツネノマゴ科 Acanthaceae

Justicia procumbens L. var. *riukiensis* Yamam.
キツネノヒマゴ (ケブカキツネノマゴ)

[変種] ○ ●

Ruellia brittoniana Leonard ex Fernald
ヤナギバルイラソウ

[帰化] ○

Ruellia squarrosa (Fenzl) Cufod.
ケブカルイラソウ

[帰化] ○

クマツヅラ科 Verbenaceae

Lantana camara L. var. *aculeata* (L.) Moldenke
シチヘンゲ (ランタナ)

[変種] [帰化] ○

Phyla nodiflora (L.) Greene
イワダレソウ

●

Stachytarpheta dichotoma (Ruiz et Pav.) Vahl
チリメンナガボソウ

[帰化] ○

Stachytarpheta jamaicensis (L.) Vahl
フトボナガボソウ (インドナガボソウ)

[帰化] ○

Verbena officinalis L.
クマツヅラ

○ ●

キク目 Asterales

クサトベラ科 Goodeniaceae

Scaevola taccada (Gaertn.) Roxb.
クサトベラ

○ ●

| | 2013 確認 | 1977 確認 |
|--|-------------|------------|
| キク科 Asteraceae | | |
| <i>Ageratum conyzoides</i> L. カッコウアザミ | [帰化] | ● |
| <i>Artemisia capillaris</i> Thunb. カワラヨモギ | | ● |
| <i>Artemisia indica</i> Willd. ニシヨモギ (オキナワヨモギ) | ○ | |
| <i>Artemisia indica</i> Willd. var. <i>maximowiczii</i> (Nakai) H.Hara ヨモギ (カズザキヨモギ) | [変種] ○ | ● |
| <i>Artemisia japonica</i> Thunb. オトコヨモギ | | ● |
| <i>Bidens pilosa</i> L. var. <i>minor</i> (Blume) Sherff コシロノセンダングサ (シロノセンダングサ, シロバナセンダングサ) | [変種] [帰化] | ● |
| <i>Bidens pilosa</i> L. var. <i>pilosa</i> コセンダングサ | [変種] [帰化] | ● |
| <i>Bidens pilosa</i> L. var. <i>radiata</i> Sch. Bip. オオバナノセンダングサ (シロノセンダングサ, タチアワユキセンダングサ, アワユキセンダングサ, オオバナセンダングサ) | [変種] [帰化] ○ | |
| <i>Blumea lacera</i> (Burm.f.) DC. ヤエヤマコウゾリナ | | ● |
| <i>Cirsium brevicaule</i> A.Gray シマアザミ (イリオモテアザミ, アマミシマアザミ) | ○ | ● |
| <i>Conyza canadensis</i> (L.) Cronquist ヒメムカシヨモギ | [帰化] | ● |
| <i>Conyza sumatrensis</i> (Retz.) E.Walker オオアレチノギク | [帰化] ○ | ● |
| <i>Crassocephalum crepidioides</i> (Benth.) S.Moore ベニバナボロギク | [帰化] | ● |
| <i>Crepidiastrum lanceolatum</i> (Houtt.) Nakai ホソバワダン | | ● |
| <i>Cyanthillium cinereum</i> (L.) H.Rob. ムラサキムカシヨモギ (ヤンバルヒゴタイ, ヤンバルノギク) | ○ | ● |
| <i>Eclipta thermalis</i> Bunge タカサブロウ (モトタカサブロウ) | ○ | ● |
| <i>Elephantopus mollis</i> Kunth シロバナイガコウゾリナ | [帰化] ○ | ● |
| <i>Emilia sonchifolia</i> (L.) DC. var. <i>javanica</i> (Burm.f.) Matf. ウスベニニガナ | [変種] [帰化] ○ | ● |
| <i>Eupatorium formosanum</i> Hayata タイワンヒヨドリ (タイワンヒヨドリバナモドキ) | ○ | ● |
| <i>Gnaphalium japonicum</i> Thunb. チチコグサ | ○ | |
| <i>Gynura bicolor</i> (Roxb. ex Willd.) DC. スイゼンジナ | [帰化] | ● |
| <i>Helianthus cucumerifolius</i> Torr. et A.Gray ヒメヒマワリ | [帰化] | ● |
| <i>Ixeris repens</i> (L.) A.Gray ハマニガナ (ハマイチョウ) | | ● |
| <i>Lactuca indica</i> L. アキノノゲシ (ホソバアキノノゲシ) | ○ | ● |
| <i>Melanthera biflora</i> (L.) Wild キダチハマグルマ (トキワハマグルマ) | ○ | ● |
| <i>Melanthera prostrata</i> (Hemsl.) W.L. Wagner et H.Rob. ネコノシタ (ハマグルマ) | | ● |

2013 1977
確認 確認

Melanthera robusta (Makino) K.Ohashi et H.Ohashi
オオハマグルマ

Sigesbeckia orientalis L.
ツクシメナモミ

Solidago virgaurea L. subsp. asiatica (Nakai ex H.Hara) Kitam. ex H.Hara
アキノキリンソウ

Sonchus oleraceus L.
ノゲシ (ハルノノゲシ, ケシアザミ)

Wedelia trilobata (L.) Hitchc.
アメリカハマグルマ

Youngia japonica (L.) DC.
オニタビラコ

[亜種]

[帰化]

セリ目 Apiales
トベラ科 Pittosporaceae

Pittosporum tobira (Thunb.) W.T.Aiton
トベラ (トビラノキ)

ウコギ科 Araliaceae

Centella asiatica (L.) Urb.
ツボクサ (アツバツボクサ, オガサワラツボクサ, チヂミツボクサ)

Hydrocotyle sibthorpioides Lam.
チドメグサ

Polyscias guilfoylei (W.Bull) L.H.Bailey
ヒロハナンヨウウコギ (アラリヤ)

[外来種]

セリ科 Apiaceae

Angelica japonica A.Gray
ハマウド (オニウド)

Foeniculum vulgare Mill.
ウイキョウ (フェンエル)

Peucedanum japonicum Thunb. var. japonicum
ボタンボウフウ

[栽培逸出]

[変種]

新城島 維管束植物目録

2013確認 1989確認
上地 下地 上地 下地

| | 大葉類 | EUPHYLLOPHYTA | | | |
|--|----------------------|--|------|---|-----|
| | 大葉シダ植物 | MONILOPHYTA | | | |
| | フサシダ目 | Schizaeales | | | |
| | カニクサ科 | Lygodiaceae | | | |
| <i>Lygodium japonicum</i> (Thunb.) Sw. var. <i>microstachyum</i> (Desv.) C.Chr. et Tardieu | | | ○ | | |
| ナガバカニクサ (タイワンカニクサ, テリバカニクサ) | | | [変種] | | |
| | ウラボシ目 | Polypodiales | | | |
| | イノモトソウ科 | Pteridaceae | | | |
| <i>Pteris ryukyuensis</i> Tagawa | | | ○ | ● | |
| リュウキュウイノモトソウ | | | | | |
| | チャセンシダ科 | Aspleniaceae | | | |
| <i>Asplenium setoi</i> N.Murak. et Seriz. | | | ○ | ● | |
| ヤエヤマオオタニワタリ (リュウキュウトリノスシダ) | | | | | |
| | ヒメシダ科 | Thelypteridaceae | | | |
| <i>Thelypteris acuminata</i> (Houtt.) C.V.Morton | | | ○ | ○ | |
| ホシダ (シシホシダ) | | | | | |
| <i>Thelypteris interrupta</i> (Willd.) K.Iwats. | | | | ○ | |
| テツホシダ | | | | | |
| | ウラボシ科 | Polypodiaceae | | | |
| <i>Phymatosorus scolopendria</i> (Burm.f.) Pic.Serm. | | | ○ | ● | |
| オキナワウラボシ | | | | | |
| | 種子植物 | SPERMETOPHYTA | | | |
| | 裸子植物 (末端裸子植物) | GYMNOSPERMAE (Acrogymnospermae) | | | |
| | ソテツ目 | Cycadales | | | |
| | ソテツ科 | Cycadaceae | | | |
| <i>Cycas revoluta</i> Thunb. | | | ○ | ○ | ● ● |
| ソテツ | | | | | |
| | ナンヨウスギ目 | Araucariales | | | |
| | マキ科 | Podocarpaceae | | | |
| <i>Podocarpus macrophyllus</i> (Thunb.) Sweet | | | ○ | ○ | ● ● |
| イヌマキ (クサマキ) | | | | | |
| | 被子植物 | ANGIOSPERMAE | | | |
| | コショウ目 | Piperales | | | |
| | コショウ科 | Piperaceae | | | |
| <i>Piper kadsura</i> (Choisy) Ohwi | | | ○ | ○ | ● |
| フウトウカズラ (オオバフウトウカズラ) | | | | | |
| <i>Piper retrofractum</i> Vahl | | | [帰化] | ○ | ○ ● |
| ヒハツモドキ (ジャワナガコショウ, ヒハツ) | | | | | |
| | クスノキ目 | Lurales | | | |
| | ハスノハギリ科 | Hernandiaceae | | | |
| <i>Hernandia nymphaeifolia</i> (C.Presl) Kubitzki | | | ○ | ○ | ● |
| ハスノハギリ | | | | | |
| | クスノキ科 | Lauraceae | | | |
| <i>Cassytha filiformis</i> L. | | | ○ | ○ | ● ● |
| スナヅル (シマネナシカズラ) | | | | | |
| | 単子葉植物 | MONOCOTYLEDONEAE | | | |
| | オモダカ目 | Alismatales | | | |
| | サトイモ科 | Araceae | | | |
| <i>Alocasia odora</i> (Lodd.) Spach | | | ○ | ○ | ● ● |
| クワズイモ | | | | | |

| | | 2013確認 | 1989確認 |
|--|---|----------|--------|
| | | 上地 | 下地 |
| | | 上地 | 下地 |
| <i>Epipremnum pinnatum</i> (L.) Engl. ハブカズラ | | ○ | ○ ● ● |
| <i>Typhonium blumei</i> Nicolson et Sivadasan リュウキュウハンゲ | | ○ | |
| | ヤマノイモ目 Dioscoreales | | |
| | ヤマノイモ科 Dioscoreaceae | | |
| <i>Dioscorea pseudojaponica</i> Hayata キールンヤマノイモ (キイルンヤマノイモ) | | ○ | |
| | タコノキ目 Pandanales | | |
| | タコノキ科 Pandanaceae | | |
| <i>Pandanus odoratissimus</i> L.f. アダン (リュウキュウアダン, カネアダン) | | ○ ○ | ● ● |
| | ユリ目 Liliales | | |
| | サルトリイバラ科 Smilacaceae | | |
| <i>Smilax sebeana</i> Miq. ハマサルトリイバラ (トゲナシカカラ) | | ○ ○ | ● ● |
| | ユリ科 Liliaceae | | |
| <i>Lilium longiflorum</i> Thunb. テッポウユリ | | ○ ○ | ● ● |
| | キジカクシ目 (クサスギカズラ目) Asparagales | | |
| | ラン科 Orchidaceae | | |
| <i>Nervilia aragoana</i> Gaudich. ヤエヤマヒトツボクロ (アオイボクロ, ヤエヤマクマガイソウ, ヤエヤマヒトツバラン) | | ○ | ● |
| | キンバイザサ科 Hypoxidaceae | | |
| <i>Curculigo orchioides</i> Gaertn. キンバイザサ | | ○ | |
| | ススキノキ科 (ワスレグサ科) Xanthorrhoeaceae | | |
| <i>Dianella ensifolia</i> (L.) DC. キキョウラン | | ○ | ● |
| | ヒガンバナ科 Amaryllidaceae | | |
| <i>Crinum asiaticum</i> L. var. <i>japonicum</i> Baker ハマオモト (ハマユウ) | | [変種] ○ ○ | ● ● |
| | キジカクシ科 (クサギカズラ科) Asparagaceae | | |
| <i>Asparagus cochinchinensis</i> (Lour.) Merr. クサスギカズラ (テンモンドウ, ナンゴククサスギカズラ) | | ○ ○ | ● ● |
| <i>Liriope muscari</i> (Decne.) L.H.Bailey ヤブラン | | ○ ○ | ● |
| <i>Sansevieria nilotica</i> Baker チトセラン | | [栽培逸出] ○ | |
| | ヤシ目 Arecales | | |
| | ヤシ科 Arecaceae | | |
| <i>Arenga ryukyuensis</i> A.Henderson クロツゲ (コミノクロツゲ) | | ○ ○ | ● ● |
| | ツユクサ目 Commelinales | | |
| | ツユクサ科 Commelinaceae | | |
| <i>Commelina auriculata</i> Blume ホウライツユクサ (ナミツユクサ) | | ○ ○ | ● ● |
| <i>Commelina benghalensis</i> L. マルバツユクサ | | ○ | ● |
| <i>Commelina diffusa</i> Burm.f. シマツユクサ (ハダカツユクサ) | | ○ | |

2013確認 1989確認
上地 下地 上地 下地

| | | | | | |
|--|---------------------------------|------|---|---|-----|
| | ミズアオイ科 Pontederiaceae | | | | |
| <i>Eichhornia crassipes</i> (Mart.) Solms ホテイアオイ | | [帰化] | ○ | | |
| | ショウガ目 Zingiberales | | | | |
| | ショウガ科 Zingiberaceae | | | | |
| <i>Alpinia zerumbet</i> (Pers.) B.L.Burtt et R.M.Sm. ゲットウ | | | ○ | ○ | ● ● |
| | イネ目 Poales | | | | |
| | ガマ科 Typhaceae | | | | |
| <i>Typha domingensis</i> Pers. ヒメガマ | | | | ○ | |
| | カヤツリグサ科 Cyperaceae | | | | |
| <i>Carex brunnea</i> Thunb. コゴメスゲ (コゴメナキリスゲ, シオカゼナキリ) | | | ○ | | ● ● |
| <i>Carex wahuensis</i> C.A.Mey. var. <i>bongardii</i> (Boott) Franch. et Sav. ヒゲスゲ (イソスゲ, オオヒゲスゲ) | | [変種] | ○ | ○ | ● ● |
| <i>Cyperus cyperoides</i> (L.) Kuntze イヌクグ (クグ) | | | ○ | | ● |
| <i>Cyperus kyllingia</i> Endl. オオヒメクグ (シロヒメクグ) | | | ○ | ○ | |
| <i>Cyperus rotundus</i> L. ハマスゲ | | | ○ | ○ | ● ● |
| <i>Fimbristylis cymosa</i> R.Br. シオカゼテンツキ (シバテンツキ, ハマテンツキ) | | | ○ | ○ | |
| <i>Fimbristylis dichotoma</i> (L.) Vahl var. <i>diphylla</i> (Retz.) T.Koyama クグテンツキ | | [変種] | | ○ | |
| <i>Fimbristylis ovata</i> (Burm.f.) Kern ヤリテンツキ | | | | ○ | |
| | トウツルモドキ科 Flagellariaceae | | | | |
| <i>Flagellaria indica</i> L. トウツルモドキ | | | ○ | ○ | ● ● |
| | イネ科 Poaceae | | | | |
| <i>Apluda mutica</i> L. オキナワカルカヤ (ヒメカルカヤ) | | | ○ | | |
| <i>Axonopus compressus</i> (Sw.) P.Beauv. ツルメヒシバ | | [帰化] | ○ | ○ | |
| <i>Capillipedium spicigerum</i> (Benth.) S.T.Blake リュウキュウヒメアブラススキ | | | ○ | | |
| <i>Cenchrus echinatus</i> L. シンクリノイガ (ハリガヤ) | | [帰化] | ○ | | ● ● |
| <i>Chloris gayana</i> Kunth アフリカヒゲシバ (ローズソウ, ローズグラス) | | [帰化] | | ○ | ● |
| <i>Cynodon dactylon</i> (L.) Pers. ギョウギシバ (バミューダグラス) | | | ○ | ○ | ● ● |
| <i>Dactyloctenium aegyptium</i> (L.) P.Beauv. タツノツメガヤ (ミヤコジマオヒシバ, ヤンバルオヒシバ) | | [帰化] | ○ | | ● ● |
| <i>Dichanthium annulatum</i> (Forssk.) Stapf ヒメオニササガヤ (マルポアブラススキ) | | [帰化] | ○ | ○ | ● |
| <i>Digitaria ciliaris</i> (Retz.) Koeler メヒシバ | | | ○ | ○ | ● ● |
| <i>Digitaria henryi</i> Rendle ヘンリーメヒシバ (ナンゴクメヒシバ) | | | ○ | ○ | ● |

| | 2013確認 | | 1989確認 | |
|---|--------|----|--------|----|
| | 上地 | 下地 | 上地 | 下地 |
| <i>Digitaria insularis</i> (L.) Mez ex Ekman ススキメヒシバ | [帰化] ○ | | | |
| <i>Digitaria radicata</i> (J.Presl) Miq. コメヒシバ (ナヨメヒシバ) | ○ | | ● | |
| <i>Digitaria violascens</i> Link アキメヒシバ | ○ | | | |
| <i>Echinochloa colona</i> (L.) Link ワセビエ (コヒメビエ, サワビエ) | | ○ | | |
| <i>Eleusine indica</i> (L.) Gaertn. オヒシバ (チカラグサ, オイジワ) | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Enteropogon dolichostachyus</i> (Lag.) Keng ex Lazarides ムラサキオヒゲシバ (ムラサキヒゲシバ) | [帰化] ○ | ○ | | |
| <i>Eragrostis amabilis</i> (L.) Wight et Arn. ヌカカゼクサ | ○ | | | |
| <i>Eragrostis brownii</i> (Kunth) Nees イトスズメガヤ (ホソバスズメガヤ, エダウチイトスズメガヤ) | [帰化] | ○ | | ● |
| <i>Eragrostis multicaulis</i> Steud. ニワホコリ | ○ | | | |
| <i>Eriochloa procera</i> (Retz.) C.E.Hubb. ムラサキノキビ (ノキビ) | [帰化] ○ | ○ | | ● |
| <i>Imperata cylindrica</i> (L.) Raeusch. var. <i>koenigii</i> (Retz.) Pilg. チガヤ (ケチガヤ) | [変種] ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Ischaemum aureum</i> (Hook. et Arn.) Hack. ハナカモノハシ | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Lepturus repens</i> (G.Forst.) R.Br. ハイシバ | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Miscanthus sinensis</i> Andersson ススキ | ○ | ○ | ● | |
| <i>Oplismenus compositus</i> (L.) P.Beauv. エダウチチヂミザサ | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Panicum maximum</i> Jacq. ギネアキビ (ギネアキビ, ギネアグラス) | [帰化] ○ | ○ | | ● |
| <i>Panicum repens</i> L. ハイキビ | ○ | ○ | ● | |
| <i>Paspalum conjugatum</i> Bergius オガサワラスズメノヒエ (スズメノナガビエ) | [帰化] ○ | ○ | | |
| <i>Paspalum scrobiculatum</i> L. var. <i>orbiculare</i> (G.Forst.) Hack. スズメノコビエ | [変種] ○ | | ● | |
| <i>Paspalum urvillei</i> Steud. タチスズメノヒエ | [帰化] ○ | | | |
| <i>Paspalum vaginatum</i> Sw. サワスズメノヒエ | ○ | ○ | | |
| <i>Pennisetum purpureum</i> Schumach. ナピアグラス (ネピアグラス, エレファントグラス) | [帰化] ○ | | | |
| <i>Pleiolobus linearis</i> (Hack.) Nakai リュウキュウチク (ゴザダケザサ, ギョウヨウチク) | ○ | | | ● |
| <i>Setaria pallidifusca</i> (Schumach.) Stapf et C.E.Hubb. コツブキンエノコロ | | ○ | | |
| <i>Setaria parviflora</i> (Poir.) Kerguelén フシネキンエノコロ (アメリカエノコログサ) | [帰化] | ○ | | ● |
| <i>Setaria verticillata</i> (L.) P.Beauv. ザラツキエノコログサ | [帰化] ○ | | | |

| | 2013確認 | | 1989確認 | |
|---|--------|----|--------|-----|
| | 上地 | 下地 | 上地 | 下地 |
| <i>Setaria viridis</i> (L.) P.Beauv. エノコログサ | ○ | | ● | ● |
| <i>Setaria viridis</i> (L.) P.Beauv. var. <i>pachystachys</i> (Franch. et Sav.) Makino et Nemoto ハマエノコロ (ムラサキハマエノコロ) | [変種] ○ | | ● | ● |
| <i>Spinifex littoreus</i> (Burm.f.) Merr. ツキイゲ | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Sporobolus diander</i> (Retz.) P.Beauv. フタシベネズミノオ | [帰化] | ○ | ● | |
| <i>Sporobolus fertilis</i> (Steud.) Clayton ネズミノオ | ○ | ○ | | ● |
| <i>Sporobolus japonicus</i> (Steud.) Maxim. ex Rendle ヒゲシバ | ○ | ○ | ● | |
| <i>Sporobolus virginicus</i> (L.) Kunth ソナレシバ | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Stenotaphrum secundatum</i> (Walter) Kuntze イヌシバ | [帰化] | ○ | | |
| <i>Thuarea involuta</i> (G.Forst.) R.Br. ex Sm. クロイワザサ (スナザサ) | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Urochloa subquadripara</i> (Trin.) R.D.Webster ニクキビ | [帰化] | ○ | | |
| <i>Zoysia pacifica</i> (Goudswaard) M.Hotta et Kuroki コウライシバ (イトシバ) | ○ | ○ | | ● |
| 真正双子葉植物 EUDICOTS | | | | |
| キンポウゲ目 Ranunculales | | | | |
| ケシ科 Papaveraceae | | | | |
| <i>Corydalis heterocarpa</i> Siebold et Zucc. var. <i>brachystyla</i> (Koidz.) Ohwi ムニンキケマン (シマキケマン, ナンゴクキケマン) | [変種] | ○ | | ● |
| ツツラフジ科 Menispermaceae | | | | |
| <i>Cyclea insularis</i> (Makino) Hatus. ミヤコジマツツラフジ | | ○ | | |
| キンポウゲ科 Ranunculaceae | | | | |
| <i>Clematis javana</i> DC. リュウキュウボタンヅル (ケボタンヅル, タイワンボタンヅル) | | ○ | ○ | ● ● |
| ユキノシタ目 Saxifragales | | | | |
| ベンケイソウ科 Crassulaceae | | | | |
| <i>Bryophyllum pinnatum</i> (L.f.) Oken トウロウソウ (セイロンベンケイ) | [帰化] | ○ | ○ | ● |
| <i>Bryophyllum tubiflorum</i> Harvey キンチョウ | [栽培逸出] | ○ | | |
| <i>Sedum formosanum</i> N.E.Br. ハママンネングサ (シママンネングサ, タカサゴマンネングサ) | | | ○ | |
| ブドウ目 Vitales | | | | |
| ブドウ科 Vitaceae | | | | |
| <i>Ampelopsis glandulosa</i> (Wall.) Momiy. var. <i>hancei</i> (Planch.) Momiy. テリハノブドウ (コバノテリハノブドウ) | [変種] | ○ | ○ | ● ● |
| <i>Cayratia japonica</i> (Thunb.) Gagnep. ヤブカラシ (ヤブガラシ, ビンボウカズラ) | | ○ | | ● |
| <i>Cayratia maritima</i> B.R.Jackes ハマヤブガラシ | [外来種] | ○ | | |
| <i>Vitis ficifolia</i> Bunge エビヅル (ミツバブドウ, リュウキュウガネブ) | | ○ | ○ | |

2013確認 1989確認
上地 下地 上地 下地

マメ目 Fabales
マメ科 Fabaceae

| | | | | |
|--|--------|---|---|-----|
| <i>Alysicarpus vaginalis</i> (L.) DC. ササハギ (マルバダケハギ) | ○ | ○ | | ● |
| <i>Bauhinia japonica</i> Maxim. ハカマカズラ | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Caesalpinia crista</i> L. ナンテンカズラ | ○ | | | |
| <i>Canavalia lineata</i> (Thunb.) DC. ハマナタマメ | ○ | | | |
| <i>Canavalia rosea</i> (Sw.) DC. ナガミハマナタマメ (ナンカイハマナタマメ) | ○ | | | |
| <i>Christia obcordata</i> (Poir.) Bakh.f. ex Meeuwen ホオズキハギ | ○ | ○ | | |
| <i>Derris trifoliata</i> Lour. シイノキカズラ (ギョトウ) | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Desmanthus pernambucanus</i> (L.) Thell. タチクサネム (ヒメギンネム) | [帰化] | ○ | | |
| <i>Desmodium gangeticum</i> (L.) DC. タマツナギ | | ○ | | |
| <i>Desmodium triflorum</i> (L.) DC. ハイマキエハギ | | ○ | | |
| <i>Erythrina variegata</i> L. デイゴ (デイコ, ムニンデイゴ) | [帰化] | ○ | ○ | ● ● |
| <i>Galactia tashiroi</i> Maxim. ハギカズラ | | ○ | ○ | ● ● |
| <i>Indigofera trifoliata</i> L. ミツバノコマツナギ (ナハエボシグサ) | | ○ | ○ | ● ● |
| <i>Indigofera zollingeriana</i> Miq. リュウキュウコマツナギ (コウトウコマツナギ) | | ○ | | |
| <i>Lespedeza cuneata</i> (Dum.Cours.) G.Don メドハギ | | ○ | | ● |
| <i>Leucaena leucocephala</i> (Lam.) de Wit ギンゴウカン (ギンネム) | [帰化] | ○ | ○ | ● |
| <i>Medicago lupulina</i> L. コメツブウマゴヤシ (ネバリコメツブウマゴヤシ) | [帰化] | | ○ | ● |
| <i>Millettia pinnata</i> (L.) Panigrahi クロヨナ | | ○ | ○ | ● |
| <i>Mucuna gigantea</i> (Willd.) DC. ワニグチモダマ (ミドリモダマ, ムニンモダマ) | | ○ | | |
| <i>Ormocarpum cochinchinense</i> (Lour.) Merr. ハマセンナ (ハマエンジュ) | | ○ | | ● |
| <i>Pueraria montana</i> (Lour.) Merr. タイワンクズ | | ○ | | ● |
| <i>Rhynchosia minima</i> (L.) DC. ヒメノアズキ | | ○ | ○ | ● ● |
| <i>Rhynchosia volubilis</i> Lour. タンキリマメ | | ○ | ○ | |
| <i>Senna obtusifolia</i> (L.) H.S.Irwin et Barneby エビスグサ | [帰化] | | ○ | ● |
| <i>Senna occidentalis</i> (L.) Link ハブソウ (オオハブソウ, クサセンナ) | [栽培逸出] | | ○ | |

| | 2013確認 | | 1989確認 | |
|---|--------|----|--------|-----|
| | 上地 | 下地 | 上地 | 下地 |
| <i>Sophora tomentosa</i> L. イソフジ | ○ | | ● | |
| <i>Stylosanthes guianensis</i> (Aubl.) Sw. スチロサンテス | [帰化] | ○ | | |
| <i>Vigna marina</i> (Burm.) Merr. ハマアズキ (ハマササゲ) | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Vigna minima</i> (Roxb.) Ohwi et H. Ohashi var. <i>minor</i> (Matsum.) Tateishi ヒナアズキ (コバノツルアズキ, ヒメハマアズキ) | [変種] | ○ | | |
| バラ目 Rosales | | | | |
| バラ科 Rosaceae | | | | |
| <i>Rhaphiolepis indica</i> (L.) Lindl. ex Ker var. <i>umbellata</i> (Thunb.) H. Ohashi シャリンバイ (マルバシャリンバイ, タチシャリンバイ, アツバシャリンバイ) | [変種] | ○ | | ● ● |
| <i>Rubus parvifolius</i> L. ナワシロイチゴ | ○ | ○ | ● | ● |
| クロウメモドキ科 Rhamnaceae | | | | |
| <i>Berchemia lineata</i> (L.) DC. ヒメクマヤナギ | | ○ | | |
| アサ科 Cannabaceae | | | | |
| <i>Celtis boninensis</i> Koidz. クワノハエノキ (オガサワラエノキ, ムニンエノキ, リュウキュウエノキ) | | ○ | | |
| <i>Trema orientalis</i> (L.) Blume ウラジロエノキ | | ○ | | |
| クワ科 Moraceae | | | | |
| <i>Broussonetia papyrifera</i> (L.) L'Hér. ex Vent. カジノキ | | ○ | ● | ● |
| <i>Ficus caulocarpa</i> (Miq.) Miq. オオバアコウ | | ○ | | ● |
| <i>Ficus erecta</i> Thunb. var. <i>erecta</i> イヌビワ (イタビ) | [変種] | ○ | ● | |
| <i>Ficus microcarpa</i> L.f. ガジュマル | | ○ | ○ | ● ● |
| <i>Ficus septica</i> Burm.f. オオバイヌビワ | | ○ | ○ | ● ● |
| <i>Ficus superba</i> (Miq.) Miq. var. <i>japonica</i> Miq. アコウ | [変種] | ○ | ○ | ● ● |
| <i>Ficus virgata</i> Reinw. ex Blume ハマイヌビワ | | ○ | ○ | ● ● |
| <i>Morus australis</i> Poir. ヤマゲワ (シマゲワ, アマミゲワ) | | ○ | ○ | ● ● |
| イラクサ科 Urticaceae | | | | |
| <i>Boehmeria nivea</i> (L.) Gaudich. var. <i>concolor</i> Makino f. <i>nipponivea</i> (Koidz.) Kitam. ex H. Ohba カラムシ (クサマオ) | [品種] | ○ | ○ | ● |
| <i>Pilea microphylla</i> (L.) Liebm. コゴメミズ | [帰化] | ○ | | |
| <i>Pipturus arborescens</i> (Link) C.B. Rob. ヌノマオ (オオイワガネ) | | ○ | ○ | ● ● |
| <i>Pouzolzia zeylanica</i> (L.) Benn. ヤンバルツルマオ (オオバヒメマオ, ツルマオモドキ, コケツルマオ) | | ○ | ○ | ● |
| ブナ目 Fagales | | | | |
| モクマオウ科 Casuarinaceae | | | | |
| <i>Casuarina equisetifolia</i> L. トクサバモクマオウ (モクマオウ, トキワギョリュウ) | [帰化] | ○ | | ● |

| | 2013確認 | | 1989確認 | |
|--|-----------|----|--------|----|
| | 上地 | 下地 | 上地 | 下地 |
| <i>Flueggea trigonoclada</i> (Ohwi) T.Kuros. アマミヒトツバハギ (アツバコバンノキ) | ○ | | ● | ● |
| <i>Phyllanthus amarus</i> Schumach. キダチコミカンソウ (キダチミカンソウ) | [帰化] ○ | | | |
| <i>Phyllanthus lepidocarpus</i> Siebold et Zucc. コミカンソウ | ○ | ○ | | |
| キントラノオ科 Malpighiaceae | | | | |
| <i>Ryssopterys timoriensis</i> (DC.) A.Juss. ササキカズラ | | | ○ | |
| ツゲモドキ科 Putranjivaceae | | | | |
| <i>Putranjiva matsumurae</i> Koidz. ツゲモドキ (モチツゲ, タイワンツゲモドキ) | ○ | ○ | ● | |
| スミレ科 Violaceae | | | | |
| <i>Viola yedoensis</i> Makino var. <i>pseudojaponica</i> (Nakai) T.Hashim. リュウキュウコスミレ | [変種] ○ | ○ | | |
| テリハボク科 Clusiaceae | | | | |
| <i>Calophyllum inophyllum</i> L. テリハボク (ヤラボ, タマナ, ヒータマナ) | [栽培逸出] ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Garcinia subelliptica</i> Merr. フクギ | [帰化] ○ | ○ | ● | ● |
| フトモモ目 Myrtales | | | | |
| シクンシ科 Combretaceae | | | | |
| <i>Terminalia catappa</i> L. モモタマナ (コバテイシ, シマボウ) | ○ | ○ | ● | |
| ミソハギ科 Lythraceae | | | | |
| <i>Pemphis acidula</i> J.R. et G.Forst. ミズガンピ (ミズハギ) | ○ | ○ | ● | ● |
| アカバナ科 Onagraceae | | | | |
| <i>Oenothera laciniata</i> Hill コマツヨイグサ | [帰化] ○ | | | |
| フトモモ科 Myrtaceae | | | | |
| <i>Psidium guajava</i> L. バンジロウ (グァバ) | [帰化] ○ | ○ | ● | ● |
| ムクロジ目 Sapindales | | | | |
| ムクロジ科 Sapindaceae | | | | |
| <i>Allophylus timoriensis</i> (DC.) Blume アカギモドキ | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Cardiospermum halicacabum</i> L. var. <i>microcarpum</i> (Kunth) Blume コフウセンカズラ | [変種] [帰化] | ○ | ● | ● |
| ミカン科 Rutaceae | | | | |
| <i>Citrus depressa</i> Hayata シイクワシャー (ヒラミレモン, シーカーシャー) | ○ | ○ | | ● |
| <i>Murraya paniculata</i> (L.) Jack ゲッキツ | ○ | ○ | ● | ● |
| センダン科 Meliaceae | | | | |
| <i>Melia azedarach</i> L. センダン (アウチ) | ○ | | ● | ● |
| アオイ目 Malvales | | | | |
| アオイ科 Malvaceae | | | | |
| <i>Abutilon indicum</i> (L.) Sweet subsp. <i>guineense</i> (Schumach.) Borss.Waalk. タイワンイチビ (ヒメイチビ) | [亜種] [帰化] | ○ | ● | ● |

| | | 2013確認 | | 1989確認 | |
|--|-----------|--------|----|--------|----|
| | | 上地 | 下地 | 上地 | 下地 |
| <i>Abutilon indicum</i> (L.) Sweet subsp. <i>indicum</i> タカサゴイチビ (シマイチビ) | [亜種] [帰化] | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Corchorus aestuans</i> L. シマツナソ (トガリバツナソ) | [帰化] | ○ | | | |
| <i>Firmiana simplex</i> (L.) W.F.Wight アオギリ (ケナシアオギリ) | | ○ | | | |
| <i>Hibiscus tiliaceus</i> L. オオハマボウ (ヤマアサ, シマハマボウ, ハマイチビ, オオバノハマボウ) | | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Malvastrum coromandelianum</i> (L.) Gareke エノキアオイ (アオイモドキ) | [帰化] | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Sida rhombifolia</i> L. subsp. <i>insularis</i> (Hatus.) Hatus. ハイキンゴジカ | [亜種] | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Sida rhombifolia</i> L. subsp. <i>rhombifolia</i> キンゴジカ | [亜種] | ○ | ○ | ● | |
| <i>Thespesia populnea</i> (L.) Sol. ex Correa サキシマハマボウ (シマアオイ, トウユウナ) | | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Triumfetta procumbens</i> G.Forst. ハテルマカズラ (ケコンペイトウグサ, ハテルマラセンソウ) | | ○ | | | |
| ジンチョウゲ科 Thymelaeaceae | | | | | |
| <i>Wikstroemia retusa</i> A.Gray アオガンピ (オキナワガンピ) | | ○ | ○ | ● | ● |
| アブラナ目 Brassicales | | | | | |
| パパイヤ科 Caricaceae | | | | | |
| <i>Carica papaya</i> L. パパイヤ (ノパパイヤ) | [帰化] | ○ | ○ | | |
| フウチョウボク科 Capparaceae | | | | | |
| <i>Crateva formosensis</i> (Jacobs) B.S.Sun ギョボク (アマギ) | | | ○ | | |
| アブラナ科 Brassicaceae | | | | | |
| <i>Lepidium englerianum</i> (Muschler) Al-Shehbaz ハマガラシ (ヤンバルガラシ) | | ○ | ○ | | |
| <i>Lepidium virginicum</i> L. マメゲンバイナズナ (セイヨウゲンバイナズナ, コウベナズナ) | [帰化] | ○ | ○ | | ● |
| <i>Raphanus sativus</i> L. var. <i>hortensis</i> Backer f. <i>raphanistroides</i> Makino ハマダイコン | [品種] [帰化] | ○ | ○ | ● | ● |
| ナデシコ目 Caryophyllales | | | | | |
| イソマツ科 Plumbaginaceae | | | | | |
| <i>Limonium wrightii</i> (Hance) Kuntze var. <i>arbusculum</i> (Maxim.) H.Hara イソマツ (ムラサキイソマツ) | [変種] | ○ | ○ | ● | ● |
| タデ科 Polygonaceae | | | | | |
| <i>Persicaria chinensis</i> (L.) H.Gross ツルソバ | | | ○ | | |
| ナデシコ科 Caryophyllaceae | | | | | |
| <i>Sagina maxima</i> A.Gray ハマツメクサ (キタノハマツメクサ) | | ○ | | | |
| ヒユ科 Amaranthaceae | | | | | |
| <i>Achyranthes aspera</i> L. var. <i>rubrofusca</i> (Wight) Hook.f. ムラサキイノコヅチ (ダイトウイノコヅチ) | [変種] | ○ | ○ | | ● |
| <i>Amaranthus blitum</i> L. イヌビユ (ムラサキビユ) | [帰化] | ○ | ○ | | ● |
| <i>Amaranthus spinosus</i> L. ハリビユ (ハリイヌビユ) | [帰化] | | ○ | | ● |

| | 2013確認 | | 1989確認 | |
|---|-----------|----|--------|-----|
| | 上地 | 下地 | 上地 | 下地 |
| <i>Blutaparon wrightii</i> (Hook.f. ex Maxim.) Mears イソフサギ | | ○ | | ● |
| <i>Chenopodium acuminatum</i> Willd. var. <i>vachelii</i> (Hook. et Arn.) Moq. カワラアカザ | [変種] | ○ | ○ | ● |
| <i>Chenopodium ambrosioides</i> L. var. <i>anthelminticum</i> (Crantz) A.Gray アメリカアリタソウ (アリタソウ) | [変種] [帰化] | | ○ | |
| ハマミズナ科 Aizoaceae | | | | |
| <i>Sesuvium portulacastrum</i> (L.) L. ミルスベリヒユ (ハマミズナ, ハマスベリヒユ) | | ○ | ○ | ● |
| <i>Tetragonia tetragonoides</i> (Pall.) Kuntze ツルナ (ハマヂシャ) | | ○ | ○ | ● |
| ヤマゴボウ科 Phytolaccaceae | | | | |
| <i>Rivina humilis</i> L. ジュズサンゴ | [帰化] | ○ | ○ | |
| オシロイバナ科 Nyctaginaceae | | | | |
| <i>Mirabilis jalapa</i> L. オシロイバナ | [帰化] | ○ | | |
| <i>Pisonia aculeata</i> L. トゲカズラ | | ○ | ○ | ● |
| スベリヒユ科 Portulacaceae | | | | |
| <i>Portulaca oleracea</i> L. スベリヒユ (オオスベリヒユ, タチスベリヒユ) | | | ○ | |
| <i>Portulaca pilosa</i> L. ヒメマツバボタン (ケツメクサ, ケツメグサ, マルバケツメグサ) | [帰化] | ○ | | ● |
| ツツジ目 Ericales | | | | |
| サガリバナ科 Lecythidaceae | | | | |
| <i>Barringtonia asiatica</i> (L.) Kurz ゴバンノアシ | | | ○ | |
| <i>Barringtonia racemosa</i> (L.) Spreng. サガリバナ (サワフジ) | | ○ | | |
| アカテツ科 Sapotaceae | | | | |
| <i>Planchonella obovata</i> (R.Br.) Pierre アカテツ (クロテツ) | | ○ | ○ | ● ● |
| カキノキ科 Ebenaceae | | | | |
| <i>Diospyros egbert-walkeri</i> Kosterm. ヤエヤマコクタン (リュウキュウコクタン) | | ○ | ○ | ● ● |
| <i>Diospyros maritima</i> Blume リュウキュウガキ (クサノガキ, クロボウ) | | ○ | ○ | ● ● |
| サクラソウ科 Primulaceae | | | | |
| <i>Lysimachia mauritiana</i> Lam. ハマボツス | | ○ | ○ | ● |
| エゴノキ科 Styrcaceae | | | | |
| <i>Styrax japonica</i> Siebold et Zucc. エゴノキ (ロクロギ, チシャノキ) | | ○ | | |
| リンドウ目 Gentianales | | | | |
| アカネ科 Rubiaceae | | | | |
| <i>Guettarda speciosa</i> L. ハテルマギリ | | ○ | ○ | ● ● |
| <i>Hedyotis paniculata</i> (L.) Lam. シマソナレムグラ | | ○ | | |
| <i>Hedyotis strigulosa</i> (Bartl. ex DC.) Fosberg var. <i>parvifolia</i> (Hook. et Arn.) T.Yamaz. ソナレムグラ (イソイナモリソウ) | [変種] | ○ | ○ | ● ● |

| | 2013確認 | | 1989確認 | |
|--|-----------|----|--------|----|
| | 上地 | 下地 | 上地 | 下地 |
| <i>Morinda citrifolia</i> L. ヤエヤマアオキ (ハテルマアオキ, ムガクヤエヤマアオキ) | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Paederia scandens</i> (Lour.) Merr. ヘクソカズラ (ヤイトバナ) | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Spermacoce assurgens</i> Ruiz et Pav. ナガバハリフタバ | [帰化] ○ | ○ | | |
| キョウチクトウ科 Apocynaceae | | | | |
| <i>Asclepias curassavica</i> L. トウワタ | [帰化] | ○ | | |
| <i>Cerbera manghas</i> L. ミフクラギ (オキナワキョウチクトウ, アマミキョウチクトウ) | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Cynanchum liukuense</i> Warb. リュウキュウガシワ | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Parsonsia alboflavescens</i> (Dennst.) Mabb. ホウライカガミ | ○ | | | |
| <i>Tylophora tanakae</i> Maxim. ツルモウリンカ | ○ | ○ | | |
| ムラサキ目 Boraginales | | | | |
| ムラサキ科 Boraginaceae | | | | |
| <i>Ehretia dicksonii</i> Hance マルバチシャノキ | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Ehretia microphylla</i> Lam. フクマンギ | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Heliotropium foertherianum</i> Diane et Hilger モンパノキ (ハマムラサキノキ) | ○ | ○ | ● | ● |
| ナス目 Solanales | | | | |
| ヒルガオ科 Convolvulaceae | | | | |
| <i>Dichondra micrantha</i> Urb. アオイゴケ | ○ | ○ | ● | |
| <i>Ipomoea indica</i> (Burm.) Merr. ノアサガオ | ○ | ○ | ● | |
| <i>Ipomoea littoralis</i> Blume ソコベニヒルガオ | ○ | | ● | ● |
| <i>Ipomoea pes-caprae</i> (L.) Sweet ゲンバイヒルガオ | ○ | ○ | ● | ● |
| ナス科 Solanaceae | | | | |
| <i>Physalis angulata</i> L. var. <i>angulata</i> ヒロハフウリンホオズキ (センナリホオズキ) | [変種] [帰化] | ○ | | |
| <i>Solanum americanum</i> Mill. テリミノイヌホオズキ (ニセイヌホオズキ, ナンゴクイヌホオズキ, カンザシイヌホオズキ) | [帰化] | ○ | ○ | ● |
| <i>Solanum capsicoides</i> All. キンギンナスビ (ニシキハリナスビ) | [帰化] | ○ | | |
| <i>Solanum erianthum</i> D.Don ヤンバルナスビ ナス科の一種 | [帰化] | ○ | ○ | ● |
| シソ目 Lamiales | | | | |
| モクセイ科 Oleaceae | | | | |
| <i>Fraxinus griffithii</i> C.B.Clarke シマトネリコ (タイワンシオジ, タイワントネリコ, タイトウシオジ, ケタイトウシオジ) | | ○ | | ● |
| オオバコ科 Plantaginaceae | | | | |
| <i>Plantago virginica</i> L. ツボミオオバコ (タチオオバコ) | [帰化] | ○ | | |

2013確認 1989確認
上地 下地 上地 下地

シソ科 Lamiaceae

| | | | | | |
|---|------|---|---|---|---|
| <i>Callicarpa japonica</i> Thunb. var. <i>luxurians</i> Rehder オオムラサキシキブ | [変種] | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Clerodendrum inerme</i> (L.) Gaertn. イボタクサギ (ガシヤンギ) | | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Clerodendrum japonicum</i> (Thunb.) Sweet ヒギリ | [帰化] | ○ | | | |
| <i>Leucas chinensis</i> (Retz.) R.Br. ヤンバルツルハッカ | | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Premna serratifolia</i> L. タイワンウオクサギ (シマウオクサギ, ケウオクサギ) | | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Salvia plebeia</i> R.Br. ミゾコウジュ (ユキミソウ) | | ○ | | | |
| <i>Stachys officinalis</i> (L.) Trevis. カッコウソウ | | ○ | | | |
| <i>Suzukia luchuensis</i> Kudô ヤエヤマズコウジュ | | ○ | ○ | | ● |
| <i>Vitex rotundifolia</i> L.f. ハマゴウ (ハマハビ) | | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Vitex rotundifolia</i> L.f. f. <i>albescens</i> Hiyama シロバナハマゴウ | [品種] | ○ | | | |
| <i>Vitex trifolia</i> L. ミツバハマゴウ | | ○ | ○ | ● | ● |

ハエドクソウ科 Phrymaceae

| | | | | | |
|---|--|---|--|--|--|
| <i>Mazus pumilus</i> (Burm.f.) Steenis トキワハゼ | | ○ | | | |
|---|--|---|--|--|--|

キツネノマゴ科 Acanthaceae

| | | | | | |
|--|------|---|---|---|---|
| <i>Codonacanthus pauciflorus</i> (Nees) Nees アリモリソウ (ツノツクバネ) | | ○ | | | |
| <i>Justicia procumbens</i> L. var. <i>riukiensis</i> Yamam. キツネノヒマゴ (ケブカキツネノマゴ) | [変種] | ○ | | ● | |
| <i>Ruellia brittoniana</i> Leonard ex Fernald ヤナギバルイラソウ | [帰化] | ○ | ○ | | ● |
| <i>Ruellia squarrosa</i> (Fenzl) Cufod. ケブカルイラソウ | [帰化] | | ○ | | |

クマツヅラ科 Verbenaceae

| | | | | | |
|--|------|---|---|---|---|
| <i>Phyla nodiflora</i> (L.) Greene イワダレソウ | | ○ | ○ | ● | |
| <i>Stachytarpheta jamaicensis</i> (L.) Vahl フトボナガボソウ (インドナガボソウ) | [帰化] | ○ | | | |
| <i>Verbena litoralis</i> Kunth ハマクマツヅラ | [帰化] | ○ | ○ | | |
| <i>Verbena officinalis</i> L. クマツヅラ | | ○ | ○ | | ● |
| <i>Verbena</i> × <i>incompta</i> P.W.Michael ダキバアレチハナガサ | [帰化] | ○ | ○ | | |

キク目 Asterales
クサトベラ科 Goodeniaceae

| | | | | | |
|--|--|---|---|---|---|
| <i>Scaevola taccada</i> (Gaertn.) Roxb. クサトベラ | | ○ | ○ | ● | ● |
|--|--|---|---|---|---|

キク科 Asteraceae

| | | | | | |
|--|-----------|---|---|---|---|
| <i>Ageratum conyzoides</i> L. カッコウアザミ | [帰化] | ○ | | | |
| <i>Artemisia indica</i> Willd. ニシヨモギ (オキナワヨモギ) | | ○ | | ● | |
| <i>Aster subulatus</i> Michx. var. <i>sandwicensis</i> (A.Gray ex H.Mann) A.G.Jones ヒロハホウキギク | [変種] [帰化] | ○ | ○ | | |
| <i>Bidens pilosa</i> L. var. <i>radiata</i> Sch. Bip. オオバナノセンダングサ (シロノセンダングサ, タチアワユキセンダングサ, アワユキセンダングサ, オオバナセンダングサ) | [変種] [帰化] | ○ | ○ | | ● |
| <i>Blumea lacera</i> (Burm.f.) DC. ヤエヤマコウゾリナ | | ○ | ○ | | ● |
| <i>Blumea laciniata</i> (Roxb.) DC. サケバコウゾリナ (オキナワコウゾリナ) | | ○ | | ● | |
| <i>Cirsium brevicaule</i> A.Gray シマアザミ (イリオモテアザミ, アマミシマアザミ) | | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Conyza bonariensis</i> (L.) Cronquist アレチノギク (ノジオウギク) | [帰化] | ○ | | ● | ● |
| <i>Conyza sumatrensis</i> (Retz.) E.Walker オオアレチノギク | [帰化] | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Crassocephalum crepidioides</i> (Benth.) S.Moore ベニバナボロギク | [帰化] | ○ | ○ | | ● |
| <i>Crepidiastrum lanceolatum</i> (Houtt.) Nakai ホソバワダン | | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Crossostephium chinense</i> (L.) Makino モクビャッコウ (モクビャクコウ) | | ○ | ○ | | ● |
| <i>Cyanthillium cinereum</i> (L.) H.Rob. ムラサキムカシヨモギ (ヤンバルヒゴタイ, ヤンバルノギク) | | ○ | ○ | ● | ● |
| <i>Eclipta thermalis</i> Bunge タカサブrou (モトタカサブrou) | | | ○ | ● | |
| <i>Emilia sonchifolia</i> (L.) DC. var. <i>javanica</i> (Burm.f.) Mattf. ウスベニニガナ | [変種] [帰化] | | ○ | | |
| <i>Eupatorium formosanum</i> Hayata タイワンヒヨドリ (タイワンヒヨドリバナモドキ) | | ○ | | ● | |
| <i>Gaillardia pulchella</i> Foug. var. <i>picta</i> (Sweet) A.Gray テンニンギク | [変種] [帰化] | ○ | | | |
| <i>Ixeris japonica</i> (Burm.f.) Nakai オオジシバリ | | ○ | ○ | | ● |
| <i>Ixeris repens</i> (L.) A.Gray ハマニガナ (ハマイチョウ) | | ○ | | | |
| <i>Lactuca indica</i> L. アキノノゲシ (ホソバアキノノゲシ) | | ○ | | | ● |
| <i>Melanthera biflora</i> (L.) Wild キダチハマグルマ (トキワハマグルマ) | | ○ | ○ | ● | |
| <i>Melanthera robusta</i> (Makino) K.Ohashi et H.Ohashi オオハマグルマ | | ○ | | | |
| <i>Sigesbeckia orientalis</i> L. ツクシメナモミ | | ○ | ○ | | |
| <i>Sonchus asper</i> (L.) Hill オニノゲシ | [帰化] | ○ | ○ | | |
| <i>Synedrella nodiflora</i> (L.) Gaertn. フシザキソウ | [帰化] | | ○ | | ● |

| | | 2013確認 | | 1989確認 | |
|---|-----------------------|--------|----|--------|----|
| | | 上地 | 下地 | 上地 | 下地 |
| <i>Wedelia trilobata</i> (L.) Hitchc. | | [帰化] | ○ | | |
| アメリカハマグルマ | | | | | |
| <i>Youngia japonica</i> (L.) DC. | | ○ | ○ | ● | |
| オニタビラコ | | | | | |
| | マツムシソウ目 | | | | |
| | Dipsacales | | | | |
| | レンブクソウ科 | | | | |
| | Adoxaceae | | | | |
| <i>Sambucus chinensis</i> Lindl. | | | ○ | ● | |
| ソクズ (クサニワトコ) | | | | | |
| | セリ目 | | | | |
| | Apiales | | | | |
| | トベラ科 | | | | |
| | Pittosporaceae | | | | |
| <i>Pittosporum tobira</i> (Thunb.) W.T.Aiton | | ○ | ○ | ● | ● |
| トベラ (トビラノキ) | | | | | |
| | ウコギ科 | | | | |
| | Araliaceae | | | | |
| <i>Centella asiatica</i> (L.) Urb. | | ○ | ○ | | ● |
| ツボクサ (アツバツボクサ, オガサワラツボクサ, チヂミツボクサ) | | | | | |
| <i>Hydrocotyle sibthorpioides</i> Lam. | | ○ | | ● | |
| チドメグサ | | | | | |
| | セリ科 | | | | |
| | Apiaceae | | | | |
| <i>Angelica hirsutiflora</i> T.S.Liu, C.Y.Chao et T.I.Chuang | | ○ | ○ | ● | ● |
| ナンゴクハマウド | | | | | |
| <i>Cyclospermum leptophyllum</i> (Pers.) Sprague ex Britton et P.Wilson | | [帰化] | ○ | | |
| マツバゼリ | | | | | |
| <i>Peucedanum japonicum</i> Thunb. var. japonicum | | [変種] | ○ | | |

黒島 維管束植物目録

2014 2006 1989 1893
 確認 確認 確認 確認

| | | | | | | |
|---|--------------------------|--|------|---|--------|---|
| | 大葉類 | EUPHYLLOPHYTA | | | | |
| | 大葉シダ植物 | MONILOPHYTA | | | | |
| | マツバラ目 | Psilotales | | | | |
| | マツバラ科 | Psilotaceae | | | | |
| <i>Psilotum nudum</i> (L.) P.Beauv. マツバラ | | | ○ | | | |
| | ウラボシ目 | Polypodiales | | | | |
| | イノモトソウ科 | Pteridaceae | | | | |
| <i>Pteris ryukyuensis</i> Tagawa リュウキュウイノモトソウ | | | ○ | | ◇ | |
| | チャセンシダ科 | Aspleniaceae | | | | |
| <i>Asplenium nidus</i> L. シマオオタニワタリ | | | | | ● | |
| <i>Asplenium setoi</i> N.Murak. et Seriz. ヤエヤマオオタニワタリ (リュウキュウトリノスシダ) | | | ○ | | | |
| | オシダ科 | Dryopteridaceae | | | | |
| <i>Cyrtomium falcatum</i> (L.f.) C.Presl オニヤブソテツ (キレハヤブソテツ) | | | ○ | | ◇ | |
| | ツルキジノオ科 | Lomariopsidaceae | | | | |
| <i>Nephrolepis cordifolia</i> (L.) C.Presl タマシダ | | | ○ | | | |
| | ウラボシ科 | Polypodiaceae | | | | |
| <i>Phymatosorus scolopendria</i> (Burm.f.) Pic.Serm. オキナワウラボシ | | | ○ | | | |
| | 種子植物 | SPERMETOPHYTA | | | | |
| | 裸子植物 (末端裸子植物) | GYMNOSPERMAE (Acrogymnospermae) | | | | |
| | ソテツ目 | Cycadales | | | | |
| | ソテツ科 | Cycadaceae | | | | |
| <i>Cycas revoluta</i> Thunb. ソテツ | | | ○ | ● | ◇ | |
| | ナンヨウスギ目 | Araucariales | | | | |
| | ナンヨウスギ科 | Araucariaceae | | | | |
| <i>Araucaria cunninghamii</i> Aiton ex D.Don ナンヨウスギ (シマナンヨウスギ) | | | | | [栽培逸出] | ● |
| | マキ科 | Podocarpaceae | | | | |
| <i>Podocarpus macrophyllus</i> (Thunb.) Sweet イヌマキ (クサマキ) | | | ○ | ● | ◇ | |
| | 被子植物 | ANGIOSPERMAE | | | | |
| | アウストロバイレヤ目 (シキミ目) | Austrobaileyales | | | | |
| | マツブサ科 | Schisandraceae | | | | |
| <i>Kadsura japonica</i> (L.) Dunal サネカズラ (ビナンカズラ) | | | | | | ◆ |
| | コショウ目 | Piperales | | | | |
| | コショウ科 | Piperaceae | | | | |
| <i>Piper kadsura</i> (Choisy) Ohwi フウトウカズラ (オオバフウトウカズラ) | | | ○ | | ◇ | |
| <i>Piper retrofractum</i> Vahl ヒハツモドキ (ジャワナガコショウ, ヒハツ) | | | [帰化] | ○ | ● | ◇ |

| | | | | | |
|--|------------------|--------|---|---|---|
| ウマノスズクサ科 | Aristolochiaceae | | | | |
| <i>Aristolochia debilis</i> Siebold et Zucc. | | | | | ◇ |
| ウマノスズクサ | | | | | |
| モクレン目 | Magnoliales | | | | |
| バンレイシ科 | Annonaceae | | | | |
| <i>Annona squamosa</i> L. | | [栽培逸出] | | | ● |
| バンレイシ (シヤカトウ) | | | | | |
| クスノキ目 | Lurales | | | | |
| ハスノハギリ科 | Hernandiaceae | | | | |
| <i>Hernandia nymphaeifolia</i> (C.Presl) Kubitzki | | | ○ | ● | ◇ |
| ハスノハギリ | | | | | |
| クスノキ科 | Lauraceae | | | | |
| <i>Cassytha filiformis</i> L. | | | ○ | ● | ◇ |
| スナヅル (シマネナンカズラ) | | | | | |
| <i>Machilus thunbergii</i> Siebold et Zucc. | | | ○ | | ◇ |
| タブノキ (イヌグス) | | | | | |
| 単子葉植物 | MONOCOTYLEDONEAE | | | | |
| オモダカ目 | Alismatales | | | | |
| サトイモ科 | Araceae | | | | |
| <i>Alocasia odora</i> (Lodd.) Spach | | | ○ | ● | ◇ |
| クワズイモ | | | | | |
| <i>Epipremnum pinnatum</i> (L.) Engl. | | | ○ | | ◇ |
| ハブカズラ | | | | | |
| トチカガミ科 | Hydrocharitaceae | | | | |
| <i>Thalassia hemprichii</i> (Ehrenb. ex Solms) Asch. | | | ○ | | |
| リュウキュウスガモ | | | | | |
| タコノキ目 | Pandanales | | | | |
| タコノキ科 | Pandanaceae | | | | |
| <i>Pandanus odoratissimus</i> L.f. | | | ○ | ● | ◇ |
| アダン (リュウキュウアダン, カネアダン) | | | | | |
| ユリ目 | Liliales | | | | |
| サルトリイバラ科 | Smilacaceae | | | | |
| <i>Smilax sebeana</i> Miq. | | | ○ | | ◇ |
| ハマサルトリイバラ (トゲナシカカラ) | | | | | |
| ユリ科 | Liliaceae | | | | |
| <i>Lilium longiflorum</i> Thunb. | | | ○ | | ◇ |
| テッポウユリ | | | | | |
| キジカクシ目 (クサスギカズラ目) | Asparagales | | | | |
| ラン科 | Orchidaceae | | | | |
| <i>Nervilia aragoana</i> Gaudich. | | | ○ | | ◇ |
| ヤエヤマヒトツボクロ (アオイボクロ, ヤエヤマクマガイソウ, ヤエヤマヒトツバラ) | | | | | |
| アヤメ科 | Iridaceae | | | | |
| <i>Gladiolus × colvillii</i> Sweet | | [栽培逸出] | | | ● |
| グラジオラス | | | | | |
| ヒガンバナ科 | Amaryllidaceae | | | | |
| <i>Allium tuberosum</i> Rottler ex Spreng. | | [帰化] | | | ● |
| ニラ | | | | | |
| <i>Crinum asiaticum</i> L. var. <i>japonicum</i> Baker | | [変種] | ○ | ● | ◇ |
| ハマオモト (ハマユウ) | | | | | |
| <i>Hippeastrum × hybridum</i> Hort. ex Valenovsky | | [帰化] | | | ● |
| アマリリス | | | | | |

| | 2014 | 2006 | 1989 | 1893 |
|--|--------|------|------|------|
| | 確認 | 確認 | 確認 | 確認 |
| <i>Lycoris traubii</i> W.Hayw. ショウキズイセン (ショウキラン) | | ● | | |
| <i>Zephyranthes carinata</i> Herb. サフランモドキ | [帰化] | ● | | |
| キジカクシ科 (クサギカズラ科) Asparagaceae | | | | |
| <i>Sansevieria trifasciata</i> Prain アツバチトセラン (サンセベリア) | [栽培逸出] | ● | | |
| <i>Asparagus cochinchinensis</i> (Lour.) Merr. クサスギカズラ (テンモンドウ, ナンゴククサスギカズラ) | | ○ | | |
| <i>Liriope spicata</i> Lour. コヤブラン (リュウキュウヤブラン, チョウセンヤブラン) | | ○ | | |
| ヤシ目 Arecales ヤシ科 Arecaceae | | | | |
| <i>Arenga ryukyuensis</i> A.Henderson クロツグ (コミノクロツグ) | | ○ | ● | |
| <i>Cocos nucifera</i> L. ココヤシ | [栽培逸出] | ○ | | |
| <i>Livistona chinensis</i> (Jacq.) R.Br. ex Mart. var. <i>subglobosa</i> (Hassk.) Becc. ビロウ | [変種] | ○ | ● | |
| ツククサ目 Commelinales ツククサ科 Commelinaceae | | | | |
| <i>Commelina auriculata</i> Blume ホウライツククサ (ナミツククサ) | | ○ | ● | ◇ |
| <i>Commelina benghalensis</i> L. マルバツククサ | | ○ | | |
| <i>Tradescantia spathacea</i> Sw. ムラサキオモト (シキンラン) | [帰化] | ○ | | |
| ショウガ目 Zingiberales バショウ科 Musaceae | | | | |
| <i>Musa basjoo</i> Siebold ex Iinuma バショウ | [栽培逸出] | ● | | |
| <i>Musa × paradisiaca</i> L. バナナ | [栽培逸出] | ● | | |
| ショウガ科 Zingiberaceae | | | | |
| <i>Alpinia zerumbet</i> (Pers.) B.L.Burtt et R.M.Sm. ゲットウ | | ○ | ● | ◇ |
| イネ目 Poales カヤツリグサ科 Cyperaceae | | | | |
| <i>Carex brunnea</i> Thunb. コゴメスゲ (コゴメナキリスゲ, シオカゼナキリ) | | ○ | | |
| <i>Carex wahuensis</i> C.A.Mey. var. <i>bongardii</i> (Boott) Franch. et Sav. ヒゲスゲ (イソスゲ, オオヒゲスゲ) | [変種] | ○ | | |
| <i>Cyperus iria</i> L. コゴメガヤツリ | | ○ | | |
| <i>Cyperus javanicus</i> Houtt. オニクグ | | | | ◇ |
| <i>Cyperus kyllingia</i> Endl. オオヒメクグ (シロヒメクグ) | | ○ | ● | |
| <i>Cyperus pilosus</i> Vahl オニガヤツリ | | | ● | |
| <i>Cyperus polystachyos</i> Rottb. イガガヤツリ | | ○ | | |

| | 2014 確認 | 2006 確認 | 1989 確認 | 1893 確認 |
|---|-------------|------------|------------|------------|
| <i>Cyperus rotundus</i> L. ハマスゲ | ○ | | | |
| <i>Fimbristylis cymosa</i> R.Br. シオカゼテンツキ (シバテンツキ, ハマテンツキ) | ○ | | ◇ | |
| <i>Fimbristylis dichotoma</i> (L.) Vahl var. <i>diphylla</i> (Retz.) T.Koyama クゲテンツキ | [変種] ○ | | | |
| <i>Fimbristylis ovata</i> (Burm.f.) Kern ヤリテンツキ | ○ | | | |
| <i>Fimbristylis sieboldii</i> Miq. ex Franch. et Sav. イソヤマテンツキ | ○ | | | |
| トウトルモドキ科 Flagellariaceae | | | | |
| <i>Flagellaria indica</i> L. トウトルモドキ | ○ | | ◇ | |
| イネ科 Poaceae | | | | |
| <i>Axonopus compressus</i> (Sw.) P.Beauv. ツルメヒシバ | [帰化] ○ | | | |
| <i>Cenchrus brownii</i> Roem. et Schult. クリノイガ | [帰化] | | ◇ | |
| <i>Chloris barbata</i> Sw. シマヒゲシバ (タイワンオヒゲシバ, ムラサキヒゲシバ, ムラサキシマヒゲシバ, クロコウセンガヤ) | [帰化] ○ | | | |
| <i>Chloris divaricata</i> R.Br. var. <i>cynodontoides</i> (Baleton) Lazarides ヒメヒゲシバ | [変種] [帰化] ○ | | ◇ | |
| <i>Chloris gayana</i> Kunth アフリカヒゲシバ (ローズソウ, ローズグラス) | [帰化] ○ | | ◇ | |
| <i>Cymbopogon citratus</i> (DC.) Stapf レモングラス (レモンガヤ, レモンソウ) | [栽培逸出] | ● | | |
| <i>Cynodon dactylon</i> (L.) Pers. ギョウギシバ (バミューダグラス) | ○ | | | |
| <i>Cynodon sp.</i> ギョウギシバ属の一種 | ○ | | | |
| <i>Dactyloctenium aegyptium</i> (L.) P.Beauv. タツノツメガヤ (ミヤコジマオヒシバ, ヤンバルオヒシバ) | [帰化] ○ | | ◇ | |
| <i>Dichanthium annulatum</i> (Forssk.) Stapf ヒメオニササガヤ (マルポアブラススキ) | [帰化] ○ | | ◇ | |
| <i>Digitaria ciliaris</i> (Retz.) Koeler メヒシバ | ○ | | ◇ | |
| <i>Digitaria henryi</i> Rendle ヘンリーメヒシバ (ナンゴクメヒシバ) | ○ | | | |
| <i>Digitaria insularis</i> (L.) Mez ex Ekman ススキメヒシバ | [帰化] ○ | | ◇ | |
| <i>Digitaria radicata</i> (J.Presl) Miq. コメヒシバ (ナヨメヒシバ) | ○ | | | |
| <i>Digitaria violascens</i> Link アキメヒシバ | ○ | | | |
| <i>Eleusine indica</i> (L.) Gaertn. オヒシバ (チカラグサ, オイジワ) | ○ | | ◇ | |
| <i>Enteropogon dolichostachyus</i> (Lag.) Keng ex Lazarides ムラサキオヒゲシバ (ムラサキヒゲシバ) | [帰化] | | ◇ | |
| <i>Eragrostis amabilis</i> (L.) Wight et Arn. ヌカカゼクサ | ○ | | | |
| <i>Eragrostis japonica</i> (Thunb.) Trin. コゴメカゼクサ | | | | ◇ |

| | 2014 確認 | 2006 確認 | 1989 確認 | 1893 確認 |
|---|------------|------------|------------|------------|
| <i>Eragrostis multicaulis</i> Steud. ニワホコリ | ○ | | ◇ | |
| <i>Imperata cylindrica</i> (L.) Raeusch. var. <i>koenigii</i> (Retz.) Pilg. チガヤ (ケチガヤ) | [変種] ○ | ● | ◇ | |
| <i>Ischaemum aureum</i> (Hook. et Arn.) Hack. ハナカモノハシ | ○ | | ◇ | |
| <i>Ischaemum muticum</i> L. ヤエヤマカモノハシ (ナンヨウカモノハシ) | ○ | | ◇ | |
| <i>Leptochloa panicea</i> (Retz.) Ohwi イトアゼガヤ | ○ | | ◇ | |
| <i>Lepturus repens</i> (G.Forst.) R.Br. ハイシバ | ○ | | ◇ | |
| <i>Melinis repens</i> (Willd.) Zizka ルビーガヤ (ホクチガヤ) | [帰化] ○ | | | |
| <i>Miscanthus floridulus</i> (Labill.) Warb. ex K.Schum. et Lauterb. トキワススキ | | ● | | |
| <i>Miscanthus sinensis</i> Andersson ススキ | ○ | | ◇ | |
| <i>Moorochloa eruciformis</i> (Sibth. et Sm.) Veldkamp ヒメスズメノヒエ | [帰化] ○ | | | |
| <i>Oplismenus compositus</i> (L.) P.Beauv. エダウチチヂミザサ | ○ | | ◇ | |
| <i>Panicum maximum</i> Jacq. ギネアキビ (ギネアキビ, ギネアグラス) | [帰化] ○ | | | |
| <i>Panicum repens</i> L. ハイキビ | ○ | | ◇ | |
| <i>Paspalum distichum</i> L. キシユウスズメノヒエ (カリマタスズメノヒエ) | [帰化] | | ◇ | |
| <i>Paspalum scrobiculatum</i> L. var. <i>orbiculare</i> (G.Forst.) Hack. スズメノコビエ | [変種] ○ | | | |
| <i>Paspalum urvillei</i> Steud. タチスズメノヒエ | [帰化] ○ | | | |
| <i>Paspalum vaginatum</i> Sw. サワスズメノヒエ | ○ | | | |
| <i>Pennisetum purpureum</i> Schumach. ナピアグラス (ネピアグラス, エレファントグラス) | [帰化] ○ | ● | | |
| <i>Pleiblastus linearis</i> (Hack.) Nakai リュウキュウチク (ゴザダケザサ, ギョウヨウチク) | ○ | | ◇ | |
| <i>Setaria parviflora</i> (Poir.) Kerguelen フシネキンエノコロ (アメリカエノコログサ) | [帰化] | | ◇ | |
| <i>Setaria pumila</i> (Poir.) Roem. et Schult. キンエノコロ (ナガボノキンエノコロ) | ○ | | | |
| <i>Setaria sphacelata</i> (Steud.) Stapf et C.E.Hubb. ex Chipp アフリカキンエノコロ | [帰化] ○ | | | |
| <i>Setaria verticillata</i> (L.) P.Beauv. ザラツキエノコログサ | [帰化] ○ | | ◇ | |
| <i>Setaria viridis</i> (L.) P.Beauv. エノコログサ | ○ | | ◇ | |
| <i>Setaria viridis</i> (L.) P.Beauv. var. <i>pachystachys</i> (Franch. et Sav.) Makino et Nemoto ハマエノコロ (ムラサキハマエノコロ) | [変種] ○ | | | |
| <i>Setaria x pycnocomma</i> (Steud.) Henrard オオエノコロ | | | ◇ | |

| | 2014 確認 | 2006 確認 | 1989 確認 | 1893 確認 |
|--|------------|------------|------------|------------|
| <i>Sorghum halepense</i> (L.) Pers. セイバンモロコシ | [帰化] | | ◇ | |
| <i>Spinifex littoreus</i> (Burm.f.) Merr. ツキイゲ | ○ | ● | ◇ | |
| <i>Sporobolus diander</i> (Retz.) P.Beauv. フタシベネズミノオ | [帰化] | ○ | | |
| <i>Sporobolus fertilis</i> (Steud.) Clayton ネズミノオ | ○ | | ◇ | |
| <i>Sporobolus virginicus</i> (L.) Kunth ソナレシバ | ○ | | ◇ | |
| <i>Thuarea involuta</i> (G.Forst.) R.Br. ex Sm. クロイワザサ (スナザサ) | ○ | ● | ◇ | |
| <i>Zoysia matrella</i> (L.) Merr. コウシュンシバ (ハリシバ) | ○ | | | |
| <i>Zoysia pacifica</i> (Goudswaard) M.Hotta et Kuroki コウライシバ (イトシバ) | ○ | | ◇ | |
| 真正双子葉植物 EUDICOTS | | | | |
| キンポウゲ目 Ranunculales | | | | |
| ケシ科 Papaveraceae | | | | |
| <i>Corydalis balansae</i> Prain シマキケマン | ○ | | | |
| <i>Corydalis heterocarpa</i> Siebold et Zucc. var. <i>japonica</i> (Franch. et Sav.) Ohwi キケマン (ヒゴキケマン) | [変種] | | | ◆ |
| ツツラフジ科 Menispermaceae | | | | |
| <i>Cocculus laurifolius</i> DC. イソヤマアオキ (コウシュウウヤク) | ○ | | ◇ | ◆ |
| <i>Cyclea insularis</i> (Makino) Hatus. ミヤコジマツツラフジ | ○ | | ◇ | |
| <i>Stephania japonica</i> (Thunb.) Miers ハスノハカズラ (ケハスノハカズラ, コバノハスノハカズラ, オオバハスノハカズラ) | | | | ◆ |
| キンポウゲ科 Ranunculaceae | | | | |
| <i>Clematis apiifolia</i> DC. ボタンヅル (ワクノテ) | | | | ◆ |
| <i>Clematis chinensis</i> Osbeck サキシマボタンヅル (ミヤコジマボタンヅル) | | | | ◆ |
| <i>Clematis javana</i> DC. リュウキュウボタンヅル (ケボタンヅル, タイワンボタンヅル) | ○ | ● | ◇ | |
| <i>Ranunculus sceleratus</i> L. タガラシ | | | | ◆ |
| <i>Ranunculus sieboldii</i> Miq. シマキツネノボタン (ヤエヤマキツネノボタン) | | | | ◆ |
| ユキノシタ目 Saxifragales | | | | |
| マンサク科 Hamamelidaceae | | | | |
| <i>Distylium racemosum</i> Siebold et Zucc. イスノキ | ○ | | | |
| ベンケイソウ科 Crassulaceae | | | | |
| <i>Bryophyllum daigremontianum</i> (Raym.-Hamet et H.Perrier) A.Berger コダカラベンケイ | [栽培逸出] | | ◇ | |
| <i>Bryophyllum pinnatum</i> (L.f.) Oken トウロウソウ (セイロンベンケイ) | [帰化] | ○ | ● | ◇ |
| <i>Bryophyllum tubiflorum</i> Harvey キンチョウ | [栽培逸出] | ○ | ● | ◇ |

2014 2006 1989 1893
 確認 確認 確認 確認

Sedum formosanum N.E.Br.
 ハママンネングサ (シママンネングサ, タカサゴマンネングサ)

○

Sedum sp.

マンネングサ属の一種 sp.

◆

アリノトウグサ科 Haloragaceae

Haloragis micrantha (Thunb.) R.Br.

アリノトウグサ

◆

ブドウ目 Vitales

ブドウ科 Vitaceae

Ampelopsis glandulosa (Wall.) Momiy. var. *hancei* (Planch.) Momiy.

テリハノブドウ (コバノテリハノブドウ)

[変種] ○ ● ◇

Ampelopsis glandulosa (Wall.) Momiy. var. *heterophylla* (Thunb.) Momiy.

ノブドウ

[変種] ◇ ◆

Cayratia japonica (Thunb.) Gagnep.

ヤブカラシ (ヤブガラシ, ビンボウカズラ)

○

Vitis ficifolia Bunge

エビヅル (ミツバブドウ, リュウキュウガネブ)

○

◇

◆

マメ目 Fabales

マメ科 Fabaceae

Acacia concinna (Willd.) DC.

オキナワネム

[栽培逸出] ◇

Acacia confusa Merr.

ソウシジュ (タイワンアカシア)

[帰化] ○ ● ◇

Bauhinia japonica Maxim.

ハカマカズラ

○

◇

Bauhinia variegata L.

ソシンカ (ファイリソシンカ)

[栽培逸出] ●

Canavalia lineata (Thunb.) DC.

ハマナタマメ

○

◆

Christia obcordata (Poir.) Bakh.f. ex Meeuwen

ホオズキハギ

○

Delonix regia (Bojer ex Hook.) Raf.

ハウオウボク

[栽培逸出] ●

Derris trifoliata Lour.

シイノキカズラ (ギョトウ)

○

◆

Desmanthus pernambucanus (L.) Thell.

タチクサネム (ヒメギンネム)

[帰化] ○

Erythrina variegata L.

デイゴ (デイコ, ムニンデイゴ)

[帰化] ○ ●

Flemingia macrophylla (Willd.) Kuntze ex Merr. var. *philippinensis* (Merr. et Rolfe) H.Ohashi

エノキマメ (ビロードエノキマメ)

[変種] ◇

Galactia tashiroi Maxim.

ハギカズラ

○

●

◇

Glycine koidzumii Ohwi

ミヤコジマツルマメ

○

Indigofera trifoliata L.

ミツバノコマツナギ (ナハエボシグサ)

○

●

◇

Lespedeza cuneata (Dum.Cours.) G.Don

メドハギ

○

Leucaena leucocephala (Lam.) de Wit

ギンゴウカン (ギンネム)

[帰化] ○ ● ◇

| | 2014 確認 | 2006 確認 | 1989 確認 | 1893 確認 |
|--|------------|------------|------------|------------|
| <i>Lotus pacificus</i> Kramina et D.D.Sokoloff シロバナミヤコグサ (シロバナノミヤコグサ, アマミエボシグサ) | ○ | | ◇ | ◆ |
| <i>Macropodium atropurpureum</i> (DC.) Urb. クロバナツルアズキ | [帰化] ○ | ● | | |
| <i>Medicago lupulina</i> L. コメツブウマゴヤシ (ネバリコメツブウマゴヤシ) | [帰化] ○ | | | |
| <i>Melilotus officinalis</i> (L.) Pall. subsp. <i>suaveolens</i> (Ledeb.) H.Ohashi シナガワハギ (エビラハギ) | [亜種] ○ | | | |
| <i>Millettia pinnata</i> (L.) Panigrahi クロヨナ | ○ | ● | ◇ | ◆ |
| <i>Ormocarpum cochinchinense</i> (Lour.) Merr. ハマセンナ (ハマエンジュ) | ○ | | | |
| <i>Pueraria montana</i> (Lour.) Merr. タイワンクス | ○ | | ◇ | |
| <i>Rhynchosia minima</i> (L.) DC. ヒメノアズキ | ○ | | ◇ | |
| <i>Senna sophera</i> (L.) Roxb. オオバノセンナ (オオバセンナ, ホソバハブソウ) | [栽培逸出] ○ | | | |
| <i>Senna surattensis</i> (Burm.f.) H.S.Irwin et Barneby モクセンナ | [栽培逸出] | ● | | |
| <i>Senna hebecarpa</i> (Fernald) H.S. Irwin & Barneby アメリカセンナ | [栽培逸出] ○ | | | |
| <i>Sophora tomentosa</i> L. イソフジ | ○ | ● | ◇ | |
| <i>Vigna luteola</i> (Jacq.) Benth. ナガバハマササゲ | | | | ◆ |
| <i>Vigna marina</i> (Burm.) Merr. ハマアズキ (ハマササゲ) | ○ | ● | ◇ | |
| <i>Vigna minima</i> (Roxb.) Ohwi et H.Ohashi var. <i>minor</i> (Matsum.) Tateishi ヒナアズキ (コバナツルアズキ, ヒメハマアズキ) | [変種] ○ | ● | | |
| バラ目 Rosales | | | | |
| バラ科 Rosaceae | | | | |
| <i>Rhaphiolepis indica</i> (L.) Lindl. ex Ker var. <i>umbellata</i> (Thunb.) H.Ohashi シャリンバイ (マルバシャリンバイ, タチシャリンバイ, アツバシャリンバイ) | [変種] ○ | | ◇ | ◆ |
| <i>Photinia wrightiana</i> Maxim. シマカナメモチ | | | | ◆ |
| <i>Rosa bracteata</i> J.C.Wendl. カカヤンバラ (ヤエヤマノイバラ) | ○ | ● | ◇ | |
| <i>Rubus parvifolius</i> L. ナワシロイチゴ | ○ | ● | ◇ | ◆ |
| クロウメモドキ科 Rhamnaceae | | | | |
| <i>Berchemia lineata</i> (L.) DC. ヒメクマヤナギ | | | | ◆ |
| <i>Colubrina asiatica</i> (L.) Brongn. ヤエヤマハマナツメ | ○ | | ◇ | |
| <i>Sageretia thea</i> (Osbeck) M.C.Johnst. クロイゲ | | | | ◆ |
| アサ科 Cannabaceae | | | | |
| <i>Celtis boninensis</i> Koidz. クワノハエノキ (オガサワラエノキ, ムニンエノキ, リュウキュウエノキ) | ○ | | | |
| <i>Celtis tetrandra</i> Roxb. タイワンエノキ (ナンバンエノキ) | [外国産] | | ◇ | |

2014 2006 1989 1893
 確認 確認 確認 確認

クワ科 Moraceae

| | | | | | |
|--|------|---|---|---|--|
| <i>Broussonetia papyrifera</i> (L.) L'Hér. ex Vent. カジノキ | | ○ | | ◇ | |
| <i>Ficus caulocarpa</i> (Miq.) Miq. オオバアコウ | | ○ | | ◇ | |
| <i>Ficus microcarpa</i> L.f. ガジュマル | | ○ | ● | ◇ | |
| <i>Ficus septica</i> Burm.f. オオバインビワ | | ○ | | ◇ | |
| <i>Ficus superba</i> (Miq.) Miq. var. <i>japonica</i> Miq. アコウ | [変種] | ○ | ● | | |
| <i>Ficus virgata</i> Reinw. ex Blume ハマインビワ | | ○ | | | |
| <i>Maclura cochinchinensis</i> (Lour.) Corner var. <i>gerontogea</i> (Siebold et Zucc.) H. Ohashi カカツガユ | [変種] | ○ | | | |
| <i>Morus australis</i> Poir. ヤマグワ (シマグワ, アマミグワ) | | ○ | ● | ◇ | |

イラクサ科 Urticaceae

| | | | | | |
|---|------|---|---|---|--|
| <i>Boehmeria nivea</i> (L.) Gaudich. var. <i>concolor</i> Makino アオカラムシ (ノカラムシ) | [変種] | | ● | | |
| <i>Boehmeria nivea</i> (L.) Gaudich. var. <i>concolor</i> Makino f. <i>nipponivea</i> (Koidz.) Kitam. ex H. Ohba カラムシ (クサマオ) | [品種] | ○ | | ◇ | |
| <i>Pipturus arborescens</i> (Link) C.B. Rob. ヌノマオ (オオイワガネ) | | ○ | | ◇ | |
| <i>Pouzolzia zeylanica</i> (L.) Benn. ヤンバルツルマオ (オオバヒメマオ, ツルマオモドキ, コケツルマオ) | | ○ | | ◇ | |

ブナ目 Fagales

モクマオウ科 Casuarinaceae

| | | | | | |
|--|------|---|---|---|--|
| <i>Casuarina equisetifolia</i> L. トクサバモクマオウ (モクマオウ, トキワギョリュウ) | [帰化] | ○ | ● | ◇ | |
|--|------|---|---|---|--|

ウリ目 Cucurbitales

ウリ科 Cucurbitaceae

| | | | | | |
|--|--------|---|---|---|--|
| <i>Diplocyclos palmatus</i> (L.) C. Jeffrey オキナワスズメウリ | | ○ | ● | ◇ | |
| <i>Luffa cylindrica</i> (L.) M. Roem. ヘチマ | [栽培逸出] | | ● | | |
| <i>Momordica charantia</i> L. ニガウリ (ツルレイシ, ゴーヤ) | [栽培逸出] | | ● | | |
| <i>Zehneria guamensis</i> (Merr.) Fosberg クロミノオキナワスズメウリ | | ○ | | ◇ | |

ニシキギ目 Celastrales

ニシキギ科 Celastraceae

| | | | | | |
|---|--|---|---|---|---|
| <i>Euonymus japonicus</i> Thunb. マサキ (オオバマサキ, ナガバマサキ, コバマサキ, ボウシュウマサキ, ヤクシマサキ) | | ○ | | ◇ | ◆ |
| <i>Gymnosporia diversifolia</i> Maxim. ハリツルマサキ (トゲマサキ) | | ○ | ● | ◇ | ◆ |

カタバミ目 Oxalidales

カタバミ科 Oxalidaceae

| | | | | | |
|--|-----------|---|---|---|---|
| <i>Oxalis corniculata</i> L. カタバミ | | ○ | | ◇ | ◆ |
| <i>Oxalis debilis</i> Kunth subsp. <i>corymbosa</i> (DC.) Lourteig ムラサキカタバミ | [亜種] [帰化] | ○ | ● | | |

ホルトノキ科 Elaeocarpaceae

Elaeocarpus photiniifolius Hook. et Arn.

シマホルトノキ (シマハボソ)



キントラノオ目 Malpighiales

トウダイグサ科 Euphorbiaceae

Acalypha australis L.

エノキグサ (アミガサソウ, ホソバエノキグサ)

○

Chamaesyce atoto (G.Forst.) Croizat

スナジタイゲキ (ハマタイゲキ, スナタイゲキ)

○

●

◇

Chamaesyce hirta (L.) Millsp.

シマニシキソウ (タイワンニシキソウ)

○

●

◇

Chamaesyce hypericifolia (L.) Millsp.

オトギリバニシキソウ

[帰化]

○

Chamaesyce prostrata (Aiton) Small

ハイニシキソウ

[帰化]

○

Chamaesyce thymifolia (L.) Millsp.

イリオモテニシキソウ

[帰化]

○

Codiaeum variegatum (L.) A.Juss. var. *pictum* (Lodd.) Müll.Arg.

ヘンヨウボク (クロトン, クロトンノキ)

[変種] [栽培逸出]

●

Croton cascarilloides Raeusch.

グミモドキ (チャンカニー)

○

◇

Euphorbia cyathophora Murray

ショウジョウソウ

[帰化]

○

●

◇

Excoecaria agallocha L.

シマシラキ (オキナワジンコウ)

○

◇

Jatropha integerrima Jacq.

テイキンザクラ (ホコバテイキンザクラ, ヤハズヤトロファ)

[栽培逸出]

●

Jatropha podagrica Hook.

トックリアブラギリ (サンゴアブラギリ)

[栽培逸出]

●

Macaranga tanarius (L.) Müll.Arg.

オオバギ (オオバキ)

○

◇

Mallotus japonicus (L.f.) Müll.Arg.

アカメガシワ (ゴサイバ)

◇

Melanolepis multiglandulosa (Reinw. ex Blume) Rchb.f. et Zoll.

ヤンバルアカメガシワ

○

●

◇

Ricinus communis L.

トウゴマ (ヒマ)

[帰化]

○

●

ミカンソウ科 (コミカンソウ科) Phyllanthaceae

Antidesma pentandrum (Blanco) Merr.

コウトウヤマヒハツ (シマヤマヒハツ, カイガンセイシボク)

○

◇

Breynia vitis-idaea (Burm.f.) C.E.C.Fisch.

オオシマコバンノキ (オオシマカンコノキ, ヒメコバンノキ, タイワンコバンノキ, タイワンヒメコバンノキ, タカサゴコバンノキ)

○

◇

Flueggea trigonoclada (Ohwi) T.Kuros.

アマミヒトツバハギ (アツバコバンノキ)

○

◇

Phyllanthus amarus Schumach.

キダチコミカンソウ (キダチミカンソウ)

[帰化]

○

Phyllanthus lepidocarpus Siebold et Zucc.

コミカンソウ

◇

Phyllanthus tenellus Roxb.

ナガエコミカンソウ (ブラジルコミカンソウ)

[帰化]

○

2014 2006 1989 1893
 確認 確認 確認 確認

| | | | | | |
|--|--|-----------|---|---|-----|
| ツゲモドキ科 Putranjivaceae | | | | | |
| <i>Putranjiva matsumurae</i> Koidz. | | ○ | | ◇ | |
| ツゲモドキ (モチツゲ, タイワンツゲモドキ) | | | | | |
| トケイソウ科 Passifloraceae | | | | | |
| <i>Passiflora minima</i> L. | | [帰化] | ○ | | |
| ヒメトケイソウ | | | | | |
| <i>Turnera ulmifolia</i> L. | | [帰化] | ○ | | |
| ツルネラ | | | | | |
| スミレ科 Violaceae | | | | | |
| <i>Viola mandshurica</i> W.Becker var. <i>triangularis</i> (Franch. et Sav.) M.Mizush. | | [変種] | | | ◆ |
| アツバスミレ | | | | | |
| <i>Viola patrinii</i> DC. | | | | | ◆ |
| シロスミレ (シロバナスミレ, ケシロスミレ, ハダカシロスミレ) | | | | | |
| <i>Viola verecunda</i> A.Gray | | | | | ◆ |
| ツボスミレ (ニョイスミレ, コマノツメ) | | | | | |
| <i>Viola yedoensis</i> Makino var. <i>pseudojaponica</i> (Nakai) T.Hashim. | | [変種] | ○ | ◇ | |
| リュウキュウコスミレ | | | | | |
| テリハボク科 Clusiaceae | | | | | |
| <i>Calophyllum inophyllum</i> L. | | [栽培逸出] | ○ | ● | ◇ ◆ |
| テリハボク (ヤラボ, タマナ, ヒータマナ) | | | | | |
| <i>Garcinia subelliptica</i> Merr. | | [帰化] | ○ | ● | ◇ |
| フクギ | | | | | |
| オトギリソウ科 Hypericaceae | | | | | |
| <i>Hypericum laxum</i> (Blume) Koidz. | | | | | ◆ |
| コケオトギリ | | | | | |
| フトモモ目 Myrtales | | | | | |
| シクンシ科 Combretaceae | | | | | |
| <i>Terminalia catappa</i> L. | | | ○ | ● | |
| モモタマナ (コバテイシ, シマボウ) | | | | | |
| ミソハギ科 Lythraceae | | | | | |
| <i>Pemphis acidula</i> J.R. et G.Forst. | | | ○ | ● | ◇ |
| ミズガンピ (ミズハギ) | | | | | |
| アカバナ科 Onagraceae | | | | | |
| <i>Oenothera laciniata</i> Hill | | [帰化] | ○ | | |
| コマツヨイグサ | | | | | |
| <i>Oenothera speciosa</i> Nutt. | | [帰化] | ○ | | |
| ヒルザキツキミソウ | | | | | |
| <i>Oenothera speciosa</i> Nutt. var. <i>childsii</i> (L.H.Bailey) Munz | | [変種] [帰化] | | ● | |
| モモイロヒルザキツキミソウ (オトメツキミソウ) | | | | | |
| フトモモ科 Myrtaceae | | | | | |
| <i>Psidium guajava</i> L. | | [帰化] | ○ | ● | ◇ ◆ |
| バンジロウ (グアバ) | | | | | |
| ノボタン科 Melastomataceae | | | | | |
| <i>Melastoma candidum</i> D.Don | | | | | ◆ |
| ノボタン | | | | | |
| ムクロジ目 Sapindales | | | | | |
| ウルシ科 Anacardiaceae | | | | | |
| <i>Mangifera indica</i> L. | | [栽培逸出] | | ● | |
| マンゴー | | | | | |
| <i>Toxicodendron succedaneum</i> (L.) Kuntze | | | ○ | | |
| ハゼノキ (ロウノキ, ハゼ, リュウキュウハゼ) | | | | | |

2014 2006 1989 1893
 確認 確認 確認 確認

ムクロジ科 Sapindaceae

| | | | | | |
|---|-----------|---|---|---|---|
| <i>Allophylus timoriensis</i> (DC.) Blume | | ○ | ● | ◇ | |
| アカギモドキ | | | | | |
| <i>Cardiospermum halicacabum</i> L. | [栽培逸出] | | | | ◆ |
| フウセンカズラ | | | | | |
| <i>Cardiospermum halicacabum</i> L. var. <i>microcarpum</i> (Kunth) Blume | [変種] [帰化] | ○ | | ◇ | |
| コフウセンカズラ | | | | | |

ミカン科 Rutaceae

| | | | | | |
|---|------|---|---|---|---|
| <i>Citrus depressa</i> Hayata | | ○ | ● | ◇ | |
| シイクワシャー (ヒラミレモン, シーカーシャー) | | | | | |
| <i>Glycosmis citrifolia</i> (Willd.) Lindl. | | ○ | | ◇ | ◆ |
| ハナシンボウギ (ゲッキツモドキ) | | | | | |
| <i>Murraya paniculata</i> (L.) Jack | | ○ | ● | ◇ | |
| ゲッキツ | | | | | |
| <i>Toddalia asiatica</i> (L.) Lam. | | ○ | | | ◆ |
| サルカケミカン | | | | | |
| <i>Zanthoxylum beecheyanum</i> K.Koch var. <i>alatum</i> (Nakai) H.Hara | [変種] | | ● | | |
| ヒレザンショウ | | | | | |

センダン科 Meliaceae

| | | | | | |
|---------------------------|--|---|---|---|--|
| <i>Melia azedarach</i> L. | | ○ | ● | ◇ | |
| センダン (アウチ) | | | | | |

アオイ目 Malvales

アオイ科 Malvaceae

| | | | | | |
|---|-----------|---|---|---|---|
| <i>Abelmoschus moschatus</i> Medik. | [帰化] | | | ◇ | |
| リュウキュウトロロアオイ (ジャコウアオイ, トロロアオイモドキ, ニオイトロロアオイ) | | | | | |
| <i>Abutilon indicum</i> (L.) Sweet subsp. <i>guineense</i> (Schumach.) Borss.Waalk. | [亜種] [帰化] | ○ | ● | ◇ | |
| タイワンイチビ (ヒメイチビ) | | | | | |
| <i>Abutilon indicum</i> (L.) Sweet subsp. <i>indicum</i> | [亜種] [帰化] | ○ | | | ◆ |
| タカサゴイチビ (シマイチビ) | | | | | |
| <i>Ceiba speciosa</i> (A.St.Hil.) Ravenna | [栽培逸出] | | ● | | |
| トックリキワタ | | | | | |
| <i>Corchorus aestuans</i> L. | [帰化] | ○ | | | ◆ |
| シマツナソ (トガリバツナソ) | | | | | |
| <i>Hibiscus rosa-sinensis</i> L. | [栽培逸出] | | ● | | |
| ブッソウゲ | | | | | |
| <i>Hibiscus tiliaceus</i> L. | | ○ | ● | ◇ | ◆ |
| オオハマボウ (ヤマアサ, シマハマボウ, ハマイチビ, オオバノハマボウ) | | | | | |
| <i>Malvastrum coromandelianum</i> (L.) Garcke | [帰化] | ○ | ● | ◇ | |
| エノキアオイ (アオイモドキ) | | | | | |
| <i>Malvaviscus penduliflorus</i> DC. | [栽培逸出] | | ● | | |
| タイリンヒメフヨウ (ウナズキヒメフヨウ) | | | | | |
| <i>Melochia corchorifolia</i> L. | | | | | ◆ |
| ノジアオイ | | | | | |
| <i>Sida acuta</i> Burm.f. | [帰化] | ○ | | | |
| ホソバキンゴジカ | | | | | |
| <i>Sida rhombifolia</i> L. subsp. <i>insularis</i> (Hatus.) Hatus. | [亜種] | ○ | | ◇ | |
| ハイキンゴジカ | | | | | |
| <i>Sida rhombifolia</i> L. subsp. <i>rhombifolia</i> | [亜種] | ○ | ● | | ◆ |
| キンゴジカ | | | | | |
| <i>Thespesia populnea</i> (L.) Sol. ex Correa | | ○ | | | ◆ |
| サキシマハマボウ (シマアオイ, トウユウナ) | | | | | |

| | 2014 | 2006 | 1989 | 1893 |
|--|-----------|------|------|------|
| | 確認 | 確認 | 確認 | 確認 |
| <i>Triumfetta procumbens</i> G.Forst. ハテルマカズラ (ケコンペイトウグサ, ハテルマラセンソウ) | | | ◇ | |
| <i>Triumfetta rhomboidea</i> Jacq. カジノハラセンソウ | [帰化] | | | ◆ |
| <i>Urena lobata</i> L. オオバボンテンカ (アマミボンテンカ) | [帰化] | | | ◆ |
| ジンチョウゲ科 Thymelaeaceae | | | | |
| <i>Wikstroemia retusa</i> A.Gray アオガンピ (オキナワガンピ) | ○ | ● | ◇ | |
| アブラナ目 Brassicales | | | | |
| パパイヤ科 Caricaceae | | | | |
| <i>Carica papaya</i> L. パパイヤ (パパイア) | [帰化] | ○ | ● | ◇ |
| フウチョウボク科 Capparaceae | | | | |
| <i>Crateva formosensis</i> (Jacobs) B.S.Sun ギョボク (アマギ) | | ○ | | |
| フウチョウソウ科 Cleomaceae | | | | |
| <i>Arivela viscosa</i> (L.) Raf. ヒメフウチョウソウ (サキシマフウチョウソウ, キバナフウチョウソウ) | [帰化] | ○ | ◇ | ◆ |
| アブラナ科 Brassicaceae | | | | |
| <i>Cardamine bellidifolia</i> L. ヒメタネツケバナ | [外来種] | ○ | | |
| <i>Capsella bursa-pastoris</i> (L.) Medik. ナズナ | | | | ◆ |
| <i>Cardamine hirsuta</i> L. ミチタネツケバナ (ケタネツケバナ) | [帰化] | | | ◆ |
| <i>Lepidium englerianum</i> (Muschler) Al-Shehbaz ハマガラシ (ヤンバルガラシ) | | ○ | | ◆ |
| <i>Lepidium virginicum</i> L. マメゲンバイナズナ (セイヨウゲンバイナズナ, コウベナズナ) | [帰化] | ○ | ◇ | |
| <i>Raphanus sativus</i> L. var. <i>hortensis</i> Backer f. <i>raphanistroides</i> Makino ハマダイコン | [品種] [帰化] | ○ | ● | ◇ |
| <i>Rorippa indica</i> (L.) Hiern イヌガラシ | | | | ◆ |
| ナデシコ目 Caryophyllales | | | | |
| イソマツ科 Plumbaginaceae | | | | |
| <i>Limonium wrightii</i> (Hance) Kuntze var. <i>arbusculum</i> (Maxim.) H.Hara イソマツ (ムラサキイソマツ) | [変種] | ○ | ● | ◇ |
| タデ科 Polygonaceae | | | | |
| <i>Antigonon leptopus</i> Hook. et Arn. ニトベカズラ (アサヒカズラ) | [帰化] | | ● | |
| <i>Persicaria chinensis</i> (L.) H.Gross ツルソバ | | ○ | ◇ | |
| <i>Rumex japonicus</i> Houtt. ギシギシ (オオギシギシ, ニッコウギシギシ) | | | ◇ | |
| ナデシコ科 Caryophyllaceae | | | | |
| <i>Arenaria serpyllifolia</i> L. ノミノツヅリ | | ○ | | ◆ |
| <i>Dianthus japonicus</i> Thunb. ハマナデシコ (フジナデシコ) | | | | ◆ |
| <i>Sagina japonica</i> (Sw.) Ohwi ツメクサ | | | | ◆ |

| | | | | | |
|--|-----------|---|---|---|---|
| <i>Stellaria media</i> (L.) Vill. コハコベ (ハコベ) | [帰化] | | | | ◆ |
| ヒユ科 Amaranthaceae | | | | | |
| <i>Achyranthes aspera</i> L. var. <i>aspera</i> ケイノコヅチ (シマイノコヅチ, シロイノコヅチ) | [変種] | ○ | | | |
| <i>Amaranthus spinosus</i> L. ハリビユ (ハリイヌビユ) | [帰化] | ○ | | ◇ | |
| <i>Amaranthus viridis</i> L. ホナガイヌビユ (アオビユ) | [帰化] | ○ | | | |
| <i>Celosia argentea</i> L. ノゲイトウ | [帰化] | ○ | | | |
| <i>Chenopodium acuminatum</i> Willd. var. <i>vachelii</i> (Hook. et Arn.) Moq. カワラアカザ | [変種] | ○ | | ◇ | |
| <i>Chenopodium ambrosioides</i> L. var. <i>anthelminticum</i> (Crantz) A.Gray アメリカアリタソウ (アリタソウ) | [変種] [帰化] | | | ◇ | |
| ハマミズナ科 Aizoaceae | | | | | |
| <i>Sesuvium portulacastrum</i> (L.) L. ミルスベリヒユ (ハマミズナ, ハマスベリヒユ) | | ○ | ● | ◇ | ◆ |
| <i>Tetragonia tetragonoides</i> (Pall.) Kuntze ツルナ (ハマヂシャ) | | ○ | | ◇ | |
| オシロイバナ科 Nyctaginaceae | | | | | |
| <i>Boerhavia glabrata</i> Blume ナハカノコソウ | | ○ | | | |
| <i>Bougainvillea spectabilis</i> Willd. イカダカズラ (ブーゲンビレア) | [栽培逸出] | | ● | | |
| <i>Mirabilis jalapa</i> L. オシロイバナ | [帰化] | ○ | ● | | |
| <i>Pisonia aculeata</i> L. トゲカズラ | | ○ | | ◇ | |
| ツルムラサキ科 Basellaceae | | | | | |
| <i>Anredera cordifolia</i> (Ten.) Steenis アカザカズラ (マデイラカズラ, ツルアカザ) | [帰化] | ○ | | | |
| <i>Basella alba</i> L. ツルムラサキ | [帰化] | ○ | | | |
| スベリヒユ科 Portulacaceae | | | | | |
| <i>Portulaca oleracea</i> L. スベリヒユ (オオスベリヒユ, タチスベリヒユ) | | ○ | | | |
| <i>Portulaca pilosa</i> L. ヒメマツバボタン (ケツメクサ, ケツメグサ, マルバケツメグサ) | [帰化] | ○ | | ◇ | |
| <i>Talinum triangulare</i> auct. non (Jacq.) Willd. ハゼラン | [帰化] | | ● | | |
| サボテン科 Cactaceae | | | | | |
| <i>Hylocereus</i> sp. ドラゴンフルーツ (サンカクサボテン類) | [栽培逸出] | | ● | | |
| ツツジ目 Ericales | | | | | |
| サガリバナ科 Lecythidaceae | | | | | |
| <i>Barringtonia asiatica</i> (L.) Kurz ゴバンノアシ | | ○ | ● | | |
| ペンタフィラクス科 (モッコク科, サカキ科) Pentaphylacaceae | | | | | |
| <i>Eurya emarginata</i> (Thunb.) Makino ハマヒサカキ (オオバハマヒサカキ) | | | | | ◆ |

2014 2006 1989 1893
 確認 確認 確認 確認

| | | | | | |
|--|--------|---|---|---|---|
| アカテツ科 Sapotaceae | | | | | |
| <i>Planchonella obovata</i> (R.Br.) Pierre | | ○ | | ◇ | ◆ |
| アカテツ (クロテツ) | | | | | |
| カキノキ科 Ebenaceae | | | | | |
| <i>Diospyros egyptica</i> Kosterm. | | ○ | ● | ◇ | |
| ヤエヤマコクタン (リュウキュウコクタン) | | | | | |
| <i>Diospyros maritima</i> Blume | | ○ | | ◇ | |
| リュウキュウガキ (クサノガキ, クロボウ) | | | | | |
| サクラソウ科 Primulaceae | | | | | |
| <i>Anagallis arvensis</i> L. f. <i>coerulea</i> (Schreb.) Baumg. | [品種] | | ● | | ◆ |
| ルリハコベ | | | | | |
| <i>Ardisia sieboldii</i> Miq. | | | | | ◆ |
| モクタチバナ | | | | | |
| <i>Lysimachia mauritiana</i> Lam. | | ○ | ● | ◇ | ◆ |
| ハマボッス | | | | | |
| ツバキ科 Theaceae | | | | | |
| <i>Camellia japonica</i> L. | | | | | ◆ |
| ヤブツバキ (ツバキ, ヤマツバキ, ホウザンツバキ, タイワンヤマツバキ) | | | | | |
| リンドウ目 Gentianales | | | | | |
| アカネ科 Rubiaceae | | | | | |
| <i>Gardenia jasminoides</i> Ellis | | ○ | | ◇ | |
| クチナシ (コリンクチナシ, センプク, ヤクシマクチナシ) | | | | | |
| <i>Guettarda speciosa</i> L. | | ○ | ● | ◇ | ◆ |
| ハテルマギリ | | | | | |
| <i>Hedyotis auricularia</i> L. | [帰化] | | ● | | |
| ヤエヤマハシカグサ | | | | | |
| <i>Hedyotis brachypoda</i> (DC.) Sivar. et Biju | | ○ | | | |
| フタバムグラ (ナガエフタバムグラ) | | | | | |
| <i>Hedyotis strigulosa</i> (Bartl. ex DC.) Fosberg var. <i>parvifolia</i> (Hook. et Arn.) T.Yamaz. | [変種] | ○ | ● | ◇ | ◆ |
| ソナレムグラ (イソイナモリソウ) | | | | | |
| <i>Morinda citrifolia</i> L. | | ○ | ● | ◇ | ◆ |
| ヤエヤマアオキ (ハテルマアオキ, ムガクヤエヤマアオキ) | | | | | |
| <i>Paederia scandens</i> (Lour.) Merr. | | ○ | ● | ◇ | ◆ |
| ヘクソカズラ (ヤイトバナ) | | | | | |
| <i>Psychotria manillensis</i> Bartl. ex DC. | | ○ | | ◇ | |
| ナガミボチョウジ | | | | | |
| <i>Psychotria serpens</i> L. | | | | | ◆ |
| シラタマカズラ (イワヅタイ, ワラベナカセ) | | | | | |
| <i>Spermacoce assurgens</i> Ruiz et Pav. | [帰化] | ○ | | | |
| ナガバハリフタバ | | | | | |
| リンドウ科 Gentianaceae | | | | | |
| <i>Schenkia japonica</i> (Maxim.) Mansion | | ○ | | | |
| シマセンブリ | | | | | |
| キョウチクトウ科 Apocynaceae | | | | | |
| <i>Adenium obesum</i> (Forssk.) Roem. et Schult. | [栽培逸出] | | ● | | |
| アデニウム | | | | | |
| <i>Allamanda cathartica</i> L. | [栽培逸出] | | ● | | |
| アリアケカズラ | | | | | |
| <i>Asclepias curassavica</i> L. | [帰化] | ○ | ● | | |
| トウワタ | | | | | |
| <i>Catharanthus roseus</i> (L.) G.Don | [栽培逸出] | ○ | ● | | |
| ニチニチソウ | | | | | |

| | 2014 | 2006 | 1989 | 1893 |
|--|------|--------|------|------|
| | 確認 | 確認 | 確認 | 確認 |
| <i>Cerbera manghas</i> L. ミフクラギ (オキナワキョウチクトウ, アマミキョウチクトウ) | ○ | ● | ◇ | ◆ |
| <i>Cynanchum liukiuense</i> Warb. リュウキュウガシワ | ○ | | | |
| <i>Nerium oleander</i> L. var. <i>indicum</i> (Mill.) O.Deg. et Greenwell キョウチクトウ | [変種] | [栽培逸出] | ● | |
| <i>Parsonsia alboflavescens</i> (Dennst.) Mabb. ホウライカガミ | ○ | ● | ◇ | |
| <i>Plumeria rubra</i> L. 'Acutifolia' インドソケイ | | [栽培逸出] | ● | |
| <i>Tylophora tanakae</i> Maxim. ツルモウリンカ | ○ | ● | ◇ | ◆ |
| <i>Vincetoxicum</i> sp. カモメヅル属の一種 | | | | ◆ |

ムラサキ目 Boraginales
ムラサキ科 Boraginaceae

| | | | | |
|---|------|---|---|---|
| <i>Cynoglossum lanceolatum</i> Forssk. var. <i>formosanum</i> (Nakai) H.Hara タイワンルリソウ (シマスナビキソウ) | [変種] | | | ◆ |
| <i>Ehretia dicksonii</i> Hance マルバチシャノキ | ○ | ● | ◇ | |
| <i>Ehretia microphylla</i> Lam. フクマンギ | ○ | ● | ◇ | |
| <i>Heliotropium foertherianum</i> Diane et Hilger モンパノキ (ハマムラサキノキ) | ○ | ● | ◇ | ◆ |

ナス目 Solanales
ヒルガオ科 Convolvulaceae

| | | | | |
|--|------|---|---|---|
| <i>Calystegia soldanella</i> (L.) R.Br. ハマヒルガオ | | | | ◆ |
| <i>Dichondra micrantha</i> Urb. アオイゴケ | ○ | | | ◆ |
| <i>Evolvulus alsinoides</i> (L.) L. var. <i>decumbens</i> (R.Br.) Ooststr. アサガオガラクサ | [変種] | ○ | | |
| <i>Ipomoea biflora</i> (L.) Pers. ネコアサガオ (ケアサガオ) | [帰化] | ○ | | |
| <i>Ipomoea cairica</i> (L.) Sweet モミジヒルガオ (タイワンアサガオ) | [帰化] | ○ | | |
| <i>Ipomoea indica</i> (Burm.) Merr. ノアサガオ | ○ | | ◇ | |
| <i>Ipomoea littoralis</i> Blume ソコベニヒルガオ | ○ | ● | ◇ | |
| <i>Ipomoea pes-caprae</i> (L.) Sweet ゲンバイヒルガオ | ○ | ● | ◇ | ◆ |
| <i>Ipomoea triloba</i> L. ホシアサガオ | [帰化] | ○ | | |
| <i>Ipomoea violacea</i> L. キバナハマヒルガオ | ○ | | | |

ナス科 Solanaceae

| | | | | |
|---|------|--|---|---|
| <i>Capsicum frutescens</i> L. キダチトウガラシ (シマトウガラシ) | [帰化] | | ◇ | |
| <i>Lycianthes biflora</i> (Lour.) Bitter メジロホオズキ (サンゴホオズキ) | | | | ◆ |

2014 2006 1989 1893
 確認 確認 確認 確認

| | | | | | |
|---|-----------|---|--|---|--|
| <i>Lycopersicon esculentum</i> Mill. var. <i>cerasiforme</i> (Dunal) A.Gray マメトマト (マメアカナス) | [変種] [帰化] | ○ | | | |
| <i>Physalis angulata</i> L. var. <i>angulata</i> ヒロハフウリンホオズキ (センナリホオズキ) | [変種] [帰化] | ○ | | | |
| <i>Solanum americanum</i> Mill. テリミノイヌホオズキ (ニセイヌホオズキ, ナンゴクイヌホオズキ, カンザシイヌホオズキ) | [帰化] | ○ | | ◇ | |
| <i>Solanum capsicoides</i> All. キンギンナスビ (ニシキハリナスビ) | [帰化] | ○ | | ◇ | |
| <i>Solanum erianthum</i> D.Don ヤンバルナスビ | [帰化] | ○ | | | |

シソ目 Lamiales
モクセイ科 Oleaceae

| | | | | | |
|--|--|---|--|---|--|
| <i>Jasminum superfluum</i> Koidz. オキナワソケイ | | ○ | | ◇ | |
|--|--|---|--|---|--|

オオバコ科 Plantaginaceae

| | | | | | |
|--|--|---|--|--|---|
| <i>Plantago asiatica</i> L. オオバコ (ハハキオオバコ, ホウキオオバコ) | | ○ | | | |
| <i>Veronica javanica</i> Blume ハマクワガタ (イシガキグサ) | | | | | ◆ |
| <i>Veronica peregrina</i> L. ムシクサ | | ○ | | | |

シソ科 Lamiaceae

| | | | | | |
|---|------|---|---|---|---|
| <i>Ajuga pygmaea</i> A.Gray ヒメキランソウ | | ○ | | | |
| <i>Callicarpa japonica</i> Thunb. var. <i>luxurians</i> Rehder オオムラサキシキブ | [変種] | ○ | ● | ◇ | |
| <i>Callicarpa mollis</i> Siebold et Zucc. ヤブムラサキ | | | | | ◆ |
| <i>Clerodendrum inerme</i> (L.) Gaertn. イボタクサギ (ガシャンギ) | | ○ | ● | ◇ | |
| <i>Clerodendrum japonicum</i> (Thunb.) Sweet ヒギリ | [帰化] | ○ | ● | | |
| <i>Leucas chinensis</i> (Retz.) R.Br. ヤンバルツルハッカ | | ○ | ● | ◇ | ◆ |
| <i>Premna microphylla</i> Turcz. ハマクサギ (トウクサギ, キバナハマクサギ, タイワンハマクサギ) | | | | | ◆ |
| <i>Premna serratifolia</i> L. タイワンウオクサギ (シマウオクサギ, ケウオクサギ) | | ○ | | ◇ | |
| <i>Scutellaria laeteviolacea</i> Koidz. シソバタツナミ (シソバタツナミソウ) | | | | | ◆ |
| <i>Suzukia luchuensis</i> Kudô ヤエヤマズコウジュ | | ○ | | ◇ | |
| <i>Vitex rotundifolia</i> L.f. ハマゴウ (ハマハビ) | | ○ | ● | ◇ | ◆ |
| <i>Vitex rotundifolia</i> L.f. f. <i>albescens</i> Hiyama シロバナハマゴウ | [品種] | ○ | | | |
| <i>Vitex trifolia</i> L. ミツバハマゴウ | | ○ | | ◇ | |

キツネノマゴ科 Acanthaceae

| | | | | | |
|---|------|--|---|--|--|
| <i>Asystasia gangetica</i> (L.) T.Anderson subsp. <i>micrantha</i> (Nees) Ensermu ツノグサ | [亜種] | | ● | | |
|---|------|--|---|--|--|

2014 2006 1989 1893
 確認 確認 確認 確認

| | | | | |
|---|-----------|---|---|---|
| <i>Codonacanthus pauciflorus</i> (Nees) Nees アリモリソウ (ツノツクバネ) | | | | ◆ |
| <i>Justicia procumbens</i> L. var. <i>procumbens</i> キツネノマゴ | [変種] | | ◇ | ◆ |
| <i>Justicia procumbens</i> L. var. <i>riukiensis</i> Yamam. キツネノヒマゴ (ケブカキツネノマゴ) | [変種] | ○ | ● | |
| <i>Ruellia brittoniana</i> Leonard ex Fernald ヤナギバルイラソウ | [帰化] | ○ | ● | |
| <i>Thunbergia erecta</i> (Benth.) T.Anders. コダチヤハズカズラ (キンギョボク) | [栽培逸出] | | ● | |
| ノウゼンカズラ科 Bignoniaceae | | | | |
| <i>Tabebuia rosea</i> モモイロノウゼン | | | ● | |
| クマツヅラ科 Verbenaceae | | | | |
| <i>Duranta erecta</i> L. タイワンレンギョウ (ハリマツリ) | [栽培逸出] | | ● | |
| <i>Lantana camara</i> L. var. <i>aculeata</i> (L.) Moldenke シチヘンゲ (ランタナ) | [変種] [帰化] | ○ | ● | |
| <i>Lantana</i> × <i>hybrida</i> Hort. ex Neubert キバナランタナ | [栽培逸出] | | ● | |
| <i>Phyla nodiflora</i> (L.) Greene イワダレソウ | | ○ | ◇ | ◆ |
| <i>Stachytarpheta jamaicensis</i> (L.) Vahl フトボナガボソウ (インドナガボソウ) | [帰化] | ○ | ● | |
| <i>Verbena bonariensis</i> L. ヤナギハナガサ (サンジャクバーベナ) | [帰化] | | ◇ | |
| <i>Verbena litoralis</i> Kunth ハマクマツヅラ | [帰化] | ○ | | |
| <i>Verbena officinalis</i> L. クマツヅラ | | ○ | ◇ | |
| <i>Verbena</i> × <i>incompta</i> P.W.Michael ダキバアレチハナガサ | [帰化] | ○ | | |
| キク目 Asterales | | | | |
| クサトベラ科 Goodeniaceae | | | | |
| <i>Scaevola taccada</i> (Gaertn.) Roxb. クサトベラ | | ○ | ● | ◇ |
| キク科 Asteraceae | | | | |
| <i>Artemisia capillaris</i> Thunb. カワラヨモギ | | | | ◆ |
| <i>Artemisia indica</i> Willd. ニシヨモギ (オキナワヨモギ) | | ○ | ● | |
| <i>Artemisia indica</i> Willd. var. <i>maximowiczii</i> (Nakai) H.Hara ヨモギ (カズザキヨモギ) | [変種] | | | ◆ |
| <i>Artemisia morrisonensis</i> Hayata ニイタカヨモギ (リュウキュウヨモギ) | | ○ | ● | |
| <i>Artemisia japonica</i> Thunb. オトコヨモギ | | | | ◆ |
| <i>Aster indicus</i> L. コヨメナ (インドヨメナ) | | | ● | |
| <i>Aster subulatus</i> Michx. var. <i>sandwicensis</i> (A.Gray ex H.Mann) A.G.Jones ヒロハホウキギク | [変種] [帰化] | ○ | | |

| | 2014 | 2006 | 1989 | 1893 | | |
|--|------|------|------|------|---|---|
| | 確認 | 確認 | 確認 | 確認 | | |
| <i>Aster yomena</i> (Kitam.) Honda ヨメナ (オハギ, カンサイヨメナ) | | | | ◆ | | |
| <i>Bidens parviflora</i> Willd. ホソバナセンダングサ | | | | ◆ | | |
| <i>Bidens pilosa</i> L. var. <i>minor</i> (Blume) Sherff コシロノセンダングサ (シロノセンダングサ, シロバナセンダングサ) | [変種] | [帰化] | | ◆ | | |
| <i>Bidens pilosa</i> L. var. <i>pilosa</i> コセンダングサ | [変種] | [帰化] | ◇ | | | |
| <i>Bidens pilosa</i> L. var. <i>radiata</i> Sch. Bip. オオバナノセンダングサ (シロノセンダングサ, タチアワユキセンダングサ, アワユキセンダングサ, オオバナセンダングサ) | [変種] | [帰化] | ○ | | | |
| <i>Bidens pilosa</i> L. var. <i>radiata</i> Sch. Bip. f. <i>decumbens</i> (Greenm.) Sherff ハイシロノセンダングサ (ハイアワユキセンダングサ) | [品種] | [帰化] | ● | | | |
| <i>Blumea hieraciifolia</i> (D.Don) DC. タカサゴコウゾリナ (タイワンジオウギク) | | | ◇ | | | |
| <i>Blumea lacera</i> (Burm.f.) DC. ヤエヤマコウゾリナ | | ○ | | | | |
| <i>Cirsium brevicaule</i> A.Gray シマアザミ (イリオモテアザミ, アマミシマアザミ) | | ○ | ● | ◇ | | |
| <i>Cirsium maritimum</i> Makino ハマアザミ | | | | ◆ | | |
| <i>Cirsium vulgare</i> (Savi) Ten. アメリカオニアザミ | [帰化] | ○ | | | | |
| <i>Conyza bonariensis</i> (L.) Cronquist アレチノギク (ノジオウギク) | [帰化] | ○ | | | | |
| <i>Conyza sumatrensis</i> (Retz.) E.Walker オオアレチノギク | [帰化] | ○ | ● | ◇ | | |
| <i>Crassocephalum crepidioides</i> (Benth.) S.Moore ベニバナボロギク | [帰化] | | ● | | | |
| <i>Crepidiastrum keiskeanum</i> (Maxim.) Nakai アゼトウナ | | | | ◆ | | |
| <i>Crepidiastrum lanceolatum</i> (Houtt.) Nakai ホソバワダン | | ○ | ● | ◇ | | |
| <i>Crepidiastrum lanceolatum</i> (Houtt.) Nakai f. <i>pinnatilobum</i> (Maxim.) Nakai ハマナレン (ソテツナ) | [品種] | | | ◆ | | |
| <i>Crossostephium chinense</i> (L.) Makino モクビャッコウ (モクビャクコウ) | | ○ | ● | ◇ | | |
| <i>Cyanthillium cinereum</i> (L.) H.Rob. ムラサキムカシヨモギ (ヤンバルヒゴタイ, ヤンバルノギク) | | ○ | | ◇ | | |
| <i>Eclipta thermalis</i> Bunge タカサブロウ (モトタカサブロウ) | | ○ | | ◆ | | |
| <i>Emilia sonchifolia</i> (L.) DC. var. <i>javanica</i> (Burm.f.) Mattf. ウスベニニガナ | [変種] | [帰化] | ○ | ● | ◇ | ◆ |
| <i>Eupatorium formosanum</i> Hayata タイワンヒヨドリ (タイワンヒヨドリバナモドキ) | | | | ◇ | | |
| <i>Eupatorium luchuense</i> Nakai シマフジバカマ | | | | | ◆ | |
| <i>Gaillardia pulchella</i> Foug. var. <i>picta</i> (Sweet) A.Gray テンニンギク | [変種] | [帰化] | ○ | | | |
| <i>Ixeris japonica</i> (Burm.f.) Nakai オオジシバリ | | ○ | | | ◆ | |
| <i>Ixeris repens</i> (L.) A.Gray ハマニガナ (ハマイチョウ) | | | ● | | ◆ | |

| | 2014 確認 | 2006 確認 | 1989 確認 | 1893 確認 |
|--|------------|------------|------------|------------|
| <i>Lactuca indica</i> L. アキノノゲシ (ホソバアキノノゲシ) | ○ | | ◇ | ◆ |
| <i>Melanthera biflora</i> (L.) Wild キダチハマグルマ (トキワハマグルマ) | ○ | ● | ◇ | |
| <i>Melanthera prostrata</i> (Hemsl.) W.L. Wagner et H. Rob. ネコノシタ (ハマグルマ) | | | | ◆ |
| <i>Melanthera robusta</i> (Makino) K. Ohashi et H. Ohashi オオハマグルマ | | | ◇ | |
| <i>Sigesbeckia orientalis</i> L. ツクシメナモミ | ○ | | ◇ | |
| <i>Sonchus asper</i> (L.) Hill オニノゲシ | [帰化] ○ | | | |
| <i>Sonchus oleraceus</i> L. ノゲシ (ハルノノゲシ, ケシアザミ) | ○ | | | |
| <i>Thymophylla tenuiloba</i> (DC.) Small カラクサシュンギク | [栽培逸出] ○ | | | |
| <i>Tithonia diversifolia</i> (Hemsl.) A. Gray ニトベギク (キダチメキシコヒマワリ) | [帰化] ○ | | | |
| <i>Wedelia trilobata</i> (L.) Hitchc. アメリカハマグルマ | [帰化] ○ | ● | | |
| <i>Youngia japonica</i> (L.) DC. オニタビラコ | ○ | ● | | |
| マツムシソウ目 Dipsacales | | | | |
| レンブクソウ科 Adoxaceae | | | | |
| <i>Sambucus chinensis</i> Lindl. ソクズ (クサニワトコ) | | | | ◆ |
| <i>Sambucus chinensis</i> Lindl. var. <i>formosana</i> (Nakai) H. Hara 台湾ソクズ (オガサワラソクズ) | [変種] ○ | ● | ◇ | |
| セリ目 Apiales | | | | |
| トベラ科 Pittosporaceae | | | | |
| <i>Pittosporum tobira</i> (Thunb.) W.T. Aiton トベラ (トビラノキ) | ○ | | ◇ | ◆ |
| ウコギ科 Araliaceae | | | | |
| <i>Centella asiatica</i> (L.) Urb. ツボクサ (アツバツボクサ, オガサワラツボクサ, チヂミツボクサ) | ○ | | | ◆ |
| <i>Hydrocotyle sibthorpioides</i> Lam. チドメグサ | ○ | | | |
| セリ科 Apiaceae | | | | |
| <i>Angelica hirsutiflora</i> T.S. Liu, C.Y. Chao et T.I. Chuang ナンゴクハマウド | ○ | | ◇ | |
| <i>Cryptotaenia canadensis</i> (L.) DC. subsp. <i>japonica</i> (Hassk.) Hand.-Mazz. ミツバ (ミツバゼリ) | [亜種] | | | ◆ |
| <i>Cyclospermum leptophyllum</i> (Pers.) Sprague ex Britton et P. Wilson マツバゼリ | [帰化] ○ | | | |
| <i>Peucedanum japonicum</i> Thunb. var. <i>japonicum</i> ボタンボウフウ | [変種] ○ | ● | | ◆ |
| <i>Torilis japonica</i> (Houtt.) DC. ヤブジラミ | | | ◇ | |

鳩間島・新城（上地）島・黒島の動物相（FAUNA） ～昆虫相を中心に～

山崎 仁也^{*1}，松村 雅史^{*2}，吉田 和久^{*2}，力身 恭二^{*2}，目黒 賢児^{*2}

Fauna of Hatoma Island, Aragusuku (Kamiji) Island, and Kuroshima Island, The Yaeyama Islands
– Mainly, report about the insect fauna –

Jinya YAMAZAKI^{*1}, Masafumi MATSUMURA^{*2}, Kazuhisa YOSHIDA^{*2}, Kyouji RIKIMI^{*2}, Kenji MEGURO^{*2}

はじめに

南琉球に位置する八重山群島の小島嶼、鳩間島・新城（上地）島・黒島の陸棲小動物相はこれまであまり報告されていないが、昆虫類に関しては琉球列島産昆虫目録増補改訂版（東清二，屋富祖昌子編，沖縄生物学会，2002）がある。この目録はトカラ列島以南102島で記録された種を対象としており，各種の生息する島嶼が記されている。ただし，鳩間島・新城（上地）島・黒島を見てみるとその分布記載は石垣島，西表島に近い属島ということで，特別な種を除き島名の記載はなく，これまで記録があるかは詳しく検索できない。

今回、沖縄県立博物館・美術館の総合調査の一環で、鳩間島・新城（上地）島・黒島の動物相（FAUNA），特に昆虫相を中心に調査したので報告する。

方法

調査は以下の日程で行った。

鳩間島 2012年10月26～28日
2013年2月10～11日
2015年4月21～23日

新城島上地 2013年6月26～28日
2014年2月12～14日
2015年4月23～24日
黒島 2014年6月27～30日
2014年10月29～31日

各島内を広く踏査し，昆虫類の採集は，捕虫網によるスweeping，ビーティングにて行った。夜間はフライトインターセプトトラップ（以下FIT），灯火採集や紫外光によるライトトラップなどを用いた。昆虫以外の陸棲小動物は，目にしたものを記録し，また，画像により同定した。

各島の地形的概況を表1に示す。



図1 八重山諸島 各島嶼の位置

表1 調査した4島嶼の位置と地形的概況

| 島名 | 北緯 | 東経 | 面積 (km ²) | 海岸線長 (km) | 最大標高 (m) |
|-----|--------------|---------------|-----------------------|-----------|----------|
| 鳩間島 | N24° 28' 22" | E123° 49' 12" | 0.96 | 3.9 | 33.8 |
| 上地島 | N24° 14' 02" | E123° 56' 40" | 1.76 | 6.2 | 13.1 |
| 黒島 | N24° 14' 22" | E124° 00' 53" | 10.02 | 12.6 | 15.3 |

※1 〒900-0006 沖縄県おもろまち3-1-1 沖縄県立博物館・美術館

*1 Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006, Japan.

※2 委嘱調査員

*2 Commissioned Investigator

結果と考察

1. 鳩間島

昆虫類75種を含め、99種を確認した。

鳩間島には大きな森林がなく、島の中央部にはウシの牧草地が広がっている。牧草地には多くの直翅類が見られるが多様性は貧弱で、台湾ハネナガイナゴ、ショウリョウバッタ、マダラバッタ、クルマバッタの4種が多数見られた。島の周囲の海岸林に自然植生がわずかに残るが、野生化ヤギの増殖が目立ち、今後も環境が変化していくことが予想される。集落付近にはクマネズミが増殖しているらしく、滞在した民宿のネズミ取りに毎日のようにかかっていた。

ヤシガニが多く生息する島として知られ、夜間に島の周回道路を1周すると大小10個体が見られた。密猟者らしき数名が徘徊していたが、大型のヤシガニは捕獲できなかったようで、持ち出しはないようだった。今後、当局による管理が必要ではないか。

爬虫類ではホオグロヤモリ、オガサワラヤモリ、ミナミヤモリ、イシガキトカゲを確認したが、ホオグロヤモリを除いて数は多くない。

2. 新城島（上地島）

昆虫類78種を含め、95種を確認した。

上地島は人口が減少し、常時住む島民は10人に満たないため、自然の多く残る島である。集落近くに点在する御嶽林は現在も少数の島民の努力により島外の人間が中に入らないよう厳重に管理されている。野生化したヤギが多少目立つものの、今後の環境変化は進まず、このまましばらくは自然が残るものと予想される。

時期が悪かったせいか、昆虫類の確認種は少なかったが、注目すべき種もあった。調査員の松村氏がカミキリの幼虫を2月に採集して持ち帰り、5月に羽化したものを確認したところ、ヨナグニゴマフカミキリの亜種で、ハテルマゴマフカミキリ *Mesosa yonaguni kashiwaii* であった。新城島は石垣島、西表島の属島ではあるが、同島亜種のイシガキゴマフカミキリ *M.y.subkonoi* ではなく竹富島、小浜島、黒島に産するものと同様に波照間島に産するハテルマゴマフカミキリであることが確認された（沖

縄昆虫同好会誌, 2014) のは、系統地理学的に非常に興味深い分布である。

3. 黒島

昆虫類129種を含め、153種を確認した。

黒島は島の内陸部を牧場が占め、人口よりウシの数が多き島として有名だが、このような牧場及び牧草地は外来の牧草が均一に繁茂し、台湾ハネナガイナゴ、ショウリョウバッタ、マダラバッタを主とする限られたバッタ類の楽園となっているため生物多様性には乏しい。反面、島の局所に御嶽林が残り、さまざまな環境が見られる。中央部の東筋（あがりすじ）集落から北部の海岸へぬける仲盛御嶽周辺にはまとまった御嶽林、海岸林が残り、小型のカミキリ類が多く見られた。また、仲本集落を拠点とする西海岸一帯は舗装道路がなく人通りも少ないため海岸林が繁茂し、マダラチョウ類などが多く見られた。

調査中、いたるところにインドクジャクの群れが見られた。

4. 総合

鳩間島、新城島、黒島で確認された動物類はほとんどが普通種で目新しい発見はない。しかしながら、冒頭述べたように、琉球列島産昆虫目録増補改訂版(2002)では、この3島が産地としての記載されているものは非常に限られている。たとえば“鳩間島”の記載は62種しかなく、そのうち15種がハチ目、30種がチョウ目である。“新城島”は28種の記載で、うち20種がチョウ目である。“黒島”は136種の記載があり、うち41種がハチ目、65種がチョウ目である。すなわち、これらの小島嶼に関しては、チョウ目やハチ目の報告は多いが、他の分類群の報告はほとんどないかまたは調査がされていないということになる。今回の調査は、限られた日数や方法での調査ではあるが、鳩間島で確認した昆虫類74種のうち56種は同目録に未記載のものだった。同様に新城島で確認した昆虫類78種のうち71種、黒島で確認した昆虫類129種のうち98種は未記載だった。このことは、小島嶼の調査の意義や必要性を示唆しており、今後も定期的に生物調査を行うことが望まれる。

参考文献

- 東清二ほか, 2002, 沖縄生物学会編琉球列島産昆虫目録, 榕樹書林.
- 松村雅史, 2015, 「2014年 新城島、黒島における鞘翅目の記録」琉球の昆虫(沖縄昆虫同好会誌), No.39, p.25-28.
- 日本チョウ類保全協会編, 2013, フィールドガイド日本のチョウ, 誠文堂新光社.
- 黒澤良彦ほか, 1985, 原色日本甲虫図鑑(Ⅱ)~(Ⅳ), 保育社.
- 草間慶一ほか, 1984, 日本産カミキリ大図鑑, 講談社.
- 大林延夫ほか, 1992, 日本産カミキリムシ検索図説, 東海大学出版.
- 新海栄一, 2010, 日本のクモ, 文一総合出版.

鳩間島確認動物リスト

| | | | |
|------------------|--|------------------|---|
| 哺乳綱 | Mammalia | ツグミ科 | Turdidae |
| コウモリ目 | Chiroptera | イソヒヨドリ | <i>Monticola solitarius</i> |
| オオコウモリ科 | Pteropodidae | メジロ科 | Zosteropidae |
| ヤエヤマオオコウモリ | <i>Pteropus dasymallus yayeyamae</i> | リュウキュウメジロ | <i>Zosterops japonicus loochooensis</i> |
| 鯨偶蹄目 | Cetartiodactyla | 甲殻綱（陸棲のみ） | Crustacea |
| ウシ科 | Bovidae | 十脚目 | Decapoda |
| ヤギ（野生化） | <i>Capra sp.</i> | オカヤドカリ科 | Coenobitidae |
| ネコ目（食肉目） | Carnivora | ヤシガニ | <i>Birgus latro</i> |
| ネコ科 | Felidae | オオナキオカヤドカリ | <i>Coenobita brevimanus</i> |
| イエネコ | <i>Felis silvestris catus</i> | ムラサキオカヤドカリ | <i>Coenobita purpureus</i> |
| ネズミ目（齧歯目） | Rodentia | ナキオカヤドカリ | <i>Coenobita rugosus</i> |
| ネズミ科 | Muridae | オカガニ科 | Gecarcinidae |
| クマネズミ | <i>Rattus rattus</i> | ムラサキオカガニ | <i>Gecarcoidea lalandii</i> |
| 爬虫綱 | Reptilia | 昆虫綱 | Insecta |
| 有鱗目 | Squamata | トンボ目 | Odonata |
| トカゲ科 | Scincidae | トンボ科 | Libellulidae |
| キシノウエトカゲ | <i>Plestiodon kishinouyei</i> | ウスバキトンボ | <i>Pantala flavescens</i> |
| イシガキトカゲ | <i>Plestiodon stimpsonii</i> | ゴキブリ目 | Blattaria |
| ヤモリ科 | Gekkonidae | マダラゴキブリ科 | Epilampridae |
| ホオグロヤモリ | <i>Hemidactylus frenatus</i> | サツマゴキブリ | <i>Opisthoptatia orientalis</i> |
| オガサワラヤモリ | <i>Lepidodactylus lugubris</i> | カマキリ目 | Mantodea |
| ミナミヤモリ | <i>Gekko hokouensis</i> | カマキリ科 | Mantidae |
| 鳥綱（留鳥のみ） | Aves | ハラビロカマキリ（卵塊） | <i>Hierodula patellifera</i> |
| コウノトリ目 | Ciconiiformes | シロアリ目 | Isoptera |
| サギ科 | Ardeidae | シロアリ科 | Termitidae |
| ムラサキサギ | <i>Ardea purpurea</i> | タカサゴシロアリ | <i>Nasutitermes takasagoensis</i> |
| クロサギ | <i>Egretta sacra</i> | バッタ目 | Orthoptera |
| キジ目 | Galliformes | キリギリス科 | Tettigoniidae |
| キジ科 | Phasianidae | ホシササキリ | <i>Conocephalus maculatus</i> |
| インドクジャク | <i>Pavo cristatus</i> | クツワムシ科 | Mecopodidae |
| ツル目 | Gruiformes | タイワンクツワムシ（幼） | <i>Mecopoda elongata</i> |
| クイナ科 | Rallidae | マツムシ科 | Eneopteridae |
| シロハラクイナ | <i>Amaurornis phoenicurus</i> | マダラコオロギ | <i>Cardiodactylus guttulus</i> |
| ハト目 | Columbiformes | イナゴ科 | Catantpidae |
| ハト科 | Columbidae | タイワンハネナガイナゴ | <i>Oxya chinensis</i> |
| カワラバト（ドバト） | <i>Columba livia</i> | イシガキモリバッタ | <i>Traulia ornata ishigakiensis</i> |
| リュウキュウキジバト | <i>Streptopelia orientalis stimpsoni</i> | バッタ科 | Acrididae |
| ズアカアオバト | <i>Treron formosae</i> | ショウリョウバッタ | <i>Acrida cinerea</i> |
| スズメ目 | Passeriformes | マダラバッタ | <i>Aiolopus thalassinus tamulus</i> |
| ヒヨドリ科 | Pycnonotidae | クルマバッタ | <i>Gastrimargus marmoratus</i> |
| イシガキヒヨドリ | <i>Hypsipetes amaurotis stejnegeri</i> | | |

| | | | |
|--|---|--|---|
| ヨコバイ目 セミ科 クマゼミ (抜け殻) イワサキクサゼミ | Homoptera Cicadidae <i>Cryptotympana facialis</i> <i>Mogannia minuta</i> | ニセフトガタヒメカミキリ イツホシシロカミキリ ヨコスジサビカミキリ モモブトトゲバカミキリ ハヤシサビカミキリ アヤモンチビカミキリ | <i>Ceresium unicolor pseudounicolor</i> <i>Olenecamptus bilobus nipponensis</i> <i>Pterolophia latefascia</i> <i>Rondibilis elongata elongata</i> <i>Ropica loochooana hayashii</i> 八重山亜種 <i>Sybra ordinata flavostriata</i> <i>Xenolea asiatica</i> |
| ヨコバイ科 オサヨコバイ | Cicadellidae <i>Tartessus ferrugineus</i> | シモフリナガヒゲカミキリ | |
| カメムシ目 カメムシ科 チャバネアオカメムシ | Heteroptera Pentatomidae <i>Plautia crossata</i> | ハムシ科 ダビッドサルハムシ | Chrysomelidae <i>Basilepta davidi</i> |
| コウチュウ目 オサムシ科 アオヘリアトキリゴミムシ ダイミョウツブゴミムシ | Coleoptera Carabidae <i>Parena latecincta</i> <i>Pentagonica daimaiella</i> | ゾウムシ科 ヒラヤマメナガゾウムシ チビコフキゾウムシ sp. | Curculionidae <i>Aclees hirayamai</i> |
| コガネムシ科 サキシマコイチャコガネ ヤノスジコガネ イシガキコアオハナムグリ リュウキュウビロウドコ オキナワコフキコガネ | Scarabaeidae <i>Adoretus formosanus sakishimanus</i> <i>Anomala limbifera yanoi</i> <i>Gametis forticula ishigakiana</i> ガネ先島亜種 <i>Maladera oshimana sakishimana</i> <i>Melolontha masafumii</i> | ハチ目 コシブトハナバチ科 アオスジコシブトハナバチ アカアシセジロクマバチ | Hymenopter Anthophoridae 八重山亜種 <i>Anthophora senahai senahai</i> <i>Xylocopa albinotum</i> |
| コメツキムシ科 シバタチャイロコメツキ クシコメツキ sp. アカホソクシコメツキ タムラハナコメツキ | Elateridae <i>Haterumelater bicarinatus shibatai</i> <i>Melanotus</i> sp. <i>Neodiploconus ferrugineipennis ferrugineipennis</i> <i>Displatynychus adjutor tamurai</i> | ハキリバチ科 シロオビキホリハナバチ | Megachilidae <i>Lithurge collaris</i> |
| ケシキスイ科 アカマダラケシキスイ | Nitidulidae <i>Lasiodactylus pictus</i> | スズメバチ科 オキナワチビアシナガバチ | Vespidae (ヒメアシナガバチ) <i>Ropalidia fasciata</i> |
| テントウムシ科 クリサキテントウ ダンダラテントウ | Coccinellidae <i>Harmonia yedoensis</i> <i>Menochilus sexmaculatus</i> | チョウ目 セセリチョウ科 タイワンアオバセセリ イチモンジセセリ トガリチャバネセセリ ネッタエアカセセリ | Lepidoptera Hesperiidae <i>Badamia exclamationia</i> <i>Parnara guttata</i> <i>Pelopidas anga</i> <i>Telicota colon</i> |
| カミキリモドキ科 カミキリモドキ sp. ヤエヤマホソカミキリモドキ ツマグロランプカミキリモドキ | Oedemeridae <i>Anoxaxis</i> sp. <i>Dryopomera kurosai</i> <i>Eobia chinensis</i> | アゲハチョウ科 ジャコウアゲハ アオスジアゲハ シロオビアゲハ | Papilionidae <i>Byasa alcinous</i> <i>Graphium sarpedon</i> <i>Papilio polytes polycles</i> |
| クチキムシ科 クチキムシ sp. | Alleculidae <i>Allecula</i> sp. | シロチョウ科 ウスキシロチョウ キチョウ | Pieridae <i>Catopsilia pomona</i> <i>Eurema hecabe</i> |
| ゴミムシダマシ科 タカラヒメツノゴミムシダマシ | Tenebrionidae <i>Cryphaeus satoi satoi</i> | シジミチョウ科 クロマダラソテツシジミ ルリウラナシジミ ヤマトシジミ沖縄亜種 ハマヤマトシジミ ヒメシルビア | Lycaenidae <i>Chilades pandava</i> <i>Jamides alecto</i> <i>Pseudozizeeria maha okinawana</i> <i>Zizeeria karsandra</i> <i>Zizina otis</i> |
| カミキリムシ科 サキシマヒメカミキリ | Cerambycidae <i>Ceresium fuscum shirakii</i> | | |

マダラチョウ科
スジグロカバマダラ
オオゴマダラ
リュウキュウアサギマダラ
アサギマダラ

Danaidae
Anosia genutia
Idea leuconoe liukiensis
Ideopsis similis
Parantica sita

タテハチョウ科
イシガケチョウ
リュウキュウムラサキ
ルリタテハ南西諸島亜種
ヒメアカタテハ
アカタテハ

Nymphalidae
Cyrestis thyodamas
Hypolimnas bolina
Kaniska canace ishima
Vanessa cardui
Vanessa indica

スズメガ科
オキナワクロホウジャク
ギンボシスズメ

Sphingidae
Macroglossum corythus platyaxanthum
Parum colligata

新城島（上地）確認動物種リスト

哺乳綱
コウモリ目
オオコウモリ科
ヤエヤマオオコウモリ

Mammalia
Chiroptera
Pteropodidae
Pteropus dasymallus yayeyamae

鯨偶蹄目
ウシ科
ヤギ

Cetartiodactyla
Bovidae
Capra sp.

爬虫綱
有鱗目
トカゲ科
キシノウエトカゲ

Reptilia
Squamata
Scincidae
Plestiodon kishinouyei

ヤモリ科
ホオグロヤモリ

Gekkonidae
Hemidactylus frenatus

ナミヘビ科
サキシママダラ

Colubridae
Dinodon rufozonatum walli

鳥綱（留鳥のみ）
キジ目
キジ科
インドクジャク

Aves
Galliformes
Phasianidae
Pavo cristatus

ハト目
ハト科
リュウキュウキジバト
ズアカアオバト

Columbiformes
Columbidae
Streptopelia orientalis simpsoni
Treron formosae

フクロウ目
フクロウ科
リュウキュウアオバズク

Strigiformes
Strigidae
Ninox scutulata totogo

スズメ目
カラス科
オサハシブトガラス

Passeriformes
Corvidae
Corvus macrorhynchos osai

ヒヨドリ科
イシガキヒヨドリ

Pycnonotidae
Hypsipetes amaurotis stejnegeri

甲殻綱（陸棲のみ）
十脚目
オカヤドカリ科
ヤシガニ
オオナキオカヤドカリ
ムラサキオカヤドカリ
ナキオカヤドカリ

Crustacea
Decapoda
Coenobitidae
Birgus latro
Coenobita brevimanus
Coenobita purpureus
Coenobita rugosus

オカガニ科
オカガニ

Gecarcinidae
Discoplax hirtipes

昆虫綱
カマキリ目
カマキリ科
カマキリ sp. (幼)

Insecta
Mantodea
Mantidae

バッタ目
イナゴ科
モリバッタ (幼体)

Orthoptera
Catantopidae
Traulia ornata ssp.

バッタ科
ショウリョウバッタ
マダラバッタ

Acrididae
Acrida cinerea
Aiolopus thalassinus tamulus

ナナフシ目
ナナフシ科
オキナワナナフシ

Phasmatodea
Phasmatidae
Entoria okinawaensis

カメムシ目
アシトメミズムシ科
アシトメミズムシ (幼体)

Heteroptera
Gelastocoridae
Nerthra macrothorax

サシガメ科
キベリヒゲナガサシガメ

Reduviidae
Euagoras plagiatus

ヒラタカメムシ科
ヒラタカメムシ sp.

Aradidae

ナガカメムシ科
コマダラナガカメムシ

Lygaeidae
Spilostethus hospes

| | | | |
|--|--|---|--|
| ヘリカメムシ科 台湾クモヘリカメムシ ホソヘリカメムシ | Coreidae <i>Leptocorisa oratorius</i> <i>Riptortus clavatus</i> | テントウムシ科 ジュウニマダラテントウ ダンドラテントウ | Coccinellidae <i>Epilachna boisduvali</i> <i>Menochilus sexmaculatus</i> |
| キンカメムシ科 ミヤコキンカメムシ | Scutelleridae <i>Brachyaulax miyakonus</i> | ハナノミ科 ヒメハナノミ sp. | Mordellidae <i>Mordellina</i> sp. |
| カメムシ科 アカスジヘリカメムシ キシモフリクチブトカメムシ チャバネアオカメムシ | Pentatomidae <i>Dasynus coccocinctus</i> <i>Eocanthecona furcellata</i> <i>Plautia crossata</i> | ゴミムシダマシ科 クチキムシ sp. タカラヒメツノゴミムシダマシ ツヤスナゴミムシダマシ サキシマオオニジゴミムシダマシ ヤエヤマオオスナゴミムシダマシ リュウキュウスナゴミムシダマシ | Tenebrionidae <i>Allecula</i> sp. <i>Cryphaeus satoi satoi</i> <i>Diphyrrhynchus iriomotensis</i> <i>Euhemicera sakishimensis</i> <i>Gonocephalum kondoi</i> <i>Gonocephalum okinawanum</i> |
| コウチュウ目 オサムシ科 オオアオモリヒラタゴミムシ キボシマメゴモクムシ | Coleoptera Carabidae <i>Colpodes buchanani</i> <i>Stenolophus smaragdulus</i> | コムシ科 コムシ sp. カラカネチビキマワリモドキ | <i>Nesocaedius minimus</i> <i>Tetragonomenes palpaloides</i> |
| ハネカクシ科 アオバアリガタハネカクシ | Staphylinidae <i>Paederus fuscipes</i> | カミキリムシ科 サキシマヒメカミキリ ハテルマヨナグニゴマフカミキリ イツホシシロカミキリ ヤエヤマカスリドウボソカミキリ フタホシサビカミキリ ハヤシサビカミキリ アヤモンチビカミキリ八重山亜種 イシガキタイワンチビカミキリ | Cerambycidae <i>Ceresium fuscum shirakii</i> <i>Mesosa yonaguni kashiwaii</i> <i>Olenecamptus bilobus nipponensis</i> <i>Pothyne variegata yayeyamana</i> <i>Ropica honesta</i> <i>Ropica loochooana hayashii</i> <i>Sybra ordinata flavostriata</i> <i>Sybra pascoei ishigakii</i> |
| コガネムシ科 リュウキュウスジコガネ ヤノスジコガネ イシガキコアオハナムグリ チビビロウドコガネ サキシマビロウドコガネ | Scarabaeidae <i>Anomala cpustulatus cpustulatus</i> <i>Anomala limbfuera yanoi</i> <i>Gametis forticula ishigakiana</i> <i>Maladera nitidiceps</i> <i>Maladera oshimana sakishimana</i> | ダエンマルトゲムシ科 リュウキュウダエンマルトゲムシ | Chelonariidae <i>Chelonarium ohbayashii</i> |
| コメツキムシ科 ウラベチビコメツキ タムラハナコメツキ シバタチャイロコメツキ オキナワホソコメツキ クシコメツキ sp. | Elateridae <i>Babadrasteriu urabensis</i> <i>Displatynychus adjutor tamurai</i> <i>Haterumelater bicarinatus shibatai</i> <i>Ludioshima okinawensis</i> <i>Melanotus</i> sp. | ハムシ科 フタイロウリハムシ ウリハムシ コガタカメノコハムシ レモントビハムシ オキナワイモサルハムシ リュウキュウツツハムシ基亜種 | Chrysomelidae <i>Aulacophora bicolor</i> <i>Aulacophora indica</i> <i>Cassida vespertina</i> <i>Clitea metallica</i> <i>Colasposoma auripenne</i> <i>Cryptocephalus loochooensis loochooensis</i> <i>Lacoptera quadrimaculata</i> <i>Luperomorpha birmanica</i> <i>Zeugophora flavonotata</i> |
| ベニボタル科 ヤエヤマハナボタル ヤエヤマキベリクロハナボタル ヤエヤマベニハナボタル | Lycidae <i>Plateros ignius</i> <i>Plateros rufomarginatus</i> <i>Plateros yayeyamanus</i> | カッコウムシ科 台湾ナガッコウムシ | Cleridae <i>Opilo formosanus</i> |
| ナガシンクイムシ科 キアシツヤナガシンクイ | Bostrychidae <i>Xylothrips flavipes</i> | キクイムシ科 キクイムシ sp. | Scolytidae <i>Xyleborus</i> sp. |
| ジョウカイモドキ科 ヒメジョウカイモドキ sp. シリトゲヒメジョウカイモドキ | Melyridae <i>Attalus</i> sp. <i>Sternodeattalus chujoi</i> | | |

| | | | |
|--|--|---|--|
| ハチ目 アナバチ科 フジジガバチ | Hymenopter Sphecidae <i>Ammophila atripes formosana</i> | ナミヘビ科 サキシママダラ | Colubridae <i>Dinodon rufozonatum walli</i> |
| チョウ目 セセリチョウ科 タイワンアオバセセリ | Lepidoptera Hesperiidae <i>Badamia exclamationia</i> | クサリヘビ科 サキシマハブ | Viperidae <i>Protobothrops elegans</i> |
| アゲハチョウ科 シロオビアゲハ | Papilionidae <i>Papilio polytes polycles</i> | 鳥綱 (留鳥のみ) コウノトリ目 サギ科 ムラサキサギ クロサギ ズグロミゾゴイ | Aves Ciconiiformes Ardeidae <i>Ardea purpurea</i> <i>Egretta sacra</i> <i>Gorsachius melanolophus</i> |
| シロチョウ科 ナミエシロチョウ タイワンキチョウ | Pieridae <i>Appias pauline</i> <i>Eurema blanda arsakai</i> | キジ目 キジ科 インドクジャク | Galliformes Phasianidae <i>Pavo cristatus</i> |
| シジミチョウ科 タイワンクロボシシジミ ヤマトシジミ沖縄亜種 | Lycaenidae <i>Megisba malaya sikkima</i> <i>Pseudoizeeria maha okinawana</i> | ツル目 クイナ科 シロハラクイナ | Gruiformes Rallidae <i>Amaurornis phoenicurus</i> |
| マダラチョウ科 スジグロカバマダラ オオゴマダラ リュウキュウアサギマダラ アサギマダラ | Danaidae <i>Anosia genutia</i> <i>Idea leuconoe liukuensis</i> <i>Ideopsis similis</i> <i>Parantica sita</i> | ハト目 ハト科 リュウキュウキジバト | Columbiformes Columbidae <i>Streptopelia orientalis stimpsoni</i> |
| タテハチョウ科 ルリタテハ南西諸島亜種 | Nymphalidae <i>Kaniska canace ishima</i> | スズメ目 ヒヨドリ科 イシガキヒヨドリ | Passeriformes Pycnonotidae <i>Hypsipetes amaurotis stejnegeri</i> |
| ヒトリガ科 ハイイロヒトリ | Arctiidae <i>Cretonotos transiens vacillans</i> | ツグミ科 イソヒヨドリ | Turdidae <i>Monticola solitarius</i> |
| クモ綱 サソリ目 キョクトウサソリ科 マダラサソリ | Arachnida Scorpionida Buthidae <i>Isometrus maculatus</i> | メジロ科 リュウキュウメジロ | Zosteropidae <i>Zosterops japonicus loochooensis</i> |
| | | スズメ科 スズメ | Passeridae <i>Passer montanus</i> |
| | | カラス科 オサハシブトガラス | Corvidae <i>Corvus macrorhynchos osai</i> |

黒島確認動物種リスト

| | | | |
|--------------------------------|--|--|---|
| 両生綱 ヌマガエル科 サキシマヌマガエル | Amphibia Dicroglossidae <i>Fejervarya sakishimensis</i> | 甲殻綱 (陸棲のみ) 十脚目 オカヤドカリ科 ヤシガニ オオナキオカヤドカリ オカヤドカリ ナキオカヤドカリ | Crustacea Decapoda Coenobitidae <i>Birgus latro</i> <i>Coenobita brevimanus</i> <i>Coenobita cavipes</i> <i>Coenobita rugosus</i> |
| 爬虫綱 有鱗目 トカゲ科 キシノウエトカゲ | Reptilia Squamata Scincidae <i>Plestiodon kishinouyei</i> | オカガニ科 オカガニ | Gecarcinidae <i>Discoplax hirtipes</i> |
| ヤモリ科 ミナミヤモリ ホオグロヤモリ | Gekkonidae <i>Gekko hokouensis</i> <i>Hemidactylus frenatus</i> | | |

| | | | |
|------------------|--------------------------------------|-------------------------------|--|
| イワガニ科 カクレイワガニ | Grapsidae <i>Geograpsus grayi</i> | カメムシ科 ウシカメムシ チャバネアオカメムシ | Pentatomidae <i>Alcimocoris japonensis</i> <i>Plautia crossata</i> |
| 昆虫綱 | Insecta | コウチュウ目 | Coleoptera |
| トンボ目 | Odonata | オサムシ科 | Carabidae |
| トンボ科 | Libellulidae | ムネミゾマルゴミムシ | <i>Caelostomus picipes japonicus</i> |
| ハラボソトンボ | <i>Orthetrum sabina sabina</i> | アトモンアオゴミムシ | <i>Chlaenius bioculatus</i> |
| ウスバキトンボ | <i>Pantala flavescens</i> | ヒロアオヘリホソゴミムシ | <i>Drypta lineola virgata</i> |
| ヒメハネビロトンボ | <i>Tramea transmarina yayeyamana</i> | イハゴモクムシ | <i>Harpalus ihai</i> |
| ゴキブリ目 | Blattaria | ニセクロゴモクムシ | <i>Harpalus simplicidens</i> |
| ゴキブリ科 | Blattidae | ヒラタアトキリゴミムシ | <i>Parena cavipennis</i> |
| コワモンゴキブリ | <i>Periplaneta australasiae</i> | カラカネゴモクムシ | <i>Platymetopus flavilabris</i> |
| マルゴキブリ科 | Perisphaeridae | キボシマメゴモクムシ | <i>Stenolophus smaragdulus</i> |
| ヒメマルゴキブリ | <i>Trichoblatta pygmaea</i> | ガムシ科 | Hydrophilidae |
| カマキリ目 | Mantodea | ナガトゲバゴマフガムシ | <i>Berosus elongatulus</i> |
| カマキリ科 | Mantidae | ケシガムシ sp | <i>Cercyon sp.</i> |
| ハラビロカマキリ | <i>Hierodula patellifera</i> | ハネカクシ科 | Staphylinidae |
| バッタ目 | Orthoptera | スオアコガシラハネカクシ | <i>Philonthus notabilis</i> |
| クツワムシ科 | Mecopodidae | アカバケビフトハネカクシ | <i>Pinophilus rufipennis</i> |
| タイワンクツワムシ | <i>Mecopoda elongata</i> | コガネムシ科 | Scarabaeidae |
| イナゴ科 | Catantpidae | シナコイチャコガネ | <i>Adoretus sinicus</i> |
| タイワンハネナガイナゴ | <i>Oxya chinensis</i> | サキシマアオドウガネ | <i>Anomala albopilosa sakishimana</i> |
| セグロイナゴ | <i>Shirakiacris shirakii</i> | リュウキュウスジコガネ | <i>Anomala cpustulatus cpustulatus</i> |
| イシガキモリバッタ | <i>Traulia ornata ishigakiensis</i> | ウスチャマゲソコガネ | <i>Aphodius marginellus</i> |
| バッタ科 | Acrididae | ウスイロマゲソコガネ | <i>Aphodius sublimbatus</i> |
| ショウリョウバッタ | <i>Acrida cinerea</i> | フチケマゲソコガネ | <i>Aphodius urostigma</i> |
| マダラバッタ | <i>Aiolopus thalassinus tamulus</i> | ヤエヤマニセツツマゲソコガネ | <i>Ataenius picinus</i> |
| ヨコバイ目 | Homoptera | オキナワコアオハナムグリ石垣、西表亜種 | <i>Gametis forticula ishigakiana</i> |
| セミ科 | Cicadidae | ヤエヤマビロウドコガネ | <i>Maladera japonica yaeyamana</i> |
| ヤエヤマクマゼミ | <i>Cryptotympana yayeyamana</i> | オオマルビロウドコガネ | <i>Maladera opima</i> |
| イワサキゼミ | <i>Meimuna iwasakii</i> | リュウキュウビロウドコガネ先島亜種 | <i>Maladera oshimana sakishimana</i> |
| カメムシ目 | Heteroptera | アカマダラエンマコガネ | <i>Onthophagus lutosopictus</i> |
| ナガカメムシ科 | Lygaeidae | ムラサキエンマコガネ | <i>Onthophagus murasakianus</i> |
| ヒメマダラナガカメムシ | <i>Graptostethus servus</i> | マルエンマコガネ | <i>Onthophagus viduus</i> |
| コマダラナガカメムシ | <i>Spilostethus hospes</i> | フチトリアツバコガネ | <i>Phaeochrous emarginatus emarginatus</i> |
| ホシカメムシ科 | Pyrrhocoridae | イシガキシロテンハナムグリ | <i>Protaetia ishigakia ishigakia</i> |
| ズグロシロジュウジホシカメムシ | <i>Dysdercus decussatus</i> | タマムシ科 | Buprestidae |
| ヘリカメムシ科 | Coreidae | キボシフナガタタマムシ | <i>Acmaeodera luzonica</i> |
| タイワンクモヘリカメムシ | <i>Leptocoris saoratorius</i> | コメツキムシ科 | Elateridae |
| ホソヘリカメムシ | <i>Riptortus clavatus</i> | サキシマシロモンサビキコリ | <i>Agrypnus scutellaris hamai</i> |
| キンカメムシ科 | Scutelleridae | シバタチャイロコメツキ | <i>Haterumelater bicarinatus shibatai</i> |
| ミヤコキンカメムシ | <i>Brachyaulax miyakonus</i> | クロサビコメツキ | <i>Lacon churakagi</i> |
| | | ニセコナガコメツキ | <i>Neopenthes pallidihumeralis</i> |
| | | カデサホソキコメツキ | <i>Procaerus kadesanus</i> |

| | | | |
|--|--|--|---|
| ホタル科 オオシママドボタル | Lampyridae <i>Pyrocoelia atripennis</i> | ギンネムヒゲナガゾウムシ | <i>Araecerus levipennis</i> |
| ナガシクイムシ科 キアシツヤナガシクイ | Bostrychidae <i>Xylothrips flavipes</i> | ゾウムシ科 ケニヨシトゲトゲゾウムシ オキナワクワゾウムシ チビアオゾウムシ | Curculionidae <i>Colobodes kuniyoshii</i> <i>Episomus mori</i> <i>Hyperstylus pallipes</i> |
| カッコウムシ科 タイワンナガッコウムシ | Cleridae <i>Opilo formosanus</i> | ハチ目 コシブトハナバチ科 アオスジコシブトハナバチ八重山亜種 アカアシセジロクマバチ | Hymenoptera Anthophoridae <i>Anthophora senahai senahai</i> <i>Xylocopa albinotum</i> |
| ケシキスイ科 アカマダラケシキスイ | Nitidulidae <i>Lasiodactylus pictus</i> | ツチバチ科 ツチバチ sp. | Scoliidae <i>Scolia sp.</i> |
| テントウムシ科 ナナホシテントウ ダンダラテントウ ハイイロテントウ | Coccinellidae <i>Coccinella septempunctata</i> <i>Menochilus sexmaculatus</i> <i>Olla v-nigrum</i> | ベッコウバチ科 シランオオベッコウ | Pompilidae <i>Cyphononyx iridipennis</i> |
| ハナノミ科 キラホシハナノミ | Mordellidae <i>Hoshihananomia kirai</i> | アナバチ科 キゴシジガバチ八重山亜種 クロアナバチ | Sphecidae <i>Sceliphron madraspatanum formosanus</i> |
| ゴミムシダマシ科 ニジマルキマワリ ヒメオオニジゴミムシダマシ サキシマオオニジゴミムシダマシ | Tenebrionidae <i>Amarygmus callichromus</i> <i>Euhemicera hajimei</i> <i>Euhemicera sakishimensis</i> | スズメバチ科 キアシナガバチ オキナワチビアシナガバチ (ヒメアシナガバチ) ツマゲロスズメバチ | Vespidae <i>Polistes rothneyi</i> <i>Ropalidia fasciata</i> <i>Vespa affinis</i> |
| コマルチビゴミムシダマシ ヨツノチビゴミムシダマシ スナゴミムシダマシ sp. | <i>Nesocaedius minimus</i> <i>Pentaphyllus quadricornis</i> | チョウ目 セセリチョウ科 タイワンアオバセセリ トガリチャバネセセリ | Lepidoptera Hesperiidae <i>Badamia exclamationia</i> <i>Pelopidas anga</i> |
| カミキリムシ科 ヨスジシラホシサビカミキリ ニセフトガタヒメカミキリ ハテルマヨナグニゴマフカミキリ イツホシシロカミキリ イシガキキボシカミキリ ハヤシサビカミキリ アトモンチビカミキリ先島亜種 アヤモンチビカミキリ八重山亜種 | Cerambycidae <i>Apomecyna histrio histrio</i> <i>Ceresium unicolor pseudounicolor</i> <i>Mesosa yonaguni kashiwaii</i> <i>Olenecamptus bilobus nipponensis</i> <i>Psacothoa hilaris ishigakiana</i> <i>Ropica loochooana hayashii</i> <i>Sybra mimogeminata</i> <i>Sybra ordinata flavostriata</i> | アゲハチョウ科 ジャコウアゲハ アオスジアゲハ シロオビアゲハ | Papilionidae <i>Byasa alcinous</i> <i>Graphium sarpedon</i> <i>Papilio polytes polycles</i> |
| シモフリナガヒゲカミキリ ヤエヤマムネマダラトラカミキリ | <i>Xenolea asiatica</i> <i>Xylotrechus grayii yaeyamanus</i> | シロチョウ科 ナミエシロチョウ ウスキシロチョウ タイワンキチョウ キチョウ ツマベニチョウ モンシロチョウ | Pieridae <i>Appias paulina</i> <i>Catopsilia pomona</i> <i>Eurema blanda</i> <i>Eurema hecabe</i> <i>Hebomoia glaucippe</i> <i>Pieris rapae</i> |
| ハムシ科 フタイロウリハムシ モモフトサルハムシ ヨツモンタマノミハムシ | Chrysomelidae <i>Aulacophora bicolor</i> <i>Rhyparida sakisimensis</i> <i>Sphaeroderma quadrimaculatum</i> | シジミチョウ科 クロマダラソテツシジミ オジロシジミ ルリウラナミシジミ ウラナミシジミ | Lycaenidae <i>Chilades pandava</i> <i>Enchrysops cnejus</i> <i>Jamides alecto</i> <i>Lampides boeticus</i> |
| ヒゲナガゾウムシ科 ワタミヒゲナガゾウムシ イシガキヒゲナガゾウムシ | Anthribidae <i>Araecerus fasciculatus</i> <i>Araecerus ishigakiensis</i> | | |

| | |
|-------------|--------------------------------------|
| タイワンクロボシシジミ | <i>Megisba malaya sikkima</i> |
| ヒメウラナミシジミ | <i>Prosotas nora kanoi</i> |
| ヤマトシジミ沖縄亜種 | <i>Pseudozizeeria maha okinawana</i> |
| ヒメシルビア | <i>Zizina otis</i> |
| ホリイコシジミ | <i>Zizula hylax</i> |

| | |
|----------------|---------------------------------|
| マダラチョウ科 | Danaidae |
| オオゴマダラ | <i>Idea leuconoe liukuensis</i> |
| リュウキュウアサギマダラ | <i>Ideopsis similis</i> |
| アサギマダラ | <i>Parantica sita</i> |

| | |
|----------------|------------------------------------|
| タテハチョウ科 | Nymphalidae |
| ツマグロヒョウモン | <i>Argyreus hyperbius</i> |
| ヤエヤマムラサキ | <i>Hypolimnas anomala truentus</i> |
| タテハモドキ | <i>Junonia almana</i> |
| アオタテハモドキ | <i>Junonia orithya</i> |
| ルリタテハ南西諸島亜種 | <i>Kaniska canace ishima</i> |
| リュウキュウミスジ | <i>Neptis hylas</i> |
| アカタテハ | <i>Vanessa indica</i> |

| | |
|--------------|---|
| スズメガ科 | Sphingidae |
| オキナワクロホウジャク | <i>Macroglossum corythus platyxanthum</i> |

鳩間島・新城島（上地）の古墓調査

片桐 千亜紀*・岸本 敬**

Investigation of old tombs in Hatomajima Island and Aragusukujima (Kamiji) Island

Chiaki KATAGIRI* and Takashi KISHIMOTO**

はじめに

戦後、沖縄の墓地の在り方は大きく変化してきている。墓地行政では墓地の拡散化を抑制して土地の有効な活用を目指した合理化を進めようとしている（井口2015）。墓地の立地だけでなく、葬法も火葬の普及によって、風葬や再葬の習俗はほとんど失われてしまったと言っても過言ではないだろう。墓地の整理・統合が進む中、すでに無縁墓となって忘れ去られようとしている古墓も多い。琉球の失われゆく伝統的な葬墓制について、現段階で可能なかぎり記録しておく必要がある。そこで、鳩間島と新城島（上地島）において古墓の分布状況とその形態を中心とした考古学的・民俗学的調査を実施した。鳩間島においては民俗担当と共同で実施し、聞き取り調査にもとづいて墓の調査をするという複合的な調査を試みた。

現地調査は、鳩間島では2013年3月26日（火）・27日（水）の2日間、新城島（上地島）では2013年6月25日（火）・26日（水）・28日（金）の3日間実施した。

鳩間島

1. 聞き取り調査

民俗学的な葬墓制調査を行うため、鳩間島在住の大城安子氏、鳩間島公民館長の通事建次氏より聞き

取りを行った（写真1）。大城安子氏は西表島の古見出身で、1929（昭和4）年2月9日生まれ、聞き取り調査時は84歳になられていた。以下、その内容を記す。

鳩間島では、墓は「パカ山」と呼ばれる丘陵の周囲に砂岩の岩陰を利用した掘り込み墓が張り付くように無数に存在する。鳩間の墓は掘り込みである。近年、墓の他島への移転が進んでおり、空き墓が増えている。また、すでに無縁墓となっているものも多い。

死者がでると家の壁や床板をはずして木棺を製作した。木材をストックすることはなかった。昭和35年前後まで竈を利用して遺体を墓まで葬送したが、最後の人は松竹のオジィだった。竈は2名×4で担いで運ぶ。しかし、昭和40年代から過疎化が



写真1 聞き取り調査風景（左が公民館長の通事健次氏、右が大城安子氏）

※ 〒900-0006 沖縄県おもろまち3-1-1 沖縄県立博物館・美術館

* Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006, Japan.

※※ 〒901-2113 沖縄県浦添市大平1-27-1 沖縄県立大平特別支援学校

** Okinawa Prefectural Ohira special school for disabled children, 1-27-1, Ohira, Urasoe, Okinawa, 901-2113, Japan.



写真2 過去に龕屋があった場所

進み、島内で亡くなる人がいなくなってきたことから、龕は使用されなくなり、朽ちていった。龕は生者にとって怖い存在であったことがこの島でも確認できた。鳩間島の龕は西表島祖納の龕に比べてとても豪華なものだったという記憶が安子氏の脳には鮮明に残されているようで、繰り返し強調しておられた。

その龕は、戦前に石垣島に注文して作った。安子氏の母は、安子氏が西表の祖納に住んでいた時に亡くなり、祖納から帰ってきたときには庭に龕が置いてあり、母が亡くなった事をホントに実感した瞬間であった。また、安子氏の父は龕をととても忌み嫌っていた。龕屋は集落の西のはずれウブマイ（大前）に向かう途中の左側にあった（写真2）。

墓に到着したら、遺体が入った木管を墓内に安置して3・5・7年間の風葬を行う。墓内がまだ使用中（他の遺体の風葬中）だった場合は、地面に埋葬して骨化を行った。洗骨は家族・親族みんなで行い、男女の区別は無かった。骨化後はパナリ焼きの壺や厨子甕に骨を安置、南蛮焼きも利用した。

2. パカ山とウブマイ（大前）の古墓調査

聞き取りによって得られた墓の情報に基づき、現地調査を行った。調査はパカ山と道を挟んで南側に広がるウブマイ（大前）と呼ばれる地域である（図1）。

2-1. パカ山の掘込墓

パカ山の南西側裾で17基の古墓を確認した（図2）。古墓は安子氏からの聞き取りどおりすべて掘込墓であった。

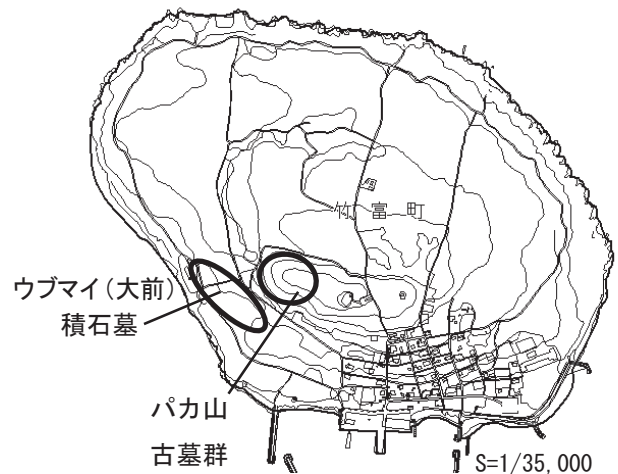


図1 鳩間島の古墓の位置

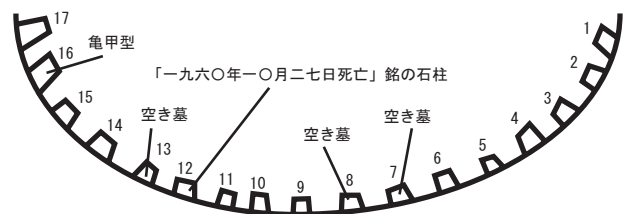


図2 パカ山の掘込墓（崖葬墓）配置

| No. | 位置 | 墓の種類 | 備考 | 座標 |
|-----|------------|------|---------|-------------------------------|
| 1 | パカ山古墓群 | 崖葬墓 | 17基の掘込墓 | N24° 28' 15" E123° 49' 06" |
| 2 | ウブマイのフズマレー | 積石墓 | 未加工の礫 | N24° 28' 11" E123° 49' 05" |

表1 鳩間島の古墓概要

基盤は八重山層群の砂岩層を掘り込んでいと考えられるが、今回、地質担当である仲里の現地調査によって、この砂岩層と連続して八重山変成岩類トムル層も露出していることが示されたため、トムル層も掘り込んでいる可能性がある。墓は簡素な造りであり、図2の1～15までの掘込墓の入口は特に装飾的ではないが（写真3～10）、16は亀甲墓的な（写真11）、17は破風墓的な（写真12）装飾が施されている。

この内、墓7・8・13は入口の蓋石が取り除かれており、空き墓となっていることがわかった（写真5～8・10）。墓7は墓内の奥にわずかな段差を持つ柵を確認することができ（写真6）、墓8は墓内奥壁に垂直に掘り込む際に残されたと考えられる楔状の痕跡が確認できた（写真8）。これらの墓は、安子氏からの聞き取りによって得られた、他の島へ



写真3 パカ山の堀込墓1・2



写真4 パカ山の堀込墓3～5



写真5 パカ山の堀込墓7



写真6 パカ山の堀込墓7 (墓内)



写真7 パカ山の古墓群8



写真8 パカ山の古墓群8 (墓内)



写真9 パカ山の堀込墓9・10



写真10 パカ山の堀込墓12・13



写真11 パカ山の堀込墓16 (亀甲型)



写真12 パカ山の堀込墓17

の移転が行われた墓である可能性が考えられる。

今回注目された点として、17基中、すべての墓が他の島々の一般的な墓と比較しても墓の面積・高さが狭いことがあげられる。鳩間島における墓の規模は極めて小規模だったようだ。調査日程が短く、具体的に数値化することができなかったが、実際に数値化して比較することによってその特色は鮮明になるはずである。このように、小さな墓はすぐにいっぱいになったはずである。そのような場合、どのように骨や蔵骨器を処理していたのか、現地調査では判断することができなかった。また、安子氏からの聞取調査では墓内に風葬中の遺体が安置されていた場合は、他の場所に埋めて骨化させたという。非常事態とはいえ、埋めるという葬法が存在していたことは極めて興味深い。今回の調査ではその場所や方法を特定することができなかった。今後、さらなる考古学的な調査を実施することによって遺体を何処に、そしてどのように埋めていたのかを明らかとする必要がある。

パカ山の古墓群には、パナリ焼きや厨子甕の破片が墓の周囲に多量に散布していた。しかし、南蛮焼は確認されなかった。安子氏は南蛮焼も見られたと言っていたが、沖縄産陶器と南蛮焼を間違えている可能性も考えられる。

2-2. ウブマイ (大前) の石積墓

聞取調査によって、鳩間島には「フズマレー」と呼ばれた石積墓が存在することを聞いた。その場所は、パカ山から道を挟んで南側に点々としているという。その墓がどのように利用される墓だったのか、当時すでに使用していなかったためにわからないということであった。しかし、墓であると伝わっていたという。

フズマレーの実態を確認するため所在確認の調査を行ったが、その場所は密林が生い茂っており、明確に判断することができなかった。しかし、未加工の石灰岩を乱雑に積み上げたマウンドを何か所かで確認できたため、フズマレーとはこれのことを指している可能性があるが(写真13)、墓を決定づける遺物等が確認できなかったため、今後の課題とする。



写真13 ウブマイの石積墓?

新城島

新城島は上地島と下地島に分かれており、現在、上地島には人が住んでおり祭祀も行われているが、下地島は無人島となっている。両島とも現在では手つかずの密林の中に中世以来の石積集落跡が保存状態良好に残されており、土器や陶磁器、貝類等当時の遺物が散乱する。近年、竹富町教育委員会によ

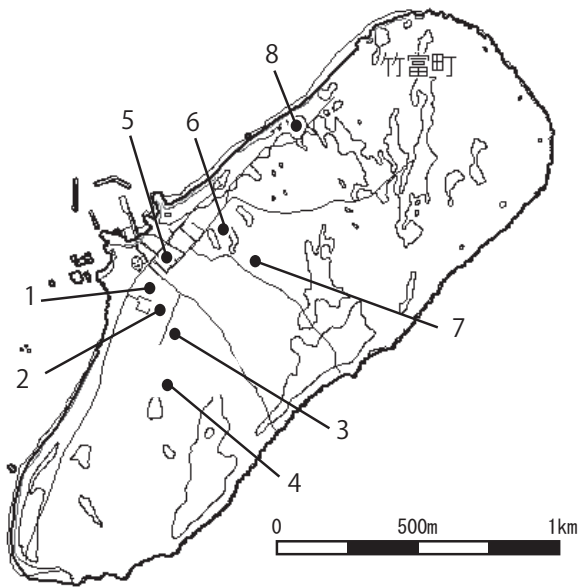


図3 新城島（上地島）の古墓分布

て竹富町史が刊行されており、考古分野では島袋綾野氏によって現地調査を含めた詳細がまとめられている（島袋2013）。このため、考古分野では上地島の古墓の状況について報告する。

1. 古墓群の位置

上地島では集落南側、集落内、集落東側、ボンヤマー遺跡周辺の4ヶ所で古墓群が確認できた（図3）。その形態的特徴と数は崖葬墓2基、石積墓10基、亀甲墓2基があり、墓に利用する石材を切り出した跡1ヶ所や、聞き取りによると風葬場跡1ヶ所も確認できた（表2）。

2. 集落南側の古墓群

集落の南側には緊急時用のヘリポートがあり、その周辺の密林の中に古墓群が存在する。今回確認できた古墓は石積墓4基、亀甲墓1基である。

2-1. No.1の古墓

まず、ヘリポート北側で確認された石積墓1（写真14）である。平面方形を呈し、ピラミッド状の2段構造からなり1段目は石灰岩の自然礫を積み上げ、2段目はビーチロックを方形に加工した直方体の石材を2～3列丁寧に積んでいる（写真15）。方形に加工された石材が積まれた2段目の規模は縦250cm×横335cm×高60cmを測る。1段目は深い

| No. | 位置 | 墓の種類 | 備考 | 座標 |
|-----|---------|------|-------------|-----------------------------------|
| 1 | 集落南エリア | 石積墓1 | ヘリポート北側 | N24° 14' 02.2" E123° 56' 25.7" |
| 2 | 集落南エリア | 石積墓2 | ヘリポート東側 | N24° 14' 01.3" E123° 56' 27.2" |
| | 集落南エリア | 石積墓3 | ヘリポート東側 | " |
| 3 | 集落南エリア | 石積墓4 | | N24° 13' 54.0" E123° 56' 28.4" |
| 4 | 集落南エリア | 亀甲墓1 | | N24° 14' 00.4" E123° 56' 29.9" |
| 5 | 集落内 | 石積墓5 | インチケーの墓 | N24° 14' 05.4" E123° 56' 28.5" |
| 6 | 集落東エリア | 崖葬墓1 | | N24° 14' 09.5" E123° 56' 36.4" |
| | 集落東エリア | 崖葬墓2 | | " |
| 7 | 集落東エリア | 亀甲墓2 | | N24° 14' 08.0" E123° 56' 36.5" |
| | 集落東エリア | 石積墓6 | | " |
| | 集落東エリア | 風葬場跡 | | " |
| | 集落東エリア | 石切場跡 | | " |
| 8 | ボンヤマー遺跡 | 石積墓7 | ボンヤマー遺跡陸側入口 | N24° 14' 20.2" E123° 56' 44.6" |
| | ボンヤマー遺跡 | 石積墓8 | ボンヤマー遺跡陸側入口 | " |
| | ボンヤマー遺跡 | 石積墓9 | ボンヤマー遺跡陸側入口 | " |

表2 新城島（上地島）の古墓概要

樹木に覆われて観察することすら困難な状況であった。墓の周囲にはパナリ焼きの壺や壺屋焼の散乱が見られた。



写真14 樹木に覆われる石積墓1



写真15 2種の石材利用の石積墓1

2-2. No.2の古墓

ヘリポート東側で2基の石積墓2・3が確認された。石積墓2は石灰岩の自然礫を積み上げており、方形を志向しているようにもみえる。天井部はビーチロックと考えられる方形の板石を乗せて蓋としている（写真16）。石積墓の規模は縦240cm×横210cm×高90cm、天井石の規模は縦160cm×横150cm×厚20cmを測る。墓には壺屋焼の急須の散乱が見られる。

石積墓3は石灰岩の自然礫及びテーブルサンゴを利用して積み上げているが、石積墓2のように天井の板は見られない（写真17）。石積墓の規模は縦190cm×横190cm×高70cmを測り、正方形を志向しているようだ。白化粧された沖縄産施釉陶器碗の散乱が見られる。



写真16 ヘリポート東側の石積墓2
(樹木に覆われ、形態を確認するもの困難)



写真17 ヘリポートの東の石積墓3

2-3. No.3の古墓群

No.2の古墓群よりさらに東、島の中央部を縦断する道の東側の密林内で亀甲墓1が確認された（写

真18)。平地を利用し石を積み上げるのみで構築しており、1基の独立した墓となっている。沖縄本島などでは、岩陰や丘陵を利用して亀甲墓を構築することが多いため、上地島におけるこのような亀甲墓の有り方は島独特の変化なのかもしれない。正面部分は砂岩を丁寧に切り出した直方体の石材を利用して積み上げており（写真19）、後背部は石灰岩の自然礫を利用して積み上げている（写真20）。石の加



写真18 亀甲墓1



写真19 亀甲墓1の正面



写真20 亀甲墓1の後背部分

工や積み方も丁寧であり高度な技術を駆使して構築された墓であることがわかる。墓口が空いており、周辺には多量の厨子甕や壺などの沖縄産陶器が散乱しているため（写真21）、すでに墓の移転が行われていると考えられる。



写真21 散乱する厨子甕や陶器

2-4. No.4の古墓

No.3の古墓群よりさらに南側の密林内で石積墓4が確認された。墓の中心には1本のガジュマルが生い茂っており、墓を包むように根が張り巡らされている（写真22）。形態的特徴は石積墓1と似ており、平面方形を呈し、ピラミッド状の2段構造からなる。1段目は石灰岩の自然礫を2列に積み上げているが、2段目はビーチロックを丁寧に切り出して加工した直方体の石材を3列に積み上げている。2段目の正面に墓口があり、やはりビーチロックを切り出して薄く加工した石材を立てて蓋としている（写真23）。

石積墓の規模は1段目が縦440cm×横410cm



写真22 ガジュマルに覆われる石積墓4



写真23 石積墓4の正面

×高90cm、2段目が縦310cm×横300cm×高60cmと大型であり、今回上地島で確認された石積墓の中では最大規模を測る。周辺にはパナリ焼きの壺や香炉、沖縄産施釉陶器の瓶、沖縄産無釉陶器の壺の散乱が見られた。

3. 集落内の古墓

3-1. No.5の古墓

「インチケーの墓」として知られるのが集落内にある石積墓5である（沖縄県教育委員会1980）。平面方形の石積墓で、石の積方から2段構造と呼べる。1段目は直方体に加工された石材を1列並べ、2段目以降は石灰岩の自然礫を積み上げて構築している（写真24）。この島でこれまで確認された2段構造の石積墓は2段のピラミッド状を呈しており、1段目に自然礫の石灰岩やテーブル珊瑚を、2段目に直方体に加工した石材を積み上げている。しかし、インチケーの墓はピラミッド状を呈しておらず、さらに、自然礫と直方体に加工された石材の積方が逆となっている点は特殊な事例である。天井部分にはビーチロックを切り出して薄く加工した板石を利用して天井石としている（写真25）。石積墓の規模は縦200cm×横200cm×高80cm、天井石の規模は縦55cm×横70cm×厚10cmを測る。

墓周辺には沖縄産施釉陶器の碗や瓶・香炉、沖縄産無釉陶器の瓶や壺、パナリ焼き、小さなヤコウガイ（写真26）やシャコガイ、イノシシ下顎骨（写真27）が散乱している。



写真24 インチケーの墓（石積墓5）



写真25 天井部



写真26 散乱するヤコウガイ・沖縄産陶器・土器



写真27 イノシシの下顎骨

4. 集落東側の古墓群

集落の東側では2カ所の古墓群を確認した。集落の北から中央部へと向かう道沿いにある崖葬墓と集落の中央部から東海岸へ向かう道沿いにある亀甲骨、石積墓、風葬場跡、石切場跡である。

4-1. No.6の古墓群

崖葬墓を2基確認した。石灰岩の岩陰を利用したもので、2基並んでいる。墓の前面には石灰岩の自然礫を多量に利用して石積で囲いをしている（写真28）。西側の崖葬墓1は墓口にビーチロックを切り出した板石を利用していただいよう、現在は倒れた状態で入口が空いていた（写真29）。すでに移転が行われているようであった。幅230cm×奥160cm×高60cmを測る。東側の崖葬墓2は墓口としてテーブル珊瑚を利用して入口を閉じている（写真30）。幅190cm×奥70cm×高70cmを測る。周辺にはパナリ焼きの壺破片、シャコガイやティラジャーの散乱が見られる。



写真28 2基並ぶ岩陰墓（崖葬墓）



写真29 岩陰墓1



写真30 岩陰墓2



写真31 2基の入口を持つ亀甲墓2

4-2. No. 7の古墓群

集落中央部から島を横断し、東海岸へ抜ける道沿いから北へ向かってやや離れた密林の中で古墓群が確認された。確認された古墓は亀甲墓1基、石積墓1基、風葬場1基、石切場跡1ヶ所である。

亀甲墓2はNo.3の古墓群で確認された亀甲墓1と似ており、平地に石を積んで墓を構築している。ただし、入口は2カ所設けられている(写真31)。墓の前面部は直方体に丁寧に切り出した石や自然礫を利用して積み上げており、漆喰で丁寧に塗装されている。後背部は自然礫を利用して積み上げている。墓口は空いており、周辺には厨子甕のまとまった散乱が見られることから(写真32)、墓の移転が終わっているものと考えられる。散乱した厨子甕蓋の銘書には「明治四年十一月」が見られることから(写真33)、墓の移転はそれ以後であり、この墓が明治時代まで使用されていたことがわかる。



写真32 亀甲墓2に散乱する厨子甕

石積墓6は平面方形を志向しており、石灰岩の自然礫やテーブル珊瑚等を利用して構築されている(写真34・35)。天井の蓋が空いた状態で確認された(写真36)。墓内には中国清朝の青花皿が残されていた(写真37)。

その他、西泊宏信氏からの聞き取り調査によって「風葬場であった」と言われている場所が確認できた(写真38)。露出した石灰岩を利用しつつ、方形の凹地に自然礫を並べているように見える。

さらに、石灰岩を直方体に切り出した石切場跡が確認された(写真39)。これらは墓の石材として利用された場所であろう。このエリアはまだ多くの墓やそれに関連した施設が存在すると思われるが、樹木の繁殖が特に激しいエリアとなっており、容易に周囲の状況を確認することができなかった。



写真33 厨子の蓋の銘書



写真34 石積墓6



写真35 石積墓6の側面



写真39 石切場跡



写真36 石積墓6の墓内



写真37 副葬品の清朝青花碗



写真38 風葬場跡

5. ポンヤマー遺跡陸側入口の古墓群

ポンヤマー遺跡へ陸側から入る場所で3基の石積墓7～9を確認した。

石積墓7は方形を志向しており、自然礫や直方体に切り出した石材を利用して石を積んでいる。この墓を中心にガジュマルが生い茂っており、その根は墓全体を覆っている(写真40)。

石積墓8・9は2基並んで構築されている(写真41)。2基ともに石灰岩の自然礫を利用して石を積み上げており、方形を志向しているように見える。石積墓8はやや小型で、天井部はテーブル珊瑚を



写真40 ガジュマルに覆われる石積墓7

利用して蓋石としている（写真42）。墓の規模は縦170cm×幅190cm×高70cmを測り、蓋石として
いるテーブル珊瑚は縦60cm×横80cmを測る。石
積墓9は石積墓8よりは大型で、天井部はビーチ
ロックを切り出した板石を利用して蓋石としている
（写真43）。縦330cm×横350cm×高80cmを測り、
蓋石としているビーチロックの板石は縦200cm×
横210cmを測る。

周辺にはパナリ焼き、厨子甕、荒焼の壺や沖縄産
施釉陶器の瓶が散乱している（写真44～46）。



写真44 散乱する厨子甕



写真41 2基並ぶ石積墓8・9



写真45 散乱する沖縄産陶器の壺



写真42 石積墓8と蓋石に利用されたテーブルサンゴ



写真43 石積墓9と蓋石に利用されたビーチロック

まとめと課題

鳩間島及び新城島（上地島）の古墓の分布状況に
ついて形態的特徴を中心に調査した。

鳩間島ではパカ山と呼ばれる丘陵の裾部を利用し
た堀込墓（崖葬墓）が多数存在し、平地では自然礫
を使用した石積墓が存在する可能性があることがわ
かった。堀込墓は沖縄島などで確認されるものと比
べてその規模がかなり小さい。今後、入口や墓内の
大きさなどを数値化してその特殊性をより明らかに
する必要がある。また、聞取調査によって石積墓
が存在する情報を得たが、現地では自然礫のマウン
ドを確認したものの、骨や遺物の散布を認めること
ができず、確証を得ることができなかった。鳩間島
にも石積墓の墓制が存在したのか、今後の課題であ
る。

新城島（上地島）では、石積墓、亀甲墓、岩陰墓
（崖葬墓）、風葬跡を確認した。石積墓は自然礫やテー
ブル珊瑚等を利用したものや、さらに、直方体に切

り出した石材を利用して墓を構築したもの、その規模も大型のものや小型のものが存在し、バリエーションがあることがわかった。亀甲墓もあるが、それは、沖縄島等で見られるように丘陵や岩陰を利用したものではなく、平地に石を積んで構築している点で特異な形態であった。正面部分には直方体に切り出した石材を利用して丁寧に仕上げられており、後背部分は自然礫を利用していることなど、興味深い。石積墓は先島諸島でよく確認される墓制であり、沖縄島とは異なっている。亀甲墓の構築方法もこの石積墓からの延長線上で考えられるのかもしれない。今回の調査では石積墓の存在が目立ったが、風葬と再葬を行う岩陰墓（崖葬墓）も存在することは注意が必要である。

先島に一般的に見られる石積墓の存在や、鳩間島における小規模な堀込墓、新城島における平地に構築された亀甲墓の存在のように、近世期の琉球王国時代ではそれぞれの島によって独特の墓制が現れていた可能性がある。

墓の移転や墓地整理によって、琉球王国時代以来の葬墓制やその記憶が失われつつある現状を考えると、今後、考古学・民俗学・形質人類学等の総合的に詳細な古墓の調査を行う事によって、島々単位の独特の葬墓制を明らかにし、記録していくことが必要であろう。

謝 辞

鳩間島では、大城安子氏、公民館長の通事建次氏から、新城島ではパナリ観光の西泊宏信氏から、竹富町教育委員会では仲盛敦氏、石垣市教育委員会では島袋綾野氏より島の葬墓制や古墓の情報をいただいた。記して感謝申し上げます。

参考文献

- 井口学, 2015, コラム 8 戦後の墓地行政について, 沖縄県立博物館・美術館 (編) 『琉球弧の葬墓制—風とサンゴの甲い』, pp. 41.
- 島袋綾野, 2013, 第 1 節 歴 (原) 史時代の村落と島民, 竹富町史編纂委員会 (編) 『竹富町史 第 5 巻 新城島』, 竹富町, pp. 77-95.

沖縄県教育委員会, 1980, 『竹富町・与那国町の遺跡—詳細分布調査報告書—』.

伝説の土器・パナリ焼を探る

山崎 真治*

An archaeological study of the Panari-yaki pottery in the recent Aragusukujima Island

Shinji YAMASAKI*

1 はじめに

^{あらぐすく}新城島の産物として、ジュゴンとパナリ焼は夙に著名である。しかし、それらに関する従来の知識は、主に文献記録や古謡、伝承にもとづくもので、具体的なモノにもとづいた調査研究の蓄積はほとんどない。本稿では、このうち特にパナリ焼について、主に考古学的観点から検討を加え、その製作、使用の実態について考察を加える。

新城島ではこれまで考古学的調査が実施されたことはないが、パナリ焼は八重山諸島の近世遺跡からしばしば出土し、各地に流通していたことが知られている。従来の知見によれば、パナリ焼は17世紀(?)から19世紀にかけて、新城島で製作されていたとされる素焼きの土器で、黒島や竹富島にはパナリ焼に関する古謡も伝わっている。パナリ焼について、『沖縄大百科事典』では以下のように述べられている(新城1983)。

竹富町新城島で1857年(尚泰10)ごろまで造られていた土器質の焼物。新城島をパナリと呼ぶところからこの名称がある。その起源は明らかでないが、一説によると、昔、中国人が新城島に漂着してその技法を伝えたといわれる。その製法は一種独特で、蔓草やタブノキの粘液を土に混ぜて捏ねあわせ、^{ろく}轆轤を使わずに、手びねりで成形し、さらに、^{かたつむり}蝸牛や貝肉の粘液をすり塗って形を整え、露天でカヤヤス

スキの火で焼き上げたといわれる。現存するパナリ焼からみると、日用容器のほとんどが作られており、王府時代は貢物として認められていたようである。パナリ焼は稚拙でもろく、特別に意匠をこらしたり、装飾文様を施すなどはまれであり、ほとんどが無文である。それだけにフォルムは豊かで逞しく素朴な美しさをもつ。パナリ焼に関する民謡・古謡として<仲筋ぬヌベーマ><パナリ焼アヨー>が竹富島に、<パナリチィチィアーミュンタ>が黒島に伝えられている。

しかし、一般に流布している蔓草やタブノキの粘液、蝸牛や貝肉の粘液を加えるという製法については、具体的な物証があるわけではなく、明確な文献記録が残されているわけでもない。また、パナリ焼は新城島の産物として著名であるが、実際に新城島で製作されたのか、はたまた新城島で産する原料から製作されたのかといった、具体的な製作の様子については明確な証拠が知られていない。ただし、新城島にはパナリ焼の焼成施設の跡が残されていたとする資料もあるようなので、そうであれば、新城島で焼かれたことになる。

パナリ焼は、1970年代から80年代にかけて特に骨董品の分野で人気を集め、^{ずし}蔵骨器(厨子)として墓に納められていた遺品が市場に出回るようになったと言われる。現在、博物館や個人によって収集されているパナリ焼の大部分は、そうした蔵骨器(厨

※ 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1 沖縄県立博物館・美術館

* Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006, JAPAN

子)や葬具として墓に納められていたものと考えられる。また、パナリ焼への関心が高まるにつれて、一旦は失われてしまったパナリ焼の技術を再現しようという取り組みが、大嶺實清氏(元沖縄県立芸術大学学長)や西念秋夫氏(西念陶器研究所)らによって進められ、1980年代以降、実際に新城島で産する原料を用いた「パナリ焼」が再現されている。

2 研究課題とアプローチの方法

新城島は西表島の南東約7km、石垣島の南西約23kmに位置し、互いに420mほど離れた上地島(面積:1.8km²)と下地島(面積:1.6km²)の二島からなる。新城島の東約4kmには黒島が、北約10kmには小浜島が位置する。

新城島には真水が乏しく、特に飲料水はほとんど天水に頼らざるを得ない環境にある。また、上地島、下地島ともに地質は石灰岩からなり、その上位を赤土(島尻マージ)層が覆っている。後述するように、石灰岩や島尻マージは、土器作りには不向きな原料である。一方、石垣島や西表島には焼き物に適した原料が分布しており(中村ほか2008、赤嶺ほか2010)、実際、近世の石垣島では陶器や瓦も製造されていた。

以上の記述によって示されるように、パナリ焼は土器に適した原料が分布せず、飲料水の確保も困難な新城島で、陶磁器が活発に流通していた近世まで製作されていた。このことは、多くの謎を投げかけているように思われる。そこで、今回、パナリ焼の調査研究にあたり、以下の研究課題を設定した。

- ①パナリ焼は新城島で作られたのか?
- ②なぜパナリ焼は近世末まで作り続けられたのか?
- ③なぜ新城島でパナリ焼が作られたのか?

このうち①の課題については、パナリ焼の焼成施設を発見することができれば解決するわけであるが、2013年6月の現地調査ではそうした施設を確認することはできなかったため、「土器の原料が新城島で調達されたのかどうか」を検討するため、新城島で採集した土器(パナリ焼等)の胎土分析を実

施した。

②の課題については、「陶磁器とパナリ焼がなぜ近世末まで共存し続けたのか」と言い換えることもできる。一般に、土器よりも陶器の方が強度や性能において優れ、製作にも高度な技術を要すると考えられるが、なぜパナリ焼は陶磁器に駆逐されずに近世末まで伝統を保ったのだろうか。

焼き物を煮炊用、貯蔵用、供膳用に分類した場合、日本本土では煮炊用や貯蔵用の器が早くに土器から石鍋や鉄鍋、陶器に移行するのに対して、供膳用の器としては「土器(かわらけ)」が長く使われた。一方、グスク時代の八重山諸島において、搬入品の陶磁器と併存するグスク土器(新里村式や中森式など)には、煮炊用、貯蔵用の各形態が見られるが、供膳用の器は基本的に欠落する。これは、供膳用には陶磁器の使用が一般的であったためと考えられている。また、煮炊用には石鍋や鉄鍋が普及しつつあったが、未だ希少であったため、鍋形土器が製作されたものと考えられている(図1)。

グスク土器に引き続くパナリ焼では、供膳用の器がないばかりでなく、さらに煮炊用の鍋を欠き、貯蔵用の壺を主体として火入れや鉢などの雑器が作られた。このように、グスク土器からパナリ焼への移行は、煮炊用器の欠落という大きな転換を伴っており、同様のことは、宮古諸島のグスク時代~近世の土器についてもあてはまるようである。その背景には、鉄鍋の普及があったものと考えられる。

以上のように、パナリ焼が用いられていた頃の八重山諸島では、煮炊には鉄鍋が、供膳には陶磁器が利用されていた。近世の石垣島や沖縄島では、貯蔵用の壺を含む各種の陶器も製作されていたので、そうした品々が八重山諸島でも流通していたはずである。パナリ焼は、このような情勢の中で作られ、使われていた。

ところで、八重山諸島のように、陶磁器普及後も「貯蔵用器」を主体にした土器の伝統が維持される事例は、日本の中でも珍しいと思われる。鉄鍋や陶磁器が広く流通している社会状況の中で、貯蔵用の陶磁器だけが特に入手しづらかったために、土器の伝統が維持されたということは考えにくい。「貯蔵容器」としての土器には、同種の陶磁器に対して何らかの優位な性能があったため、維持されたのでは

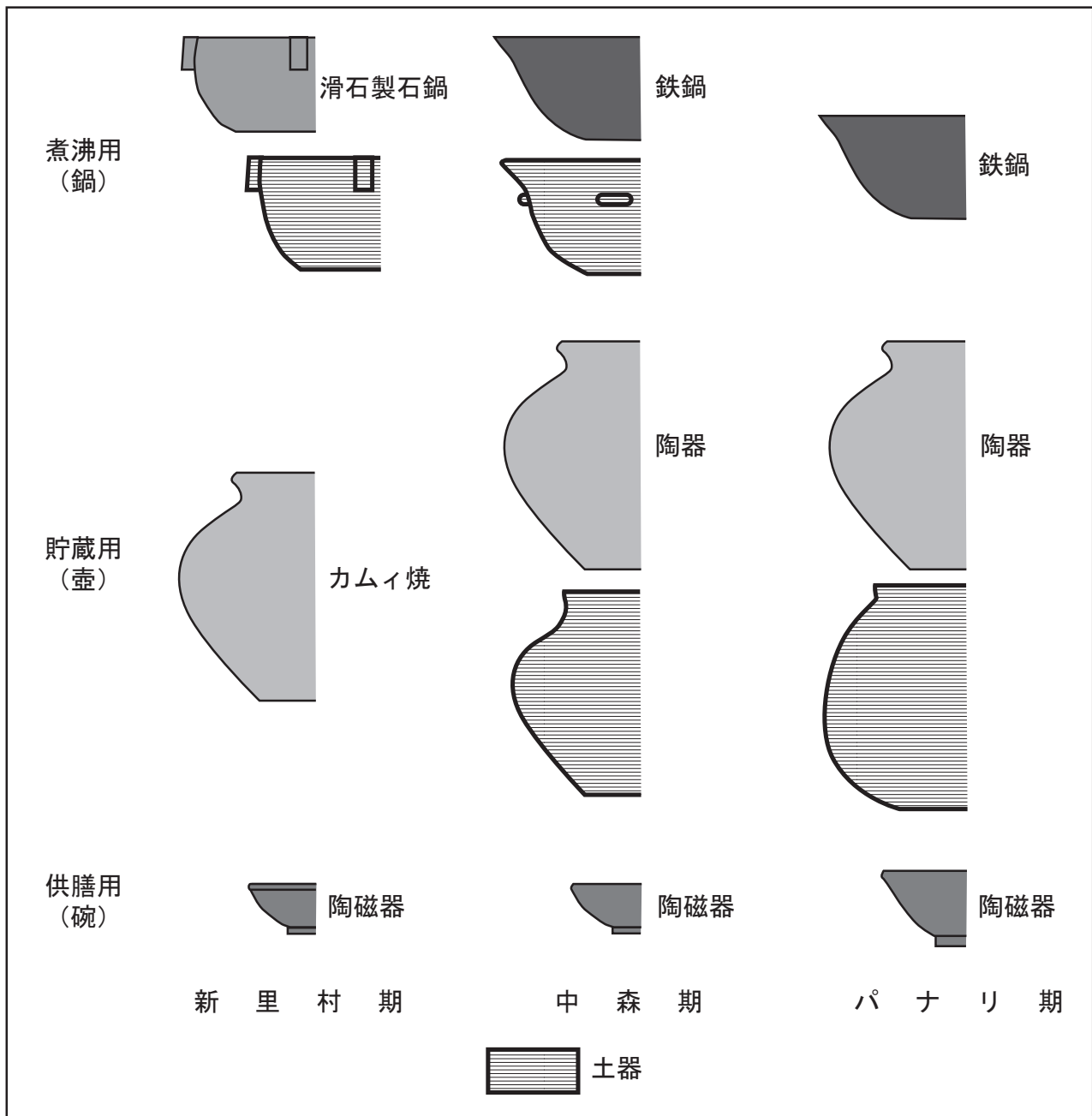


図1 八重山諸島における中世～近世の焼き物（容器類）の組成の変遷

ないかと考えるものである。

一例として、現在でも東南アジアや南太平洋地域では、金属器や陶磁器と併存して土器が作り使われており、南太平洋地域における土器づくりの民俗誌を調査した福本繁樹は「調理には金属の鍋よりも土器をつかうほうが味がよいというし、水瓶に土器を利用すると、土器の表面にしみでた水が蒸発するとき奪う気化熱によって冷たい飲み水を得ることができる。サゴヤシ澱粉を水に沈殿・発酵させて土器に貯蔵する場合にも、金属製の石油缶や陶器の壺を利用すると、澱粉はすえたようなすっぱい味になって

しまうが、土器に貯蔵すると味がいい」ことを記している(福本1994)。土器を水瓶として使用すると、気化熱によって中の水が冷たく保たれるという性能上の特徴については、これまで多くの指摘がある(例えばアジア民族造形文化研究所編 1989)。また、土器に浸みこんだ水分が気化熱を奪う性質を利用した冷却装置として、pot-in-pot refrigeratorと呼ばれる特殊な装置が、スペインやインド、北アフリカなどで知られている。こうした気化熱の作用による冷却効果は、陶磁器や金属器には替えることのできない、土器ならではの性能と言えよう。

以上のことから、貯蔵用の壺を中心とするパナリ焼にも、そうした冷却効果が備わっていた可能性が考えられる。そこで今回は、②の課題へのアプローチとして、パナリ焼と陶磁器の性能の一端を比較するための分析を試みた。すなわち、両者を水瓶として使用した場合、水温にどれだけの差が出るのかを比較するため、パナリ焼と陶磁器の実物を使用した「貯水実験」を行うこととした。

最後の③の課題は、アプローチの難しい難題であるが、①、②の課題を検討する中で、総合的に考察を加えることとした。以下の記述では、まず、①の課題に対応する胎土分析、②の課題に対応する「貯水実験」の内容について述べ、それらの結果を踏まえて総合的考察を行う。その中で、③の課題についても私見を述べてみたい。

3 新城島採集土器の胎土分析

2013年6月、新城島（上地島、下地島）の遺跡について現地調査を行った。現地調査の結果、パナリ焼を焼成した施設や粘土を採掘した遺構を確認することはできなかったが、パナリ焼をはじめとする土器片や陶片が、島内各所に散布していることを確認した（写真1）。そこで、それらの一部を採集して胎土分析の試料とした。分析試料は表1の通りで、図2には実測図を示す。なお、採集地については新城島の遺跡詳細分布調査報告書（沖縄県教育委員会1980）を参照いただきたい。

3-1 試料と方法

胎土分析試料は総数10点（No.1～No.10）で、採集地は伝ウイスク村跡（下地島）、新川亀翁生誕地付近（下地島）、上地島集落内（上地島）である（図2）。その内訳は、パナリ焼6点、グスク土器（中森式）3点、赤瓦1点である。

各分析試料から、ダイヤモンドカッターを用いて2～3cm角程度の切片を切り出し、樹脂で固定した後、一面を研磨盤で研磨し、スライドガラスに接着した。その後、接着面の反対側から切片の厚さが約0.03mmになるまで研磨盤で研磨し、薄片を作成した。作成した薄片について、偏光顕微鏡（NIKON ECLIPSE E200）を用いて含有鉱物の観察・同定を

行った。

3-2 結果

分析結果を表1に示す。今回の分析試料中に確認できた鉱物・岩片は、石英と淘汰の悪い生砕物（貝類やサンゴなどの生物由来の破片）にほぼ限られている。

このうち生砕物は板状、塊状、蜂の巣状の三種類に区分できた。板状を呈する生砕物は、グスク土器に多く含まれており（写真2、写真5）、この種のもは貝殻の破片と考えられる。破片の形状から具体的な貝種を特定することは難しいが、比較的厚い層状のものも多く見られるので、少なくともカタツムリなどの陸産貝ではなく、海産貝であることは明らかである。一例として、サラサバテイやヤコウガイなどの真珠層の発達した貝殻が候補となりうる。一方、塊状や蜂の巣状のものはパナリ焼に多く含まれており（写真3、写真4、写真6）、塊状のものは一般にサイズが小さく、蜂の巣状のものはやや大型なので、前者は後者がさらに細かく砕けた破片と見られる。これらは、その形状からサンゴの破片と考えられる。

なお、これらの生砕物には、石灰岩やビーチロック由来の岩片のように、マトリクスが固結したものは認められないことから、いずれも化石ではなく、当時現生していた貝殻やサンゴが利用されたものと考えられる。

いずれにせよ、グスク土器とパナリ焼では含有される生砕物の種類が異なること、石英と生砕物以外の鉱物・岩片がほとんど含まれていないことは注目される。ただし、No.9のように、斜長石や砂岩をわずかに含むパナリ焼も見られた。また、上地島集落内採集の赤瓦（No.10）には、生砕物が全く含まれておらず、石英が多量に含まれていたほか、砂岩と見られる岩片も確認できた（写真7）。こうした胎土の特徴は、グスク土器やパナリ焼とは全く異なっている。

3-3 考察

新城島に近接する西表島や石垣島には、八重山層群の堆積岩類、変成岩類、火成岩類など多様な岩石が分布しており、それらの風化土には石英や長石、



写真1 新城島（上地島）に残るパナリ焼

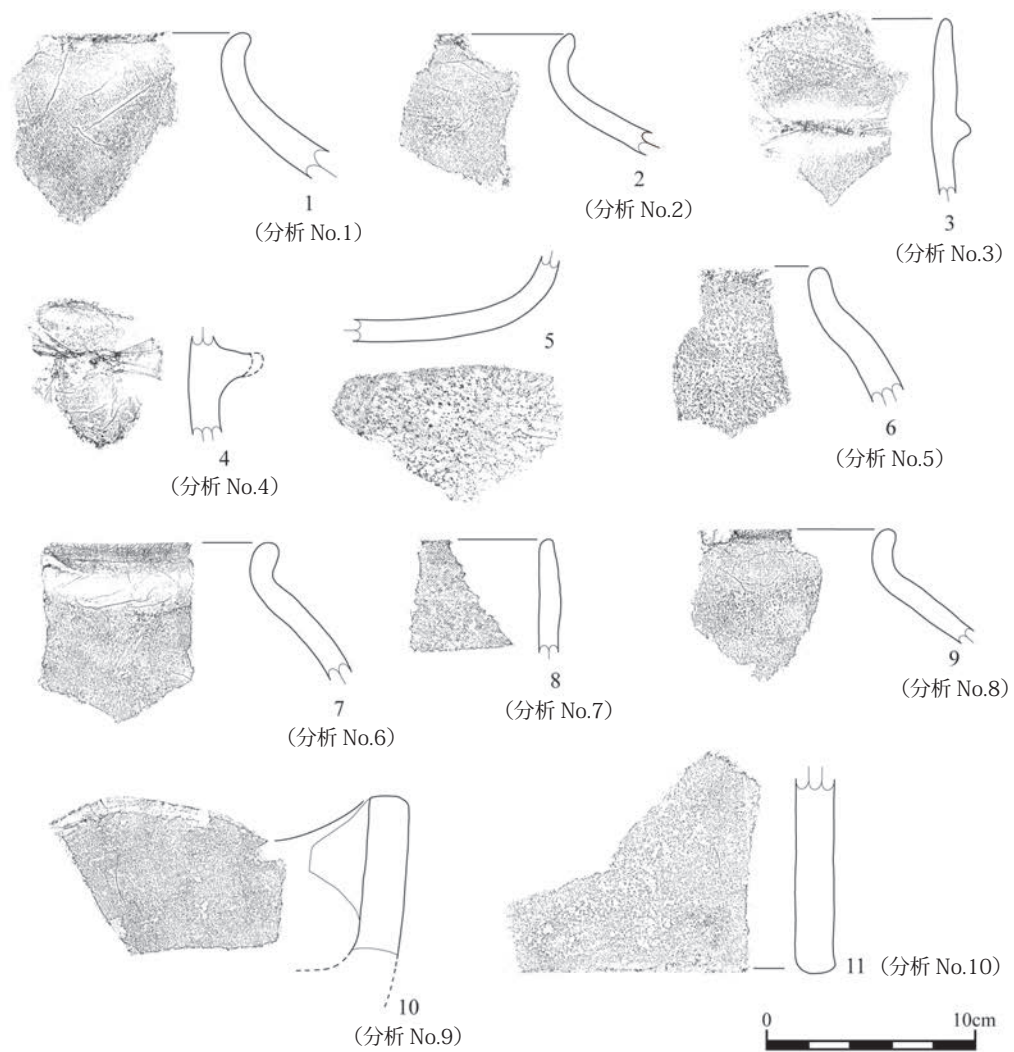


図2 分析試料実測図
※分析 No. は表 1 に対応。

表1 胎土分析試料一覧

| No. | 種 別 | 採集地点 | 含有鉱物・岩片 | | | | | 備 考 |
|-------|------|---------|---------|-----|-------|-----|------|---------|
| | | | 石 英 | 変成岩 | 生 碎 物 | | | |
| | | | | | 板 状 | 塊 状 | 蜂の巣状 | |
| No.1 | パナリ焼 | 伝ウイスク村跡 | ++ | | + | +++ | ++ | |
| No.2 | パナリ焼 | 伝ウイスク村跡 | ++ | | ? | +++ | + | |
| No.3 | 中森式 | 伝ウイスク村跡 | ++ | | +++ | | | |
| No.4 | 中森式 | 新川亀翁生誕地 | ++ | | +++ | | | |
| No.5 | パナリ焼 | 上地島集落内 | ++ | | | +++ | | |
| No.6 | パナリ焼 | 上地島集落内 | ++ | | + | +++ | ++ | |
| No.7 | 中森式 | 上地島集落内 | ++ | | ++ | + | | |
| No.8 | パナリ焼 | 上地島集落内 | ++ | | + | +++ | ++ | 多結晶石英 |
| No.9 | パナリ焼 | 上地島集落内 | ++ | | | +++ | | 斜長石/砂岩? |
| No.10 | 赤瓦 | 上地島集落内 | +++ | | | | | 砂岩 |

※表中の「+++」は多い、「++」は普通、「+」は含まれることを示す。

変成鉱物や各種の岩片が含まれるはずである。実際、石垣島や波照間島出土の下田原式土器やグスク土器には、そうした鉱物・岩片が含まれている（山崎ほか2012、2013）。

今回分析したグスク土器とパナリ焼には、石英と生砕物以外の鉱物・岩片は稀であり、こうした胎土の特徴は、新城島に分布する赤土（島尻マーヅ）を原料としてこれらの土器が製作されたという伝承とも矛盾しない。パナリ焼の中には、ごく少量、斜長石や砂岩を含むものもあるが、その含有量は微量であり、次に述べる赤瓦の胎土などとは明らかに異なっているので、現在のところその評価は難しい（偶発的な混入も否定できない）。胎土中に含まれる生砕物の種類は、グスク土器とパナリ焼で違いがあり、前者では貝殻片が、後者ではサンゴ片が含まれる。したがって、今回の分析結果に基づく限り、両者は型式的特徴だけでなく、胎土においてもはっきりし

た違いがあるように見えるが、実際にはサンゴ片を含むグスク土器や、貝殻片を含むパナリ焼が存在する可能性もあるので、今後資料規模を増やして検討を行っていく必要がある。

以上のようなグスク土器やパナリ焼の胎土に対して、赤瓦には石英や砂岩が含まれており、こうした特徴は、新城島外で採取された原料からこの赤瓦が製作されたことを示している。

ところで、パナリ焼の特徴的な胎土については、これまで多くの人々が注目してきたところであり、冒頭に紹介した『沖縄大百科』においても、蔓草やタブノキ（※今回の植物調査によれば、新城島にはタブノキは現生していない（本報告書 p.33参照）、蝸牛や貝肉の粘液が加えられたという伝承が紹介されている。しかし、今回の胎土分析では、カタツムリの混入を示唆するような貝殻片や、蔓草などの混入を示唆するような有機物片の混入は確認できな



写真 2 グスク土器の断面写真
板状の貝片が多く見られる。



写真 3 パナリ焼の断面写真
ポーラスなサンゴ片が多く見られる。

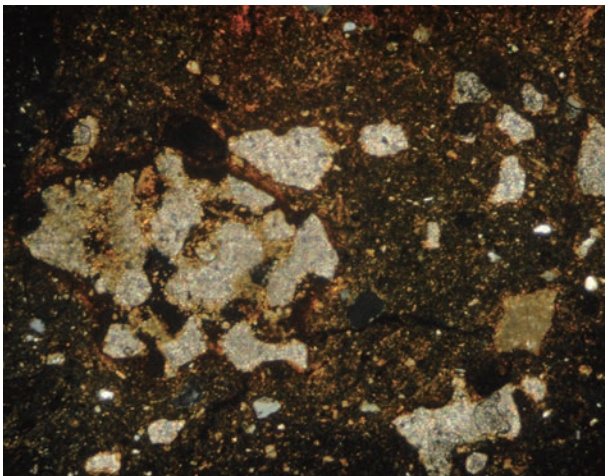


写真 4 No.1 の偏光顕微鏡写真
蜂の巣状の生砕物（左）の周囲に
塊状の生砕物が見える。

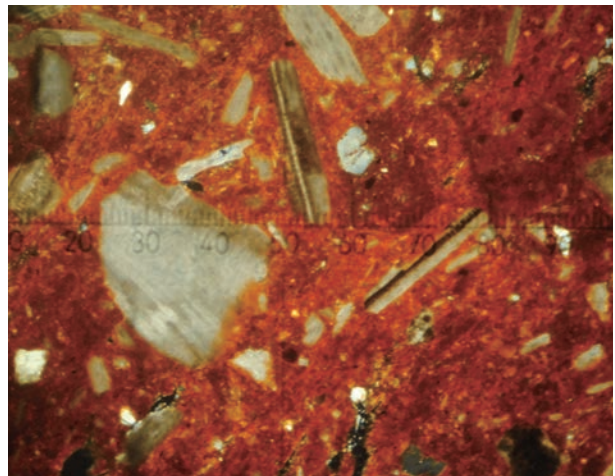


写真 5 No.3 の偏光顕微鏡写真
板状の生砕物が多く見られる。

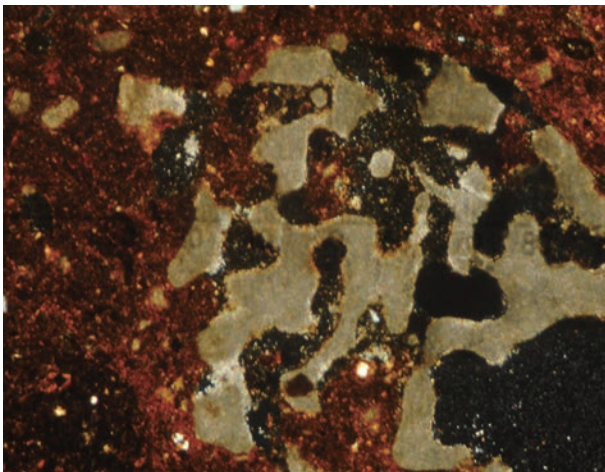


写真 6 No.8 の偏光顕微鏡写真
蜂の巣状の生砕物。

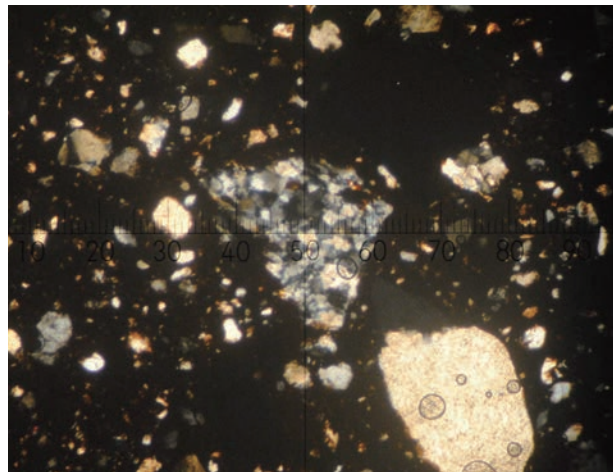


写真 7 No.10 の偏光顕微鏡写真
写真中央は砂岩片。周囲の鉱物は
ほとんどが石英。

かった。また、パナリ焼の胎土について、以下のよう
な記述もなされている。

「…パナリ焼には多くの貝殻とともにサンゴ片が
混入されていることも多く…（中略）…海浜性の砂
を混ぜ込んだ可能性が高い。これは沖縄本島のグス
ク土器にも見られる例である…」（島袋2011:59頁）

「…パナリ土器の素地に含まれる貝片は、野焼き
による焼成の際に爆ぜるのを防ぐためと考えられま
す。…（中略）…土に対して一度焼いて砕きやすく
した貝を細かく砕き、2割くらい加えます。貝の種
類は、土器に含まれる貝片が鱗片状（ママ）や粒状
の形があることから、高背貝やクモガイ、アカミナー
など特に種類の限定はないと考えられます。…」
（嘉陽『パナリ焼』）

仮に、前者のように、海浜性の砂を利用した場合、
その中には有孔虫やサンゴ片、貝片など、多様な種
類の生砕物が含まれることになるはずである（写真
8）。しかし、今回分析したグスク土器やパナリ焼
では、生砕物はほぼ単一の種類に限定されており、
円磨度も弱いものが多いので、海浜性の砂が利用さ
れた可能性は否定して良いであろう。

一方、後者は貝殻を砕いた破片を混ぜ込むとい
うもので、これはむしろグスク土器の胎土の特徴にあ
てはまる。グスク土器の胎土中に含まれる貝片に
は、黒色～灰色化したものも見られるので、ここで
述べられている「焼いて砕きやすく」という工
程も、実際に行われていた可能性は高い。西念秋夫
氏や大嶺實清氏による「パナリ焼」再現品は、後者
に近い素地土の製作を行っているようである（西念
2004、大重1996、竹内2015）。

貝殻やサンゴなどに含まれる炭酸カルシウムは、
900度以上に加熱されると酸化カルシウム（生石灰）
に変化し、この酸化カルシウムが水分と反応すると
水酸化カルシウムに変化する。このため、貝殻やサ
ンゴを混入した土器は、900度以上の高温に晒され
ると崩壊してしまう（縄田2010）。従って、生砕
物を含む土器を焼成する際には、温度管理が重要と
なる。特に多孔質なサンゴ片を混入した土器は焼成
が難しいと考えられるが、パナリ焼はそうした難題

を乗り越えて焼成されていたということになる。グ
スク土器からパナリ焼にかけて、胎土中の混入物が
貝殻片からサンゴ片に変化する要因については、「総
合的考察」の項で再度取り上げたい。

ところで、沖縄の先史土器復元に取り組んでいる
比嘉賀盛氏は、島尻マージを用いた土器では「亀甲
状のヒビ割れ」（例えば写真9のようなもの）が目
立つことに注目しており、パナリ焼の中にこうした
亀裂が目立つものがあることを指摘している。こう
した点も、パナリ焼が新城島の島尻マージで製作さ
れたことを支持する傍証となりうるものである。

以上のように胎土分析の結果、新城島採集のグス
ク土器やパナリ焼には石英と生砕物が多く含まれて
いることが確認できた。このことは、新城島に分布
する赤土（島尻マージ）を原料としてこれらの土器
が製作されたという伝承とも矛盾しない。また、グ
スク土器には貝殻片が、パナリ焼にはサンゴ片が多
く含まれていることも明らかとなった。

4 パナリ焼の「貯水実験」

ここでは、パナリ焼の性能、特に水瓶として使用
した際の冷却効果に関する「貯水実験」の結果につ
いて記述する。

4-1 対象資料と方法

実験に使用した土器、陶器は表2の通り4点（No.
1～No.4）で（写真10～13）、壺屋焼（荒焼）の
壺2点（No.1およびNo.2）、パナリ焼の壺1点（No.
3）、カンボジア産の土器1点（No.4）を使用した。
壺屋焼は当館民俗分野の収蔵資料、パナリ焼は当
館美術工芸分野の収蔵資料、カンボジア産土器は、
2014年にカンボジアにて購入した資料である。な
お、実験に使用したパナリ焼には、底部と胴部に穿
孔があり、充填剤で補修されていた。しかし、水を
注いだ段階で、特にこの穿孔部から漏水は認められ
なかったため、実験に大きな影響はないと判断した。

「貯水実験」は、この4点の土器と陶器（よく乾
燥させた状態のもの）に水を注ぎ、外気温のもとで
直射日光の当たらない風通しの良い場所に設置して
行った。No.1～No.3には8ℓ、No.4には2.5ℓ
の水を貯水した。実験時間は午前9時から午後5時



写真8 新城島（上地島）の海浜砂
サンゴや貝片、有孔虫などさまざまな生物遺骸からなる。



写真9 パナリ焼に見られるひび割れ
（当館所蔵品）



写真10 壺屋焼（No. 1）



写真11 壺屋焼（No. 2）



写真12 パナリ焼（No. 3）



写真13 カンボジア土器（No. 4）

表2 「貯水実験」使用土器・陶器リスト

| 番号 | 名称 | 棚 | 資料番号等 | 法量 (cm) | | | | 容量 (ℓ) | 重量 (kg) | 器壁の厚さ (mm) |
|------|---------|------------|-----------|---------|------|------|------|--------|---------|------------|
| | | | | 口径 | 最大径 | 底径 | 高さ | | | |
| No.1 | 壺屋焼 | 民 2-1-3 中段 | 仮 No.2285 | 14.0 | 34.0 | 18.0 | 31.0 | 13.7 | 6.0 | 10.0 |
| No.2 | 壺屋焼 | 民 2-1-4 中段 | 仮 No.2294 | 12.0 | 28.0 | 16.0 | 40.0 | 12.5 | 5.0 | 8.0 |
| No.3 | パナリ焼 | 考 1-72 棚 B | No.223 | 16.0 | 30.0 | 25.0 | 27.0 | 9.5 | 5.0 | 15.0 |
| No.4 | カンボジア土器 | | | 11.0 | 19.0 | 16.0 | 18.0 | 2.9 | 0.8 | 4.0 |

※容量は器に海砂を満たして計測。

までの8時間とし、実験中は1時間ごとに水温および気温の変化を温度計を使って計測した。また、実験終了時の残水量を計量し、貯水量がどれだけ減少したか（失水率）を調査した。

以上の実験を2015年8月3日と8月10日の2日間にわたって2度、当館中庭民家の北側縁側にて行った（写真14、15）。

4-2 結果

「貯水実験」の結果を表3、4と図3、4に示す。実験1回目の天候は晴れ、実験2回目の天候は雨であった。

2回の実験を通して、常に壺屋焼の方が水温が高く、パナリ焼、カンボジア産土器の方が水温が低い状態であった。したがって、しばしば指摘されるように、陶器よりも土器の方が水が冷たく保たれることは事実であると言える。これは、土器の表面から染み出す水が気化熱を奪うため、器壁の薄いカンボジア産土器では実験開始からほどなく土器表面に水が染み出して結露し（写真16）、実験した4例の中で最も水温が低く保たれていた。一方、器壁の厚いパナリ焼では、実験開始当初は土器表面は乾燥した状態であったが、3時間ほどで表面に水が染み出し、結露する様子が観察できた（写真16、写真17）。天候や気温に関わらず、パナリ焼もカンボジア産土器も、最終的には27度前後の水温となった。八重山諸島における夏の厳しい直射日光と高温を考えると、水瓶として使用した場合の土器の冷却効果は、意外と人々にとって重要な性能であったのかも知れない。

一方、陶器では、土器のような水の染み出しや結

露は見られず、天候や気温によって水温が変化することがわかった。特に雨天下の実験2回目では、壺屋焼の水温は気温よりも高い状態であった。これは、輻射熱によって、陶器の表面が熱せられたためではないかと思われる。陶器と土器の水温の差は、雨天時で1～2℃、晴天時では2～3℃にも達する。

また、実験を行った8時間の間に蒸発などで失われる水の量（失水率）は、壺屋焼では5%以下であるが、土器では7～14%と陶器に比べてかなりの水量が失われることがわかった。

以上のように、実験の結果、水瓶として使用した場合、土器には陶器よりも水を冷たく保つ性能があることが確認できた。

ところで、以上の実験にはいくつかの限界も指摘できる。管理された環境下で実施された実験ではないため、実験開始時点（9:00）で、すでに陶器と土器との間に、水温の差異が見られた。これは、輻射熱等の影響で、器自体の温度が一定ではないために、注水時点で水温に差異が現れたものと考えられる。これを防ぐためには、外光等の影響のない管理された温度環境下に器を設置し、実験を行うことが必要であるが、今回はそもそも土器や陶器が使用された当時の環境に近い条件下での実験を試みたため、そうした温度・条件管理を徹底しなかった。したがって、この点については別途実験を行う必要があるかも知れない。

また、気化熱によって貯蔵された水が冷却されることを「証明」するためには、どれだけの量の水が気化して、どれだけ水温が下がったのかを厳密に測定する必要があるのかも知れない。しかし、いくつかの理由により、厳密な測定は困難と思われる。す

表3 8月3日実験結果

| | No.1 壺屋焼 | No.2 壺屋焼 | No.3 パナリ焼 | No.4 カンボジア 土器 | 気温 | 天気 | 備 考 |
|----------------|-------------|-------------|--------------|---------------------|------|--------------|---|
| 注水量 (ℓ) | 8.0 | 8.0 | 8.0 | 2.5 | | | |
| 9:00 | 30.0 | 29.3 | 28.6 | 28.0 | 30.0 | 晴れ | 9:15 準備完了・No4 はすぐに外面にしみ出し |
| 10:00 | 29.8 | 29.4 | 28.7 | 27.6 | 30.6 | 晴れ | No3 底面上 9cm の範囲までしみ出し |
| 11:00 | 29.7 | 29.4 | 28.4 | 27.0 | 29.5 | 曇り | No3 底面上 16cm の範囲までしみ出し・結露 No4 外面結露 |
| 12:00 | 29.6 | 29.4 | 27.8 | 26.6 | 29.7 | 曇り | |
| 13:00 | 29.7 | 29.7 | 27.6 | 26.7 | 31.0 | やや曇り (小雨) | No3 底面上 18cm の範囲までしみ出し No4 口縁下までしみ出し |
| 14:00 | 29.7 | 30.0 | 27.5 | 26.6 | 30.4 | 曇り | |
| 15:00 | 29.8 | 30.0 | 27.4 | 26.7 | 29.7 | 曇り | No3 水溜まりできた |
| 16:00 | 30.0 | 30.6 | 27.4 | 26.8 | 32.5 | 晴れ | |
| 17:00 | 30.4 | 31.0 | 27.6 | 27.0 | 32.4 | 晴れ | |
| 終了時水量 (ℓ) | 7.72 | 8 | 7.3 | 2.25 | | | |
| 失水率(8h) (%) | 3.5 | 0 | 8.75 | 10 | | | |

表4 8月10日実験結果

| | No.1 壺屋焼 | No.2 壺屋焼 | No.3 パナリ焼 | No.4 カンボジア 土器 | 気温 | 天気 | 備 考 |
|----------------|-------------|-------------|--------------|---------------------|------|------------|---------------------------|
| 注水量 (ℓ) | 8.0 | 8.0 | 8.0 | 2.5 | | | |
| 9:00 | 29.3 | 30.0 | 28.7 | 28.0 | 28.7 | 曇り 時々雨 | 湿度高い |
| 10:00 | 29.0 | 29.7 | 28.6 | 27.6 | 28.0 | 曇り | No.4 胴全体しみ出し |
| 11:00 | 29.0 | 29.6 | 28.3 | 27.2 | 29.2 | 曇り | No.3 胴下部ややしみ出し |
| 12:00 | 28.8 | 29.4 | 28.0 | 26.9 | 26.7 | 雨 | N.3 胴中・下部しみ出し N.3、4 胴下部結露 |
| 13:00 | 28.6 | 29.0 | 27.6 | 26.7 | 27.2 | 雨 | |
| 14:00 | 28.4 | 28.8 | 27.3 | 26.6 | 28.0 | 雨あがり 曇り | |
| 15:00 | 28.4 | 28.7 | 27.2 | 26.6 | 28.0 | 小雨 | |
| 16:00 | 28.4 | 28.7 | 27.1 | 26.6 | 28.0 | 小雨 | |
| 17:00 | 28.4 | 28.6 | 27.0 | 26.6 | 28.8 | 雨あがり 曇り | |
| 終了時水量 (ℓ) | 7.62 | 7.9 | 7.42 | 2.15 | | | |
| 失水率(8h) (%) | 4.75 | 1.25 | 7.25 | 14 | | | |

20150803 (晴)

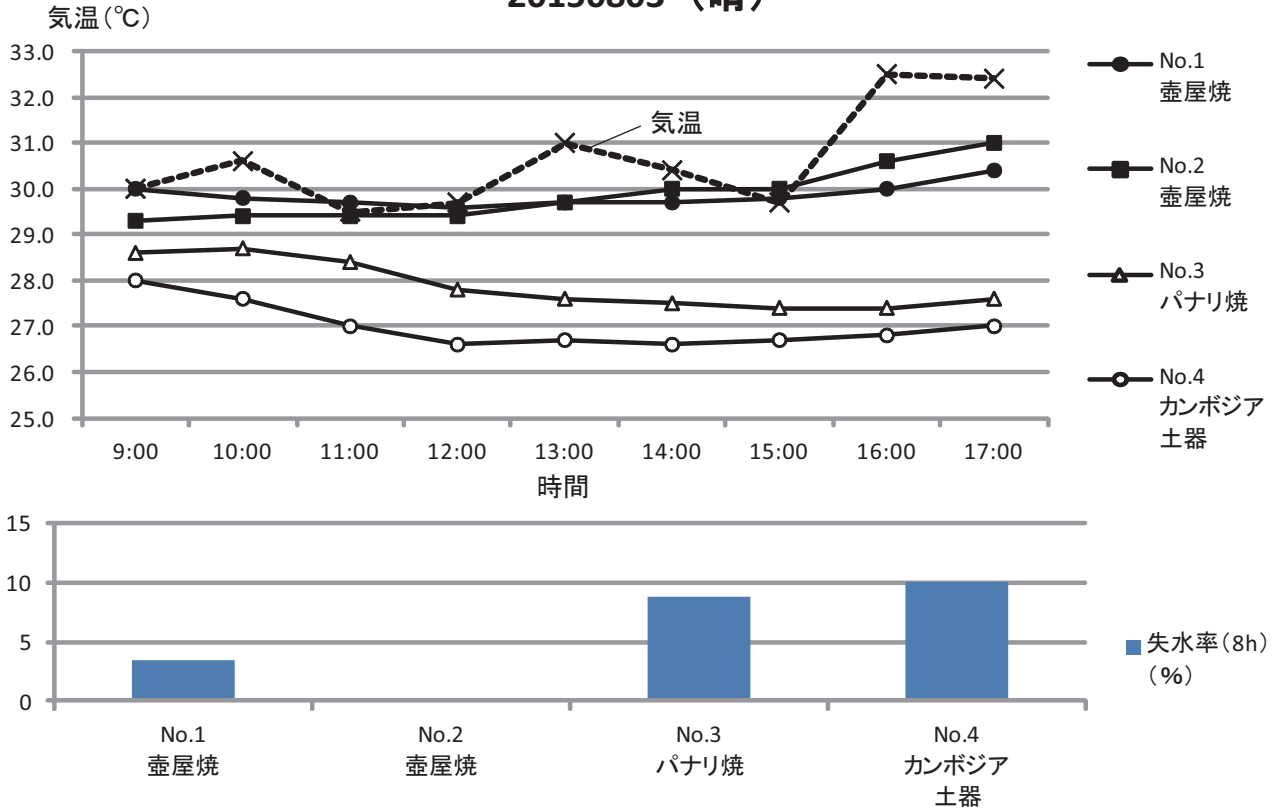


図3 「貯水実験」1回目(8月3日:晴天)の結果

20150810 (雨)

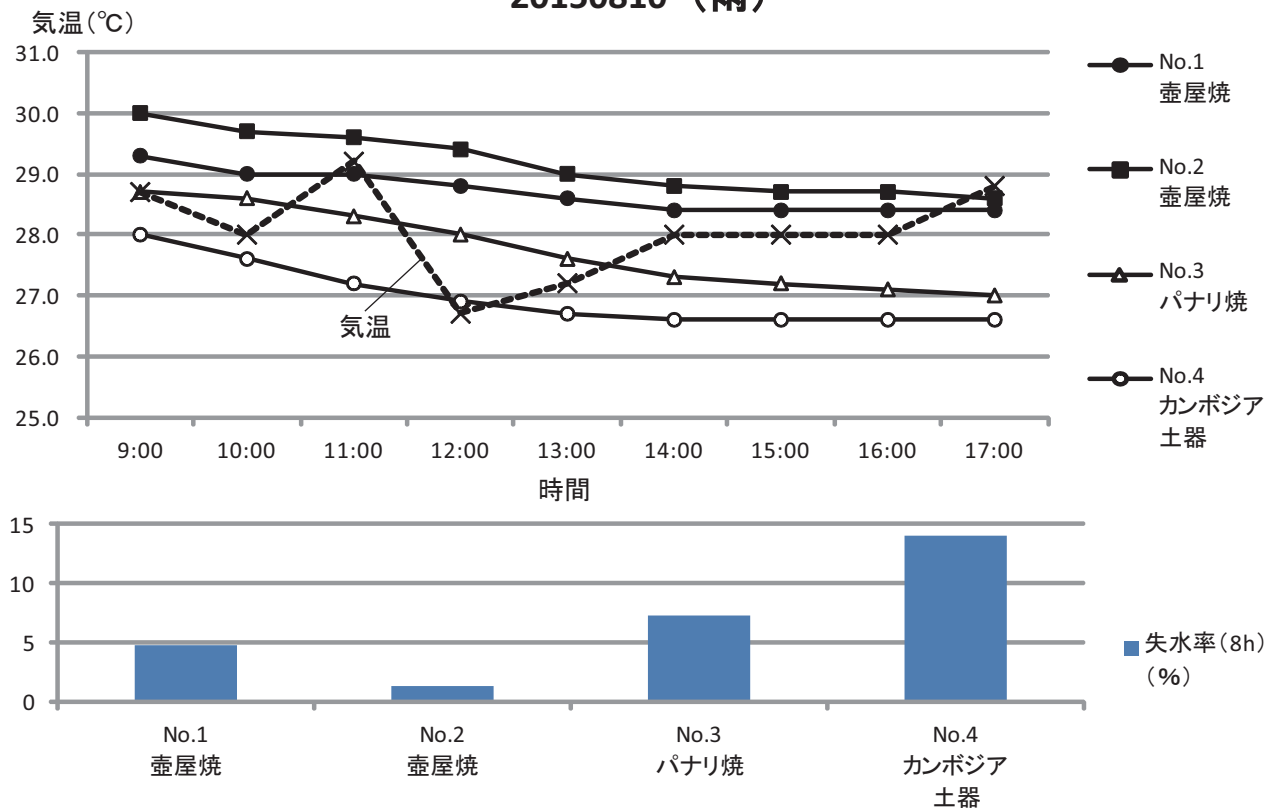


図4 「貯水実験」2回目(8月10日:雨天)の結果

なわち、失われた水量には、蒸発量だけでなく、器壁に吸収された水量が含まれており、これは器壁の厚さに多分に影響される。理想的には、法量や厚さを統一した土器、陶器を使用することが望ましいが、既存の資料中からそうした条件に適合する実験資料を見出すことはほぼ不可能であろう。

以上のように、今回の実験データは、こうした限界を抱えた実験によって得られたデータであることを考慮する必要があることを申し添えておきたい。

5 総合的考察

以下では、パナリ焼の胎土分析と「貯水実験」の結果を踏まえて、冒頭で設定した研究課題に関して総合的な考察を加える。

①パナリ焼は新城島で作られたのか？

胎土分析の結果、新城島で採集されたグスク土器やパナリ焼には、石英と生砕物以外の鉱物・岩片は稀であり、こうした胎土の特徴は、新城島に分布する赤土（島尻マージ）を原料としてこれらの土器が製作されたという伝承とも矛盾しないと言える。したがって、今回のデータに基づく限り、パナリ焼は新城島において、新城島の原料を使って作られていたと考えて問題はないであろう。ただし、この問題を決着させるためには、今後胎土の基質を構成する粘土の成分分析など、より詳細な分析を実施する必要があると考える。

②なぜパナリ焼は近世末まで作り続けられたのか？

この問題については、今回、土器には陶器に対して何らかの性能上の優位性が備わっているのではないかという仮説のもとに、「貯水実験」を行った。その結果、水瓶として使用した場合、土器には陶器よりも水を冷たく保つ性能があることが確認できた。したがって、こうした性能上の特徴が、陶磁器が普及するようになった近世においても、貯蔵用の壺を主体とするパナリ焼が作り続けられた理由の一つであった可能性は否定できないであろう。また、夏季には猛暑に見舞われる八重山諸島で、パナリ焼が作り続けられたことも、冷水の確保と土器が結びついていた可能性を示唆しているように思われる。ただし、実際にはそうした性能上の特徴以外にも、

「水汲み用の器は割れやすいため、高価な陶器よりも安価な土器を使う」（安里進氏私信）というようなこともあったのかも知れない。したがって、この問題については、多様な観点から今後の検討が必要であろう。

なお、グスク土器とパナリ焼では、胎土中の混入物が異なり、前者には貝殻片が、後者にはサンゴ片が混入されることはすでに述べた。このうち、サンゴは多孔質であるため、水分を保持しやすいと考えられ、実際、「貯水実験」に使用したパナリ焼は、完全に乾燥するまでに冷暗所で2～3日程度を要した。このことから、サンゴ片の混入は、器壁に水分を蓄えるという効果を意図しているのかも知れない。その場合、保水性の高い器壁は、いわゆる pot-in-pot refrigerator と似た効果を発揮した可能性が考えられる。

③なぜ新城島でパナリ焼が作られたのか？

最後に、なぜ新城島でパナリ焼が作られたのかという問題について、考察を加えてみたい。新城島は八重山諸島の離島の中でも小規模で、土器作りに適した原料は分布しておらず、土器焼成のための燃料も豊富とは言えず、真水を得ることも難しい。むしろ西表島や石垣島の方が、土器製作には適しているように思われるし、実際、石垣島では瓦や陶器が製作されていた。したがって、新城島で土器作りが行われる必然性は、全くないと言っても過言ではない。このため、資源環境という観点からは、この問題に回答を与えることは不可能である。

一方、パナリ焼は新城島の産物として広く認知されてきた歴史があり、王府時代には貢物として認められていたと言う。このことは、いわばパナリ焼が「島の特産品」、すなわち「ブランド産業」として、確たる地位を占めていたことを物語っている。こうした「島の特産品」は、パナリ焼に限らず、宮古上布や久米島紬^{つむぎ}など各地に分布しており、パナリ焼もそのような位置づけであったのかも知れない。いずれにせよ、新城島でパナリ焼が作られた背景には、資源環境上の優位性よりも、そうした社会的背景が多分に影響していた可能性が考えられる。



写真 14 「貯水実験」の様子①



写真 15 「貯水実験」の様子②



写真 16 パナリ焼（左）とカンボジア土器（右）
に見られた水の浸み出し



写真 17 パナリ焼胴部下半の結露

6 まとめ

本稿では、新城島の産物として著名なパナリ焼について検討した。

新城島で採集した土器片の胎土分析の結果、パナリ焼は新城島で製作されていたと考えて矛盾ないこと、パナリ焼にはサンゴ片が多量に含まれること、グスク土器には貝殻片が多量に含まれることが明らかとなった。また、「貯水実験」の結果、パナリ焼には陶器（壺屋焼）に比べて顕著な冷却作用があることが明らかとなった。こうした性能上の特徴は、陶磁器が普及するようになった近世においても、貯蔵用の壺を主体とするパナリ焼が作り続けられた理

由の一つであった可能性が考えられる。

新城島には、土器作りに適した原料は分布しておらず、なぜ新城島でパナリ焼が作られたのかは不明である。この点については、資源環境と言うよりも、社会的背景からのアプローチが必要ではないかと思われる。

本稿をまとめるにあたり、大濱憲二氏（石垣市立八重山博物館）、嘉陽恵美子氏（ビームパリ窯）、瑞慶山昇氏にはパナリ焼についてさまざまにご教示いただきました。また、安里進、園原謙、外間一先、大湾ゆかり、仲里健、與儀美奈をはじめとする沖縄県立博物館・美術館の関係者の方々には、胎土分析や実験について便宜をはかっていただくとともに、

有益なご教示をいただきました。記して謝意を表します。

跡出土土器の胎土分析」、『白保竿根田原洞穴遺跡—新石垣急行建設工事に伴う緊急発掘調査報告書』、沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書、第65集。

参考文献

- 赤嶺公一・中村英二郎・赤嶺欣哉・花城可英・与座範弘, 2010, 「窯業原料調査(その6)(西表島地域)」, 『沖縄県工業技術センター研究報告書』, 13: 25-31頁.
- アジア民族造形文化研究所編, 1989, 『アジアと土器の世界』, 雄山閣: 145-172頁.
- 大重潤一郎監督, 1996, 『風の島』(映像作品)
- 沖縄県教育委員会, 1980, 『竹富町・与那国町の遺跡』, 沖縄県文化財調査報告書, 第29集.
- 新城 剛, 1983, 「パナリ焼」, 『沖縄大百科事典(下巻)』, 沖縄タイムス社, 239頁.
- 嘉陽恵美子, 『パナリ焼』, ビームパブリッシング.
- 西念秋夫, 2004, 「八重山諸島の焼き物、パナリ土器」, 『月刊茶道誌 淡交』712, 株式会社淡交社: 28-31頁.
- 島袋綾野, 2011, 「パナリ焼—イメージの形成・製作・流通の謎」, 『石垣市立八重山博物館紀要』, 20: 51-73頁.
- 竹内重雄, 2015, 「おもろさうしの叙事性」, 『沖縄文化研究』, 42, 法政大学沖縄文化研究所: 63-83頁.
- 中村英二郎・赤嶺公一・宮城雄二・花城可英・与座範弘, 2008, 「窯業原料調査(その3)(石垣島、竹富島地域)」, 『沖縄県工業技術センター研究報告書』, 11: 55-60頁.
- 縄田雅重, 2010, 「実践レポート土器作り—土器崩壊の謎」, 『あやみや』, 18, 沖縄市立郷土博物館: 14-19頁.
- 比嘉賀盛, 1994, 「『沖縄の古代土器』の作り方—失敗しないためのノウハウ」, 『あやみや』, 2, 沖縄市立郷土博物館: 1—17頁.
- 福本繁樹, 1994, 『精霊と土と炎—南太平洋の土器』, 東京美術.
- 山崎真治・仲里 健・仲座久宜, 2012, 「胎土分析から見た下田原式土器」, 『沖縄県立博物館・美術館 博物館紀要』, 第5号.
- 山崎真治・仲里 健, 2013, 「白保竿根田原洞穴遺

鳩間島・黒島・新城島における石碑・記念碑等の調査報告

岸本 弘人^{*1}・石垣 忍^{*2}

The investigation report of the monument in Hatomajima Island/Kuroshima Island/Aragusukushima Island

Hiroto KISHIMOTO^{*1}, Shinobu ISHIGAKI^{*2}

はじめに

本稿は、沖縄県立博物館・美術館（博物館班）による総合調査事業に基づいて2012（平成24）年度から2015（平成27）年度の4年間にわたり実施した「鳩間島・黒島・新城島総合調査」の歴史分野の調査報告である。

当館が実施する沖縄周辺の島々に関する総合調査は1980（昭和55）年から行われており、八重山諸島についてはこれまでに波照間島、西表島、小浜島、与那国島、竹富島の調査が実施されてきた。

著者は2009（平成21）年に赴任後、竹富島の石碑・記念碑等の現状調査を行ったが、島の大きさの割に石碑・記念碑の数が多く、その中でも銅像を伴った故人の顕彰碑が多いといった特徴が見られた。今回は鳩間・黒島・新城の3島で同様の調査を実施し、竹富島との比較をすることとした。

調査の目的

本調査は鳩間・黒島・新城の3島に現存する全ての石碑・記念碑等の現況を把握することを目的とした。御嶽の鳥居や灯籠については石碑・記念碑とは言えないものの、奉納年や奉納者が刻まれているものが存在することから、前回の竹富島調査より調査対象としている。ただし、新城島（上地島）につい

ては聖域としての扱いが厳格で立ち入りが厳禁されているため、調査の対象とはしていないことをあらかじめ断っておく。

調査項目は時間的制約等もあって設置場所の把握、法量測定、碑文の確認および書き起こし等に限った。石材を利用した記念碑が建立されている場合、石の材質は詳細な分析に基づくものではなく、あくまでも調査員が参考程度に判断したものなので、今後あらためて検討する必要がある。個々の石碑の確認については万全を期したつもりであるが、万が一調査洩れがある場合の責任は一切当博物館にある。なお、文献調査や聞き取りによる建立の歴史的経緯等の記述については機会を改めることとしたい。

本調査においては、次の方々（五十音順）にお世話になった。記して感謝申し上げます。

竹富町教育委員会総務課町史編集係主事

飯田泰彦

鳩間中学校教諭 池田 亘

同校3年生 田澤 優 山田創太

パナリ島観光 西泊宏信

竹富町史編集委員 玻座間武

新城公民館長 本底重男

調査の方法

調査は現地踏査により、1件ずつ調査シートに記

※1 〒904-2213 沖縄県うるま市市場1827 沖縄県立前原高等学校

*1 Okinawa Prefectural Maehara high school, 1827, Taba, Uruma city, Okinawa, 904-2213, Japan.

※2 〒900-0006 沖縄県おもろまち3-1-1 沖縄県立博物館・美術館

*2 Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006, Japan.

入していく方法をとった。調査日は以下の通りである。

2013（平成25）年3月4日～6日 黒島
岸本弘人
2013（平成25）年6月25日 新城島（上地島）
2013（平成25）年6月26日 新城島（下地島）
岸本弘人
2015（平成27）年3月18日～20日 鳩間島
石垣 忍

石碑・記念碑等の分布状況

〔新城島〕

新城島は通称パナリ島とも呼ばれ、北東の上地島と南西の下地島は僅か数百mの海で隔てられているだけである。

現在、上地島に住民登録している人は数名に過ぎないが、豊年祭などの行事の時に島に戻って利用するための別荘的な屋敷が10数件ある。筆者が調査を行った6月下旬は祭りが終わったばかりで屋敷がきれいに清掃されているのが印象的であった。上地島には国の史跡に指定されている「タカニク」と竹富町史跡「クイヌパナ」にそれぞれ標柱と説明板があり、他には小学校跡地にコンクリート製の鉄棒があるのみであった。

下地島は現在、島のほとんどが牧場となっており、管理人が一人住んでいるだけである。下地島の栈橋からしばらく歩いた右手奥に大原小中学校下地分校跡があり、その先数十メートルの所に拜所と顕彰碑が集中している場所がある。その他には島の中央部と北西、南西部に御嶽が分布している。

下地島はかつて新城島の中心地で、人口も一定程度いたこともあり、上地島よりも石碑・記念碑の数が多い。

〔黒島〕

石碑・記念碑等は東筋集落の黒島伝統芸能館周辺と宮里集落内、および黒島小中学校の敷地内の三カ所に集中している。石碑・記念碑の数そのものは竹富島と比べて少なく、故人を顕彰した銅像は一つもない。御嶽は12カ所あり、13カ所の竹富島とそれほど変わらない。

建立年代は南風保多御嶽内の灯籠が戦前（昭和17年）に造られているのが確認できたが、その他はほとんどが1973（昭和48）年以後に造られた比較的新しいものが多い。御嶽の鳥居も含め建立年が刻まれていないもののがかなりの数に上る。

〔鳩間島〕

鳩間島は、西表島の北方約6kmの海上に位置し、周囲3.86km、面積0.96km²、人口48名と小さな島である。島の南に西表島、東南に小浜島、東側には石垣島を望むことができる。中央部が島で最も高い部分で、標高34メートルである。そこには、物見台が復元され、石が円錐台に3メートルほど積み上げられており、この小高い丘は一般に「中森」と呼ばれ、「鳩間中森」の標柱も設置されている。八重山を代表する民謡「鳩間節」はこの「中森」からの眺めを歌ったものである。この中森の東部と西部だけ大木が生い茂り、小さいながらも森としての形を成しており島の象徴的な存在である。竹富町史跡の標柱と説明板や御嶽の鳥居などが主に島の中央部から南側に分布している。

各石碑・記念碑等の記録

調査結果を元に若干の考察を行ってみたい。

（1）建立年代について

黒島、新城島、鳩間島の石碑・記念碑等（鳥居・灯籠含む）の建立年代を見ると全68件中、昭和戦前期（1926～1945年）3件（4.4%）、昭和アメリカ統治期（1946～1971年）6件（8.8%）、本土復帰以降（1972年～）42件（61.8%）、不明17件（25%）となっており、戦後に建立されたものが9割を占める。前回調査した竹富島においては王府時代に建立されたと考えられる小城盛（火番盛・遠見台）の方位石、また近代の大正時代に建立された「啓蒙台」や「敬老席」などが最も古いものであったのに対し、この3つの島の中では新城下地島の小学校跡西にある鳥居が最も古く1936（昭和11）年で続いて1942（昭和17）年に南風保多御嶽の内の灯籠がなっている。さらに、この3島で1973（昭和48）年に11件の石碑（主に記念碑）が集中して建立されているのが、ちょうど復帰の翌年にあたる

年で竹富町の文化財として、指定したために集中的にしたと思われる。しかし、竹富島は全体数からするとそれほど多くない。

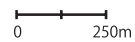
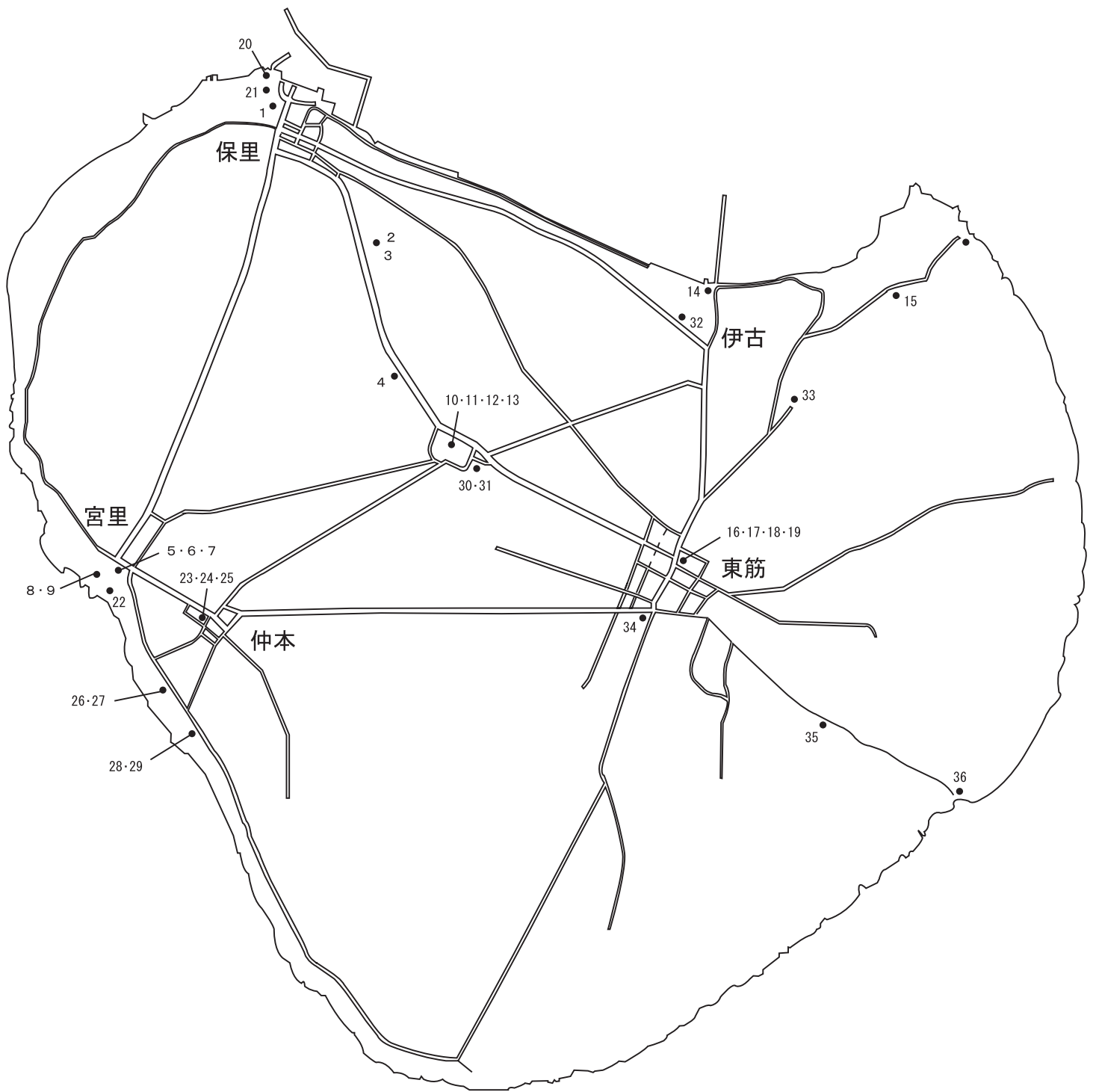
(2) 石碑・記念碑等（御嶽・灯籠を除く）の種類について

今回調査した黒島、新城島、鳩間島の石碑・記念碑等全68件中、御嶽の鳥居は18件で最も多く、と灯籠2件を合わせると全体の29.4%となり、次に記念碑の16件で全体の23.5%、この記念碑に付随して、説明板（10件 -14.7%）、標柱（11件 -16.1%）を入れると、記念碑関連で54.3%と半数を占める。

また、竹富島では、顕彰碑は全体の約12%を占めていたのに対し、この3島では、新城島の2件の3%であったのが特徴と言えよう。

引用・参考文献（順不同）

沖縄県立博物館・美術館，2012，『竹富島総合調査報告書』。



黒島記念碑等集成

番号：1

名称：黒島の紹介説明板



分類：説明板

建立年月日：1973年7月18日

建立場所：黒島港より南へ50m

材質：コンクリート表面タイル貼り 銘板は銅

法量：(全体) 高さ188cm 幅145cm

(銘板上) 縦61cm 横88cm

(銘板下) 縦24cm 横33cm

方角：東南東

設置者：

銘文：

(銘板大)

日本最南端の町 黒島 沖縄県八重山郡竹富町

位置 東経124°北緯24°14′ 石垣島西南方約19km

面積 13.7km² 八重山群島5番目 周囲12.7km

人口 590名 世帯数121 昭和初期は1000人だった

地形 低平な小島 海拔13m 隆起サンゴ石灰岩

気候 湿潤亜熱帯海洋性 平均気温23.6℃ 降水量2195.7mm

産業 農業：甘蔗作が中心であったが今は肉牛の飼育がさかんで黒島牛は八重山の名産である。

文化 島名の由来：一説に薩南諸島からの移住者が自己にゆかりの地名をつけたともいわれるが、サクシマ(珊瑚礁の島の意)からフィシマ=黒島に転訛したものであろう。民謡・伝承：黒島は民俗芸能の宝庫といわれ各部落に古くからの民謡・伝承が多い。なかでも「山崎のアブゼーマ」「黒島口説」「タラマモーサの話」などは有名である。

舞踊：唐踊、獅子舞、仲本部落の「かでく舞」保里部落の「太舞」が知られている。

科学 豊富な海洋資源開発のため海中公園研究センターの建設が予定されている。リーフはあたかも帽子のツバのように島の周囲に伸びている遠浅の環●で、干潮時は●渉が可能であるが多くの危険があるので案内なしでわたってはならない。とくに外海は突然深くなるので注意を要する。

「まっさおな空、サンゴの海、そして頭上を超音速でとびぬける戦闘機 --- 沖縄の人はしかしなぜあれ程に人の情にあついであろうか、私は今守礼の邦にいます ---」1972 一学生

(銘板小)

建立 竹富町

このリーフは長野市大学広瀬金沢公男氏の厚志によるものである

昭和48年7月15日 竹富町長 瀬戸 弘書

制作 長野県須坂市 株式会社アキタ



黒島記念碑等集成

番 号：2
名 称：イサンチャヤー標柱



分 類：標柱
建立年月日：昭和48年2月28日
建立場所：沖縄県道213号黒島港線終点より約500m地点北側
材 質：コンクリート
法 量：高さ163cm 幅19cm 奥行き19cm
方 角：南南西
設 置 者：竹富町教育委員会
銘 文：
・記念物 イサンチャヤー（古墓）
・指定 昭和47年8月30日
・建設 昭和48年2月28日
・竹富町教育委員会

番 号：3
名 称：イサンチャヤー説明板



分 類：説明板
建立年月日：
建立場所：沖縄県道213号黒島港線終点より約500m地点北側
材 質：コンクリート
法 量：高さ120cm 幅41cm 奥行き9cm
方 角：南南西
設 置 者：竹富町教育委員会
銘 文：
・イサンチャヤー（古墓）
・黒島初代の役人高嶺首里
・大屋子夫妻の墓 この島にはじめて
・牛を入れた恩人である

番 号：4
名 称：水道記念碑

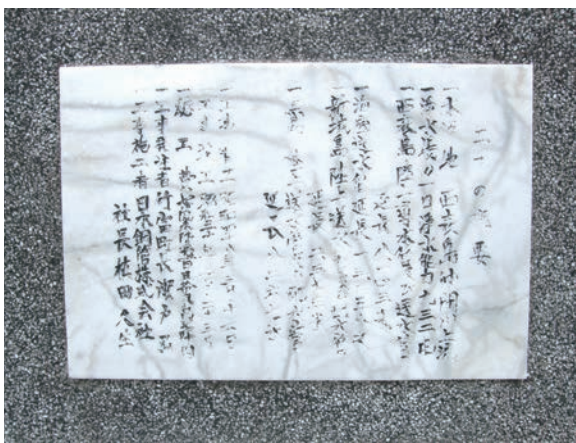


分 類：記念碑
建立年月日：昭和50年2月23日
建立場所：黒島小中学校西100m
材 質：コンクリート
法 量：（全体）高さ330cm 幅337cm 奥行き114cm
（表上銘板）縦50cm 横111cm
（表下銘板）縦43cm 横95cm
（裏銘板）縦43cm 横65cm
方 角：東北東
設 置 者：
銘 文：
（表上銘板）
水道記念碑
初代沖縄開発庁長官

山中貞則書

(表下銘板)

黒島新城島は昔から水に恵まれず島の住民は天水を頼り早魃時は石垣島や西表島から運搬し言語に絶する生活苦と闘い今日に至った。町はこの島の水解決のため当時の琉球政府や米民政府に要請し、度を重ねて地下水源の探査をしたが水源がなく西表島から海底送水の結論に及んだ。それによって県や政府に強力な陳情を続けた。工事の着工までは夢とも言はれたがこの歴史的工事の着工が当時の山中総務長官の卓越せる政治手腕と離島住民を思う御温情により見事完成を見たのである。この水道の実現こそは島の住民にとって正に苦節幾百年の輝しい実りであり、この歓喜他に勝るものわなない本海底送水の実現方について格段の御協力を戴いた県並びに政府に対し深甚な謝意を表す。この施設が永遠に住民に明るい希望を抱かせ郷土の建設と福祉繁栄をもたらし島の礎となることを祈念する。
昭和五十年二月二十三日
竹富町



(裏銘板)

工事の概要
 水源地 西表島仲間川上流
 浄水場の一日浄水能力九三二屯
 西表島陸上導水管及び送水管
 延長八一四三米
 海底送水管延長 一三、二五八米
 新城島陸上送水管及び配水管
 延長八、二六七米
 工事着工 昭和四十八年三月十六日
 工事竣工 昭和五十年二月二十三日
 総工費 七億参阡壹百五拾九萬七阡円
 工事発注者 竹富町長 瀬戸弘
 工事施工者 日本鋼管株式会社
 社長 楨田久生

黒島記念碑等集成

番号：5
名称：学校教育発祥之地



分類：標柱
建立年月日：
建立場所：黒島ビジターセンターの庭
材質：コンクリート
法量：高さ110cm 幅45cm 奥行き10cm
方角：南南西
設置者：
銘文：(表)・学校教育発祥之地
・大川尋常小学校黒島分校
(裏)・明治26年(1893年)6月12日創立

番号：6
名称：番所跡の標柱



分類：標柱
建立年月日：昭和48年2月28日
建立場所：黒島ビジターセンターの庭
材質：コンクリート
法量：高さ151cm 幅18cm 奥行き18cm
方角：南南西
設置者：竹富町教育委員会
銘文：(正面) 史跡 番所跡
(左面) 指定 昭和四七年八月三〇日
(裏面) 建設 昭和四八年二月二八日
(右面) 竹富町教育委員会

番号：7
名称：番所跡の説明板



分類：説明板
建立年月日：
建立場所：黒島ビジターセンターの庭
材質：コンクリート
法量：高さ120cm 幅41cm 奥行き9cm
方角：南南西
設置者：
銘文：・番所跡
・旧藩時代この島を
・統治した役所跡である

黒島記念碑等集成

番号：8
名称：フズマリの標柱



分類：標柱
建立年月日：昭和四十八年二月二十八日
建立場所：フズマリの脇
材質：コンクリート
法量：高さ152cm 幅19cm 奥行き19cm
方角：西北西
設置者：竹富町教育委員会
銘文：

- ・(正面) 記念物 フズマリ (高盛・火番盛)
- ・(左面) 指定 昭和47年8月30日
- ・(裏面) 建設 昭和48年2月28日
- ・(右面) 竹富町教育委員会

番号：9
名称：フズマリの説明板



分類：説明板
建立年月日：
建立場所：フズマリの脇
材質：コンクリート
法量：高さ114cm 幅41cm 奥行き9cm
方角：西北西
設置者：
銘文：

- ・フズマリ (タカムイ)
- ・旧藩時代海上の監視や船の通報
- ・のため烽火を掲げた所黒島口説の
- ・「メーヌタカムイ」はここである。

番号：10
名称：黒島小学校創立百周年記念碑



分類：記念碑
建立年月日：1993年6月
建立場所：黒島小学校内体育館横
材質：(台座) 石灰岩 (銘板) 御影石
法量：(台座) 高さ200cm 幅230cm
(銘板) 高さ80cm 幅60cm
方角：北東
設置者：
銘文：

- はばたけ
- 黒潮の子
- 肝びしち
- 色びしち
- 黒島小学校創立
- 百周年

黒島記念碑等集成

番 号：11

名 称：黒島小中学校校歌



分 類：歌碑

建立年月日：平成元年10月

建立場所：黒島小学校内校舎横

材 質：(台座) 石灰岩 (銘板) 御影石

法 量：(台座) 高さ200cm 幅220cm 奥行40cm
(銘板) 縦50cm 横100cm

方 角：南南西

設 置 者：

銘 文：

(表)

- ・黒島小中学校校歌
- ・作詞 伊波南哲
- ・作曲 外間永律
- ・一. 黒潮おどり 空青く
人はうるわし 南の
緑の丘を 仲原に
真理の鐘は いんいんと
島越え遠く 海渡る
あゝわが母校 黒島校
- 二. 心に太陽 口にうた
もゆる望みに 胸はなり
見よや五体に わく力
嵐吹くとも 肩くみて
力のかぎり こぎゆかん
あゝあが母校 黒島校
- 三. きびの葉ゆれて かいの夢
月もさやかに 風なごみ
海から山へ 幸まねく
友よ健児よ 大らかに
築きあげなん 平和郷
あゝわが母校 黒島校

(裏)

- ・贈
- ・昭和16・7年生
- ・パナスミー会
- ・平成元年10月
- ・揮毫
- ・西真雄 氏

黒島記念碑等集成

番号：12
名称：法務大臣賞の碑



分類：記念碑
建立年月日：
建立場所：黒島小学校内体育館横
材質：(台座) 御影石 (銘板) 御影石
法量：(台座) 高さ107cm 幅115cm 奥行き40cm
方角：北
設置者：
銘文：
・第52回
・社会を明るくする運動作文コンテスト
・法務大臣賞
・宮良もも子
・平成14年12月26日

番号：13
名称：黒島中学校50周年記念碑



分類：記念碑
建立年月日：
建立場所：黒島小中学校裏門脇
材質：
法量：(台座) 高さ127cm 幅310cm 奥行き150cm
(銘石) 高さ156cm 幅240cm 奥行き38cm
(銘板表) 縦70cm 横200cm
(裏銘板) 縦70cm 横50cm

方角：南西
設置者：
銘文：

(表)

①

- ・心
- ・黒島中学校50周年記念事業

②

- ・黒島中学校の歴史
- ・本校は明治二十六年六月十二日
- ・宮里部落でかやぶき十二坪の
- ・大川尋常小学校黒島分校として
- ・産声を上げ、その後大川尋常小学校
- ・黒島分教場、黒島尋常小学校と
- ・つぎつぎ改名する。
- ・大正十一年七月十日に宮里部落
- ・から島のほぼ中央に位置する
- ・現在地(仲原)へ移転し、校名も黒島
- ・尋常高等小学校、黒島国民学校
- ・黒島初等学校とさらに変遷を
- ・繰り返す中、学制改革により
- ・昭和二十四年四月一日に黒島初等
- ・学校が黒島小学校と黒島中学校



- ・に改名された。
- ・当初の中学校は、一年生三十二名
- ・二年生三十一名、三年生六名
- ・計六十九名の向学に志す生徒で
- ・開校し、現在に至る。

(裏)

- ・いつも喜んでいなさい
- ・絶えず祈りなさい
- ・すべての事について感謝しなさい
- ・寄贈者
- ・中元 展 (童名マイチ)
- ・一九〇九年 (明治四十二年) 二月十一日生
- ・竹富町黒島字仲本 出身
- ・父 本原 保久利
- ・母 ウナヒト

番 号：14

名 称：伊古棧橋登録有形文化財の碑



分 類：記念碑

建立年月日：

建立場所：伊古棧橋たもと

材 質：(台座) コンクリート (碑) 石灰岩
(銘板) 銅

法 量：(台座) 高さ30cm 幅100cm 奥行き100cm
(碑) 高さ80cm 幅65cm
(銘板) 縦21cm 横30cm

方 角：南

設 置 者：文化庁

銘 文：

登録有形文化財

第47-0010号

この建造物は重要な国民的財産です
文化庁

番 号：15

名 称：獣魂の碑



分 類：記念碑

建立年月日：

建立場所：北神山御嶽から阿名泊御嶽向けの細道沿いにある牧場
施設内

材 質：(碑) 石灰岩 (銘板) 御影石

法 量：(全体) 高さ250cm 幅110cm 奥行きcm

方 角：北

設 置 者：

銘 文：

(表) 獣魂の碑

黒島記念碑等集成

番 号：16

名 称：日本の道100選の碑



分 類：記念碑

建立年月日：昭和62年10月

建立場所：黒島伝統芸能館の北側

材 質：(碑) 石灰岩

(銘板) 御影石

法 量：(全体) 高さ250cm 幅180cm

(銘板表) 縦25cm 横25cm

(銘板裏) 縦55cm 横85cm

方 角：西北西

設 置 者：・建設省「道の日」実行委員会

銘 文：

(表) 道

日本の道100選

県道黒島港線

昭和61年8月10日

建設省「道の日」●●●●会

(裏)

この顕彰碑は、建設省が道路に対する国民の関心を高める目的で、昭和六十一年度から八月十日を「道の日」にせいでいたのにちなんで、「日本の道百選」に日本全国から推薦された百四十一の道路の中から県内で初めて県道黒島港線が選定されたことを記念し設置するものである。

記

県道黒島港線は、東筋集落を起点とし、黒島港を終点とする延長二千四百三十八メートルで、昭和五十六年度から昭和五十八年度にかけて総工費およそ九千万円を投じ、昔ながらの石垣や赤瓦屋根など島の代表的景観を配慮し、琉球石灰岩による石垣の復元、クリーンベルトを兼ねた地下浸透式の排水溝など構造物に工夫を凝らした地域独特の文化や景観に調和した道づくりが高く評価された。

なお、顕彰プレートは、東京オリンピックシンボルマークをはじめ、日本万国博覧会ポスター、沖縄海洋博覧会ペットマークなどを製作した亀倉雄策氏によってデザインされたものである。

昭和六十二年十月

沖縄県八重山土木事務所

黒島記念碑等集成

番号：17

名称：八重山舞踊勤王流ゆかりの地



分類：記念碑

建立年月日：1996年11月10日

建立場所：黒島伝統芸能館前

材質：御影石

法量：(全体) 高さ240cm 幅280cm 奥行き230cm

方角：西

設置者：八重山舞踊勤王流記念碑建立期成会

銘文：

(表上) 八重山舞踊

勤王流ゆかりの地

(表下)

八重山舞踊勤王流は、比屋根安弼（一八三五～一九〇一年）によって創設され、諸見里秀思（一八七六～一九四五年）の代に盤石の基礎が築かれ、渡慶次長智（一八八七～一九六二年）らに引き継がれて八重山芸能の興隆に多くの彩りを添えてきた。

比屋根安弼は、首里で生を享け、鳩間島・西表島古見村を経て黒島で終生を過ごした。

この地は、諸見里秀思の居住跡であり、仲本村に居を構えていた比屋根安弼や近隣に住んでいた渡慶次長智及び島の人々と共に数多くの名作を創案・作成した由緒ある場所である。

ここに、八重山舞踊勤王流を称揚し、その創設・完成に関わった先師を顕彰するための祈念碑を建立する。

一九九六年十一月一日

八重山舞踊勤王流記念碑建立期成会

番号：18

名称：黒島伝統芸能館



分類：記念碑

建立年月日：平成3年10月25日

建立場所：黒島伝統芸能館前

材質：(台座) コンクリート

(碑) 石灰岩

(銘板) 御影石

法量：(全体) 高さ270cm 幅280cm

(銘板) 縦30cm 横80cm

方角：北北西

設置者：

銘文：

(表) 黒島伝統芸能館

(裏) 寄贈 平成三年十月二十五日

名古屋鉄道株式会社

取締役会長 竹田弘太郎

黒島記念碑等集成

番 号：19

名 称：勤王流舞踊の二十二手の名稱



分 類：記念碑

建立年月日：

建立場所：黒島伝統芸能館前

材 質：御影石

法 量：(全体) 高さ128cm 幅90cm 奥行き10.5cm

方 角：西

設 置 者：勤王流八重山舞踊保存会

銘 文：

勤王流始祖・比屋根安弼・諸見里秀思・渡慶次長智

勤王流八重山舞踊保存会 石垣寛吏

勤王流舞踊の二十二手の名稱

起 怨 凱 斜 歡 示 視

恩 顧 奉 納 風 摩 招 摩

無 窮 登 峰 遠 眺 瞬 眸

思 出 翻 熾 戀 想 袖 懷

警 巖 尊 顏 揮 前 進 貢

飛 龍 降 龍

番 号：20

名 称：ハブのお宮の鳥居



分 類：鳥居

建立年月日：

建立場所：黒島港の北西30m

材 質：コンクリート

法 量：高さ210cm 幅181cm 奥行き17cm

方 角：南南西

設 置 者：

銘 文：

番 号：21

名 称：保里嶽の鳥居



分 類：鳥居

建立年月日：

建立場所：黒島港の北西10m

材 質：コンクリート

法 量：高さ340cm 幅340cm 奥行き45cm

方 角：北東

設 置 者：

銘 文：

黒島記念碑等集成

番 号：22
名 称：船浦嶽の鳥居



分 類：鳥居
建立年月日：
建立場所：フズマリの南東約30m
材 質：コンクリート
法 量：高さ270cm 幅280cm
方 角：南南東
設 置 者：
銘 文：

番 号：23
名 称：仲本神社寄附者芳名揭示板



分 類：揭示板
建立年月日：1957年11月丁酉
建立場所：仲本集落内
材 質：コンクリート
法 量：高さ185cm 幅272cm
方 角：西北西
設 置 者：
銘 文：一九五七年十一月丁酉建設
仲本神社
寄附者芳名
金額 住所 氏名
(以下略)

番 号：24
名 称：うぶはあのお宮鳥居



分 類：鳥居
建立年月日：1957年11月
建立場所：仲本集落内
材 質：コンクリート
法 量：高さ270cm 幅310cm
方 角：南南西
設 置 者：
銘 文：

黒島記念碑等集成

番号：25
名称：うぶはあ



分類：
建立年月日：
建立場所：うぶはあのお宮内
材質：コンクリート
法量：高さ43cm 幅14cm 奥行き8cm
方角：南南西
設置者：
銘文：うぶはあ

番号：26
名称：迎里御嶽の鳥居



分類：鳥居
建立年月日：平成18年1月
建立場所：迎里御嶽
材質：コンクリート
法量：高さ255cm 幅235cm 奥行き20cm
方角：北
設置者：
銘文：

番号：27
名称：迎里御嶽の灯籠



(左)



(右)

分類：灯籠
建立年月日：
建立場所：迎里御嶽の鳥居脇
材質：コンクリート、石灰岩
法量：(右) 高さ107cm 幅47cm 奥行き40cm
 (左) 高さ107cm 幅40cm 奥行き30cm
方角：北
設置者：
銘文：

黒島記念碑等集成

番 号：28

名 称：南風保多御嶽の鳥居



分 類：鳥居

建立年月日：

建立場所：南風保多御嶽

材 質：コンクリート

法 量：高さ310cm 幅340cm 奥行き35cm

方 角：北東

設 置 者：

銘 文：

番 号：29

名 称：南風保多御嶽内の灯籠



分 類：灯籠

建立年月日：(右) 昭和17年旧10月26日

(左) 昭和17年旧9月17日

建立場所：南風保多御嶽内

材 質：コンクリート

法 量：(右) 高さ103cm 幅26cm

(左) 高さ110cm 幅26cm

方 角：北

設 置 者：

銘 文：(右) 奉納 山田繁

(左) 奉納

番 号：30

名 称：乾震堂



分 類：記念碑

建立年月日：1970年7月23日

建立場所：黒島小中学校東約10m

材 質：コンクリート

法 量：高さ140cm 幅63cm 奥行き19cm

方 角：北

設 置 者：

銘 文：乾震堂

黒島記念碑等集成

番 号：31
名 称：乾震堂横の鳥居



分 類：鳥居
建立年月日：昭和30年1月21日
建立場所：黒島小中学校東約10m
材 質：コンクリート
法 量：高さ300cm 幅300cm 奥行き30cm
方 角：北
設 置 者：
銘 文：

番 号：32
名 称：仲盛御嶽の鳥居



分 類：鳥居
建立年月日：
建立場所：伊古部落三叉路より保里向け50m
材 質：コンクリート
法 量：高さ320cm 幅300cm 奥行き30cm
方 角：南南西
設 置 者：
銘 文：

番 号：33
名 称：北神山御嶽の鳥居



分 類：鳥居
建立年月日：昭和25年旧11月13日
建立場所：東筋集落北東約750m
材 質：コンクリート
法 量：高さ270cm 幅260cm 奥行き35cm
方 角：南西
設 置 者：
銘 文：
（左表）奉
（右表）納
（右裏）寄贈 西神山嶽
 信仰者一同

黒島記念碑等集成

番 号：34
名 称：比江地御嶽の鳥居



分 類：鳥居
建立年月日：
建立場所：
材 質：コンクリート
法 量：高さ290cm 幅280cm 奥行き28cm
方 角：東南東
設 置 者：
銘 文：

番 号：35
名 称：南神山御嶽の鳥居

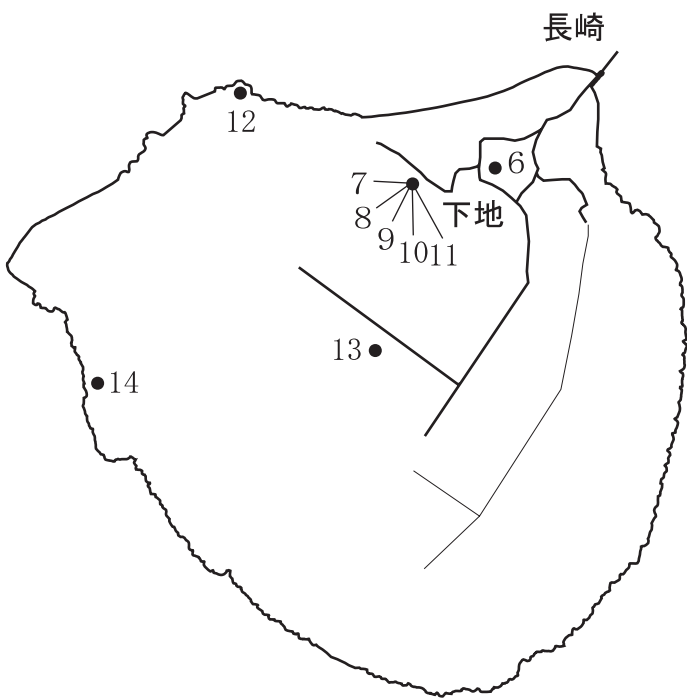
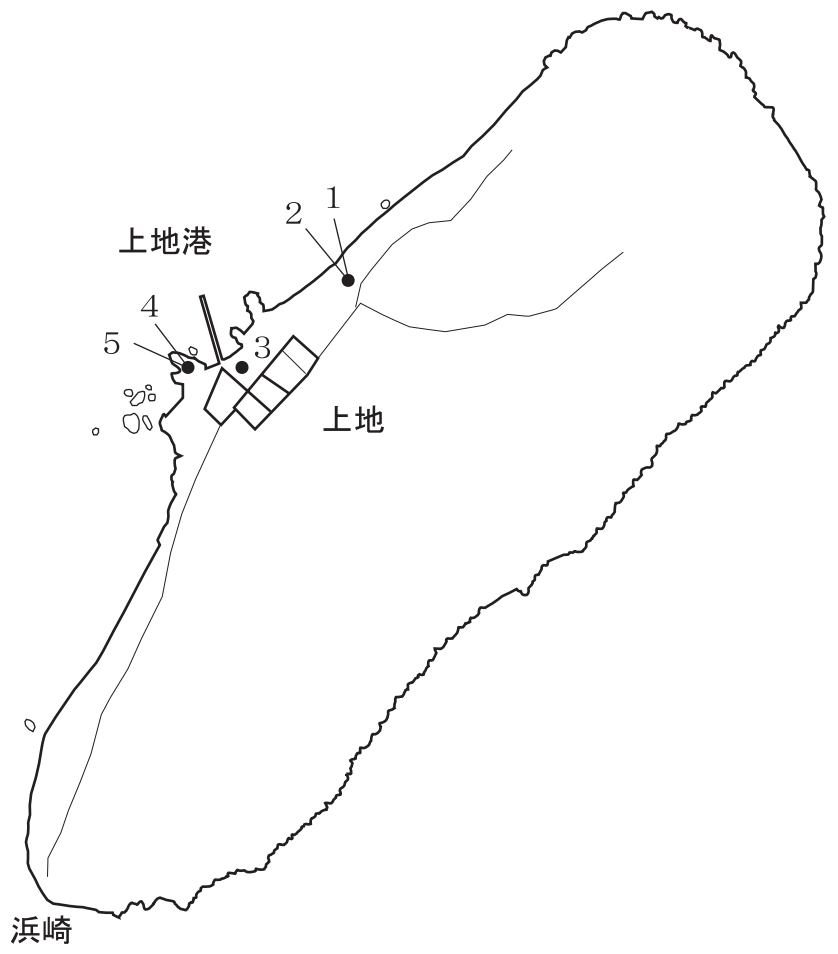


分 類：鳥居
建立年月日：昭和29年旧9月9日
建立場所：
材 質：コンクリート
法 量：高さ320cm 幅310cm 奥行き28cm
方 角：北北東
設 置 者：
銘 文：
 (左) 表：奉
 裏：昭和二十九年旧九月九日
 (右) 表：納
 裏：玉代勢
 クヤマ米寿記念
 親族一同

番 号：36
名 称：喜屋武御嶽の鳥居



分 類：鳥居
建立年月日：
建立場所：
材 質：コンクリート
法 量：高さ360cm 幅310cm 奥行き40cm
方 角：北
設 置 者：
銘 文：
 (左) 表：奉
 裏：昭和五十二年巳
 年十月十五日建立
 (右) 表：納
 裏：大工 仲底忠男氏



新城島内石碑等集成

番 号：1
名 称：タカニク（火番盛）の標柱



分 類：標柱
建立年月日：昭和四八年二月二八日
建立場所：タカニクの脇
材 質：コンクリート
法 量：高さ157cm 幅18cm 奥行き18cm
方 角：西
設 置 者：竹富町教育委員会
銘 文：(正面) 記念物タカニク（火番盛）
(右面) 竹富町教育委員会
(背面) 昭和四八年二月二八日
(左面) 指定 昭和四七年八月三〇日

番 号：2
名 称：タカニク（火番盛）の説明板



分 類：説明板
建立年月日：
建立場所：タカニクの脇
材 質：コンクリート
法 量：高さ107cm 幅41cm 奥行き9cm
方 角：西
設 置 者：竹富町教育委員会
銘 文：旧藩時代海上の監視や船の
通報のため烽火を揚げた所。

番 号：3
名 称：小学校跡地の鉄棒



分 類：
建立年月日：1964年7月18日
建立場所：上地島小学校跡地
材 質：コンクリート
法 量：幅23cm 奥行き23cm 高さ221cm、160cm、
128cm 間隔170cm
方 角：南南西
設 置 者：
銘 文：(正面) 寄贈 加藤 孝
(右面) 一九六四年七月十八日竣工 大工
与儀清邦
石垣三郎

新城島内石碑等集成

番 号：4
名 称：クイヌパナの標柱



分 類：標柱
建立年月日：昭和48年2月28日
建立場所：クイヌパナへの道脇
材 質：コンクリート
法 量：高さ143cm 幅18.5cm 奥行き18.5cm
方 角：北東
設 置 者：竹富町教育委員会
銘 文：（正面）クイヌパナ
（右面）竹富町教育委員会
（背面）指定 昭和四七年 八月三〇日
（左面）建設 昭和四八年二月二八日

番 号：5
名 称：クイヌパナの説明板



分 類：説明板
建立年月日：
建立場所：クイヌパナへの道脇
材 質：コンクリート
法 量：高さ103cm 幅41cm 奥行き9cm
方 角：北東
設 置 者：竹富町教育委員会
銘 文：自然の丘陵に石を積み上げて造った昔の見晴台この島の民謡クイヌパナ節に歌われている

番 号：6
名 称：大原小中学校下地分校跡記念碑



分 類：記念碑
建立年月日：昭和五十九年七月吉日
建立場所：下地島小学校跡地
材 質：御影石
法 量：高さ66.5cm 幅46cm 奥行き9.3cm
（銘板）縦50.5cm 横84.5cm
（台座）1段目 高さ67cm 幅140cm 奥行き128cm
2段目 高さ19cm 幅91cm 奥行き51cm
方 角：西南西
設 置 者：下地島学校跡地記念碑建立期成会

新城島内石碑等集成



- 銘 文：(表) 大原小中学校下地分校跡
 (裏)・廃校三十周年にあたり此に建立する
 ・昭和五十九年七月吉日
 ・下地島学校跡地記念碑建立
 ・期成会

(文字盤)

- ・明治二十九年六月十三日
- ・大川尋常小学校の分教場として創立
- ・(新城番所附属真納布機織小屋で開校)
- ・〃〃三十四年三月
- ・大川尋常小学校新城分教場と改称
- ・〃〃三十九年五月一日
- ・黒島尋常小学校の分教場となる
- ・〃〃四十年四月一日
- ・新城尋常小学校と改称し、独立校となる
- ・大正九年五月十一日
- ・新城下地に仮教室を設置
- ・(通学不能の場合学習セシムルタメ)
- ・昭和十六年四月一日
- ・新城国民学校と改称(高等科併設)
- ・〃〃十九年四月一日
- ・新城国民学校下地分教場を対岸南風
- ・見ザラ崎二〇一番地に移築開校式挙行
- ・〃〃二十一年四月一日
- ・新城国民学校を大原国民学校に改称
- ・〃〃二十一年六月四日
- ・新城下地分教場設置認可
- ・〃〃二十一年七月一日
- ・国民学校を初等学校と改称
- ・〃〃二十四年四月一日
- ・大原小中学校下地分校と改称
- ・〃〃二十八年六月六日
- ・大原中学校下地分校廃止
- ・〃〃二十九年四月五日
- ・大原小学校下地分校廃校

番 号：7
 名 称：下地神やどる拝所



- 分 類：
 建立年月日：昭和五十九年六月吉日建立
 建立場所：下地島小学校跡西
 材 質：御影石
 法 量：高さ50cm 幅30cm 奥行き10cm
 方 角：南西
 設 置 者：下地同胞一同
 銘 文：(表) 下地神やどる拝所
 (裏)・昭和五十九年六月吉日建立
 ・建立者 下地同胞一同

新城島内石碑等集成

番号：8
名称：



分類：鳥居
建立年月日：昭和11年6月
建立場所：下地島小学校跡西
材質：コンクリート
法量：高さ280cm 幅240cm
方角：北北東
設置者：
銘文：・奉納 昭和十一年六月建立
・新川盛光

番号：9
名称：故新川亀翁生誕一六五年記念之碑



分類：顕彰碑
建立年月日：昭和五十九年六月吉日
建立場所：下地島小学校跡西
材質：御影石
法量：高さ90cm 幅38cm 奥行き13cm
(台座) 1段目 高さ2cm 幅160cm 奥行き160cm
2段目 高さ15cm 幅120cm 奥行き120cm
3段目 高さ15cm 幅80cm 奥行き80cm

方角：南西
設置者：新川家子孫一同

銘文：
・経歴 御先祖故亀翁は一六五年前当所に出生生来
・温厚篤実な人柄で博く人を愛し村のために尽くされた
・ことは世人手本なりとの伝承を深く感謝しております。
・一八六二年一月六日下地島の東南岸暗礁に米國船坐礁難破せる
・見て单身急行し米人等の救助に当り村人と協力し直ちに当時の
・蔵元当局へ急報し本國へ帰還させられた功績と御遺徳を
・偲びここに祈念碑を建立す
・昭和五十九年六月吉日
・建立者 新川家子孫一同



新城島内石碑等集成

番 号：10
名 称：故新川ツルマ媼之碑



分 類：顕彰碑
建立年月日：昭和61年5月吉日
建立場所：下地島小学校跡西
材 質：御影石
法 量：高さ69.5cm 幅30cm 奥行き10.5cm
 (台座) 1段目 高さ15cm 幅100cm 奥行き100cm
 2段目 高さ15cm 幅70cm 奥行き70cm
方 角：北東
設 置 者：新川家子孫一同
銘 文：
・故ツルマ媼は生来靈力高く慶応三年（丁卯）下地島
・御出生され二十七才の癸巳年に神の託宣啓示あり神宿
・拝所を創建され島の神信仰を啓蒙されたその
・偉大なる業績を御遺徳を偲びここに記念の碑を建てる
・昭和六十一年（丙寅）五月吉日建立
・新川家子孫一同

番 号：11
名 称：神宿拝殿改築記念碑



分 類：記念碑
建立年月日：昭和11年7月19日
建立場所：下地島小学校跡西
材 質：コンクリート
法 量：高さ113cm 幅23cm 奥行き13cm
 (台座) 1段目 高さ15cm 幅70cm 奥行き51cm
 2段目 高さ15cm 幅50cm 奥行き34cm
方 角：北西
設 置 者：
銘 文：(正面) 神宿拝殿改築記念碑
 (右面) 昭和十一年七月十九日新川盛光謹書

番 号：12
名 称：ななぞう御嶽拝所



分 類：
建立年月日：昭和六十年六月十八日
建立場所：下地島北西部
材 質：御影石
法 量：高さ67cm 幅30cm 奥行き10cm
 (台座) 1段目 高さ15cm 幅120cm 奥行き120cm
 2段目 高さ15cm 幅90cm 奥行き90cm
 3段目 高さ15cm 幅60cm 奥行き60cm
方 角：南
設 置 者：下地島出身者一同
銘 文：(表)・ななぞう御嶽拝所
 ・海の神
 (裏)・昭和六十年六月十八日建立
 ・下地島出身者一同

新城島内石碑等集成

番 号：13
名 称：大中城御嶽神座

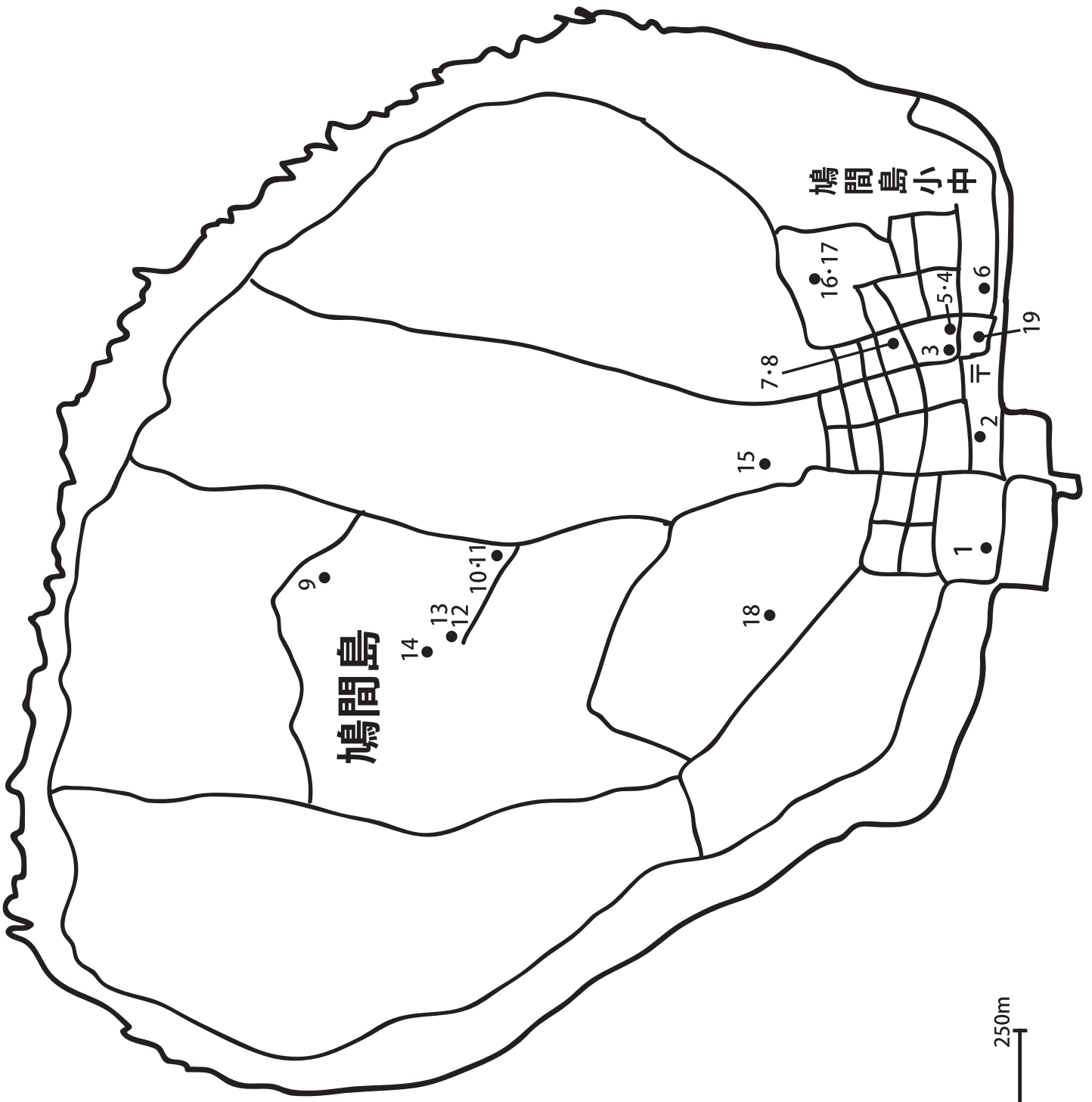


分 類：記念碑
建立年月日：昭和六十二年六月吉日
建立場所：下地島火番盛東方
材 質：コンクリート
法 量：高さ114cm 幅20.5cm 奥行き11cm
方 角：北東
設 置 者：下地島出身者一同
銘 文：
・此処新城四五二ノ森ワ古来鎮守ノ親神ゲ 靈力高く尊崇
・サレ人跡未踏ノ聖域ナリ祭事拝礼ハ南方四五四番地ノ
・拝所ゲ行ナワレタ依ッテココニ祈念碑ヲ建立スル
・昭和六十二年六月吉日建立 下地島出身者一同

番 号：14
名 称：下地西御嶽拝所



分 類：
建立年月日：昭和五十九年六月吉日
建立場所：下地島西部
材 質：御影石
法 量：高さ54cm 幅30cm 奥行き10cm
 (台座) 1段目 高さ15cm 幅122cm 奥行き122cm
 2段目 高さ15cm 幅81cm 奥行き81cm
 3段目 高さ15cm 幅51cm 奥行き51cm
方 角：東南東
設 置 者：下地氏子一同
銘 文：(表) 下地西御嶽拝所
 (裏)・昭和五十九年六月吉日建立
 ・建立者 下地氏子一同



鳩間島内石碑等集成

番号：1

名称：戦死者・マラリア死亡者慰霊之碑



分類：慰霊之碑

建立年月日：平成元年六月

建立場所：いとま浜ターミナル向い

材質：コンクリート 銘板は御影石

法量：(全体) 幅114cm 高さ76cm 奥行き14cm

(表上銘板) 幅114cm 高さ76cm 奥行き14cm

(表下銘板) 幅114cm 高さ76cm 奥行き14cm

(裏銘板) 幅114cm 高さ76cm 奥行き14cm

方角：南

設置者：田代浩

銘文：(正面) 太平洋戦争は鳩間島でも日夜敵機の飛来して無数の爆弾の投下を受けて尊い人命を失い家屋その他も多大なる損害を蒙った。当時西表島防衛司令官下永部隊長の軍命に依り島民は昭和二十年三月対岸の西表島に余儀なく強制的に疎開させられた。島民は疎開先の山野で七ヶ月間現地生活を強いられた。その間敵機の猛烈なる機銃掃射のため死亡する者、悪性マラリアで罹患して死亡する者、現地を引き上げる者や、食料の欠乏と栄養失調等更にマラリアが再発して高熱のため死亡する等後を絶えなかった。その死亡者数は遂に九十余名となり戦死者十一名を加えると一〇〇を数えるに至った。

ここに霊を慰め恒久的平和を願い碑を建立す。

平成元年六月

建立者 田代浩

(背面) 戦死者芳名

兼久 屋真 (陸軍)

通事 太郎 (海軍)

大工 良祐 (〃)

浦崎 英八 (〃)

小浜 博 (〃)

西加治工 三郎 (〃)

西加治工 弘 (陸軍)

田代 新英 (陸軍)

伊豆味 亀一 (陸軍)

大浜 長度 (軍属)

以上十一名

鳩間島内石碑等集成

番 号：2
名 称：ヒナイ御獄の鳥居



分 類：鳥居
建立年月日：平成9年7月27日
建立場所：鳩間島簡易郵便局西65m
材 質：コンクリート
法 量：高さ265cm 幅250cm 奥行き25cm
方 角：北
銘 文：(正面) 奉納
(背面) 平成九年七月二十七日建立

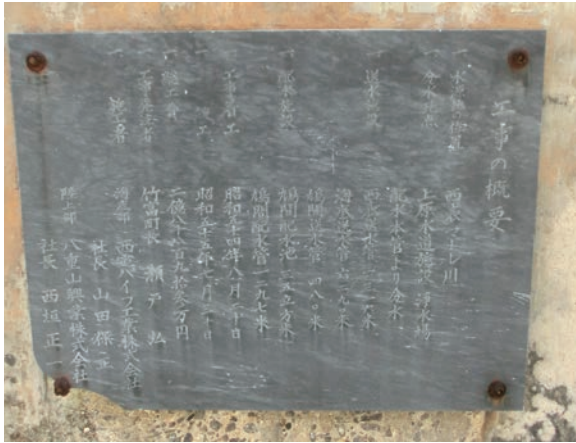
番 号：3
名 称：鳩間島水道記念の碑



分 類：記念碑
建立年月日：昭和55年7月30日
建立場所：鳩間島コミュニティセンター敷地内西側
材 質：コンクリート 銘板は御影石
法 量：(全体) 幅228cm 高さ250cm 奥行き77cm
方 角：南
設 置 者：竹富町長 瀬戸 弘
銘 文：(正面上) 鳩間島水道記念の碑
国務大臣
沖縄開発庁長官 小渕恵三
(正面上) 鳩間島は昔から水に恵まれず島の人々は
天水をウイヌカー アンヌカー インヌカー
を頼りに生活を営み旱魃時には西表
島から水を運ぶという言語に絶する苦難
と戦いながら生命をつないできた。
この島の水道施設は国県の人口基準等
多くの問題があってその実現には極めて
難渋した。
而しその基準に左右されることなく人間の
生命維持と島の発展は多くの過去の歴史
が示すように水の解決を図ることに信念
を堅持してその実現には政治生命をかけ
地元住民や議会の協力を得てねばり強く
陳情を重ねてきた。
本町では先に黒島、新城、竹富、小浜
各島の海底水道が完成し鳩間島も同様
その完成を見たことは歴史的な事業と
して感懐深いものがある。
ここに政府県の関係機関に対し深く感謝
の意を表す。
この海底水道の施設によって島民の生活
向上と未来の展望が拓け永遠に島の繁栄
の礎となることを祈念してこの碑を建立し
永く記念とする
昭和五十五年七月三十日



鳩間島内石碑等集成



竹富町長 瀬戸 弘

(背面) 工事の概要

- 一、水源地の位置 西表マーレ川
- 一、水地点 上原 水道施設上水道
配水本官より分水
- 一、送水施設 西表送水管 一三一六米
海底送水管 六二九〇米
鳩間送水管 四八〇米
- 一、配水施設 鳩間配水池 三五立方メートル
鳩間配水管 一二九七米
- 一、工事着工 昭和五十四年八月二十日
竣工 昭和五十五年七月三十日
- 一、総工費 二億八千八百九拾参万円
- 一、工事発注者 竹富町長 瀬戸 弘
- 一、施工者 海底部 西電パイプ工業株式会社
社長 山田 保
陸上部 八重山興業株式会社
社長 西垣 正

番号：4
名称：鳩間小学校発祥の地



分類：記念碑

建立年月日：平成8年6月19日

建立場所：鳩間島コミュニティセンター敷地内東側

材質：砂岩（ニービ）

法量：高さ82cm 幅160cm 奥行き36cm

方角：南

設置者：卒業生同窓生 沖縄在小鳩会

銘文：(正面) 鳩間小学校発祥の地

(左面) 此の麗しき鳩間島に
父母よ安らかれ友よ待て
学びの業のなるときに
錦かざりて帰るまで

(背面) かつて番所があり、鳩間島における庶民教育の発祥の地でもあるこのゆかりの地において明治二九（一八九六）年六月一九日に大川尋常小学校鳩間分校が設置された。由緒ある母校の校史を讀るとともに学問と平和と故郷を愛したかつての少年・少女たちにとって此の地が心のふるさとであることの証として永く記憶にとどめてもらうべく創立百周年を記念して本碑を建立する
平成八（一九九六）年六月一九日吉日

卒業生同窓生
沖縄在小鳩会

鳩間島内石碑等集成

番 号：5
名 称：ふるさと歌碑



分 類：歌碑
建立年月日：
建立場所：鳩間小学校発祥の地横
材 質：砂岩（ニービ）
法 量：（全体）幅120cm 高さ107cm 奥行き18cm
方 角：南
設 置 者：
銘 文：兎追いしかの山
小鮒釣りしかの川
夢は今もめぐりて
忘れがたき故郷

こころざしをはたして
いつの日にか帰らん
山はあをき故郷
水は清き故郷

番 号：6
名 称：前泊御獄の鳥居



分 類：鳥居
建立年月日：昭和五十九年七月吉日
建立場所：郵便局東68m
材 質：コンクリート
法 量：高さ280cm 幅260cm 奥行き28cm
方 角：南
銘 文：（表）奉納
（裏）一九五五年
新七月二十四日
旧六月六日 建立

番 号：7
名 称：鳩間郵便局之跡の標柱



分 類：標柱
建立年月日：
建立場所：鳩間小学校発祥の地西70m
材 質：コンクリート 銘板は御影石
法 量：（全体）幅15cm 高さ60cm 奥行き18cm
方 角：南
設 置 者：
銘 文：（表）鳩間郵便局之跡

鳩間島内石碑等集成

番 号：8
名 称：鳩間島沿革



分 類：説明板

建立年月日：昭和63年8月

建立場所：鳩間郵便局之跡の標柱横

材 質：コンクリート銘板は御影石

法 量：(全体) 幅140cm 高さ90cm 奥行11cm

方 角：南

設 置 者：田代浩

銘 文：(正面) 鳩間島は周囲四・二キロで昭和十三年頃には人口八百余名擁し鰹漁船六隻半農半漁の生計を維持していた。昭和十三年郵便取扱所開所され所長に故通事浩氏就任、昭和十五年特定郵便局設置初代局長に田代浩氏が任命された。昭和十八年大東亜戦争は益々悪化し島にも無数の爆弾が投下され軍命に依り島人は西表島北岸、赤離・上原一帯に避難を余儀なくされた。八月終戦と共に島に引き揚げるや食糧はなくマラリヤ罹患者は栄養失調で死亡する者六十余名を数えた。そのような混乱の最中当時与那国を基地として台湾との物資の取引(所謂ヤミ物資時代)が盛んだったが島の海域を頻りに往来する船舶の座礁は後を絶たず尊い人命財物の損失は夥しいものがあつた。事態を憂慮した田代局長は灯台、電信の重要性を痛感し時の八重山郵便局長故宮良賢副・電信課長向井信秀氏に再三陳情要請の結果、昭和二十三年念願の灯台。手動式三号無線機が設置された。(通信士新本実氏)然るに予算乏しく田代局長は島内を初め西表・石垣・与那国の有志等に働きかけ浄財を募り灯台・電信の維持費に充て更に発電機を導入して灯台或は各戸へも電灯化して文化生活の一負を印した。昭和二十年上原地区は鳩間局の市外配達区域に指定された(五年)昭和四十一年無線電話開通された。昭和三十一年頃から島人の転出が著しく昭和五十六年には郵便局は簡易局となり学校も一時期には廃校寸前までなつたが島の人々の燃ゆる結集や各方面の援助の功あつて最近島も次第に活気を取り戻しつつある。

昭和六十二年八月吉日

建立者 田代浩

鳩間島内石碑等集成

番 号：9
名 称：西堂御獄の鳥居



分 類：鳥居
建立年月日：昭和29年9月27日
建立場所：灯台北
材 質：コンクリート
法 量：幅255cm 高さ280cm 奥行き28cm
方 角：北
銘 文：(正面) 奉納
(背面) 昭和二十九年七月二十七日建立

番 号：10
名 称：鳩間島中森の標柱



分 類：標柱
建立年月日：昭和61年5月吉日
建立場所：灯台南東68m
材 質：コンクリート 銘板は御影石
法 量：(全体) 幅16cm 高さ97cm 奥行き17.5cm
(台座) 幅16cm 高さ97cm 奥行き17.5cm
方 角：北東
設 置 者：

番 号：11
名 称：鳩間灯台の由来



分 類：説明板
建立年月日：昭和61年11月
建立場所：灯台南東66m
材 質：コンクリート
法 量：高さ113cm 幅23cm 上部奥行き5cm
方 角：北西
設 置 者：田代浩
銘 文：鳩間島は周囲4.26キロの小島である。大東亜戦争は昭和20年8月を以て終わりを告げたものの島人の生活に必要な日用雑貨とりわけ食料品の不足は著しく必然的にその活路を島外に求めなければならなかった。そのため鳩間島海域に於ける船舶の往来は慌ただしくなり、それに伴い海難事故が頻発難渋を極めた。就中島周辺で座礁する船舶は後を絶たず尊い人命や財物の損失はおびただしいものであった。事態を憂慮した当時の鳩間郵便局長田代浩は

鳩間島内石碑等集成



船舶の航行を安全に導く灯台の重要性を痛感し、昭和23年4月5日島の中央部中岡（海拔三十四米）の頂きに自力で以て高さ三米の櫓を組み立て灯油八分ランプ三基灯を光源とし、木製の仮灯台を設置して暗夜の道標とした。かくて島内第一号の航海安全の祈りの灯が点火された。

第二代その後内外共に灯台への関心は高まり電源による恒久的灯台の建設へと計画を進め八重山水産会、石垣、西表、与那国 漁業者他有志等へ働きかけ浄財を募り、昭和二十三年九月三十日、高さ六米直径約七十七センチの鉄筋コンクリート造を建設、更に八馬力原動機を郵便局の構内に設置送電し灯台守として吉川一雄、加治工四郎氏の力を援用して三〇〇Wの照明を終夜点灯することになった。来鳩間灯台は琉球政府海上保安庁と引き継がれ三代・四代と改築変遷して現在に至っている。

昭和六十年十一月吉日建立
寄贈者 田代浩

番号：12
名称：鳩間中森標柱



分類：標柱

建立年月日：昭和48年2月28日

建立場所：灯台東側34m

材質：コンクリート

法量：幅18cm 高さ150cm 奥行き18cm

方角：東

設置者：竹富町教育委員会

銘文：・記念物 鳩間中森

・指定 昭和四七年八月三〇日

・建設 昭和四八年二月二八日

・竹富町教育委員会

番号：13
名称：鳩間中森説明板



分類：説明板

建立年月日：昭和六十二年六月吉日

建立場所：灯台東隣

材質：コンクリート

法量：(全体) 幅41cm 高さ116cm 奥行き9cm

方角：北

設置者：竹富町教育委員会

銘文：鳩間中森

ここからの眺望はまことにすばらしい
有名な民謡 鳩間節はここからの眺め
をうたったといわれている。

鳩間島内石碑等集成

番号：14
名称：物見台復元の碑



分類：標柱
建立年月日：昭和58年6月30日
建立場所：灯台北東側物見台横
材質：コンクリート
法量：幅60cm 高さ116cm 奥行き7cm
 (台座) 幅60cm 高さ116cm 奥行き7cm
方角：東
設置者：
銘文：物見台復元之碑
 昭和五十八年六月三十日竣工
 (台座) 昭和五十八年十二月二十日建立

番号：15
名称：友利御獄の鳥居



分類：鳥居
建立年月日：昭和29年旧9月17日
建立場所：灯台東140m
材質：コンクリート
法量：幅255cm 高さ280cm 奥行き28cm
方角：南
設置者：
銘文：(正面) 奉納
 (背面) 昭和二十九年旧九月十七日

番号：16
名称：下り井 (アンヌカ) 標柱



分類：標柱
建立年月日：昭和48年2月28日
建立場所：鳩間小学校発祥之地より北122m
材質：コンクリート
法量：幅18cm 高さ152cm 奥行き18cm
方角：南西
設置者：竹富町教育委員会
銘文：・記念物 下り井戸
 ・指定 昭和四七年八月三〇日
 ・建設 昭和四八年二月二八日
 ・竹富町教育委員会

鳩間島内石碑等集成

番号：17
名称：下り井（アンヌカ）説明板



分類：説明板
建立年月日：昭和48年2月28日
建立場所：鳩間小学校発祥之地より北122m
材質：コンクリート
法量：幅40cm 高さ115cm 奥行き10cm
 (台座) 幅40cm 高さ115cm 奥行き10cm
方角：南西
設置者：
銘文：自然の洞窟の傾斜地を下った
 所に泉がある 昔島人にとって唯一の
 飲料水だったという

番号：18
名称：新川御獄の鳥居



分類：鳥居
建立年月日：昭和29年旧9月17日
建立場所：灯台西143m
材質：コンクリート
法量：幅255cm 高さ280cm 奥行き28cm
方角：南
銘文：(正面) 奉納
 (背面) 昭和二十九年旧九月十七日

番号：19
名称：宮良長包歌碑（生誕125周年）



分類：歌碑
建立年月日：平成20年12月
建立場所：郵便局南東34m
材質：コンクリート
法量：(全体) 幅246cm 高さ180cm 奥行き52cm
 (台座) 幅246cm 高さ180cm 奥行き52cm
方角：南
銘文：(正面) 鳩間節
 一 海の中中に只一つ
 鳩の浮巣か鳩間島
 常の春辺の中森の
 久葉の葉末のそよ風に
 ゆかしき楽の調べあり
 二 稲田に寄する黄金の波

鳩間島内石碑等集成



岸に群れ寄る銀のうろこ
久遠を誇る くがと海
平和の徴 ゆたかなる
あかず楽しき眺めあり
三 嗚呼島人よ 吾人は
空と水とに 比えつつ
心雄々しく 氣は高く
名に負う鳩の 平和
永久に歌わん其の幸を
(背面) 宮良長包生誕 125周年記念
平成20年12月吉日

近世琉球における烽火（火立）のネットワークについて —新城島・黒島・鳩間島を中心に—

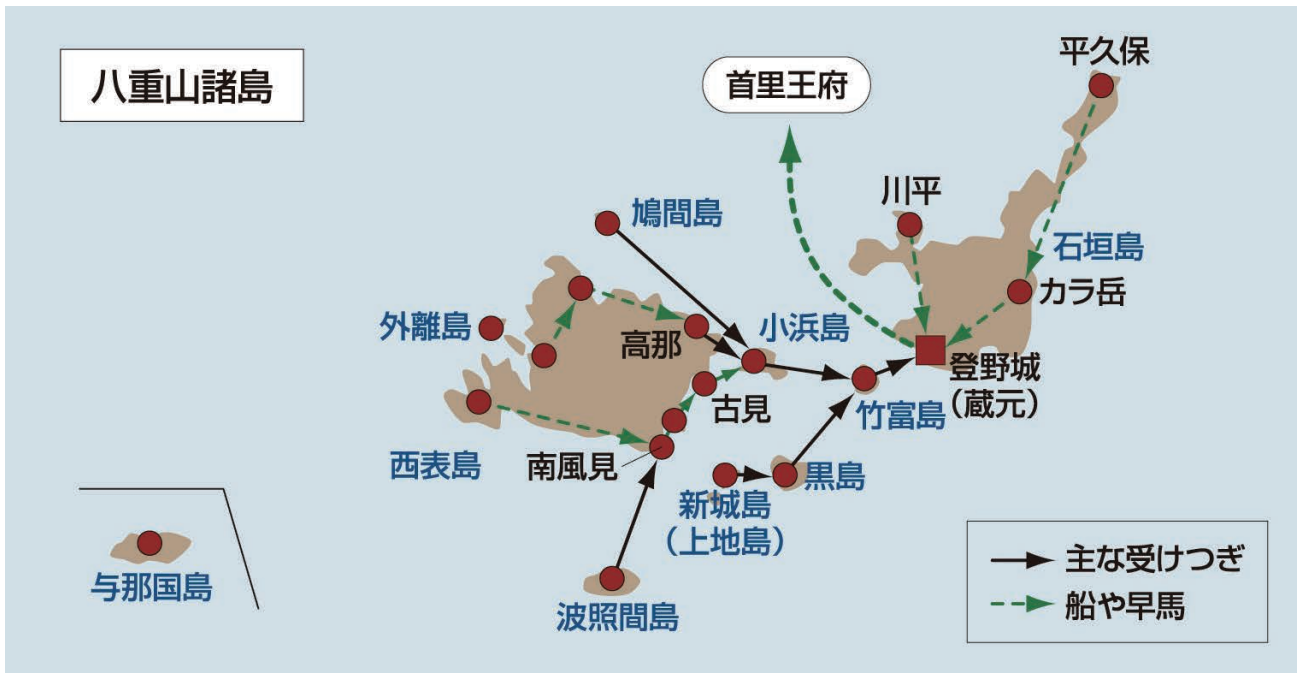
崎原 恭子*

Brief notes on network of Pre-modern beacon fires in Aragusuku Island, Kuro Island, Hatoma Island

Kyoko SAKIHARA*

琉球王国時代、王府は海上の監視や船の動向を把握するため1644年に国内各地に烽火をあげる場所を設置し、王府へ情報を伝達する経路を整備した(球陽研究会編, 1974)。この理由は、中国で起こった明から清への交替やヨーロッパ諸国からのいわゆる異国船の来航による国際的な緊張に備えたからだと考えられている(黒島, 1990、黒島, 1992)。王府による海上監視のシステムは、事始めおよび沖縄島周辺の烽火の制度を記載した『球陽』だけでなく、久米島や八重山での公務遂行や執務上の規定として布達された公事帳などからも知ることができ、王府

によって国内に広く徹底されていたことがわかる。烽火をあげていた場所は、より遠くをみるための石積みを伴う「遠見台」を兼ねていたところもある。そのため、これらには「遠見台」や「烽火台」、「火立所」、「火番盛」など種々の呼称がある。黒島為一氏は沖縄県歴史の道調査報告書(八重山諸島)において、用語の問題を指摘し、報告書内では「それぞれの固有名詞を用い、かつ、遠見台と総称する」としている(黒島, 1990)。本小稿もこれを踏襲し、烽火をあげる場所と遠くをみる場所と性格が異なるところについてはその都度示すようにした。



図：八重山諸島における烽火（火立）のネットワーク

参考：「富川親方八重山島諸村公事帳」「翁長親方八重山島規模帳」「沖縄県歴史の道調査報告書Ⅶ-八重山諸島の道-

※ 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1 沖縄県立博物館・美術館

* Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006, JAPAN

遠見台の設置場所については、沖縄県教育委員会による沖縄県歴史の道調査報告(沖縄県教育委員会, 1990) や市町村による現地調査や報告(名護市教育委員会, 1989、具志川村史編集委員会, 1976など)、島袋和幸氏による調査報告(島袋, 2010)などが行われてきた。2007年には宮古諸島および八重山諸島にある火番盛(ひばんむい・ぴーばんむる、遠見台のこと) 18カ所が国指定史跡「先島諸島火番盛」に指定された。

遠見台の現状として、現在史跡として保存されているところもあれば、わずかな石積みや伝承のみ残されているところ、土地の改変などによって所在不明のところなどがある。近世琉球の地図では、「正保国絵図」などの琉球国絵図(東京大学史料編纂所蔵)や薩摩藩調製図(沖縄県立図書館蔵)、18世紀末頃の製作と考えられる琉球国惣絵図(間切集成図)(沖縄県立博物館・美術館蔵)などに図示される。琉球国惣絵図(間切集成図)では、国頭間切・小禄間切・喜屋武間切に「火立所」、西原間切に「火立番敷」の表記で烽火に関する場所が記載されている。喜屋武間切の火立所の近くと西原間切の火立番敷には赤色屋根の家屋も描かれている。

琉球は国内の情報伝達手段として、人や馬、船を駆使するとともに、烽火をあげることによって情報を王府に伝えるしくみを整えていた。『球陽』には、進貢船や異国船が来た際に、進貢船2隻の場合は烽火2つ、1隻の場合は烽火1つ、異国船の場合は烽火3つをあげて、中継地点を経由して早々に情報を王府に知らせることが記されている。また、『翁長親方八重山島諸村規模帳』(1857年)には、遠見(遠目)番人の人数が記され、複数が輪番で任にあっていたと考えられている(黒島, 1990)。『富川親方八重山島諸村公事帳』(1878年)には、天気が悪く船を出せない状況下で八重山各地に船が漂着した場合において、烽火をあげる数と船の種類を区別した蔵元への情報伝達方法が記されている。琉球や中国の船が漂着した場合は立火(烽火)2つ、大和船の場合は立火3つ、外国船の場合は立火4つで情報を通達するということであった。さらには、伝達経路や烽火をあげる場所などについて、以下のとおり、村ごとの詳細な手順が記されている。

①西表・上原・高那村に船が漂着した際は、高那村

東の平川野にて烽火をあげ、小浜島、竹富島の順に受け継ぎ、石垣島の蔵元へ知らせること

②崎山・南風見・仲間・古見村に船が漂着した際は、古見村のかさ之辻(嘉佐崎)にて烽火をあげ、小浜島、竹富島の順に受け継ぎ、蔵元へ知らせること

③鳩間村に船が漂着した際は、東之森(鳩間島東海岸側)にて烽火をあげ、小浜島、竹富島の順に受け継ぎ、蔵元へ知らせること

④波照間村に船が漂着した際は、そひら森(コート盛)にて烽火をあげて南風見番所に知らせて、古見村から小浜島、竹富島の順に受け継ぎ、蔵元へ知らせること

⑤新城村に船が漂着した際は、たかねく(上地島のタカニク)にて烽火をあげ、黒島、竹富島の順に受け継ぎ、蔵元へ知らせること

⑥黒島村に船が漂着した際は、たわの辻(プズマリ)にて烽火をあげ、竹富島を中継して蔵元へ知らせること

このように、八重山諸島の火番盛(遠見台)についてはその伝達経路や遠見番に従事した人数などが記録されている。また、実際にどのような方法で烽火があげられていたのかについて、地元では検証も行われている。近年では、2007年に竹富町教育委員会が中心となって実施された。天候不良等の影響で点火状況のやりとりについて携帯電話を利用しながら烽火を確認していたようだが、現代の通信手段以前の方法について学ぶ重要な機会となったようである(沖縄タイムス, 2007、八重山毎日新聞, 2007)。

八重山諸島にある火番盛(烽火台)の眺望状況については、黒島為一氏や島袋和幸氏の調査によってこれまでも報告されている(黒島, 1990、島袋2010)が、今回、当館の総合調査を行うにあたって、2013年6月25日～28日に新城島・黒島・鳩間島の遠見台及び眺望場所の現状と眺望状況を確認する機会を得た。八重山諸島に分布する各遠見台は、より遠くを見渡すための石積みが設置されている場合が多く、基底はおおよそ円形や方形、高さは2m以上なかには10mほども石が積み上げられたところもある。石積みの現状としては、新城島(上地島)のタカニク、鳩間島の鳩間中森のようにしっかり残っていた場所もあれば、黒島のプズマリのように崩落の危険のため

立入禁止の場所もあった。また、遠見台の立地場所自体が植物の繁茂や牛の放牧地であるため簡単に立ち入ることができない場所もあった。眺望状況については100倍ズーム機能付きのカメラと方位磁石を用いておおよその範囲を確認した。ただ、今回の調査期間中、南風のカーチカゼ（カーチーバー）の影響で海上にモヤがかかっていたが、島影が見えたなかでおおよその眺望範囲を以下のとおり記録した。

(1) 新城島（上地島）

・クイヌパナ

国指定史跡に含まれていないが、新城島（上地島）の西側に面した港のすぐ側にある琉球石灰岩の断崖上に「クイヌパナ」という遠見台がある。陸地側から入る海岸沿いの小道を進みビーチロックを利用した17段の階段をのぼるとおおよそ五角形の平場に立ち、新城島（下地島）・西表島・小浜島方面の約210°の範囲を見渡すことができた。東南方向は生い茂った木々や丘があるため、海上をみることはできない。



写真1：クイヌパナ遠景



写真2：クイヌパナより下地島方面を望む

・タカニク

新城島（上地島）の集落から外れた北東側には、国指定史跡となった「タカニク」がある。三層の石積みから成り、小道から正面にある15段ほどの階段をのぼるとおおよそ円形の平場（直径約3.5m）があり、西表島・小浜島を望むことができる。新城島（下地島）や黒島は木々にさえぎられ一部しかみることができなかった。

新城島（上地島）にはその他に、島内で最も高い標高2.3mのウフドゥムールと呼ばれる丘にも遠見台があり、島の西側にある集落から東海岸に通り抜ける小道の右側に位置しているらしい。新城出身の安里眞幸氏によると、戦前には周囲に畑が広がり上まで登れたそうであるが、現在は植物が繁茂して立ち入ることができない状態であった。また、タカニクからもウフドゥムールをみることができたそうである。ウフドゥムールを通り過ぎた島の東海岸からは黒島をはっきりと望むことができたため、ウフドゥムールからの視界はかなり良好であったことが想定できた。



写真3：タカニク



写真4：タカニクより西表島の南風見方面を望む

(2) 新城島 (下地島)

・中森 (波照間ムリ)

新城島 (下地島) の放牧地帯には、国指定史跡となった「中森 (波照間ムリ)」がある。2～3層ほどから成る石積みの上から、崩落のため3段くらいしか確認できない階段をのぼると、ガジュマルの繁茂や石積みの崩落のため足場の少なくなった頂上に立つことができる。ここからは、西表島・新城島 (上地島) ・黒島、遠くは小浜島を含め約170°の視界が広がっていた。ただし、波照間島方面は木々の繁茂で全くみることができなかった。



写真5：ナカムリ



写真6：ナカムリより黒島方面を望む

(3) 黒島

・プズマリ付近の海岸 (南西側)

黒島の火番盛 (遠見台) には、国指定史跡となった「プズマリ」がある。9m前後の高い石積みが特徴となっている。近くには、現在の黒島ビジターセンターとなっている黒島の番所 (役所) 跡がある。現在、石積みの崩落のため頂上にのぼれなかった

め、近くの海岸から眺望状況を確認したところ、南西側方向に新城島の土地・下地島を確認できた。その他の遠見台は牧場内にあることが知られている。

また、黒島港からは竹富島や小浜島を望むことができ、八重山諸島の島々を視覚的に結べる状況を確認することができた。



写真7：プズマリ



写真8：プズマリ近くの海岸より新城島方面を望む

(4) 鳩間島

・鳩間中森

鳩間島の火番盛 (遠見台) は、国指定史跡の「鳩間中森」がある。鳩間集落から北側に位置する島内で最も高い地点に設置され、近くには灯台がある。石積みは良好であり、30段ほどの階段をのぼると約3m四方の平場に立つことができる。南側の灯台や繁茂したビロウなどの植物がなければ、360°見渡せる眺望の良い場所である。西表島の上原や外離島の一部も望むことができた。ただし、小浜島はモヤのためみることができなかった。

また、鳩間島東海岸側にある鳩間小中学校付近は、

小浜島にある大岳への烽火をあげた場所であるが、通常確認できるはずの島影が、カーチカゼ(カーチーベ)の影響で確認することができなかった。



写真9：鳩間中森



写真10：鳩間中森より西表島上原方面を望む

以上のように、新城島・黒島・鳩間島における遠見台の現状等を確認した。現地にて確認できた時期がちょうど霧のかかる時期となってしまう、島影が望めない場所もあった。このような天候の場合は烽火をあげても島々の間でほとんどみえず、天候に左右される状況下の情報伝達方法の限界とも考えられる。しかし、史料に基づくと天気が悪く船を出すことができない場合に島々を結ぶ情報伝達手段として烽火が活用されていたことになっている。2007年の烽火の検証でも悪天候だったようであるが烽火を確認できる場合もあった。実際の烽火の運用について、烽火やその他の手段がどの程度まで有効であったのかが検証課題として残った。しかし、新城島・黒島・鳩間島の遠見台を確認することによって、八重山諸島国内の隅々まで海上監視を行い、迅速な情

報伝達のしくみを整備する王府の徹底さを改めて確認することができた。

末筆ながら、遠見台に関する様々なご教示を賜った安里眞幸氏および飯田泰彦氏(竹富町教育委員会町史編集係)に感謝申し上げます。

また、10年ほど前に遡るが、八重山諸島の烽火のネットワークについての的確なご教示を賜った黒島為一氏、精力的な調査・報告を続けている島袋和幸氏からも著作を通じて様々なご教示を賜った。ここに重ねてお礼申し上げます。

引用・参考文献(五十音順)

- 石垣市総務部市史編集室, 1994, 『石垣市史叢書』7
沖縄県教育委員会, 1988, 『沖縄県歴史の道調査報告書—中頭方東海道—』.
沖縄県教育委員会, 1991, 『沖縄県史料 前近代7』
首里王府仕置3.
沖縄タイムス社編, 1983, 『沖縄大百科事典』.
沖縄タイムス, 2007, 新聞記事「のろしりレー
島つなぐ」2007年11月10日(土)朝刊.
球陽研究会, 1974, 『球陽』読み下し編.
具志川村史編集委員会, 1976, 『久米島具志川村史』
具志川村役場.
久米島西銘誌編集委員会, 2003, 『久米島 西銘誌』.
黒島為一, 1990, 「第四章 八重山の遠見台」 沖
縄県教育庁文化課編『沖縄県歴史の道調査報告書
VII—八重山諸島の道—』.
黒島為一, 1992, 「烽火の制創設の背景」『地域と
文化』第71号 地域と文化編集委員会.
島袋和幸, 2010, 『沖縄の軌跡 沖縄烽火のネット
ワーク』.
玉津博克, 1991, 「産業・交通・土木遺跡と保存へ
の課題」『文化課紀要』第7号 沖縄県教育委員
会文化課.
今帰仁村教育委員会・今帰仁村立歴史文化センター,
1995, 『なきじん研究』vol. 5.
今帰仁村教育委員会, 2006, 『古宇利島の遺跡』.
名護市教育委員会, 1989, 『天仁屋バンサチ(番崎)
の火立跡調査報告書』.
八重山毎日新聞, 2007, 新聞記事「竹富町内7島

で「のろし」リレー 350年以上前の情報伝達を
再現」2007年11月9日(金)オンラインニュース.

鳩間島、黒島所在・由来の三線

園原 謙*

The Trace of *Sanshins* in Hatomajima and Kuroshima Islands

Ken SONOHARA*

はじめに

鳩間島・黒島は八重山諸島内でも鳩間節、黒島口説など八重山地方を代表する歌謡の舞台となった島である。歌謡にとって、伴奏楽器としての三線は不可欠である。彼の地の華やかな豊年祭などで用いられる実用品としての三線の存在に注目することにした。

歌・三線演奏のベテラン、得意とする方々が集落ごとにおり、豊年祭などの祭祀行事においても活躍する。彼等はよく鳴る三線を所蔵していることが多い。それもいくつか持っている場合がある。

本稿ではこの2つの島に所在する三線の実態とどのような由緒や伝来をもっているかについての聞き取り調査と実物資料の記録撮影を目的とする。調査にあたり、いくつかの仮説を考えた。ひとつは、歴史的にはもともと王国時代、旧士族を中心に所持したのが三線である。そのため、本島から遠く離れた八重山地方には、明治以前の古い三線はあまり存在しないのではないかとする考えである。もちろん後の時代に移入された可能性を否定するものではない。2つ目は、廃藩置県以降に伝播していった三線があるのであれば、どのような形で、「芸能の島」とされる八重山地方で伝播し、普及していったかについてである。それらを三線に係る伝承で知りえるのではないかと考えた。さらに3つ目は、二つの島に所在する三線の形態的特徴を通して、同地の人々

が嗜好する型を確認することであった。それら3点を念頭に鳩間島・黒島に所在・由来する三線について論じることにする。

三線調査の研究史と本調査の方法

7つの型の三線があるにもかかわらず、沖縄県内に所在する戦前の古三線を調査した結果、全般的にいえることは真壁型と与那城型のように多くの人々に嗜好される型があることである。周知のとおり沖縄における三線は、音曲を奏でる実用楽器であるとともに、美術工芸的な価値を有するものでもある。そのため、全国的にも稀であるが三線は工芸品として文化財指定されており、その件数は平成26年度末現在で24挺^(註1)ある。

沖縄の三線の形態的特徴は、大きく7つの型に分類され、製作者の名字に因み、古い順に南風原型、知念大工型、久場春殿型、久葉の骨型(久場春殿による)、真壁型、平仲知念型、与那城型^(註2)とされる。

これまでの三線調査の歴史を振り返ると、本格的な調査は1952(昭和27)年に池宮喜輝が行ったハワイ、ロサンゼルス^(註3)の移住地をはじめ本土、沖縄本島での調査を嚆矢とする。池宮が内外の沖縄伝統音楽家らの協力をえて、戦前流出した沖縄の三線の悉皆的な調査^(註3)を行った意義は大きい。型分類などの目利きは池宮自身の審美眼によって行われた。そのため型分類の基準を客観的に評価する上では若

※ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

* Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha city, Okinawa Prefecture 900-0006 JAPAN

干の問題があった。その問題点を解消するために、より多くの目で、型分類の客観化をはかるために1986（昭和61）年に琉球三線楽器保存会（初代会長宮里春行）が発足した。当時、沖縄県立博物館（首里時代）の支援によって、鑑定場所を提供し活動を重ね、現在まで続いている。博物館では月1回の三線鑑定会が開催され、型分類の定型化が図られるようになった。そのノウハウに基づいて、1990（平成2）年～1993（同5）年まで文化庁補助事業として、県内の悉皆調査として「琉球三味線楽器所在調査」が行われ、本島北部、中部、南部、宮古、八重山を含む地域で612挺の戦前製作の三線を調査し、調査結果を報告書『沖縄の三線』（沖縄県教育委員会、1995）で紹介した。また、戦後間もなく行われた池宮以降の移民社会における三線の実態を把握するため、筆者による「ハワイに所在する三線」（園原、2000）の報告や、2013年度博物館企画展「三線のチカラ形之美と音の妙」（平成24年2月18日～5月11日）の開催にあたり、ハワイからの里帰り三線を展示するための事前調査として2012年12月にハワイ現地で40挺あまりの三線調査を行い、うち同展では8挺の戦前ハワイに渡った三線を借用し展示するなどの活動があった。

さて、過疎化する2つの島での三線の所在確認調査は、ハワイ以上に難しかった。三線はそれを演奏する目的で所有するか、または演奏はしないが祖先伝来の家宝^{（註4）}として保管する人によって各家で管理されている。過疎化に晒される2つの島にとって、居住者が少ないことは、すなわち三線そのものの数がきわめて少ないことを意味する。そこで今回の調査では、当該島に実際に所在する三線に加え、かつて当該島にあったとされる三線を当該由来の三線と規定して調査することにした。

その結果、鳩間島所在・由来の三線7挺、内訳は鳩間島所在で4挺、鳩間島出身で石垣島に居住する人が所有する三線3挺を調査した。一方、黒島においては、現地で実際調査ができた三線は1挺のみで、沖縄本島居住の黒島出身者が所有する三線を黒島由来の三線とした2挺を含め、合計3挺を調査した。今回の両島の調査では10挺を確認したが、10挺のみしか存在しないという意味ではない。ただ、島の過疎化による人口減少は深刻で、島に所在した動産

的文化遺産が当該島から流出し、少なくなっている実状がある。

調査の方法については、三線調査カードに基づき、型名の分類、各部位の長さの測定、胴内の状況の確認、所有者が知りうる由緒伝来の聞き取りを行った。また、三線の正面、側面、鳩胸、心と各部位を撮影し、図版として記録することとした。また、各家の三線名称は、所有者の苗字または屋号に三線の型名を付して、名称とした。

鳩間島における調査では、平成25年6月25日に鳩間区長らの協力を得て、公民館に資料を運んでもらい調査を実施した。また、翌日には、石垣在住鳩間島郷友会の方のご協力をいただき、古三線を所蔵する各家を廻って調査を行った。一方、黒島での調査は平成27年4月16日に、本島居住の黒島出身者が所有する三線2挺は平成27年11月4日に当館に持参いただき調査をさせてもらった。

表1は今回、鳩間島・黒島所在・由来の三線として調査した資料一覧である。また、調査した三線の図版は図1から10までとして、原則全体姿（斜め45度）、側面、天及び心部分の4点の写真で構成した。

三線胴皮（紙）張りの製作技術の伝承

黒島の現地調査において、黒島唯一の博物館施設の黒島研究所^{（註5）}で展示されていた「三線保存用」とされる荒焼大甕の存在を確認したことは大きな収穫であった（図11参照）。この甕は、口の内径が240mm、外径が300mm、高さが890mmで、その使用法は同研究所の説明によると、「胴（皮紙）部分を張り替えたばかりの三線を保存するため」のものとされる。毎年催される結願祭などの行事の前に三線の胴が張り替えられる。書き損じた紙や古い紙（和紙）を芭蕉の渋汁を塗って、貼り重ねの作業を数回繰り返す、紙による胴張りがされる。胴が新調された三線は、底に水を張ったこの甕にいれ、ゆっくりと乾燥させた、という。当時の紙とは和紙のことをさし、現存する古文書の紙質から推察すると、楮紙や芭蕉紙だと思われる。

三線の胴（チーガ）は円形状で直径180mm程度、上下の幅（厚み）は120mmの大きさである。幅広

| 図版 | 島 | 名 称 | 棹の各部位の法量 (cm) | | | | 爪裏ノミ型 | 材質 | 保存状態 | 由緒・伝来等 |
|----|----|----------------|---------------|------|------|-----|--------|---------------|---|--|
| | | | 全長 | 野 | 心 | 糸藏 | | | | |
| 1 | 鳩間 | 大城の真壁型 | 78.8 | 47.8 | 21.5 | 3.4 | 角ノミ総取り | クルチ (白太あり) | 天の裏側に漆剥離。チーガの差し口が大きいので、5mmの厚みの歩当がされる | 母方の祖父愛用三線。祖父は豊年祭で地方を務めるほどの腕前の持ち主。入手方法は不明。推定製作年：大正～昭和前期 |
| 2 | 鳩間 | 米盛の真壁型 | 78.8 | 48.4 | 21.9 | 3.4 | 角ノミ総取り | クルチ (白太あり) | カラクイがすべて異なる。男絃のカラクリの花形の象牙欠。猿尾に1.5cmのクルチ材が釘で接がれる。 | 復帰後那覇で入手したもの。従業員からもらったという。推定製作年代：戦後 |
| 3 | 鳩間 | ユーレー（寄合）の真壁型 | 78.8 | 48.8 | 21.6 | 3.2 | 丸ノミ平取り | クルチ (白太あり) | カラクイが女絃と中絃は古い。男絃は新しいカラクイ。猿尾に1.5cmのクルチ材で釘で接がれる。 | 元々の現所有者の祖父。その由緒来歴は不明。推定製作年は明治～大正期 |
| 4 | 鳩間 | 浦崎の真壁型 | 77.4 | 47.7 | 21.2 | 3.2 | 丸ノミ総取り | ユシギ | カラクイの男絃の飾り欠 | 心の右側に新栄堂の紙札が貼られる。製作年：戦後（平成4） |
| 5 | 鳩間 | 鳩間屋の真壁型 | 79.2 | 48.2 | 21.5 | 3.7 | 角ノミ総取り | クルチ | 良好 | 所有者の父が所有していた三線。西表島のクルチで造られたという。地元ではなく、本島で作ったのではないかとされる。推定制作年：大正～昭和前期 |
| 6 | 鳩間 | トムレー（友利）の真壁型 | 78.3 | 48.1 | 22 | 3.4 | 角ノミ総取り | クルチ | 黒島出身の三線職人（那覇在）に依頼し、20年前に塗替。チーガも新調したが、棹が間違えられないようにした。塗り替は塗り剥げが原因で、音に雑音が生じたため。 | 祖父がもっていたもので、家宝として長男が継承すべきだと考える。推定製作年：明治～大正期 |
| 7 | 鳩間 | ウイカナケの真壁型 | 80 | 48.5 | 20.8 | 3.7 | 角ノミ総取り | クルチ | 良好 | 明治23年生まれの祖父が愛用していた三線。祖父は、王国末期、石垣の役人と鳩間の人の間に生まれた。鳩間島で旗頭の保管を行う由緒ある家。「兄弟三線」があり、本島に所蔵者がいるという。幼い頃から泣くと、祖父の三線を聞かされたという。製作推定年：明治期 |
| 8 | 黒島 | 島仲の真壁型 | — | — | — | — | — | クルチ | 良好 | 製作推定年：戦後 |
| 9 | 黒島 | ニシトミヤ（北當山）の真壁型 | 77.2 | 48 | 21.5 | 3.4 | 丸ノミ総取り | クルチ | 良好、現所有者が昭和54、55年頃に塗替えた。カラクイは総入れ替え。猿尾に8mmの象牙が接がれる。材質はクルチのウズラ目で、黒島産だという。その質感がでるようスチン塗り。元々は黒漆塗りだった。No10とは夫婦三線。 | 黒島で散髪屋をしていた船道という職人による製作とされる。明治31年生まれの父親の形見で、前所有者は大正年間には、黒島を代表する三線の地方で（ジーボー）活躍した人であった。地域の三線製作技術を知るうえで貴重である。製作推定年：大正期 |
| 10 | 黒島 | ニシトミヤ（北當山）の真壁型 | 78 | 48 | 21 | 3.4 | 角ノミ角取り | クルチ | 良好、現所有者が昭和54、56年頃に塗替えた。カラクイは総入れ替え。材質はクルチのウズラ目で、黒島産だという。その質感がでるようスチン塗り。元々は黒漆塗りだったNo9とは夫婦三線。 | 黒島の慶世村という職人による製作とされる。慶世村はその後石垣に出て、三線製作者として有名になる。本三線のカラクイのうち女掛籠と中掛籠の間隔が若干狭いが、糸藏上側の加工の仕方に古い形が確認される。明治31年生まれの父親の形見で、前所有者は大正年間には、黒島を代表する三線の地方（ジーボー）で活躍した人であった。地域の三線製作技術を知るうえで貴重である。製作推定年：大正期 |

表1 鳩間島・黒島所在・由来の三線一覧

黒島所在・由来の三線



図1 大城の真壁型



図2 米盛の真壁型



図3 ユーレー（寄合）の真壁型

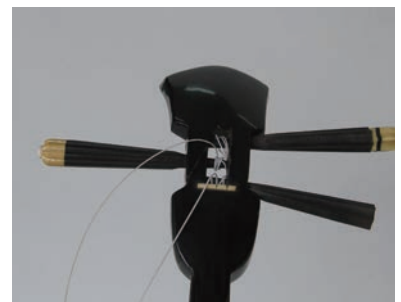


図4 浦崎の真壁型



図5 鳩間ヤーの真壁型

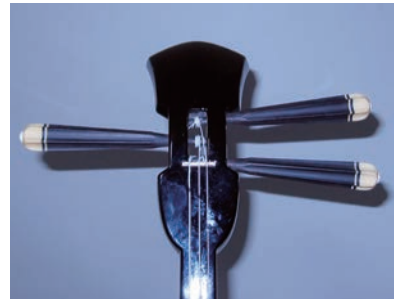


図6 トムレー（友利）の真壁型



図7 ウイカナケ（上兼久）の真壁型



図8 島仲の真壁型



図9 ニシトミーヤ（北當山）の真壁型



図10 ニシトミーヤ（北當山）の真壁型

の大甕の口は、三線の出し入れが十分にできる。甕の底に付かないよう棹の上部を支柱棒で縛り、甕の中では三線は宙に浮いた状態になっている。甕内は適度な湿度状態で渋張りの紙がゆっくり乾燥でき、祭祀に際しての三線楽を奏でることができるのだろう。三線胴紙を乾燥させるための甕というよりは、便宜的に水を蓄えたりする大甕が流用されたものと思われる。

慢性的に物資が不足する島の社会において、使い古された紙、いわゆる反古紙ですら貴重なものであったと思われる。一年に一回の結願祭に備えて三線胴の紙による胴張りを新調する。紙張胴の寿命は1年程度であったのか、それとも毎年新調することに民俗学的な意味があるのかを含めて検討する必要があるが、渋張り胴三線の製作に関わる先人の智恵が垣間見られる。

三線に胴皮として使用される蛇皮は、王国時代から東南アジア産のニシキヘビを用いている。当時から輸入品であったため、蛇皮は高価であった。そのため、戦前までは地方では「蛇皮線」ならぬ「紙皮線」（紙による胴張り）が使用されることが一般的だったと思われる。和紙に柿渋や芭蕉渋汁を塗って、接着剤代わりに紙を重ね、紙質を強化して、蛇皮の代用品として用いたのである。筆者が三線職人から聞き取り調査したもので、戦前製作された渋張り三線があるが、この場合には和紙を豚血で数枚接着し、スックイとよばれるデンプンで胴枠に接着したという。また、湿気除けと防水を兼ねて、生漆を塗って、強化したものがある。

1900（明治33）年には、少なくとも「シブ（渋）張」胴^{（註6）}の三線の存在が確認される。「三味線大工の同盟」、今流に言えば三線製作者組合で、その三線製作の手間賃に関わる賃金表が琉球新報に広告されている。同表では胴の製作にあたって、蛇皮張の手間賃だけで40銭に加え、「上等シブ張20銭」、「同中18銭」、「同下16銭」と渋張りの張り方について「上中下」とランク付けがされている。張り方の手法や材質による差異なのかは不明であるが、いずれにしても、その渋張り製作技術の方法のひとつが島に伝承されていることは興味深い。

一定の湿度を保たせながら、乾燥させることは、漆芸品の乾燥にも用いる方法である。漆を塗った器

物を入れ、湿度を保って乾燥させる室を「漆風呂（うるしぶろ）」というが、この原理と同様に三線の渋張りの胴は乾燥させられたことになる。渋張り胴がどの程度の強度と耐久性があるのかについては実験などで試みる必要があり、このことは今後の課題としたい。

戦前、一般的であった渋張り胴の三線については、名称としては確認できたが、その具体的な技術・技法については現在の三線職人の間でも伝承が途絶え、確認することが困難な状況にある。物資不足の離島において、実用的な技術として継承されており、大甕が三線胴皮の乾燥のために使用された伝承と用具を確認することができた収穫は大きい。

まとめにかえて

本稿では沖縄を代表する楽器であり、家宝であり、工芸品として各家に継承される文化遺産三線について、芸能の宝庫といわれる八重山諸島の鳩間島と黒島に限定して、現在両島に所在、由来する三線を対象に調査したが、残念ながら悉皆的な調査にはなっていない。



図 11 渋張りの新調の胴紙を乾燥させるための水甕（黒島研究所所蔵）

その前提に立ち、今回の調査では合計10挺の三線を調査した。内訳は鳩間島が7挺、黒島が3挺であった。

鳩間島での調査では島内4挺、島外3挺を調査した。その三線型は7挺とも真壁型であった。製作についての聞き取り調査に基づくと、鳩間島には三線製作者がいなかったとされることから、沖縄本島で製作されたものを買って求めたものとされる。一方、黒島では三線製作者がいたとされる。慶世村（きよむら）や船道（ふなみち）という職人がおり、地方の職人の手による三線が2挺確認された。これらの三線の元々の所有者はすでに亡くなっているが、伝承として確認される部分については要約し、表1の備考に記した。

結果として、鳩間島民が嗜好する三線型は真壁型になる。ただ、調査では島内においては真壁の正型といわれる形なるものがあるが、その形を保ったものが2挺、真壁型としての天、野、鳩胸、心の各部位の不統一のものが2挺あった。またこれら三線の製作時期については、戦前に製作されたものが3挺、戦後のものが1挺と推察される。

豊年祭の祭祀などにおける使用頻度が高かったためか、すべての三線においてカラクイ（範）の破損が目立ち、3本のカラクイが同一タイプのものは殆どなかった。また、石垣島に居住する鳩間出身者が所蔵する3挺の三線は、鑑定や伝承を加味すると、少なくとも明治期～大正期の時代のものと推察される。それらの型はすべて真壁型で正型として確認されるものであった。

一方、黒島の三線調査では、事前情報で、島内所在の数挺の三線を確認し、実際調査を試みようとしたが、結果的には島内では1挺しか調査ができなかった。同三線は真壁型で製作年代は戦後のものと推察される。また、沖縄本島に移り住んだ黒島出身者が所有する黒島由来の三線2挺を調査することができた。島外の三線2挺も真壁型で、製作年代は伝承によると、前所有者が地方（ジープー）として活躍した大正期頃の作と推察される。とりわけ、黒島製の三線のうち1挺の棹は黒島に居住し、後に石垣島に移り住み、石垣地方では三線製作者として名をあげたとされる三線職人慶世村の手によるものである。真壁型の細棹で優美なフォルムは、地方作にお

いても型の正型が整えられ、爪裏ノミ型も詳細に刻まれており、バランスがよかった。

これらデータから一般化を図ることは多少難があるが、鳩間島同様、黒島においても人々が真壁型を嗜好する傾向は確認され、いわゆる開鐘型といわれる真壁型が広く伝播している状況が確認された。

以上のことも含め、黒島・鳩間所在・由来する三線については、次のように5点に総括することができる。

- ① 鳩間島・黒島の三線のうち、由緒伝来が古い三線は、島を離れた元島民らによって、保管される傾向にある。
- ② 同島では、古三線における首里王府から派遣された役人が現地妻を娶り、その子孫に伝承された三線で、置県前後に伝承されたものが確認された。
- ③ 両島においても、調査した範囲において、沖縄本島の人々の間でも嗜好性が高い真壁型三線が好まれる傾向が確認できた。
- ④ 三線製作においては、鳩間島には製作者の伝承が確認されなかったが、リュウキュウコクタンの産地とされる黒島では、明治期～大正期にかけて島に三線製作者がいたとの伝承が確認された。今回の調査でその一つが確認され、真壁型で細棹の特徴を持っている。
- ⑤ 黒島では結願祭などの前に渋張り三線の胴の張り替えをした。反故紙（和紙）を用い、芭蕉の渋汁によって何枚も重ねたものを、ゆっくり乾かすために水甕が用いられた。底に水を張って甕に渋張りの三線をいれ、一定の湿度のもとで乾燥させる渋張り胴の製作技術が伝承されていることを確認した。

謝 辞

今回の調査を行うに当たり、次の方々に調査協力、ご指導をいただいた。心から感謝申し上げます。通司建次氏（鳩間公民館長）、大城正明氏（石垣在鳩間郷友会長）、鳩間真吉氏（石垣市）、友利英雄氏（石垣市）、浦崎宜浩氏（石垣市）、宮良哲夫（黒島）島仲氏（黒島）、若月元樹氏（黒島研究所）、當山善堂氏（那覇市）

註記

- 註1 沖縄県教育庁文化財課発行『平成26年度文化行政要覧』によると、平成26年度末の県市町村指定の三線は、県指定有形文化財が20挺、市町村指定文化財が4挺（うるま市3挺、嘉手納町1挺）である。
- 註2 王国時代の文献『球陽』には、三線職人を「三線打」と記載されており、南風原、三線主取の知念、名工真壁、与那城など名前がでてくる。明治時代にはすでにその型名が確認されている。当時すでに、古い三線の型順に名工の名前に因み、南風原型、知念大工型、真壁型、与那城型など三線の型の名称化がなされている。
- 註3 戦後、琉球古典音楽家の池宮喜輝によって、移民地の米国ハワイやロサンゼルスなどの悉皆的な調査が実施され、昭和29年に『琉球三味線寶鑑』として上梓された。それぞれの三線ごとに由緒来歴などが記されており、ハワイに5千挺の三線が確認されている。
- 註4 三線を家宝とする考えは王国時代からあった。相伝の物として遺言状に記されてもおり、基本的には門外不出のもので、公に展示される機会はなかった。戦前、展示などの公にされた嚆矢が、昭和8年の読売新聞社によって東京府美術館で開催された「日本名寶展」であった。その際、旧琉球王家尚家の出品資料のうち三線が2挺出品された。また、県内では昭和14年の首里城南殿で開催された江戸与那の三線供養祭が初めてであった。歴史学者の東恩納寛惇が東京の古書市で、島津家に献上された一名「江戸与那」を見つけ、沖縄へ里帰りさせた。その際に、当時沖縄教育会附設郷土博物館長の島袋源一郎と協力して、首里那覇の名器20数挺とともに供養祭と銘うって展示公開を行っている。
- 註5 黒島研究所は黒島唯一の博物館類似施設である。ウミガメの生態展示をはじめ海の生物や黒島の漁労習俗などを展示する施設で、NPO法人が昭和50年に設立、運営している。
- 註6 1900（明治33）年の10月25日付けの「琉球新報」の記事には、「三味線大工の同盟」で三線職人の低賃金を是正するために組合として新聞

広告を掲示した。三線製作組合として作業賃の定額化をめざし、三線職人の地位と生活改善の向上をめざそうと試みている。

参考文献

- 沖縄県教育委員会，2015，『平成26年度 沖縄県文化行政要覧』。
- 沖縄県立博物館・美術館，2013，『三線のチカラ—形の美と音の妙—』。
- 池宮喜輝，1951，『琉球三味線宝鑑』。
- 沖縄県教育委員会，1995，『沖縄の三線』。

黒島の染織概観

與那嶺 一子*

The outline of textile in Kuroshima Island

Ichiko YONAMINE*

はじめに

「衣食住」という言葉にあるように、「衣」は暑さ、寒さから身を守るものとして、人の暮らしに欠かすことはできない。その利用以外にも、近代以前には、布には税（米）の代わりに納める品という側面があり、八重山でも、琉球王国時代には、苧麻による織物（上布・中布・下布）を納税することが義務付けられていた。

これまで黒島、鳩間島、新城島以外の八重山の島々を調査し、その概要を報告してきた^{〔註1〕}。聞き取りや史料から、それらの島々には琉球王国時代には苧麻、芭蕉、木綿による織物があったこと、税として収める以外に、これらの素材を用いて家用の衣服をつくってきた様子が見えてきた。また、近代に入ると殖産振興の動きに連動し、島々では養蚕が奨励され、その副産物として、それまで士族や裕福な者だけが得られた絹織物も身につけられるようになる。

八重山には、石垣島、与那国島、竹富島や小浜島、西表島祖納のように、現在も手織による織物が続いている島もあるが、鳩間島や新城島、黒島においては、織物の技を継承する者が島には残っておらず、これまでこれらの島々の染織についてほとんど報告されていない。鳩間島や新城島には、織物をしていた頃を知っている人が既におらず、島での聞き取りや染織品を調査することができなかった。

黒島には、まだ80代から90代の方が健在であり、

島の染織の概要の聞き取り調査と実物確認調査を行うことにした。

調査の結果

鳩間島・黒島の調査は下記のとおり3回行った。

- 1回目 鳩間島 平成19年6月（平成19年度）
- 2回目 黒島 平成26年2月（平成25年度）
- 3回目 石垣島 平成27年2月（平成26年度）

平成25年度は、T.M.氏（女性／93歳／保里）、H.N.さん（女性／85歳／伊古）、K.M.さん（女性／86歳／仲本）の3名からの聞き取りを行い、黒島に残っている染織品や用具などを確認させてもらった。3名とも織物に携わっていたわけではなく、祖母、母親、姉などの様子や手伝いの記憶を語ってくれた。

平成26年度は、石垣市立図書館に於いて大正から昭和初期の八重山の新聞資料の調査と竹富町役場町史編集室にて昭和初期の写真資料を収集した。

調査の結果は下記のとおりである。

1. 素材

今は途絶えているが、聞き取りや黒島ビクターセンターに展示されている糸の素材や民具から芭蕉・苧麻・絹（養蚕）による布づくりが確認できた。

※ 〒900-0006 沖縄県おもろまち3-1-1 沖縄県立博物館・美術館

* Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006, Japan.

(1) 苧麻

苧麻はブーと呼ばれ、繊維素材として最も多くつくられ、使われていた。



写真1) チョマ (苧麻・カラムシ/ブー)
上布の材料。今はヤギや牛の牧草。

糸づくりにかかわる人は、現在、黒島には残っていない。

苧麻畑が自宅前にあった家庭もあるが、現在は牧場となった場所にある畑で苧麻を栽培していた者も



写真2) 苧麻の糸 (黒島ビジターセンター蔵)

いたようである。

(2) 芭蕉

芭蕉は黒島でもバサーと呼ばれ、それで織った衣服がバサーギン (芭蕉着) である。

芭蕉は畑の畦に植えてられていた。栽培していたわけではなく、自然に育ったものが使われたようだ。実のなる芭蕉 (バナナ) は家の庭の角に植えていたようで、今もその様子が残る。

芭蕉は、ある程度の長さ (丈) に育つと、伐採し白いスジを取って、束ねる。それをカマドの灰を入れたシンメナービで煮炊きする。灰は色々なもの (植物) を焚いて得たもの。芭蕉の煮炊き後、残った灰は田畑の肥料にしたとの事である。芭蕉が柔らかくなると繊維をとるが、使われた採織具は、切れなくなった包丁や竹製のものであったようだ。各家庭によって採織具は異なっており、包丁を使った家では貝や竹で繊維を採るのは見たことがないとの話であった。竹製品については、どのような形であったか、どのように使用したのか、その詳細は確認できなかった。



写真3) 芭蕉の繊維 (黒島ビジターセンター蔵)

繊維を採った後、陰干しし、糸づくりを行う。芭蕉糸の績ぎは、沖縄島で行われる機結びではなく縋り繋ぎによる^[写真8]。経糸は糸車で撚りを掛けていたようで、その状況は T.M.氏所蔵の芭蕉着から確認できる。糸は竹管 (フダ) に巻いて使用した。芭蕉着 (バサーギン) は、織り終わったら、灰汁で

洗濯をする。その際半分に割れた高さの低い甕が使われた。シークワサーで洗濯することもあった。

(3) 養蚕

養蚕もまた、聞き取りした女性達の祖母、母、姉達が行っていたとの事である。桑の木の見られる家が多く残っており、養蚕のなごりである。屋敷内の桑だけでは不足するので、桑のみを植えた桑屋敷(桑園か)があったようだ。さらに野原に育つ桑の葉も使われた。濡れた桑葉は蚕を病気にするため、刈り取った桑葉は軒先に下げて乾かした後に蚕に与える。蚕は卵から孵化するとある程度まで飼育場(養蚕組合養蚕室)^(註2)で育て、その後各家庭に配られたようである。天井まで棚があり、そこに編んだ籠を載せ、その中で蚕を養っていた。

養蚕は繭を販売し現金収入を得る仕事である。販売できない繭は真綿をつくり、綿入れにし、紬糸などにした。久米島の紬糸は王国時代から知られているが、八重山の島々では紬糸をつくっていた様子はみられない。黒島でもそうである。

近代における養蚕では、農林技手より指導を受け、繭から生糸を採り、自家用とした例も各島々に多く残る^(註3)。T.M.氏の祖母はその指導を受けたうちの一人だったようだ。



写真4) 屋敷内に残る桑の木 (平成26年撮影)

(4) 木綿

木綿も植えられていたと言う話だったが、その様子は確認できなかった。小浜島では糸を紡いで布にしていたようだが、黒島には糸にするための道具が残っていない。綿として使っていたようだ。

(5) 道具類

黒島には残念なことに、織機も養蚕の道具も廃棄され残っていなかった。僅かに黒島ビジターセンターに下記の染織関係資料が残るのみである。

- ① 芭蕉繊維
- ② 絹糸 (生糸/糸入箱に複数あり)
- ③ 糸入籠 (ブーイリマグ) と苧麻繊維
- ④ 糸入箱と績んだ苧麻糸 (フナ巻)

2. 染色

聞き取りを行った3名は実際に染色や整織をしていたわけではないので、染色に関しては断片的な事しか分からなかった。

芭蕉布^(写真7・8)に見られる茶系統の色はヒルギによるもの。フクギも使われたようである。

藍染めも行われていた。T.M.氏の祖母は豆のできる木の葉を刈り取って藍造りをしていたようである。植物はマメ科のナンバンコマツナギやタイワンコマツナギによるものか。

T.M.氏蔵の黒地紋付は京都で黒に染め、紋を付けてもらったものである。

また、N.H.氏蔵の着物の色は染粉を石垣から購入して染めたとの事である。

3. 黒島に残る着物

- 絹白地経縞模様着物 (N.H.氏所蔵/伊古在)



写真5) 絹白地経縞模様着物 表部分

素 材：経糸・緯糸ともに絹（生糸）
 染 色：染粉（化学染料）
 織 り：平織（密度：経30本／1cm・緯26本／1cm）
 布 幅：36.2cm
 サイズ：丈127.0， 衿60.2
 H.N.さんの母親（ガナハ・オナリ）が織ったもの。
 養蚕で得た絹糸を石垣島から買って来た染粉で藍色に染めて縞模様を作る。
 肩当てに2種類の別布を使う。

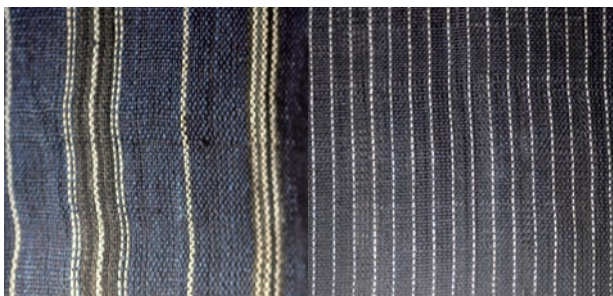


写真6) 絹地経縞模様着物 左右ともに裏の肩当部分

● 芭蕉経縞模様着物（T.M.氏所蔵／保里在）



写真7) 芭蕉経縞模様着物 前身頃全体



写真8) 芭蕉経縞模様着物 部分拡大

素 材：経糸・緯糸ともに芭蕉
 糸は縫り繋ぎ。経糸は撚糸されている。
 沖縄島では機結びで糸を績む。
 茶色の縞糸は強く撚糸されている。地糸は少し緩やかである。

染 色：ヒルギ
 織 り：平織（密度：経22本／1cm・緯13本／1cm）

布 幅：32.0cm
 サイズ：丈126.0， 衿59.0
 T.M.さんの母親か祖母が織ったもの。バサーキンは引越してヤーチクイジラバを踊る時や豊年祭で身につけたもの。帯はミンサー帯。帯は作らず、竹富島から買った。

● 絹黒地紋付長着（T.M.氏所蔵／保里在）



写真9) 芭蕉経縞模様着物 後身頃全体



写真10) 蕉経縞模様着物 背紋部分

素材：経糸・緯糸ともに絹（生糸）

染色：京都で紋付用に染めた

布幅：36cm

サイズ：丈136.5，衿64.0

T.M.氏の母親か祖母が養蚕で得た絹糸で織ったもの。

単衣だが、袖口だけ内側に白布を当てる。

紋は別に染めた紋を縫いと留める。紋は背中と右胸の2箇所に残る。

黒島の染織概要

〔近世〕

黒島でいつ頃から、どのような織物があったのか、それについて語った史料が少ないため、遡るのは難しい。

人頭税として布の代納が宮古・八重山で定められる1637年以前から、人頭税制廃止まで、苧麻による布を納めていたものと思われる。苧麻による上布以外にも、八重山では、芭蕉布、木綿布があった。黒島でも聞き取りから分かるように、これらの素材による布が織られていた。木綿は、1642年、栽培技術を導入したことが『八重山島年来記』にみられる^{〔註4〕}。

人頭税制が敷かれた時代、黒島ではどうだったのか、琉球王国末期の「八重山島人頭税賦課台帳」をみると、男女222人に白上布、白中布、白下布が課税されている^{〔表1／註5〕}。黒島（保里式ヶ村）に賦課された布の総数は下記のとおり。

白上布：四拾六疋七尋式尺七寸八分八厘七毛

白中布：壹反七尋五寸七分九厘八毛

白下布：八拾八反三尋四反五寸〇分式厘

これらの布は苧麻を材料とし、布の粗密によって上布・中布・下布に分かれる。下布は密度（1cm間の本数）経糸10～12本程の荒い布で、包み物や幕などに使われる。上布は経26本以上の細い糸で織られた布のことを示す。中布はその中間の密度の布ということになる^{〔註6〕}。疋と反は織あげた布の単位だが、衣服を仕立てる一着分を示し、現在、一疋は二反分を意味する。その当時、特に指示のない場合、一疋の長さは十一尋、一反は七尋を意味していた^{〔註7〕}。

賦課された数字は、島の納税者全体に割り振られ

る。男性は白中布と白下布、女性は布の総ての種類を納めることが定められている。数字を見ると白下布を多く収めたように見えるが、白上布は疋となっており、疋が二反を示すのであれば、白上布が最も多く納められたことになる。また、上布は女性のみにも課されるため一人当たりの負担は最も大きい。白中布は島全体に約一反七尋が課されており、一台の織機に経糸を仕掛けそれを交代で織り上げたようである^{〔註8〕}。

〔近代〕

1907（明治40）年、人頭税廃止後、八重山地方に新たな産業として養蚕が始まる。

八重山で養蚕がスタートするのは、明治に入ってからである。官吏として赴任した中島兼次郎夫人が始めたと伝わる。養蚕講習会も開かれたが、見るべき成果はなかった^{〔註9〕}。

大正に入ると、欧州戦争の影響による絹の暴騰により、国内では養蚕事業の振興が唱えられるようになる。沖縄県では大正10年以来製糖業の不振もあり、養蚕業へシフトするようになる^{〔註10〕}。

沖縄県内の各地で養蚕傳習会が開かれ、各村から応募してきた受講者達は県から派遣された講師から養蚕法、蚕体病理、蚕体整理、蚕体解剖、蚕種製造法並びに養さん製絲などを学ぶ。八重山では郡農會主催の養蚕傳習が石垣島で開かれた^{〔註3・11〕}。この他、沖縄県では養蚕技術員の養成（男子は1ヶ年、女子は4ヶ月の間）も行なわれていた^{〔註12〕}。

1921（大正10）年、竹富村役場議事堂（共同飼育場）では、養蚕教師、加本嘉四郎を招いて蚕の飼育状況の検査が行われている^{〔註13〕}。1924（大正13）年、養蚕地として国頭郡本部村、八重山郡竹富村が指定され、指導の強化が図られ、収穫量も増える^{〔註14〕}。そのピークは1940（昭和15）年頃である。収穫した繭は、石垣島の公會堂に集められ、販売される。仲買人や、台湾や県外の製糸会社も買い付けにやって来た^{〔註15〕}。沖縄県は、繭の買取に際して養蚕者が不利となっていた状況もあり、大正14年以降、佐賀県鳥栖にある片倉製糸所へ販売している^{〔註16〕}。しかし、引き取り価格には差があり、仲買人や他業者が養蚕者と個別に取引し問題となることもあったようだ^{〔註16〕}。

昭和6年、保里養蚕組合共同蚕室の建設が承認を

待っていること、新城上地島には既に蚕室が建てられ、下地島も保里同様に承認待ちであることが当時の新聞に掲載されており〔註17〕、島の産業として養蚕が大きな地位を占めつつあったことがうかがえる。共同蚕室では、各家庭に配布する蚕を卵から孵化させ、ある程度の大きさまで育てていた。平成26年調査の際に養蚕室の場所について確認したが、保里ではなく、宮里にあったようだ〔註2〕。

おわりに

明治から昭和初期にかけて、衣服は琉服から和服へめまぐるしく変化する。黒島で今回の調査で確認し3点の染織品は、和服または和琉折衷のスタイルに縫製されている〔註18〕。

これらと同様に島内で整織され仕立てられた布は、時代の移り変わりとともに、芸能衣装としての役目を果たすようになる〔写真10・11〕。

今回の調査にあたっては、非営利活動法人 日本ウミガメ協会附属黒島研究所所長の若月元樹氏、竹富町史編集室の飯田泰彦氏に格段のご配慮をいただいた。また、黒島研究所特別研究員の宮良哲行氏からは資料をご提供いただき、島に住む皆さんからは貴重なお話をうかがうことができた。記してお礼を申し上げる。

〔註1〕

- ・ 與那嶺，1989，「与那国島の染織概観」、『沖縄県立博物館総合調査報告書Ⅵ 一与那国島一』。
- ・ 與那嶺，1998，「昭和初期における波照間島の織物（聞き書き）」、『波照間島総合調査報告書』。
- ・ 與那嶺，2001，「戦前期（大正期～昭和初期）西表島の織物（聞き書き）」、『西表島総合調査報告書』。
- ・ 與那嶺，2004，「小浜島の染織概観」、『小浜島総合調査報告書』。
- ・ 平川，2009，「与那国の染織レポート―戦後の織物の状況について―」、『与那国島調査報告書』。
- ・ 與那嶺，2012，「竹富島のうちくい―竹富喜宝院収蔵品より―」、『竹富島総合調査報告書』。

〔註2〕

「保里養蠶組合蠶室 近日中に工事着手」『先嶋朝

日新聞／昭和6年2月30日』石垣市立図書館
宮良氏より提供された地図

〔註3〕

- ・ (財)農林統計協会，昭和56，「沖縄之蚕業 沖縄県」、『沖縄県農林水産行政史 第十一巻（農業資料編Ⅱ）』，P688。
4 養蚕伝習所設置 一略一 春蚕期は男子を募集し蚕種催青より蚕種製造を終る迄、夏秋蚕期は女子を募集し、得たる収繭を以って生糸製造、屑繭整理を伝習す、一略一
- ・ 「有吉技手の製糸伝習」『先嶋朝日新聞／昭和4年6月27日』石垣市立図書館
八重山郡農会主催の養蠶傳習所は去る十一月十三日より楷書してゐることは既報の通りであるが先日より公會堂に於いて縣農林技手有吉都美女史の製糸方法の傳習をしてゐるがクズ繭からとれる糸が素人の記者には如何にも見事なものであった十三名の傳習生は熱心に作業をしてゐた 一略一 因に座繰器一台三円 カセソク十八円のさうである。

〔註4〕

石垣市総務部市史編纂室編，1999，『石垣市史叢書13 八重山年来記』，石垣市，P25。

〔註5〕

徳能壽美，平成14年，「新本家文書「八重山島人唐税賦課台帳」（仮題）」、『石垣市立八重山博物館紀要第19号』，石垣市立八重山博物館，P137-139。

〔註6〕

與那嶺・平田，2014，「御拝領上布幕の製作時期についての考察」、『沖縄県立博物館・美術館 博物館紀要 第7号』，沖縄県立博物館・美術館，P104。

〔註7〕

- ・ 沖縄県立図書館史料編集室，1991，「七 富川親方八重山島御用布座公事帳」、『沖縄県史料 前近代7 首里王府仕置3』，P75。
御用布疋反長幅定之事
一略一
一何布ニ~~る~~反~~る~~有之時~~る~~長七尋幅壹尺三寸二限事
- ・ 徳能壽美，平成14，「新本家文書「八重山島人唐税賦課台帳」（仮題）」、『石垣市立八重山博物館紀要 第19号』，石垣市立八重山博物館，P82。

一疋=十一尋=五五尺
一反= 七尋=三五尺
一尋= 五尺=五〇寸

〔註8〕

徳能壽美, 2003, 「古文書にみる人頭税時代」, 『人頭税廃止百年記念誌 あさばな』, 八重山人頭税廃止百年記念事業期成会, P87-88.

具体的には、織り手となる人がそれぞれの「かせ」をモトに差し出し、モトはこれを集めて一略一、機に掛け、自らの分二尋を織り、その機具を次の織り手に貸して織らせ、さらに次の織り手に「機具」が回され、一反となる七尋半にしてモトに戻し、モトがこれを上納する 一略一

〔註9〕

沖縄県養蚕産地育成協議会, 平成16, 『沖縄県の蚕糸業 復帰30周年記念誌』.

〔註10〕

(財) 農林統計協会, 昭和56, 「沖縄之蚕業 沖縄県」, 『沖縄県農林水産行政史第巻(農業資料編Ⅱ)』, P665.

〔註11〕

- ・「養蠶傳習所近況 若き男女の養蠶振り」『先嶋朝日新聞/昭和5年2月28日』石垣市立図書館
- ・「養蠶 傳習所近況」『先嶋朝日新聞/昭和5年3月8日』石垣市立図書館
- ・「郡農會主催 養蠶傳習終了」『先嶋朝日新聞/昭和6年4月3日』石垣市立図書館
- ・「郡農會主催 養蠶傳習所」『先嶋朝日新聞/昭和7年1月28日』石垣市立図書館
- ・「製絲講習會」『先嶋朝日新聞/昭和7年3月18日』石垣市立図書館

〔註12〕

- ・「女子蠶業 講習生募集」『先嶋朝日新聞/昭和6年4月3日』石垣市立図書館
- ・(財) 農林統計協会, 昭和56, 「沖縄之蚕業 沖縄県」, 『沖縄県農林水産行政史第巻(農業資料編Ⅱ)』, P694.
4 蚕業技術員の養成
修業年限を男子一ヶ年、女子を四ヶ月(昭和五年三ヶ月)として養蠶講習を行ふ一略一

〔註13〕

「秋蠶成績(養蚕教師 加本嘉四郎)」『八重山新報/大正10年12月21日』石垣市立図書館

〔註14〕

(財) 農林統計協会, 昭和56, 「沖縄之蚕業 沖縄県」, 『沖縄県農林水産行政史第巻(農業資料編Ⅱ)』, P666.

〔註15〕

「本郡の養蠶成績良好」『八重山新報社/大正11年4月11日』

〔註16〕

・(財) 農林統計協会, 昭和56, 「沖縄之蚕業 沖縄県」, 『沖縄県農林水産行政史第巻(農業資料編Ⅱ)』, P690.

同十四年春蚕繭よりは佐賀県鳥栖町片倉製糸所に交渉し全部同工場に販売することとし一略一

・「繭買人の市場争奪戦 片倉組の番頭の様に働く人々」『先嶋朝日新聞/昭和5年3月28日』石垣市立図書館

※片倉製糸所、片倉組とは大正9年創業の片倉製糸紡績(株)(現:片倉工業)のこと。片倉組は片倉製糸の前進である。

〔註17〕

・「農村巡り 竹富島新城」『先嶋朝日新聞/昭和6年2月3日』

〔註18〕

琉服: 琉球王国時代の衣服のこと。基本的な形態は和服だが、身丈や身幅、袖口の形など、近世の和服の形態や縫製とは異なる点がみられる。

琉服の形態及び縫製の特徴

身丈: 対丈。

身幅: 前身頃と後身頃の幅が同じ、前身頃は裾から肩にかけて狭くなる。

衿: 12cm以上の広さ(広衿)で、裏表に返して着衣する。丈は長い。

袖: 袖口は小袖ではなく、肩から袖下まで開いた平袖で、脇には襷を付ける。

縫製の特徴:

基本的に並縫い。背縫いを除き、裾を縫って脇を縫う。袖の縫い代は身頃に入り込む。

黒島の染織品の形態及び縫製の特徴

- ・ 3領ともに、対丈。
- ・ 前身頃の幅は後身頃より狭い（5～8cm）。
- ・ 衿幅は6～7cm。棒衿に仕立てられる。
- ・ 黒地紋付は小袖、それ以外、袖口は平袖。裾はなく、

芭蕉布以外は袖付の袖下に振りがある。和服では身頃側にある身八口はなし。

- ・ 身頃は並縫いだが、身頃の裾はクケ縫い。身頃の背、脇などを総て縫い合わせた後、裾を三折りし縫う。芭蕉布は並縫い。その他2領はクケ縫い。

表1) 黒島・保里式ヶ村に賦課された一人当たりの米・上布・中布・下布（新本家文書「八重山島人頭税賦課台帳」仮題）より

| 課税対象者 | 納税する物 | 賦課された量（一人当） |
|-----------|-------|------------------|
| 上男（六拾貳人） | 米 | 三斗五升三合七勺八分八厘七毛 |
| | 白中布 | 三寸四分五厘四毛 |
| | 白下布 | 三尋七寸四分三厘七毛 |
| 中男（九人） | 米 | 貳斗九升四合七勺五才七分七厘七毛 |
| | 白中布 | 三寸貳厘二毛八才 |
| | 白下布 | 貳尋三尺七寸七分五厘八毛 |
| 下男（七人） | 米 | 貳斗三升五合八勺五分七厘壹毛 |
| | 白中布 | 貳寸五分九厘三糸五忽 |
| | 白下布 | 貳尋壹尺八寸七厘八毛 |
| 下々男（貳拾五人） | 米 | 壹斗七升六合八勺五才四分四厘 |
| | 白中布 | 貳寸壹分五厘八毛六糸三忽 |
| | 白下布 | 壹尋四尺八寸三分九厘八毛 |
| 上女（七拾四人） | 白上布 | 四尋四尺壹寸九分五厘八毛八糸九忽 |
| | 白中布 | 三寸四分五厘四毛 |
| | 白下布 | 三尋七寸四分三厘七毛 |
| 中女（拾三人） | 白上布 | 四尋壹尺壹寸七分壹厘四毛 |
| | 白中布 | 三寸貳厘貳毛八忽 |
| | 白下布 | 貳尋三尺七寸七分五厘八毛 |
| 下女（六人） | 白上布 | 三尋三尺壹寸四分六厘九毛壹糸七忽 |
| | 白中布 | 貳寸五分九厘三糸五忽 |
| | 白下布 | 貳尋壹尺八寸七厘八毛 |
| 下々女（貳拾六人） | 白上布 | 三尋三尺壹寸四分六厘九毛壹糸七忽 |
| | 白中布 | 貳寸壹分五厘八毛六糸三忽 |
| | 白下布 | 壹尋四尺八寸三分九厘八毛 |

表2) 黒島に賦課された上布の総数

| 織物の種類 | 黒島に賦課された上布の総数 |
|-------|------------------|
| 白上布 | 四拾六疋七尋貳尺七寸八分八厘七毛 |
| 白中布 | 壹反七尋五寸七分九厘八毛 |
| 白下布 | 八拾八反三尋四反五寸〇分貳厘 |

黒島の古墓及び葬法調査

大 湾 ゆかり*

Investigation of old tombs and funeral ceremony in Kuroshima Island

Yukari OWAN*

はじめに

八重山諸島の黒島における民俗分野の調査は、3回にわたって行った。第1回は古墓の分布と葬法についての聞き取り調査、第2回は、豊年祭の爬龍船競漕と伝統芸能の見学、第3回は旧正月の綱引き行事の見学であった。

このうち、古墓の調査については、黒島研究所の協力を得て話者を紹介していただき、黒島内の遺跡や古墓を案内していただいた。また、竹富町自然環境課にご協力いただき、平成26年度に「竹富町墓地基本計画」を策定するにあたり、竹富町の各島で墓地の現状調査を行った結果を参考にさせていただいた。さらに、1993年にかけて黒島の調査に取り組んでおられた当時国立歴史民俗博物館の篠原徹氏よりご提供いただいた資料を活用し、黒島に関する記録資料の中から葬墓制の記録を抽出して紹介した。

後者の伝統行事については、映像等の記録を取ることに重きをおいたので、今回の報告では割愛する。この記録については、映像を現地黒島で活用していただけるよう、編集していきたいと思う。

調査は以下の日程で行った。

- 第1回 2014年2月25日～27日 古墓調査
- 第2回 2014年7月20日 豊年祭見学(映像記録)
- 第3回 2015年2月19日 旧正月綱引き見学
(映像記録)

1. 黒島について

黒島は石垣島の南西18.5kmの海上に位置する、周囲12.6km面積10.02km²の隆起サンゴ石灰岩からなる平らな島である。現在は、宮里、仲本、保里、東筋、伊古の5つの集落からなり、世帯数121戸、人口207人である[平成26年2月末現在]¹⁾。島の基幹産業は牛を中心とした牧畜で、島全体に牧場が広がっている。古くはアワやムギなどの雑穀栽培が主であったが、1940年代から甘蔗栽培と製糖、タマネギや煙草栽培が行われ、1960年代から肉牛飼育へと切り替わった²⁾。黒島は、元々隆起サンゴ石灰岩に覆われた地形であったが、牧畜の導入に伴い1972年(昭和47)から草地開発事業³⁾が始まり、機械で石が砕かれ牧草地に転換された。

黒島は、現在では人口200名余りの島であるが、かつては1500名を超える人口があり⁴⁾、そのため強制移住をさせられるなどの苦難な歴史もある。また、この島には按司の居城跡や番所跡、遠見台跡などの遺跡が数多く残っている。このほか、1975年(昭和50)に西表島から海底送水が実現し、1976年(昭和51)には電気が開通するなど、現在ではさまざまなインフラ整備が完了している。島の海岸付近には、風光明媚な自然が広がっている。

※ 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1 沖縄県立博物館・美術館

* Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006, JAPAN

2. 古墓調査

総合調査では平成27年度の特別展（琉球弧の葬墓制—風とサンゴの吊い—）の関係で、2014年2月の調査には黒島の古いタイプの墳墓について調査した。黒島における墓は、現在ではコンクリートや琉球石灰岩、あるいは御影石造の新しい形式の墓に変わっている。しかし、現地の人びとの話では、少なくとも黒島が牧草地に変わる前までは、サンゴ礫を積み上げた石積みの方形墓があちこちに見られたという。本報告では、これらの墓を「石積墓」と言うことにする。

まず、黒島の古墓に関する文献としては、沖縄県教育委員会の『竹富町・与那国町の遺跡—詳細分布調査報告書—』[1980]に次のような記述があるので紹介する。

「牧場内のあちこちにフウメエまたはユシヌバカと呼ばれる墳墓が見受けられる。フウメエとは古い墓の意のようだ。フウメエは百姓墓として大正年間までも使用されていたと伝える。以前はフウメエへがいたる所に何百基もあったとのことだ。牧場の草地改良事業でその殆どは消えたが、現在でも無縁墓として百基近くは残っている。（中略）フウメエへは外形を珊瑚石灰岩で凸型に積み上げてつくってある。平面形は長方形で長い方の辺はだいたい7.5m～8.5mで短い辺は5.5m～6.5mである。墓室はテーブル珊瑚を四方に立てて作り、それが墓室の蓋の支柱の役目も果たしている。墓室は上蓋でそれもテーブル珊瑚をたいてい用いている。礫石の底面から墓室の縁石までの高さは170cmくらいあり墓室面は約15cmほど低くなっている。1基の墓にはたいてい複数の墓室が見られる。」⁵⁾

この報告書では、按司の居城跡とされるミントウハネマ遺跡やイヌムル遺跡の近くにフウメエへが発見されているが遺跡との関係は不明とのことである。保里部落より約500m南西地点にあるミントウハネマ遺跡のさらに南40mにあるフウメエへは、墓室が4つあり、その一室の上蓋のカサ石（テーブルサンゴ）が開いており、中には人骨やパナリ焼、壺屋焼、古伊万里、外来染付が確認されたという。また、宮里部落の北方約1500mにある按司の居城遺跡群の一つイヌムル遺跡では、草地改良工事のときに遺跡の北側の崖下の空洞を利用した古墓から頭骨が数体出た

といわれ、調査の結果、北側に3基、南側に4基の古墓が確認されたとある。また、一番規模の大きいウブスク按司居城跡の石垣の囲い内から、約5m四方のフウメエへが2基あり、その内の1基には人骨、パナリ焼片と口径約10cm、高さの7cmの香炉が確認できたという。さらに、仲本村の東方1200mにあるクスリチ遺跡に隣接する付近にもフウメエへが4基あったという⁶⁾。クスリチ遺跡の位置については、同報告書では仲本より南方に位置している⁷⁾が、運道武三氏が著した『黒島誌』では仲本の東方にあり⁸⁾、未確認のため図1では両方を併記した。

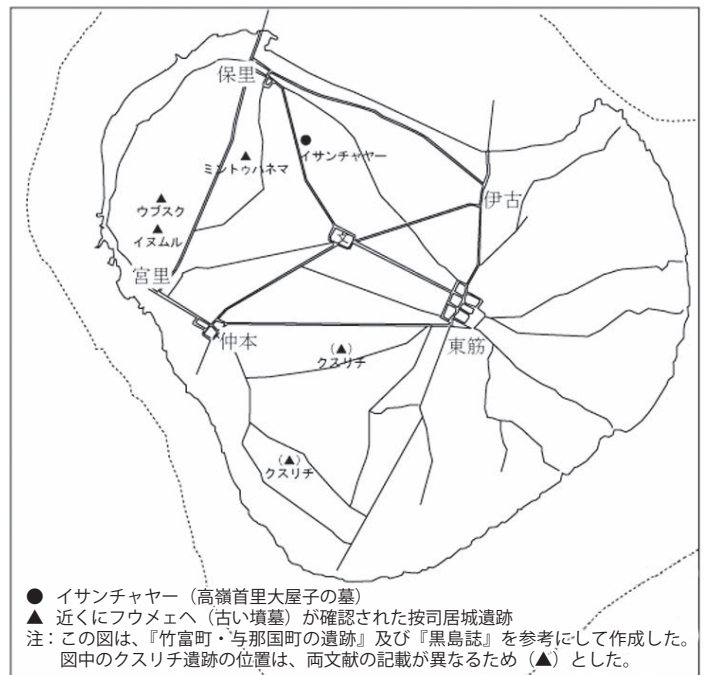


図1. 黒島の集落と墓に関連する遺跡（クスリチの位置は『竹富町・与那国町の遺跡』と『黒島誌』の両方を併記）

次に『黒島誌』から墓制についての記録を紹介する。

- 「墓制 家族墓である。昔はヤーヌ墓（筆者：ヌーヤ墓の誤字か？）であった。二重墓である。（中略）
- 形式 亀甲墓、破風型墓、昔は黒島には1、2点であったが、明治40年～大正にかけて亀甲墓、破風型墓が各家々で作られ、ヌーヤ（野屋）墓が少なくなった。現在はみあたらない。（中略）
- ヌーヤ墓 小石を方形に高く積み上げ、平らな石（海からとってくるカサ石）でふたをする。方墳となる。石のないときはカヤでふたをする。」⁹⁾

この資料では、黒島の古い墓は小石を方形に積み上げ、平らな石（海からとってくるカサ石）で蓋をした方形の墓であり、それを「ヌーヤ墓」と言うこと示されている。また、黒島に亀甲墓や破風墓が造られるようになったのは、明治40年代以降であったことがわかる。

ヌーヤ墓とは、石を方形に積み上げた石積墓で、石垣島や西表島などの八重山諸島に広く見られた形式の墓である（写真1及び2）。屋根の部分はテーブルサンゴの平たい石で蓋をしたり、カヤで覆う形のものもあった。このようなテーブルサンゴを積み上げた墓は奄美大島にもみられる（写真3）。

つぎに、黒島には昭和47年に竹富町が史跡として文化財指定している「イサンチャヤー」という古墓がある。黒島初代の役人でこの島に初めて牛をもたらしたといわれる高嶺首里大屋子とその妻の墓2基が並んでいる。イサンチャヤーは、福島駿介[1986]¹¹⁾によるとミャーカ（ドルメン風の支石墓）として分類された巨石墓である。ミャーカ墓は宮古島周辺で多く見られ、16世紀頃の権力者の墓である。イサンチャヤーも10m以上の方形型の巨石墓であり、前述の石積墓とは異なると思われる。また、もともとはヌーヤ墓といわれるように屋根の部分を茅で覆っていたものと思われるが、現在は屋根が付いている。



写真1. 竹富島のヌーヤ墓 (1960年代)¹⁰⁾



写真2. 西表島祖納大竹祖納堂のチンマサの墓



写真3. 奄美大島宇検村佐念のヌーヤ墓



写真4. イサンチャヤー（上：全景 中：石垣の内部に石積墓 下：文化財指定の碑が建っている）

以上のことを踏まえて、調査した結果を報告する。2014年2月の調査では、東筋の野底幸生氏や仲本の宮城哲行氏等に聞き取りし、現存する古墓等を案内してもらった。ここではまず野底氏の案内で訪れた東筋と仲本集落の間にある牧場内の古墓を紹介する。

野底氏が案内したのは、東筋集落より南西側に位置する放牧地の中であった。一帯は牛が自由に動き回る広大な牧草地である(図2)。野底氏によると昔はこの一帯は全て畑で、ムギやアワ、大豆、サトウキビ等を作っていたそうであるが、今はその陰も見あたらない。

しばらく歩くと、草原の中に点々と石を積み上げた小山が表れた。黒島では牧草地の中にこのような石山があちこちにあるが、その大半は機械で碎石した石を積み上げているだけのものだと説明を受けていた。しかし、野底氏が示した牧場の中に点々とある石山は、まさに古い石積墓であった。

この日、筆者等は4つの古い石積墓を見て回ったが、詳しい測量はできなかったもので、調査時のスケッ

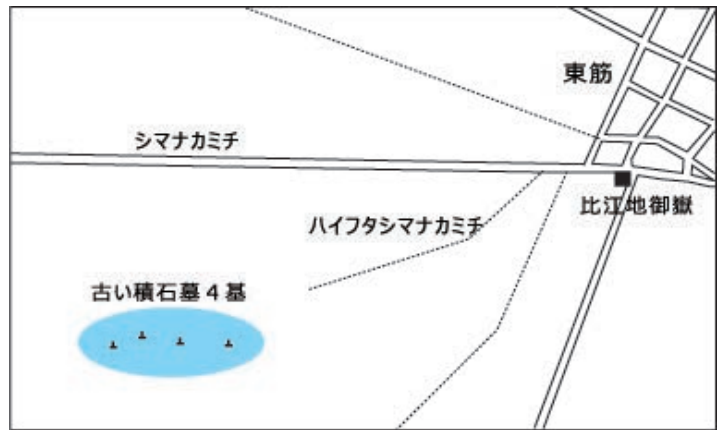


図2. 調査した場所の概略図(正確な位置は確認していないので大凡の位置)

チ等から簡単な概略図で紹介する。

(1) 古墓A

この墓は、周りを石灰岩礫で積んだ中にテーブルサンゴの平板を四方に立てて壁を作り、その上にさらにテーブルサンゴの巨石で蓋をしてあった。中をのぞくと方形の墓室になっており、そこに人骨を確認することができた。測量はしていない。

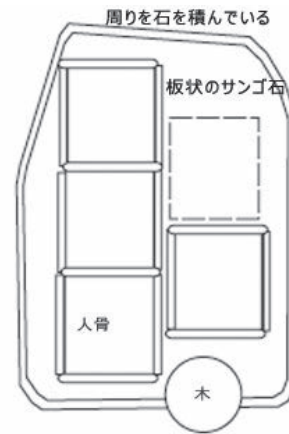


写真5及び図3. 古墓A(左上:外見 右上:簡易図面 左下:墓室の表面 右下:墓室内の人骨)

(2) 古墓B

古墓Aからさらに東に歩いたところにあった石積墓。石灰岩礫で囲い込んであったが、中の様子は不明。てっぺんに家の屋根を型取ったような石が3個あった。



写真6及び図4. 古墓B (上:外見 右:墓の上部簡略図)

(3) 古墓C

周辺を石灰岩の礫で積み上げ、内部にテーブルサンゴの平たい板石で方形に並べた石棺墓が確認できる。その中には、人骨等が発見された。外周部分の大きさは、縦188cm、横125cmで板石のある石棺墓の深さは80cmであった。この墓は、野底氏によると仲本集落の上原家の墓であるという。

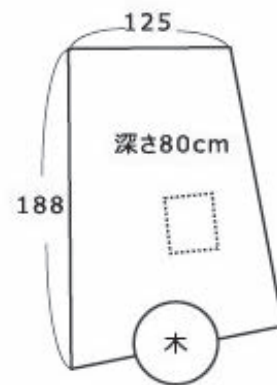


写真7及び図5. 古墓C (左上:外見 右上:簡易図面 左下:墓室の表面 右下:墓室内の人骨)

(4) 古墓D

この墓も周辺を石灰岩の礫で積み上げている。上部に登ると内側にテーブルサンゴの平たい石を支柱にした空洞のように見えたが、骨は見えない。深さも計測できなかった。周囲の大きさは縦138cm、横40cm。上部に屋根の一部として使われたのか、加工されたサンゴ礫が残っていた。

以上、古墓AからDまで概略を紹介した。これらの石積墓に共通する点は、1に、いずれもサンゴ石灰岩の石を積み上げて外壁を築いている、2に、内部にはテーブルサンゴを加工した板石を支柱にした石棺墓が数基ある、3に、石棺墓の蓋は巨大なテーブルサンゴの板石を使っていることである。古墓AとCからは、墓室の中に人骨を確認することができ、古墓BとDからは、サンゴ礫を加工して屋根の梁のような文様にした石がいくつか発見された。いずれの墓も長年使われていないとみえて、大木や、木根、蔦などの植物に覆われており、現状でははっきりした形は見えないが、少なくともフウメエと呼ばれ

る石積墓の類であるといえる。ただし、野底氏はこのような墓を「シンマーラサー」と呼んでおり、この墓には同じ系統の祖先が葬られているとのことであった。

3. 現在の墓

竹富町が平成27年3月に発行した『竹富町墓地基本計画』¹²⁾によると、黒島の現在の墓数は112基である。これらの墓の詳細について、住民説明会の資料¹³⁾に基づく次のような傾向がみえる。

- ①墳墓の素材 コンクリート造77.8% 琉球石灰岩21.1% 御影石等1.1%
- ②前庭の広さ 約2/3 22.2% 約1/2 63.4% 前庭なし 11.1% その他 3.3%
- ③管理状況(想定) 管理されている73.3% 管理されていない20.0% 不明6.7%
- ④立地状況 農業振興地域 100%

この結果から、墳墓の多くはコンクリートが普及した後の比較的新しい墓で、しかも前庭が広く巨大

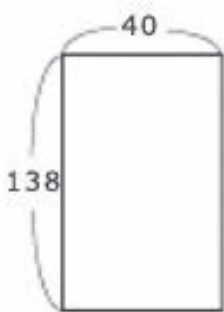


写真8及び図6. 古墓D (左上: 外見 右上: 上部の墓室の様子 左下: 概略図 中下: 記録した石 右下: 加工痕のある石)

な墓が多い。これらの墓の立地はすべて農業振興地域にあるため、竹富町では黒島の墓地の課題として、墓地の散在化を指摘している。実際に、島内を巡ると広大な牧場内に点々と墓が建っている風景をみることができる。

中でも、東筋の西側にある新城家の墓（写真9左上）は、敷地面積200坪以上の巨大な墓である。この墓について新城輝文氏にお話を伺った。新城家は代々ミルク神を司る由緒ある家で、この墓は25年程前に新城氏の祖父が造ったもの。袖墓がある亀甲型の墓で、内部には壺を置くための棚があり、後部にコンクリート製らしき合葬用の大きな箱があるという。新城家の墓は元々違う場所にあったが、祖父は自分の土地の中かなりの資金を投じてこの墓を建てた。墓は家の守ってくれる存在になっているそうである。

このように、黒島では墓所という一定の場所はなく、牧場内に自由に墓を建てるという特徴があるが、これはヌーヤ墓のように古くから平地に石を積んで

墓を造ることが慣習としてあったからではなかろうか。

4. 黒島の葬制

黒島における葬法は、昔は遺体を風葬し、数年後に水で洗って酒で清める「洗骨」を行い大きい壺に納めていたが、現在ではほとんどが石垣島の病院で亡くなり、火葬されて島に帰ってくるという。そこで、風葬や洗骨がいつ頃まで行われていたかを中心に文献や聞き取り調査の結果を報告する。

まず、『黒島誌』[1988:運道]の葬送の項¹⁴⁾には、火葬以前の葬法についての記述がある。

それによると、臨終を迎えた死者は、逆水を取り正装させて、生き方（マリプウ）、クサテヌ方の神に礼拝させたという。葬式を出す前に入棺の式があり、ここで家族、親類との別れの杯をかわし、後生へのお土産（お茶、煙草、手拭、針、糸、打紙等）を預ける。入棺は、長男が頭をもち、二、三男は足（下



写真9. 左から放牧地の中に点在する墓（左上：新城家の墓 右下：岩盤を利用して作られた亀甲墓）

体)を持って棺に入れ、寝かせて屈膝させる。葬式は、①みち道(4本)、②提灯(2つ)、③供花、④名旗、⑤位牌持ち、親類、男の会葬者の順、⑥龕、⑦親類の女、会葬者の女、⑧てんがい持ち、⑨念仏鐘打ちの順に墓に向かう。7歳以下の子供は、墓まで家族がおぶっていき、墓場で箱に入れて墓所の隅の穴を掘って埋葬する。

納骨後、3日、7日、14日、21日、28日、35日、42日、49日、100日、1年、3年、7年、13年、25年、33年の法事がある。また、洗骨は、死後3年、5年、7年、9年目に行う。死人のあるときは、葬式の朝洗骨をしてから葬式を出す。洗骨は旧暦7月や11月に多いとある。

この資料では、いつ頃までこのような葬法が行われたかは定かでないが、葬送儀礼の流れを見ることができる。

次に、『うみがめ〜』第56号[2009]の記事(p67)には次のような記録が見える。

「島で葬式があると、朝から集落じゅう総出で準備をした。棺おけを作る者、炊き出しをする者、折り紙で花を作る者、遺体を運ぶ「龕」を準備する者、時にはお墓も同時に作ることもあり、石割作業などもあった。子どもたちも集められ、手伝ったり、食事等を与えられた。」¹⁵⁾

これは、昭和43年生れの又吉敬氏のエピソード紹介の一節で、又吉氏の幼少期にドルを使っていた等の記述から復帰直前の話であったことがわかる。このように、黒島では少なくとも復帰前までは集落総出で葬式を出し、遺体を墓へ運び風葬していたと考えられる。

次に、2014年2月と2015年2月の調査時に聞いた話をまとめることにする。話者は、東筋集落の野底幸生氏と新城輝文氏、及び仲本集落の宮喜キヨ氏である。

野底氏は、13年前(調査当時)に島で突然亡くなられた家族を風葬し、7年目にそれを取り出して火葬した経験話を話してくれた。風葬した遺体を7年後に取り出したときは、トタンを敷いて薪を燃やし、棺桶ごと燃やしたそうである。死者は二番座に西枕で寝かせて、公民館にあった白黒の幕を張って死者を囲んだ。火葬する以前は、骨を水で洗って酒で拭いていき、足から壺に納めていた。また、龕はあっ

たが使っていないとのこと。

現在40代前半の新城氏からは、30年以上前と最近の黒島の葬法についての話を伺った。まず、30年以上前に新城氏の祖母が亡くなられた時には、遺体を古い墓に葬り、何年か後に出して薪の上に乗せて焼いたそうである。その骨を洗って(たぶん甕に)納めたのを見たとのこと。現在は、石垣の病院で亡くなると、火葬して石垣の葬儀セレモニー会館で告別式をし、島に帰って家でもう一度告別式を行うことが多い。島に墓がある人や高齢者は2度葬式をするが、島に墓がない場合などは石垣で葬儀して石垣に墓を建てる人も少なくないそうである。

宮喜氏は、昭和3年生まれである。ご主人は石垣で亡くなり火葬したとのこと。しかし、昔は木の箱を作って遺体を入れ、それを墓に納めていたという。10年前に10数年置いた遺体を墓から出して焼いた。それ以前は洗って甕に入れたそうである。葬式の時には仲盛の龕を使い、喪家では黒い布を張って死者を囲んだ。

宮喜氏は、墓についても話してくれた。それによると、墓は上等な場所を選び石で囲んで作ったが、現在は新しい墓に作り替えた。そのとき、宮喜家の先祖の遺骨を甕に入れて移し替えたとのこと。骨甕は、茶色で石垣から買ってきたそうである。死者には一番上等の着物を着せた。また、念仏者はいなかったという。

以上の話から、黒島では少なくとも復帰前までは集落で共同して葬儀を行い、風葬していたと思われる。また、風葬後の洗骨は、30年ほど前から火葬していたこともわかる。すなわち、黒島では風葬後に骨を洗う、いわゆる洗骨から、風葬後に骨を焼く焼骨への葬法の転換があり、その習慣が10年ほど前まであったといえる。また、現在では石垣で死亡する例がほとんどで、そのため火葬後、石垣と黒島の両方で葬儀を行うということが慣例化している。このような葬送儀礼の変化については、今後さらに聞き取り調査を進め、龕や葬式幕等の葬具類の調査や墓地へのダビミチのルート調査等も含めて明らかにしていきたい。

おわりに

今回の報告は、平成27年度博物館特別展「琉球弧の葬墓制—風とサンゴの吊い—」の中で、奄美から八重山諸島にかけての葬墓制に関する調査も兼ねて行った。その結果、黒島の墓について、その形態や立地場所に興味深い特色が見いだされたので、特別展の中でも一部紹介させていただいた。

黒島の墓は、古くは石積墓が主流であったと思われる。石積墓以外にも岩盤を利用した亀甲墓も一部にあるが、元々平たい台地上の地形をしている黒島では、岩盤を掘り込むより石を積んだ方が造りやすかったのではなかろうか。これまでの調査で、黒島以外の周辺離島においても石積墓の存在は確認されている。とくに西表島古見の後良橋の北西約300mの山林や東のカサ崎の丘陵地には、こうした石積墓が100基以上あったといわれる¹⁶⁾。石積墓は、俗にヌーヤ（野屋）墓と称しているが、黒島では「フウメエヘ」と呼んでいる。また、野底氏の言うように「シンマーラサー」との呼称もあることから、石積墓の形態や名称についてはひとくくりにはまだ難しい。しかし、今回の調査で、実際に牧場内に現存する古い石積墓を確認できたことで、その形状がいくらかは明らかできたと思う。残念ながら、竹富島のヌーヤ（野屋）墓はすでに取り壊されており、また、西表島古見の石積墓も開発青年隊訓練所建設のため大部分が破壊された。黒島においても草地造成のため石灰岩台地を掘削されて古い石積墓の多くが失われ、最近では新しい墓への改築も顕著である。このような状況にあるため石積墓のさらに詳しい調査を行うことは近々の課題であると感じた。

葬制についても風葬から火葬へと転換し葬儀の方法も大きく変わった昨今、今のうちに村人共同で葬式を出していた時代の話も集めなければならない。葬送儀礼についての聞き取り調査の難しさを強く感じたが、話者の皆様に随分と助けていただき貴重なお話を聞くことができた。残念ながら、黒島単独でいえば葬墓制調査はけして十分とは言えないまま終わってしまい、多くの課題を残している。今後も引き続き調査を進め、記録を残して行きたいと思う。

謝 辞

今回の調査では、東筋集落の野底幸生氏、新城輝文氏、仲本集落の宮喜キヨ氏には、葬墓制に関する貴重なお話を伺い、現地調査に同行していただくなど、大変お世話になりました。また、日本ウミガメ協議会附属黒島研究所の若月元樹氏と黒島ビジターセンターの宮良哲行氏には、現地での案内や話者の紹介等々に多大なるご協力をいただき、琵琶湖博物館館長の篠原徹氏には黒島に関する貴重な資料を多数ご提供いただきました。さらに、竹富町役場自然環境課（当時）の西里幸晴氏にも資料をご提供いただきました。ここに記して心より感謝申し上げます。

参考・引用文献

- 1) 南山舎, 2015, 『2015年やえやまナビ (navi)』 p4, p88.
- 2) 福本美知子, 1986, 「八重山、黒島における生業の変遷と儀礼—その一 アワ作りの過程と儀礼について—」, 人間博物館リトルワールド, p56.
- 3) 関東黒島郷友会 編集・発行, 1988, 『関東黒島郷友会 創立二十五周年記念誌 黒島』, p35.
- 4) 運道武三, 1988, 『黒島誌』, p50.
- 5) 沖縄県教育委員会, 1980, 『竹富町・与那国町の遺跡—詳細分布調査報告書—』, 沖縄県文化財調査報告書, 第29集, p70.
- 6) 同上 p71-77.
- 7) 同上 p81.
- 8) 運道武三, 1988, 『黒島誌』, p30.
- 9) 同上 p146— p147.
- 10) 写真提供: 名嘉真宜勝氏
- 11) 福島駿介, 1986, 「沖縄における伝統的建築技術の伝播と定着に関する研究 (2)」, 『(財法) 新住宅普及会住宅建築研究所報』, p4.
- 12) 竹富町自然環境課, 2014, 『竹富町墓地基本計画』, 竹富町.
- 13) 竹富町自然環境課, 2014, 「竹富町墓地基本計画策定に伴う地域説明会 黒島」.
- 14) 運道武三, 1988, 『黒島誌』, p143-144.
- 15) 黒島研究所, 2009, 『うみがめ〜る』, 黒島研究所だより, 第56号.

¹⁶⁾沖縄県教育委員会，1980，『竹富町・与那国町の遺跡—詳細分布調査報告書—』，沖縄県文化財調査報告書，第29集，p26.

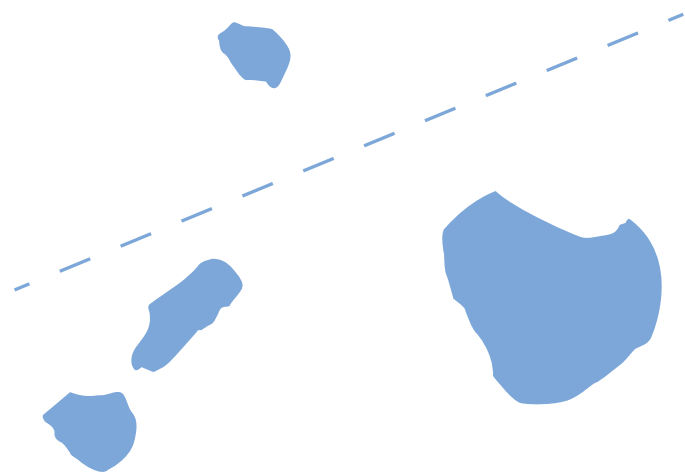
鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書

発行 2016年3月11日

編集発行 沖縄県立博物館・美術館 博物館班
〒900-0006
沖縄県那覇市おもろまち3-1-1
TEL 098-851-5401
FAX 098-941-3650
<http://www.museums.pref.okinawa.jp/>

印刷 文進印刷株式会社
〒901-0306
沖縄県糸満市西崎町5-10-14
TEL 098-994-5777

本報告書のPDFファイルは当館ホームページからダウンロードできます。



鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書
沖縄県立博物館・美術館